

末端によつて感ぜられるのであつて、感覺の種類によつて感ずる場所即ち知覺點を異にし、又知覺點の分布及びその感度は局部により人によつて異なる。尙この外に擦感(くすぐつたい感じ)及び痒感(かゆい感じ)なる皮膚感覺があるが、その壓覺・痛覺との關係は明らかでない。

【作用】 サヨウ (一)はたらき。機能。(二)理學上で、物體間に物理的又は化學的變化が起ること。こゝは(一)で、それ／＼の器官に特有な生理的の活動能力をいふ。

【弾力性を増し】 こゝは作用が生き／＼と活潑になることをいふ。

「肺臓・心臓及び皮膚の作用が急に弾力性を増し」とあるのは、平地から山上に移つて身邊の事情が變化すると共に、これに對應する必要上、これら諸器官の機能活動が大になるのをいふ。氣壓の低下に伴ふ、肺臓の呼吸運動が強化されるが如きはその一例である。

【弾力性】 壓迫を受けたものがはねかへす力。こゝでは「生き生きしむ」「生き生きしたはたらき」の意味である。

【羽化登仙】 ウクワトウセン 身に羽を生じ、仙人に化して天に登ること。蘇軾、赤壁賦「飄々乎如遺世獨立、羽化而登仙。」

【聽覺】 チャウカク 物體の發する音響を感知し、以て距

たつた場所の出來事を認知せしめる感覺。これを掌る器官は即ち耳であつて、外耳から入り込んだ音響は、外耳と中耳との境にある鼓膜に達し、次いで中耳の聽小骨から内耳中の淋巴液に傳はつて聽神經の末端を刺戟するのである。

【視覺】 シカク 物の色と明るさを感知し、以て物の形・大きさ・位置・運動、及び物と物との關係等を知らしめる感覺。之を掌る器官は即ち眼であつて、光を感ずるのはその網膜である。即ち、寫眞機の絞りに類する虹彩によつてその量を調節された光は、鏡玉に相當する水晶體その他の作用によつて、乾板ともいふべき後壁の網膜に感じ、視神經を通じて、腦の視覺中樞へ傳達されるのである。この眼球の最外部には眼瞼があつてほゞシャッターの役目をなし、又網膜以外の眼球の壁は角膜・鞏膜・脈絡膜から成つて、眼球を完全な暗箱たらしめるのである。

【雜然】 ザツゼン 物事の入りまじるさま。

【噪音】 サウオン 不規則な振動或は無關係の週期を有する數多の振動が同時に起る場合の音。さわがしい音。

【樂音】 の對。

流水の音・風の音・蟲の聲・鳥の聲等は何れも樂音である。又樂音たると噪音たるとを問はず、餘りに強

烈であるか、若しくは不快の感と與へる音を特に「騒音」といふことがある。こゝでいふ「雜然たる噪音」は即ち騒音である。騒音の最も顯著なものは都市のものである。文化の發達と共に都市の騒音は漸次増加し就中大都市に於ける雜沓・交通機關・工場機械等によつて起される騒音は最も著しいものである。

【俗世界】 ソクセカイ 俗人の世の中。俗界。
【俗】 (一)一般のならばし。時代の風習。(二)世間。世の中。(三)つね。なみ。凡庸。(四)風流でないこと。いやしいこと。(五)僧尼に對して普通の人の俗人。

【音響の減却は吾人をして超人間たらしめる】
いかに科學者らしい透徹した筆致である。

【音響】 オンキヤウ 耳を刺戟して聽覺を誘起させる物理的作用。おと。ひびき。

【減却】 メツキヤク (一)きえほろびること。(二)けしほろぼすこと。こゝは(一)。

【超人間】 テウニンゲン 人間以上のもの。

【雜音】 ザツオン (一)さわがしい音。(二)騒音。こゝは(一)。

【天狗の奏樂】 テングのソウガク 深夜山中などから原因不明の笛太鼓の囀のやうな音が聞えて來る現象を、天狗の仕業と見ていつたもの。

【天狗】 (一)深山に棲み神通力を有するといふ想像上の魔神。ぐひん。ごひん。(二)高慢なこと。又、その人。こゝは(一)。

我が國の天狗思想は移動自在の靈として生れたものであるが、中世以後、佛道の妨げをなす外道・天魔の類とする思想が弘布し、いつしか、赭顔・白髪で鼻高く、頭巾・笹懸の修行姿に羽團扇を執るなど、一定の山伏的形相が成るに至つた。鼻を高くしたのは増上慢を表すもので、すべて負嫌ひ・意地悪・潔癖・執念等の性質が附與せられた。

一方、山人・守護神等と同じく山靈の一としてこれを畏怖する思想も永く民間に傳はり、これらの思想が混融して種々の傳説を生んだ結果、深夜人跡絶えた場所に起る異様な音響・光輝、その他普通の人智を以ては解釋し難い現象は、總べて天狗の仕業とせられた。天狗磔(ど)こからともなく石の降る現象)天狗倒し(大木を挽き伐る如き音のする現象)天狗笑ひ(多數の人の高笑ひが聞える現象)天狗の火(あるべからざる所に火の見える現象)及び天狗の奏樂などはその代表的なものであり、山伏の行場である愛宕・鞍馬・比良・飯繩・大山・彦山・大峯・二荒・戸隠・秋葉・羽黒・榛名等の諸山は、それ／＼著名な天狗の棲處として傳へられてゐる。

猶、天狗の奏樂に就いては、柳田國男氏著「山の人生」中に、遠州秋葉山その他の例が擧げられてゐる。

【湖水の忍泣】 コスキのシノビナキ 湖畔又は湖面から響いて来る異様な音を、傳説的に水中からの忍泣に譬へたものであらう。

湖沼のほとりは、霧が多く、空氣の濕度が大である關係上、音響の傳はる速度、範圍が大きく、且つ空氣の状態に應じて音の變化があり、無風・快晴で濃霧のある日などは、例へば湖畔の木ずれの音などが、湖上を渡つて意外の場所にまで聞えて来る。水中の忍泣も、恐らくはこの種の現象の傳説化であらう。

この種の傳説はかなり多く、作者の郷國上州から一例をとれば、安中（現群馬縣碓氷郡安中町）のお八重が淵傳説がある。

即ち、昔安中城中にお八重といふ美貌の侍女があつて朋輩から嫉まれ、讒によつて城主の怒に遭ひ、生きながら甕に封ぜられて、城東九十九川の川上にある名なしの池の深淵に沈められた。爾來、日が暮れると池底から女子の悲聲が聞えるので「お八重が淵」と呼ばれるに至つたといふ。

【俗界】 ゾクカイ 「俗世界」に同じ。

【何等の物音なくして山上の風光を觀るに及んで、山は愈々

感覺的に影響して、風景の感じに一つの重大な變化を與へるのである。

【眼と同水平に】 メとドウスキヘイに 眼と同じ高さの水平面上に。

【開展】 カイテン (一)ひらきのびること。(二)ひろげのびること。(三)進歩發達すること。こゝは(一)。

【水平相】 スキヘイサウ 眼と同水平の位置に於て物を見た時に知覺されるその物のすがた。

【仰望相】 ギヤウバウサウ 眼よりも高い水平位置に於て物を仰ぎ見た時に知覺されるその物のすがた。

【俯瞰相】 フカンサウ 眼よりも低い水平位置に於て物を見おろした時に知覺されるその物のすがた。

【景物】 ケイブツ こゝでは、風景を構成してゐる一つの物象といふ程の意。一般に(一)四季折々の景色。

花鳥風月の類。風物。(二)座興を添へるに足る時節相應の珍しい食物、酒肴等。(三)連歌や俳諧で、點取の賞として與へる品物。(四)商品に添へて客に贈る品。景品。

【奇現象】 キゲンシヤウ 不思議なあらはれ。

【現象】 五官を通じて吾々の經驗し得るすべての事物の象。理性により思惟せられた本質・本體等に對していふ。

【雲中如來】 ウンチュウニヨライ 雲霧に映る自分の投影を雲中に如來が出現した如く考へていつたもの。

靈なるものとなる】

日常の平地の生活に於ては、音響の減却といふことは極めて稀有である。山上ではこの稀有な境に在つて山上の光景を眺めるのだから感覺が明敏となり、清澄・崇高の感が高まるわけである。

【風光】 フウクワウ (一)けしき。ながめ。風景。(二)やうす。人から。品格。(三)おもかげ。こゝは(一)。

【視線の角度】 シセンのカクド 凝視線の移動に伴つて生ずる角度をいふ。所謂視角(眼の光學的説明に於て、物體の兩端と一眼の結點とを結ぶ視線のなす角)とは異なる。

視線は、概括的にいへば物體と眼とを結ぶ直線であつて、網膜の中心窩を通る視線を凝視線といひ、この線上の點が最も鮮明に網膜に映じ、これを中心として外界の物象の状態が眼にうつるのであるが、實際に風景などを見る時には、眼球を眼窩の中で上下左右に回轉させる外種々の運動が行はれる。随つて之に伴ふ視線の動きも様々に變化するわけであつて、眼と同じ水平面に於ける風景を上下に見る場合は、その角度が比較的小さいけれども、山上などの如く頭上から足下まで展開してゐる風景を仰望俯瞰する場合には、それが著しく大きくなりそれに伴ふ複雑な眼筋の協同運動や調節の努力などが

山の頂のやうな所で太陽が背後にあつて雲霧が前面を蔽うてゐる時に、自分の影が雲霧に映る現象。

氣象學上の「大氣中の光象」の一であつて、この雲霧に映る像は極めて大きく見えることがある。又頭の周圍には光の廻折の現象によつて色彩のついた光輪が見えるので、山の神秘感から古來これを靈異的に又怪異的に考へて種々の迷信や傳説を生み、この光輪を「佛の御光」といひ、この現象を「雲中如來」と稱へた。又この現象はドイツのプロッケン山に於て屢々見られたので、これを「プロッケンの妖怪」と呼び、一般的にこれをその名稱とするに至つた。

この現象に於て、映像が巨人の如く見えることがあるのは、眼の錯覺によるものである。元來太陽の光線は殆ど平行に來るのであるから、映像は自然大で決して巨大には映つてはゐないのであるが、吾人の視覺上の判斷は映像を遠くに移して見てゐる。しかも視角は元通りであるから、結局映像は大きく見えるのである。又この現象に現れる光輪の色彩は日光スペクトルと同じで、外縁が紅色で内縁が靑色である。

【如來】 梵語 Tathagata の譯語。佛の異名で佛十號の一。如實の理に契うて來現する者の意。佛は窮滿せる眞實智慧を以て眞如の理を證し、迷界に來つて衆生を救濟する

者だからである。

【目撃】 モクゲキ 実際に見ること。みとめること。

【私がまた大學の學生であつた頃】 明治二十五年前後。

【碓氷峠】 ウスヒタウゲ 古書には笛吹峠・碓日坂・宇須比坂・碓井坂・信濃坂等と見える。群馬縣碓氷郡と長野縣北佐久郡との境界に在り、信濃川と利根川との分水界をなす峠で、新・舊兩道がある。中山道に沿ふ碓氷峠舊道は海拔約一二〇〇米、日本武尊が弟橘姫を追慕し給うて「吾嬬者耶」と詠歎せられた所と傳へられ、西麓に峠町と碓氷神社（俗に峠權現とも呼ばれ、熊野大神を祭ると傳へてゐる）がある。又鐵路に沿うて開鑿された碓氷峠新道は海拔九五六米、信越本線は二十六箇の隧道でこれを通過し、アプト式機關車を用ひてゐる。

【輕井澤】 カルキザハ 長野縣北佐久郡輕井澤町。開析火山荒船山の北麓と活火山淺間山の南麓との間に横たはる海拔約九五〇米の火山性高原に位し、夏季は朝夕著しく冷涼で紫外線に富み、避暑地として著名である。輕井澤長倉の兩字から成り、前者は更に舊輕井澤と新輕井澤とに分れる。舊輕井澤は碓氷峠の西麓に當り、往時中山道碓氷峠の關門を扼する官驛として繁華を極めた。新輕井澤はそれより南方二軒を隔て、信越線の要驛をなしてゐる。避暑客の集るのは主として舊輕井澤附近で、その西

方にある難山は眺望の關達を以て知られてゐる。

輕井澤は、明治初年以來外人の手で開發せられ、在留外人の別荘地たるの觀を呈したが、近時は淺間山麓の千ヶ瀬附近に本那人の別荘地が建設せられつゝある。

【徘徊】 ハイクワイ あるきまはること。ぶらつくこと。うろつくこと。たちもとほること。

【開闢の太初】 カイビヤクのタイショ 天地の開け初め。古事記では、天地の初に當つては、國土が稚く浮脂のやうで、海月のやうに漂つてゐたが、葦牙のやうに萌え騰つて天となり、淹滞して地となつたとあり、日本書紀では太初は混沌として鶏卵のやうであつたが、重い物は沈んで大地となり、軽い物は浮んで天空となつたとある。其の他、エヂプトでは、萬物の始原は暗い深淵であるとし、イスラエルでは、元始に神が天地を創り給うたが地は定形がなく、曠空で、黑暗が淵の面にあり、神の靈が水の面を覆うたとある。フエニキヤでも深淵と卵によつて説いてゐる。科學的根據の上に立つ宇宙開闢説、即ち太陽系の起源を論ずるものは十八世紀に入つて漸く唱へ出された。

【關】 開發する。

【太】 はじめ。

【高原】 カウゲン 平地がその平坦な表面を保存しつゝ、高

くなつてゐるもの。臺地。

【速に】 ニハカに 速かなるさま。あわていそぐさま。

【狭霧】 サギリ 霧。「さ」は、名詞・動詞・形容詞に冠して語調を整へるに用ひる接頭語。「さ夜」「さ迷ふ」「さ遍し」。

【半透明】 ハントウメイ 透明と不透明との中間に位するもので、物體の色や明暗は透視できるが、物の輪廓は判然と透視し得ない。

【ヴェール】 Veil (英) (一) 婦人が頭髮又は顔の一部を覆ふに用ひる薄絹網又は絹布など。かほかけ。面衣。面紗。面網。面帕。(二) 轉じて、薄いおほひ。とぼり。幕。こゝは(一)。

【巨人】 キョジン (一) 並外れて身體の大きな人。(二) 各國の神話・傳説・童話等に傳承せられる超人間的の巨大な人物。ジャイアント (Giant)。(三) 品性・才學の偉大な人。こゝは(一)に多少(二)のやうな妖怪的な意を含ませたもので、大入道といふ程の意。

【刮目】 クワツモク 目をこすりぬぐつて見開くこと。注意して見ること。

【刮】 (一) けづる。こする。

【虹の環】 ニジのワ 雲中如來の現象に於て、映像の頭の周囲に見える色彩のついた光輪のこと。

一三 山上の靈氣

吾が國ではこれを光背になぞらへて、「佛の御光」と稱する。光輪は虹のやうな色彩をもつてゐるので「虹の輪」といつたのである。

【周邊】 シウヘン あたり。まはり。

【清涼】 セイリヤウ すがすがしいこと。さわやかなこと。

【靈光】 レイクワウ 不思議なたふとい光。

【現身佛】 ゲンシンブツ 肉體を持つた佛。「應身佛」に同じ。法身佛・報身佛と共に佛三身の一。

【現身】 (一) 現在の身。(二) 應身、即ち佛が機に應じ物に接して肉身を現し、法を説いて衆生を救ふこと。

【人寰】 ジンクワン 人間の住んでゐる所。世の中。人境。

【寰】 界。場所。天地。天下。

【遭逢】 サウホウ であふこと。めぐりあふこと。

【恍惚】 クワウコツ 物事に心を奪はれてうつとりとするさま。

【嘆美】 タンビ 感心してほめること。感嘆して賞揚すること。

【美】 賞める。よみする。

【善光寺如來】 ゼンクワウジニョライ 長野市に在る善光寺の本尊阿彌陀如來をいふ。

この如來像は三國傳來の一光三尊と稱せられる丈一

尺五寸闊浮檀金の尊像で、欽明天皇十三年(一一二二)百濟聖明王から經卷と共に我が國に奉獻せられた。(一説に、繼體天皇四年頃渡來といふ)。大臣蘇我稻目、その子馬子は深くこれを信仰したが、物部・中臣二氏の反對に遭つて難波の堀江に投げられた。然るに推古天皇十年(一一六二)信濃の人本田善光がこれを堀江から拾ひ、奉じて伊那郡麻績の里、即ち今の座光寺村に草堂を營んで安置した。皇極天皇元年(一一三〇)勅によつて水内郡芋井郷長野村(現長野市)に伽藍を造營し、これに移して善光寺の勅號を授けられたのだといふ。永祿元年武田信玄は甲斐の善光寺にこれを遷し更に數次の變遷を見た後、慶長三年豊臣秀吉は京都方廣寺にこれを奉安し、次いで翌年信濃の當寺にかへつた。

【善光寺】長野市元善町に在る天台・淨土兼宗の名刹。市の北端大峯山麓に位し、南面して市街を俯瞰してゐる。皇極天皇元年の創建以來、堂塔の炎上すること元祿十三年まで十二回に及び、現在の金堂は徳川幕府が松代藩に命じて造營させ寶永四年竣工したものであるが、我が國佛寺建築中特殊な様式に屬し、國寶建造物に指定されてゐる。主な堂宇は金堂の外、山門・仁王門・經堂・鐘堂等で、その他別當職の大勸進(天台宗)主務職の大本願

淨土宗があり、又山内の寺院は三十九寺を數へる。大勸進の住職は比叡山・東叡山から薦擧せられ、大本願の住職は尼公と定められてゐる。今境内は公園となり、その東は城山公園に接してゐる。

【傳説】デンセツ (一)古くいひつたへられて來た話。いひつたへ。口碑。(二)うはさ。風聞。風評。取沙汰。こは(一)。

傳説は物語の傳承形式の一で、過去の事實若しくは事實と信ぜられる事件の傳承であり、神話・民譚・口碑などを含めたものである。猶、傳説は諸人種の慣習信仰・技術等をも取扱ふところから、民俗もこれに含まれるともせられる。

【めつたに】(一)むやみに。みだりに。(二)そのことを度度はしない意(下に打消の語を伴ふ)。こは(二)。

【印象】インシヤウ 對象が心に與へる直接影響。感官知覺及び直接それに伴ふ感情。

【光背】クワウハイ 本來は佛・菩薩等の身後に發するといふ光燄であるが、轉じて、佛・菩薩の彫像又は畫像に於て、その光燄に象つて頭後と身後とに添へる金色の圓輪。頭後ものを頭光、身後ものを身光といふ。背光。御光。後光。

更に轉じて、すべて佛像の背後に添へてこれを莊嚴

ならしめるものを光背といひ、輪光・船形光・唐草光・飛天光・傘御光・火燄光等種々の形式がある。

【惠心】エシン 源信。天台教學に於ける惠心流の祖。天台宗の根本思想を淨土信仰に活用し、鎌倉期淨土信仰興隆の基礎をなす所が多かつた。惠心院に住したので惠心僧都と稱せられた。俗姓は卜部氏。父の名は正親。母は清原氏。大和國葛下郡(現奈良縣北葛城郡)の人。天慶五年(一六〇二)生。幼にして比叡山に登り、良源(慈惠大師)に就いて切磋怠らず、十三才の時剃髮・受戒して法諱を源信と稱した。顯密の教を究めて薰練せざるなく、大いに朝廷の殊遇を忝うしたが、榮名を忌んで出離を求め、天祿中横川に屏居して、専ら行道と著述とに従つた。著す所、一乘要訣・往生要集・阿彌陀經疏・大乘對俱舍鈔・因明相違註釋等、すべて七十餘部百五十卷、(惠心僧都全集に輯録せられてゐる)世に行はれる天台の教法はこの時に於て最盛を極めた。又、彫刻・繪畫をよくし、高野山にある二十五菩薩來迎の圖、及び京都禪林寺その他にある山越彌陀の圖は、その作と傳へられてゐる。その遺跡は諸國に散在し、衆庶の尊信するものが多い。寛仁元年(一六七七)六月十日寂。享年七十六。

【山越彌陀】ヤマゴゴン(ヤマゴエ)ミダ 阿彌陀如來來迎圖の一様式。阿彌陀如來が觀音・勢至の二尊を従へ、或

はその他の聖衆を引率して、峯巒の背後に半身を現した圖で、如來が雲に乗じ山を越えて引攝來迎する容である。とせられてゐる。傳説によれば、惠心僧都が叡山横川の山中に於て彌陀佛の雙峯の間に出現するを見て感得した所を圖したのに始まるといふ。現存するものでは、京都禪林寺所藏の山越阿彌陀如來圖一幅(絹本着色)京都黒谷金戒光明寺所藏の山越阿彌陀如來像及び地獄極樂圖三曲屏(絹本着色)並びに大阪上野精一氏所藏の山越阿彌陀圖一幅(絹本着色)が最も著名で、いづれも國寶に指定せられてゐる。

上記三圖はいづれも惠心筆として傳はつてゐるが、時代は惠心よりもやゝ降つて、鎌倉時代の初期乃至中期の作と推定せられてゐる。

【叡山】エイザン 比叡山。京都市の東北約四軒、京都府(山城)と滋賀縣(近江)の境に、方五軒に盤踞し、内に二高所があつて、東にある大嶽は海拔八四八米、西にある四明が嶽は海拔八三九米。天台宗の大本山延暦寺の寺界で、東塔・西塔・横川の三塔に分れ、東塔は一山の中心部で、根本中堂・戒壇院・大講堂・淨土院・文殊樓等があり、西塔は根本中堂の西北約一軒、釋迦堂・相輪塔・法華堂・椿堂等がある。横川は東塔の正北四軒、楞嚴院・四季講堂・元三堂等がある。こは東塔・西塔

とは別世界をなし、古來惠心その他、名利の學を厭ひ、眞の出離を求めた人々の隱栖修行した所で、惠心院・惠心僧都廟・道元及び日蓮修學の舊跡もある。

この山は近江の人最澄が延暦七年（一四四八）日枝山寺（後の延暦寺）を建て、入唐歸朝の後こゝに據つて日本天台の一派を起してから、歴朝の御信仰厚く永く平安佛教の中心地をなした。

【藝術化】 ゲイジユツクワ こゝは藝術的に表現する意。

【藝術】 こゝでは最狹義の藝術、即ち造形藝術中の繪畫を指す。

【化】 英語の接尾語 *-ize, -ise* に當る語で、或語に添へて「……とする」「……のやうにする」又は「……となる」「……のやうになる」意を表す。

【幽玄】 イウゲン 道理が奥深く、容易に探り知ることが出来ないこと。趣が深く味はひが盡きないこと。

【畫龍に眼睛を點する】 グワリウにガンセイをテンする 畫いた龍にひとみを入れる意で、事をなして、最後にその眼目となる部分を完全することによつて、急に全體が

2 文の構成

第一節 初—一〇一頁八行

山上に於ける氣分の一轉は生存感覺の變化と聽視覺に訴へる所の變化による。

第二節 一〇一頁九行—一〇三頁終

山上に於ける音響の減却・視線の角度の變化及び雲霧の作用は山を愈々靈ならし

生動し來ることにいふ。「畫龍點睛」ともいふ。

水術記「張僧繇於金陵安樂寺畫四龍於壁、不點睛。每曰、點之即飛去、人以爲誕。因點其一。須臾雷電破壁、一龍乘雲上天。不點睛者皆有。」

【眼睛】 (一)ひとみ。(二)まなこ。めだま。

【點する】 (一)點をうつ。(二)批點を加へる。評價する。(三)火をとます。(四)場所や日時を定める。(五)

(茶を)たてる。(薬を)さす。(六)しらべる。點檢する。

【山靈】 サンレイ 山の靈氣を神格化していふ。山の神。山のぬし。山の精。

山・川・湖・沼などの自然物の中に精靈が存してこれを主宰するといふのは、未開人に共通な信仰的思想であつて、自然界の神祕は、多くその仕業に歸せられた。民間傳承の天狗の如きも山靈の一種である。但し作者がこゝで山靈といつてゐるのは無論未開人的な意味の山靈ではなく、山の靈氣を神格化していつたものであることは既述の通りである。

【活躍】 クワツヤク 勢よく生き生きと活動すること。

める。

1 音響の減却は山を靈ならしめる。(一〇一頁九行—一〇二頁七行)

2 視線の角度の變化は山を不思議ならしめる。(一〇二頁八行—一〇三頁三行)

3 雲霧の作用は山を靈異ならしめる。(一〇三頁四行—一〇三頁終)

第三節 一〇四頁一行—一〇六頁一行 作者が碓氷峠に於て雲中如來の現象に遭遇したこと。

1 碓氷峠の絶頂に於て黎明、無人の境を徘徊しつゝ天地の悠久を味はつてゐたこと。(一〇四頁一行—一〇四頁一行)

2 或朝の散歩に雲中如來の出現に遭遇したこと。(一〇四頁二行—一〇六頁五行)

3 善光寺如來現身佛の傳説への聯想。(一〇六頁六行—同一行)

第四節 一〇六頁一二行—一〇七頁四行 雲中如來に對する作者の藝術的態度。

第五節 一〇七頁五行—同頁終 作者の目撃した雲中如來と惠心作山越彌陀との比較及び雲中如來が山を靈ならしめる一の重要契機たること。

3 文意

山上の靈氣の心理的説明と山靈の象徴たる雲中如來現象の藝術的把握。

4 鑑賞批評

科學的考察に、自然觀察に如何にも科學者らしい透徹した筆致が冴え渡つてゐる。特に科學者である作者が雲中如來現象を靈的、審美的に觀てゐる點にこの文の獨自の位置が見出される。

三 備 考

1 指導研究

(一) 生徒に困難な點は景觀の敘述ではなくて、むしろそれを心理的に説明してゆく考察であらう。更にいへばこの文が一見敘事であり、描寫であるやうであつて、中心は説明にあることであらう。

随つて學習の指導に於ては、さういふ作者の態度を具體的に指摘し、心理的考察の要點を指示することが肝要と思はれる。殊に生存感覺とか聽覺とか視覺とかいふ感覺作用によつて、山上の靈氣を説明しようとしてゐる所に特色が認められる。

(二) 本課では、反覆熟讀の前に心理學的な術語や考へ方の説明を與へることが本文の理解を助けるであらう。

其他、「雲中如來」「巨人」の如き傳説的事象を觀察して、一には之を歎美し一には之を説明しようとする所に理解の困難を生ずる。これ亦指導上、用意を加へるべき點であらうと思はれる。

2 参 考

(一) 挿繪説明

影富士。夕日が富士の背後に傾くや、裾野に廣がる雲海の上に萬丈の倒影が投ぜられて、壯大な景觀を呈する。之を影富士又は倒富士といふ。

雲海。高山の頂上から俯瞰した時に、下界一面が雲にとざされそれが海洋の波濤の如くに見える状態をいふ。

山越彌陀圖。年代鎌倉時代。原圖は京都市左京區南禪寺町、禪林寺にあり、國寶となつて居る。左に出所京都美術大觀よりその説明を抜粹する。

名稱 山越阿彌陀如來圖。絹本着色。竪大約四尺五寸、幅三尺九寸ほどの掛幅である。淨土教の思想がよほど普遍的となり、彌陀來迎が稀有の事實ではないと信ぜられるやうになつてからの産物である。

圖様は、倭繪一般にみられる斜横のそれとはちがつた正面よりせられた俯瞰法に依つて、上方に漫々たる湖水を境として果層的に山容を描き、山の彼方よりはや、半身を現じた金色の阿彌陀如來を描き、觀音・勢至の二菩薩は、早や山を越えて中腹に來てゐる。山麓の磐頭には二童子騎を捧げて迎へ、左右兩端には、四天王あつて臨終の魔縁を守護してゐる。構圖布置は正しい三角形の均整的なものでや、半身をか、げた二菩薩の姿體にも、すぐれた才能を窺ふ事が出来る。(下略) 繪語釋の項參照。

(二) 参考文献

(イ) 「渡り鳥日記」中の「山水の心」の冒頭を抜く。

我々日本人には山水の心がある。山水の心を有つてゐるといふことは、平常は自分でも氣付かないのであるが、山水の無い所に半年なり一年なり住んで見ると、始めてそれが分る。余は往年獨逸のライプツヒに留學して居つたことがある。萊府の郊外には大なる森林があるが、大方は見渡す限り平野茫邈として日も月も野原の向ふから出て、又野原の向ふに没するといふ有様で、偶有耶無耶の水平線上に山の嶺があるやうに見えることがあるが、それは雲に欺かるるのである。小さい川は無いことはないが、平野であるから水面を見てもそれが何の方面に流れてゐるか譯らない。余は久しく斯る土地に住つてゐたが、常に山嶽を仰ぎたい流れの急なる水に臨みたいと希ふ。所謂山水の心に驅られて萊府の平野に對し不満の情を催さざるを得なかつた。

山水の心は必ずしも故國の山水を懐ふのではないから、懷郷心とは同一でない。然し自己の幼時生育せる土地の山水により養成せらるゝ心だから、時としては山水の心と懷郷の心とは一致することもある。瑞西の人は幼少の時から清明なる山水の間に育ち、生活に飲食を必要とする如く美なる山水を要求するから、何れの國に行つても満足することが出来ない。瑞西の山間湖邊を自己安住の所と感ずる。斯る場合には山水心と懷郷心と同一になる。日本人が何れの國へ行つても詰りは自國に歸りたいとの念慮を有し、他の國の歸化人となつて了ふのを躊躇する趣あるは、勿論人文的教化の影響もあるが、一は日本の國土に至る所美なる山水の風色に富み、國民の山水心を養成することが深いからで、故國の山水に羨はれた心を遂に他國の風土に適應せしむることが出来ないからであらう。

余の山水風流の心を養ふに與つたものは種々ある。我國の山水は勿論、ロッキーマウンテンの雪山紅葉の如き、英國北方の山地の如き、或は瑞西の巍峩たる山嶽の如き、或はロンバルディー爾蘭の春雨の如き、或は希臘メガラ海岸の如き、或はシナイ山の夕陽の如き、何れも余が記憶の天地に際顯する奇勝であるが、抑も余が山水心の萌芽となつたものは、余が生育したる上毛の山水風光であつて、余が幼年及び少年時代の意識は上毛の山川と結び付いて離るゝことがない。(同書 三三六頁—三三八頁)

(ロ) 田部重治氏の「山と溪谷」の中の一節を抜く。

私は屢々信州島々谷の溪谷を溯つて徳本峠に攀ぢ、峠の上から穂高の秀峯が、ほんの唯今大地の底から湧いたかのやうに清淨な白雪を頂きながら、新しく立つてゐる壯嚴なる光景に接した。私は此の秀麗な山容によつて、今迄、私の考へて來たことの如何に價値少くて、私にして來た行爲の如何に卑しいものであつたかを感じしめられた時、此の秀麗なる姿は、人生の美はしい姿の象徴として、私の憧憬の對象となり、私の感情の内に深く織り込まれるやうになつた。そして此の秀麗なる姿を私と共に味ひ共に感激した人々は私に取つて忘るゝことの出來ない人々となつてゐる。(同書 一九頁—二〇頁)

一四 瓜 盜 人

一 解 題

1 出 典

續狂言記卷二に收められてゐる「瓜盜人」の全文である。總べて狂言記とは板本によつて行はれた能狂言の臺本で、萬治三年(二三二〇)以降徳川末期に至るまで屢々刊行せられ、現に狂言記・續狂言記・狂言記拾遺・狂言記外篇、各五卷各卷十番が世に行はれてゐる。併し實際には、能狂言は専ら口傳として傳へられたものの如く容易に記録・書物の形では傳はらなかつたもので、これ等の狂言記は舞臺で行はれる臺本のまゝのものではなく、多分に讀み物としての意識の加へられたものである。随つて能狂言の根本的研究は古正本によらねばならぬ。現在知られてゐる古正本としては、大藏流に大藏彌右衛門虎明傳書(寛永十、九年寫)、鷲流に鷲傳右衛門保教傳書(正徳、和泉流に波形本・雲形本(何れも徳川末期寫)等がある。各流によつて詞章に少からぬ異同がある。

能狂言は、平安朝後期以來次第に發達した猿樂の諸演戲のうち、物真似を本體とする笑戲の成長發達したもので、鎌倉時代を経て、室町時代に至つて能樂の完成に伴つて大成せられた。能と能との間に挿み、普通能五番と狂言四番とに組んで演ぜられ、幽玄を狙ふ能によつて醸される緊張を放笑によつて轉換せしめ、又一面には能樂師に休息を與へ、その複雑な扮装に要する時間を作る役目をなした。藝術的にさまで大きな價値をもつものではないが、文學史的には平民文學の一つの先驅として、重要な位置を占め、歌舞伎の發達に大きな影響を與へ、滑稽本・落語・小咄・歌淨瑠璃等に多くの材料

を提供してゐる。その他、風俗史上の参考すべき資料であり、その詞章は國語學上の重要文献である。

2 作者

金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作と傳へられてゐるが、勿論確證はない。總べて能狂言の作者は、謡曲の如く明らかでない。續視聽草は玄惠法師の作にかゝるもの五十九番、金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちに作つたもの七十番、作者不明二十三番としてゐるが、それも如何なる資料によつた説か明らかでない。現存は、大體吉野朝時代から文祿・慶長頃にかけて徐々に成立したもので、演者によつて協定せられた一つの筋が舞臺に於て洗練せられ、ほゞ一つの定まつた形として傳承せられたものと見るべきであらう。

3 主眼及び採擇の趣旨

本課は中世に於ける民衆に取材した喜劇の臺本を掲げた。一篇に溢るゝ輕快で洒脫なユーモアが主眼である。猶、これはその時代の風尚を反映したもので、その時代の國語を知るべき貴重な文化的所産である。文藝的教材であり、文化的教材である。

本課は前二課の後を受けてその緊張感を快く解放するであらう。

二 解釋

1 語釋

【瓜盜人】 ウリヌスピト 瓜の瓜をこつそり盜む者。

【瓜】 (一) 葫蘆科植物の總稱。古昔は「ふり」と稱した。

蔓性の一年生草本で、この栽培には高温の氣候を要するので、多く夏期作物として取扱ふ。果實は食用に供せられる。その中の主なものは、胡瓜・甜瓜・越瓜・南瓜・西瓜・冬瓜・扁蒲・絲瓜・苦瓜・倅瓜等である。(二)

越瓜・甜瓜の特稱。こゝは(一)。

【瓜主】 ウリヌシ 瓜島の持主。こゝではアド。

能狂言の登場人物は、極く稀には一人のものもあるが、多くは二人・三人、稍複雑になると數人のものである。その主な役をシテ、又はオモといひ、助演者をアドといふ。瓜盜人では、シテが盜人(半袴、上下、腰)、アドが瓜主(出立同前)である。

【罷出でたる者】 此邊の耕作人でござる

能狂言には、演者登場の道程として、謡曲のやうに次第・一聲その他で始まるものもあるが、大部分は「罷出でたるは、この邊に住居致すものでござる。」とか「罷出でたるは、隠れもない大名」とか、或は單に「八幡大名」「御存知の者」などで始まる。こゝもその例である。なほ簡單なものは直に「やいやい、太郎冠者あるか」と本文にかかる。

【罷出でたる者】 マカリイでたるモノ 出て参りました者。

【罷る】 (一) 貴い所から退き去る。歸る。(二) 「行く」「来る」の謙遜の語。(三) 死ぬ。(四) 他語の上に添へて謙遜の意を表す語。こゝは(四)。
【此邊の耕作人】 コノアタリのカウサクニン 此附近の農夫。

【ござる】 「御座ある」の約。「居る」「来る」「行く」「ある」等の敬語。轉じて丁寧語。こゝは「ある」の丁寧語。

【身共が仕合で】 ミドモがシアハセで 私の運がよくて。

【身共】 自稱代名詞。同輩以下に對して用ひる。

【殊の外好う出来てござる】 例年より格別によく出来てゐます。

【畑へ見舞うて】 畑へ様子を見に行つて。

【見舞ふ】 起居を問ふ。様子をたづねる。とぶらふ。おとづれる。

【臍落】 ホゾオチ 瓜の蒂の落ちること。成熟すると蒂が落ちる。「臍」は瓜の蒂を譬喩的にいつた語。

【ちと】 少し。

【誠に此邊方々に瓜を作つてはござれど、某が様はござらぬ】

瓜主の得意満足を窺はれると共に、その受難が既に暗示せられてゐる。

【某が様はござらぬ】 私のやうなよく出来た瓜はありません。「様な」の次に「瓜」が省かれてゐる。

【是が身共の畑ぢや】

この獨白の中に時空の経過が鮮かに表されてゐる。
【や】 こゝは、突然何か思ひついた時に發する語。

【獸】 ケダモノ 兎や猪の類を指すのであらう。
 【案山子】 カガシ (一)竹・藁などで人の形を作り、弓矢などを持たせて、田畠の間に立て、鳥獸の寄るのを威し防ぐもの。そほど。やまだのそほづ。(二)見かけばかりもつともらしくて、無能な人物。こゝは(一)。
 【脇座】 ワキザ 能舞臺の名どころ。舞臺に向つて右の方で、脇柱の後方にある脇師の着座する所。
 【や、一段とよい】

自分で作つた案山子をじつと見入りながら言ふセリフであるから、一段と立派に出来たといふ意に見るべきである。

【樂屋】 ガクヤ 能・芝居などの舞臺の後にある部屋、役者の装束をつけ化粧をなし又は休息する所。瓜主は舞臺より橋掛りを通つて樂屋へ入る。

【所用】 シヨヨウ 用事。

【山一つ彼方へ参つていゝるが】 山一つ向うの村に行つて来ました。

今はその歸途である。行きに見た瓜のことが腦裡を去らなかつたことが次に語られてゐる。

【私に御目を懸けらるゝ御方】 私を最眞して下さる御方。

【目をかける】 目をつけて可愛がる。最眞する。

【此邊にあつたが、どの畑ちや知らぬ。おゝ、これぢや。】

薄闇の中に目ざす瓜畠を探してきよろついでゐる盗人の姿が浮き出してゐる。

【どの畑ちや知らぬ】 どの畠か知らん。こゝの「ぢや」は疑問の助詞「か」の俗語と見れば良い。

【垣杭】 カキグヒ 畠の周囲にめぐらした垣根の杭。

【あらば聲を立てうが、無いものぢや】 番人がゐたら、こらつ！ とか、泥棒！ とか聲を立てようがさてはゐないのだ。

【立てう】 「う」は未來助動詞「む」の音便。こゝは下二段の動詞に接続してゐる。今日標準語では「う」は廣義の四段、即ち、四段、ラ變、ナ變の未然形に限つて接続し、それ以外には、「よう」が接続することになつてゐる。即ち今日の語法ではこの場合「立てよう」となる譯である。然し地方には方言として「見う」「爲う」「來う」等の四段以外の動詞にも「う」を用ひる語法が猶存してゐる。

【いかい事】 澤山に。仰山に。

【此が瓜さうな。いや、瓜かと思つたれば枯葉ぢや】

畠の中にしやがみこんで手探りしてゐる有様が見えるやうである。

【此が瓜さうな】 これが瓜であるらしい。

【や、思ひ出した。夜瓜を取るには轉びをうつて取るものぢ

やと聞いた】

この思ひつきが、場面の急展開を見物に期待させ興をそゝるのを覺える。

【さればこそ】 期待に外れなかつた時に發する語。「されば」に助詞「こそ」を添へて強めた語。それこの通り。思つたやうに。案の如く。案の定。

【枕の時】 「枕のやうに當つた」といふセリフをいふ時に。仰臥になつて、自分の両手で頭の下を瓜を持つやうなしぐさがあつて大聲でうれしさうに笑ふのである。

【一つ潰れたわと云ふ】

他の瓜をさがす(横臥しながら手さぐりで)所作があつて、この句をいふ。そして、この語があるために「さてもく好い匂じや」が生きて来る。つぶれて芳香がただよふのである。

【眞平御許されませ。私は盗人ではござりませぬ。こなたの畑が、あまり見事に瓜が生りましたと承りまして、見物に参りました。命の儀を御許されませ。瓜二つ三つ取りましてござる。皆返しませう。御許なつて下さりませ云々】

案山子を番人と取りちがへた盗人の粗忽さ、その中にいかにも善良な小心者らしい面影が見えて、その失敗が一層際立つて滑稽に感ぜられる。實演では「命の儀を御許されませ」の次と「御免なつて下さりませ」の次とに

長いポーズがある。このポーズは、相手が何とか言つてくれないかと期待しながら平伏してゐる際である。第一のポーズで、瓜盗人でないと言つてゐたのが、「瓜二つ三つとりましてござる」と白状せざるを得ない心理的變化を示してゐるのである。

【眞平】 マツピラ ひとへに。平に。ひたすら。

【お許されませ】 お許しなさいませ。

「お」は尊敬の意を表す接頭語であるが、こゝでは「許さ」といふ動詞に冠せられてゐる。従つて形の上では之を接頭語と扱ふわけには行かないであらう。現代口語では「お許しなさいませ」とか「お許しになつて下さい」とか言ふのであつて、この場合の「許し」は名詞化された語であるから、上の「お」は形の上からも接頭語と扱はれるわけである。

【お許されませ】の如く「お」が直接動詞に冠せられることは、今日標準語法としては存しないが、方言としては各地に残つてゐる。

【御免なつて下さりませ】 御許しになつて下さい。

【御免なつて】 ゴメンなつて「御免」は、おゆるし、の意の名詞。「なつて」は「なりて」の音便、「なる」は「なす」「す」の意を表す尊敬の動詞。

【何とも迷惑でござる】

何とも困りますといふ意。どうしてよいか閉口してしまふことを迷惑といつたものである。

【歸させられて下されませや】 家に歸して下さいませよ。

【申し、なう】 相手を促す語。

【これはいかな事】 これはまあどうしたことだ。

【いかな】 「いかなる」の略。(一)いかやうな。どのやうな。どんな。(二)不承知、又は容易ならぬ意にいふ語。こゝは(二)。

【扱も扱もよい肝を潰した】 さて／＼ひどく吃驚させられた。

【よい】 副詞的な意味で用ひられてゐる。

【いくせの事】 いろいろな事。

【せ】 (一) 河流の水が浅くて徒渉の出来る所。淺瀬。(二) 水流の急な所。急湍。(三) 時節。場合。こゝは(三)。

【其儘人のやうな】 そっくり人のやうだ。

【な】 指定の助動詞「なり」を約したも。軽い語感が感ぜられる。

【折こかいて退けう】 折り倒しやらう。「退けう」は「やらう」といふに同じ。「言つて退けう」「逃げて退けう」の如し。

【瓜蔓も引き扱つて退けう】 案山子にたまされた盗人の腹立ちがひたすらに表れて

の奇畜家であらう。行く手の畠の被害が思ひ合せられて微笑を禁じ得ない。

冒頭の「畑へは毎日見舞はねばならぬ」といふ言葉の意味がこゝで釋然とするやうに思ふ。

【某の】 私が、の意。この「の」は主格を表す特別の例である。

【瓜盗人め、ゆふべうせたものであらう】

【うせる】 (一) 見えなくなる。なくなる。(二) 死亡す。

(三) 消滅する。(四) 滅びる。(五) 来る、行く、去る、などを罵つていふ語。こゝは(五) 来るの意。來やあがつた。

【今夜は某が案山子に成つて捕へう】

瓜主の智慧を思はせる巧妙な思ひつきである。珍事出來の期待をそゝられる。

【ゆふべの味を得て】 ゆふべの成功に味を占めて。

【烏帽子】 エボシ 又は、エボウシ 冠帽の一種。上代は禮冠の下に被つた頭巾であつたが、延喜の頃から、冠と區別し、貴人は朝服でない時に用ひ、庶人は常用した。もと黒色の絹で造つたが、後には紙で造り漆で塗りがためて造つた。貴賤によつて、形と塗りに差別があり、立

烏帽子は高貴の用であり、種々に折り据ゑたほど卑賤の用となる風折烏帽子、揉烏帽子、引立烏帽子、平禮烏帽

るて微笑される。これが次の事件の伏線となるのである。

【好い仕合】 ヨいシアハセ いゝ工合だつた。

【仕合】 (一) 機會。運。やうす。仕儀。次第。始末。

(二) 運命の吉凶。境遇の榮枯。(三) 幸運。幸福。こゝは(一)。

【後見座】 コウケンザ 能・狂言・芝居などで、舞臺の後方、演技者の後に控へて居て、演技に就いて諸事を補助する者の控へてゐる場所。

【くつろぐ】

能狂言の術語として、後見座等に、後向きになつて、靜かに座してゐることをいふ。その席にその人物が居ない事を象徴的に示すしぐさである。

【未だ臍落が致さなんだ】 まだ臍落がしてゐなかつた。

【なんだ】 過去の打消を表す複合語。語源は「なかつた」の約言といはれる。名古屋から京阪にかけて今日も用ひられてゐる。

【今日は大方臍落がござらう程に】

【程に】 こゝでは、によつて、故に、の意。

【内の者を遣れば瓜を盗みをるによつて、某の毎日參らねばならぬ】 家人にも畠のことを任せることが出来ぬとは、よくよく

子、侍烏帽子、納豆烏帽子等の種類がある。

【面】 メン (一) 顔。顔面。(二) 顔の形に擬して造つたもの。能樂・狂言などの時顔に被つて舞ふ。假面。おもがた。この狂言で用ひる面は「ウソブキ」と稱して、口を尖らした滑稽な面である。案山子を作つた際に、この面を用ひて、案山子の顔とし、それに烏帽子を着せてゐたのである。今度は、それを、瓜主自身が着けるのである。左手の綱、右手の竹も、前の案山子の場合と同様の姿である。

【床几】 シヤウギ 昔、陣中又は狩場などで用ひた一種の腰掛。尻の當る所に革を張り、脚を打違へに組み、携帯に便利なやうに作る。但し、能狂言の時は塗桶ぬりかきを床几として用ひる習慣になつてゐる。

【餘所へ物を遣るとも、後前の分別して遣る事ぢや】

よそへ贈り物をするにしても、あとさきのことをよく考へて後の難儀のかゝらぬやうにしなければいけない。

二度と盗まぬつもり所、手作といつたばかりに又所望されて退引ならぬ破目に陥つたからである。

【手作】 テサク テヅクリ 狂言では、テサクといつてゐる。手づから作ること、又、その作つたもの。

【なかなか】 いかにも。さうである。いふまでもない。勿論。能・狂言などに多く用ひられて、相手の言を應諾し

た意を表す語。

【近頃】 チカゴロ (一)このごろ。近來。(二)甚だ。大へん。こゝは(11)。

【無心】 ムシン (一)思慮のないこと。無邪氣なこと。

(二)遠慮なく物を乞ふこと。無遠慮なこと。(三)狂歌。

(四)連歌で詞を選びつくるはぬこと。有心の對。こゝは(11)。

【仰せらるる】 いはれる。おつしやる。「仰せらるる」の

「らるる」は尊敬の助動詞「らる」の連體形であるが、室町時代になると「らる」が碎けて「らるる」が終止形の役をなすやうになつたのである。今日の口語「られる」に移りゆく過渡的の形がこゝに認められる。

【なりませんまい】 それは出来ませぬ。差上げられませぬ、の意。

【是非に及ばぬ】 致し方がない。仕方がない。

【行て】 イて「行つて」の約。

【此様に又參らうとは知らないで、瓜島を散々に荒して置いた】

昨夜案山子に騙された腹立ちまぎれに瓜島を荒した無分別が今更後悔されるのである。

【知らないで】 知らないで。豫想しないで。「知らずて」の音便母韻轉化である。

書きである。

【下に居て】 シタにキテ 能狂言の時は、片膝立てて座ることを「下に居る」といふ。

【うそぶきの面】 俗に、「ひよつとこ面」といふのによく似てゐる。案山子のつけてゐる面をさす。

【盆】 ボン 盂蘭盆のこと。梵語 *ulambana*。陰曆七月十五日に行ふ佛事供養。種々の食物を盛つて祖先父母の亡靈に供へ、讀經してその倒懸の苦しみを救はうとするのである。佛弟子目連が餓鬼道に落ちた母を救うた故事による。

この日、寺社の境内に老若男女が相集つて、盆踊をする習俗があるが、これはこの法會によつて亡者が地獄の苦患を免れて喜ぶ状を模したものといはれる。

【若い衆】 ワカいッウ 村の若者。青年。

【中踊】 ナカヲドリ 盆踊の中間に、演戲めいたもの(當時風流と呼んだ)を演ずるのをいふ。その一夜の踊の中で、最も眼目となり人氣のあつまるものである。

【鬼】 オ = (一)死人の靈。亡靈。(二)人に祟りをする亡靈。もののけ。(三)地獄にゐる獄卒。頭に角があり、口は横に裂けて鋭い牙を有し、裸體で、腰に虎の皮の褌をまとひ、相貌猙獰で怪力がある。らせつ。やしや。(四)恐ろしい人。勇猛な人。残忍な人。(五)借金取り。債

【何とやら胸騒がして氣遣な】 (胸騒) ムナサワギ、心配不安のために、胸がドキ／＼とどきつくことをいふ。

今夜の失敗が既に豫感されてゐるのである。

【其儘ある】 そのまゝの状態であるの意。

【合點がゆかぬ】 事の様子が腑に落ちぬ。わけが分らぬ。

【はあ、合點した。】 定めて内の者の業であらう。主が畑を見舞うて来いと云ひ附けたによつて、見舞はしたけれども、案山子ばかり立てて置いて、垣も其儘で戻つたものぢやらう】

物事を成るだけ自分に都合よく解釋しようとしたがる人間の弱點が露呈されてゐる。

【總じて下々は、どれも此様な事ぢや】 一般に、雇人はど

この雇人でも骨惜みすることはこんなものだ。

まんまと敵の係蹄に陥つてゐるとも知らず、この太平樂をならべてゐる有様は、苦笑を禁じ得ない光景である。

【ことにこの案山子は、ゆふべよりは猶好う人に似た】

昨夜眞物の案山子にひどく失敗してゐる盗人は、昨夜に懲りて今夜のも眞物の案山子と思ひ込んでゐる。その思ひこみ方が全信的である所にかしみが強化される。

【仕様】 シヤウ 仕ぐさ。演者のしぐさがあるといふ「ト

鬼。(六)鬼ごつこで人を捕へる役。(七)食物の毒見。こは(三)。

【鬼が責める所をせう】

盆踊の中踊として、面白い。地獄の鬼が、亡者の罪人を呵責する場面を、演じようといふことであつた、の意。

【如何に罪人。地獄遠きに非ず。極樂遙かなり。急げこそ】

鬼の聲色である。こゝは特に節をつけて、謡の如くうたふ所である。故に、本文に『』を附けた。

【如何に】 こゝは感動詞。呼びかける言葉である。おい。さあ。どうだ。

【地獄】 ギョク 梵語 *Naraka* 地下五百由旬で鐵圍山の間にあるといふ想像上の世界。即ち六道輪廻の最下層にあり、現世に於て悪業をしたものが、死んでこゝに落ちあらゆる苦患を受けるといふ所。閻魔が之を主宰し、鬼類之に屬して罪人を呵責するといふ。八大地獄・八寒地獄・八熱地獄等、すべて百三十六の種類があるといふ。極樂の對。

【極樂】 ゴクラク 極樂淨土。梵語 *Sukhavati* の譯語。阿彌陀佛の居所である淨土。西方十萬億佛土を経た所にあつて、諸事具足し、佛果を得た亡者がこゝに往生するといふ。地獄の對。

【急げとこそ】 急げ。
指定の助詞「と」に強意の助詞「こそ」が複合して語勢を強めるに用ひられる。
鬼の言葉の意味は、「こりや罪人よ。お前の行くべき地獄はもう直ぐそこだ。極樂などは（汝の行くべき所でない故に）遙かな彼方だ。早く急いで地獄へ行け。」の意。

【綱を持ち云々】 案山子の左手に持つ綱の端を取り、右手に持った杖を取り上げて、縛られた罪人を打つやうな真似をするのである。

【呵責】 カシヤク 責めさいなむこと。とがめ叱ること。

【案山子ちやによつて責め力がない】 相手が眞物の罪人ではなくて案山子だから責める張合ひが出ない。

【さりながら、これも圖であらう】 今の場合は自分が責め役の鬼になつたが、盆踊の際の役割はくじで定められることであらう。

【某が罪人に取り當る事もあらう】 自分が罪人の役に當ることであらう。

【引綱】 ヒキツナ こゝは罪人を縛つて後から追うてゆく綱。

【案山子に背を向けて】 案山子を鬼と見、自分がそれに追立てられる姿をするのである。

【さのみな御責め候ひそ】 さう無慈悲に責めなされますな。「さのみ」の「のみ」は強めの助詞。「な……そ」は禁止。「あらかなしや」から「』」であるのは、前と同じく譚の口調になることを示す。

【行けど行かれぬ死出の山】 行かうとすれど死出の山は思ふやうに行かれぬ。

【死出の山】 冥途に行く路にありと信ぜられてゐる山。

【行かんとすれば引き止む】 鬼が後から意地悪をして引綱で引っぱり止めるのである。

【止れば杖でてうと打つ】 後から引っぱり立て止まれば後から杖でびしりと打擲する。

【止れば】 トマれば「止まれば」を譚ふ調子でいふ爲に「ん」を加へたのである。

【飛礫を打つた】 石を投げた。

【飛礫】 ツブテ 小石を投げること。又、その小石。

【綱を肩にかけたれば】 後向きになり引づなを自分の肩にかけて、後より追はれる様をしたことをいふ。

【ばつたり、ばつたり、ばつたり】

綱を緩める度毎に、杖が落ちる、その音を、反射的に模倣してゐる聲。

【これなれば氣づかひない】 これなら心配はない。

飛礫を案山子のからくりと思ひこみ、他に人はゐない

と安心したのである。

【杖にててうと打ち、直ぐに面をとり】 案山子に化した瓜主の動作である。

【がつき奴】 こいつめ。畜生め。

【がつき】 「餓鬼」の訛。人を賤しめ又は罵つていふ語。
【遣るまいぞ】 遣るまいぞ、逃さぬぞ。

2 文の構成

第一節 初—一〇八頁九行 瓜主が昌を見廻つて案山子を立てて行く。

第二節 一〇八頁一〇行—一一一頁四行 瓜盗人が現れ、瓜を盗み、昌を荒して行く。

第三節 一一一頁五行—一二二頁二行 瓜主案山子に化けて盗人を待つ。

第四節 一二二頁三行—一二五頁一〇行 盗人再び現れ、案山子を眞物と思ひこみ、之に戯れる。

第五節 一二五頁一一行—終 瓜主姿を現して盗人を追ふ。

3 文意

案山子に騙された瓜盗人の失策。

4 鑑賞批評

簡潔な對話と獨語とで喜劇としての効果を何らの弛緩なく擧げてゐる手法の緊密さには驚く。恐らく成立當時舞臺上の演戲として練られた爲に、かういふ完成が得られたものであらう。しかもこの短篇中に二人の人物を思ふ儘に活躍させ、舞臺藝術としての最大の効果を齎してゐる點など、演戲として反復せられる間に純化したものであることの著しい證左で

逃げてゆく對手を呼びとめる言葉。かう呼びながら對手を追つて舞臺から退場するのが能狂言の常套である。

【あら悲しや。許させられい、許させられい】

「あら悲しや」が語義に反して何ともいへぬをかしみを誘ふ。逃げてゆく盗人の後姿が見えるやうである。

ある。

三 備 考

1 指導研究

(一) 既に前出の卷二の二三、櫻井驛、卷四の十九、夜叉王の戯曲によつて會話を會話として生かす經驗を持つてゐる生徒は、讀みによつてこの狂言を狂言として生かすことが容易く出来るであらう。十分に讀みぬくことが出来た上は、二人の生徒をしてこれを實演的に讀ませることも一方法であらう。

解釋に於ては、場面々々をはつきりと浮び上らせることの必要は固より、一語の作用が全機構の上に有力に影響してゐる點を逸せしめることなく、その微妙な力を感得させ、理解させ、以て言語表現が如何に微妙な力を存するものであるかを教へる上にも活用し得るであらう。

(二) 狂言の性質や發達に關して精しい説明は要しないまでも、成立の年代や能との關聯については要點を説明する必要があるであらう。そしてそれは日本藝術への理解と愛好とを深める一助ともなるであらう。

2 參考

(一) 狂言に關する芳賀矢一氏の所説を「國文學史概論」から左に引用する。

猿樂の能と離るべからざる關係あるものは能の狂言なり。猿樂の名已に中古の物語に見えて滑稽の所作を意味し、神社に奉仕せし猿樂の人が猿樂の能の役者なりし歴史より察すれば、猿樂の名はむしろ狂言に屬すべきものにして、後に發達せる能樂の爲にこの名を奪はれたるものといふべし。しかも能樂發達の後と雖も、尙これと密接の關係を有し、今日に至るまで能樂興行の際には必ずその中間に狂言を挿む定なり。この點に於ては伊太利のインターセシオの如き性質あり。一方能樂の悲劇的なるに對して、喜劇的性質を帯びたる

狂言がその中間に挿まれ、相錯綜して一日の歡を悉さしむるは面白き對照といはざるべからず。然れども狂言はあくまで能樂の附屬物の如き位置に落ちたるは、その性質上及び事實上よりしかあるべき勢あればなり。蓋し能樂に於ては古英雄古美人を材料として懷古の情を起さしめ、神明佛陀の功徳を示して、神々しさ、いやちこさを感じしむるに反し、狂言に於ては無學なる大名、破戒の僧、似而非修驗者等を主人公として、一方は眞摯に、一方は滑稽に、一方は尊嚴の念を起さしむべく、一方は輕蔑の念を起さしむるに足ればなり。又謠曲は古來の古歌古句を引用し、佛典の教義を説き、章曲に於ても大に學者的なるに反し、狂言は當時の平語を以て之を綴り、章句の上にも學識を要せず。又その章曲を歌ふにも謠曲は音樂の調子を暗んじて曲節に合せざるべからず。狂言はもとより此の事なし。舞容に於ても能樂は希臘の古劇の如く、舞方の上方は即ち役者にして、役者としての技術には専門の技術を要すること甚大なり。加之狂言は比較的單純なり。又能の數番の中間に於て、役者の休息の爲、又は扮裝を直す爲に之を挿入せる事あり。間の狂言の如きは前シテ後シテの間にも用ひらる、如き情態なるを以て、勢ひ能樂に對しては附庸の地位に立たざるべからず。希臘の古劇を察するにも、喜劇悲劇の根本は相同じきが如く、我が國の能樂狂言亦神事に起因して、兩面に發達せしこと甚だ相似たりと雖も、喜劇的方面を代表せる狂言は永く能樂の附庸となり、文安田樂能記、糺河原勸進能記等に於て早く已に能樂の間々に演ぜられたるを見る。たゞその當時の言語を以て記して全文悉く對話より成り、毫も地の文を挿まざるは謠曲に比して一層純劇詩的性質を有せりといふべく、後世脚本の根源をなせりといふべし。

一五 青 鷺

谷 口 蕪 村

一 解 題

1 作者

谷口蕪村 タニグチブソン 俳人・畫家。別姓與謝。蕪村はその號。別に俳諧の上では、宰鳥・溪霜・襄道人・落日庵・夜半亭・夜半翁等の號を用ひ、畫の上では、初め四明・朝滄・趙居、後には長庚・寅・春星等の名號を用ひた。その生ひ立ちについては、信憑すべき資料が殆ど残されてゐないが、享保元年（二三七六）攝津國東成郡毛馬村（現大阪市東成區内）に生まれ、窮境に育ち、また夙くから俳諧及び繪畫を學んだといはれる。享保二十年（二十才）の頃江戸に出て、初め内田沾山について俳諧を學んだと傳へられてゐるが、元文二年（二十二才）には早野巴人の門に入り、巴人が日本橋石町に夜半亭を結んだ時、その閑居に起居し、砂岡雁宕と共に篤く師に仕へ、宰町又は宰鳥と號して次第に江戸の俳壇に名を知られるに至つた。當時から既に、墮落した蕉風俳諧に憐れなで独自の境地を狙ひ、一方、畫道にも精進した。寛保二年（二十七才）師巴人の死に逢つて望を江戸の俳壇に斷ち、雁宕に伴なはれてその郷里下總結城に寄寓し、更に下野宇都宮等にも流寓した。蕪村の號を用ひるやうになつたのはこの頃からである。又畫道に専念しようとしたのもこの頃の如く、狩野派・土佐派・住吉派等の行詰つた時に當つて新興した南宋畫風を慕ひ、宋元の古畫を研究し、次第に文人畫風に傾くに至つた。寛保・延享の交奥羽地方に旅し、詩心を鍊磨し畫道に精進した。かくして野總・奥羽の地に漂泊すること約十年、寶曆元年（三十六才）には長崎までもと心切かに期して西歸の途に上り、暫く足を京都に止めたが、四年の春、

飄然として丹後への旅に上り、主として宮津の見性寺に三年餘の歲月を過した。丹後與謝の生まれで、谷口派を不縁になり、その故郷に歸つて再嫁してゐたといはれる生母を慕つての旅であつたと傳へられてゐる。この間、畫道自得の辛酸を具に嘗め、七年（四十二才）再び歸京するに及び、寢食を忘れてその完成に没頭し、遂に京都畫壇に一躍その名を高めた。與謝隱栖中配偶者を得、歸京後その地の生活を記念する爲か、姓を與謝と改めた。明和三年（五十一才）の春以來、讃岐に行脚すること前後三回、愈々畫境を深め、技巧に累はされない南畫の妙境を自得した。五年、讃岐から歸つてからは、二三泊の吟行程度の曳杖以外、また旅に出づることなく、殘生約二十餘年間は京都に定住した。そしてこの間、繪畫によつて生活の安定が得られると共に俳諧に對する情熱を高め、明和三年炭太祇等七八人の同志と共に三葉社なる俳諧結社を起したのを始めとして、逐年俳諧上の活躍をなし、召波・几童・大魯等の門人の外、梶良・曉臺・士朗・麥水等當時の俳壇の諸豪も多くその傘下に往來した。かくして芭蕉を宗としつつ、而も芭蕉によつて開拓されなかつた新境地を開拓して俳壇に新生命を注ぎ、その絢爛高雅な格調を以て安永・天明の俳壇に輝かしい地位を獲得した。天明三年（二四四三）十二月歿。享年六十八。歿後俳人としての眞價は埋れて一般に知られなかつたが、明治時代になつて正岡子規が精細にその價値を闡明するに及び、頓に蕪村禮讃の聲が起り、蕪村研究は各方面に著しい展開を見せた。その編著に「花鳥篇」「寫經社集」「明和辛卯歲旦帖」「昔を今」「玉藻集」「芭蕉翁附合集」「夜半樂」「新花摘」「俳諧三十六歌仙」等があり、尙、「蕪村七部集」は主として几童の手に成つたものであるが、蕪村の力に負ふ所が多い。彼の俳句はその歿後、几童の手によつて「蕪村句集」上下二冊が公にされた。畫に於ける代表作には、京都博物館藏の「野馬圖屏風」、「春山烟雨圖」、「竹溪訪隱圖」等がある。

2 出典

「蕪村句集」の中から蕪村の俳風の特色を窺ふに足る代表句を抄出したものである。「蕪村句集」は蕪村の歿後一週忌に

當り、その高弟高井几董が師の發句八百五十餘を四季に類別して集め、天明四年に京都の書肆汲古堂から出版したもので前篇上下二冊から成つてゐる。後篇は三回忌に當つて刊行の積りであつたらしいが、その運びに至らなかつた。蕪村の代表句は殆どこの「蕪村句集」に網羅されてゐる。明治時代に入つて子規の推稱以來蕪村研究の盛んとなるにつれて、その遺稿の蒐集・編録に志す者多く、蕪村の句は「蕪村句集」に倍加すべき量が集成されるに至つた。その主なるものを擧げると、頼原退藏「蕪村全集」、勝峯晋風「蕪村一代集」(日本俳書大系第八卷)、乾猷平「未刊蕪村句集」等である。

3 主眼及び採擇の趣旨

本邦俳諧史上に於て芭蕉と並び稱せられる天明俳壇の巨擘與謝蕪村の俳句を掲げた。主眼とする所はその豊かな藝術性と高雅な詩的精神とにある。文藝的教材なることはいふまでもない。猶前課がユーモアを主眼とした劇文學であつたのに對して高雅な詩情を旨とする詩である點に配列上の變化があり、又兩者は文學史的に時代を逐うて相接してゐるものである。

二 解 釋

春雨や小磯の小貝ぬるるほど

絹絲のやうな春雨が靜かに降つてゐる。磯の小貝がこまやかに濡れるほどに。

【春雨や】 春雨の景を大觀的に點出した句法。「や」は所謂切れ字である。この句法は俳句になか／＼多い。簡潔な表現の中に、その狀景を髣髴せしめるに有效な技法である。

【小磯の小貝】 春雨の繊細な趣に調和するやうに擇ばれた言葉である。

猶「小磯の小貝ぬるるほど」は眼前の寫實ではない。

鑑賞批評

春雨の繊細な趣が巧みに描かれてゐる。うちけふる春雨に對し、嘗て見た磯への光景に聯想を馳せ、その光景を春雨にふさはしく理想化して美しい調和の世界を描き出したものであらう。

蕪村の句は一般に豪宕華麗であるがその反面にかういふ繊細な一面もあるかと驚かされる。

然し何れかといへば、技巧の勝つた句であり、豫め用意された蕪村の美意識が感ぜられると思ふ。

春の海ひねもすのたりのたりかな

春の海が終日のたり／＼とうねつてゐるよ。

【春の海】 ハルのウミ 季の上では三春を通じて用ひられ一般に穩かな悠長な感じを起させるものとして取扱はれてゐる。

【のたりのたり】 「のたり」の重言。のたるさま「のたる」は這ひまはること「ゆるやかにうねりゆくさま。副詞的な擬聲語。

【ひねもす】 終日。日一日。一日中。

鑑賞批評

「俳諧金花傳」に「須磨の浦にて」と詞書があるので、この句の詠まれた場所が知られる。紺青にはふ春の須磨浦に一日中波がゆるやかなリズムを奏でてゐる。ゆつたりとした情景である。「春の海」には既に駘蕩たる思ひの盡きないものがあるし、「終日のたりのたり」には無限に打ちつゞける悠揚たる春の潮の姿態と音律が髣髴としてゐる。この「のたりのたり」の俗語らしさが利き、をかしみをも感じさせてゐる。

蕪村の句としては可なり初期の作で、遍く人口に膾炙してゐる有名な作である。寶曆年中作。

菜の花や月は東に日は西に

菜の花が野の上に一面に咲き連つてゐる。空を仰ぐと春の月が淡く東の空にかかつてゐるのが見え、菜の花を照らす夕日は大きく西の空に傾いてゐる。

【菜の花や】 菜の花がひろく咲き連つてゐる野を見渡

したさま。

【菜】 油菜をいふ。十字科の栽培草本。莖は一、五米に達する。葉は「だいこん」に似、大形で濃緑色を呈し、基部で莖を圍む。四月頃、梢上枝を分つて花を開く。花は黄色で總狀花房、果實は長角で、種子は一列に並んで

ゐる。種を菜種といひ、これから油を搾る。嫩葉は食用に供せられる。

【月は東に】 夕べの空を仰ぐと淡い月が東の空にかかつてゐる。

【日は西に】 夕日は菜の花に輝きながら西空に落ちんとしてゐる。

鑑賞批評

「續明鴉」にこの句を發句とした、樗良・几董三吟の未完歌仙が載つてゐるが、それには前置「春興」とある。如何にも空間の廣々とした、無風状態の豊かな春らしい晩景である。地上の菜の花に、夕日と夕月との對照を配して、天地の大景を十七字に収めてしまつた手腕には驚かされざるを得ない。

この發句に對する樗良の脇が、「山もと遠く驚かすみ行く」とある。兩々合せて、一幅の好畫圖である。安永三年作。猶この句を讀むと直ちに柿本人麿の

東の野に陽炎の立つ見えてかへりみすれば月傾きぬ

が浮ぶ。この歌に雄渾な統一美が感ぜられるのに對し、蕪村の句には輕快な配合調和の美が感ぜられる。

蕪村には菜の花を詠んだ句に

菜の花や摩耶を下れば日の暮るゝ

といふものもある。

ほととぎす平安城をすぢかひに

時鳥が、京都の空をすぢかひに啼き過ぎた。

【ほととぎす】 夏の季節に屬する。時鳥・杜鵑・子規・杜宇・不如歸・郭公等と書く。攀木類の鳥、體軀は鴨鳥大で稍瘦骨、背面灰黒色で翼は黒褐色、腹面白く多數の黒色の横斑を有する。尾羽は黒色で數條の白色の横斑がある。嘴は扁平で上嘴の末端は少しく鉤狀をなしてゐる。眼の周圍の皮膚は黄色で、脚も黄色である。我が國各地に四月から渡來し、十月頃南方に去る。四國・九州・臺灣などには越冬するものもある。自ら抱卵育雛をせず、

通常卵を鶯の巢に産み、之に孵化哺育させる。他の鳥類の嗜好しない毛蟲類を特に嗜食する。保護鳥の一であるときのとり・しでのたをさ・たまむかへどり等の異名がある。

【平安城】 京都の古名。

【すぢかひに】 斜に。はすかひに。

【すぢかひ】 すぢが斜に打交ること。

鑑賞批評

ほととぎすの飛翔の勢ひがさながら句々の上に響き出てゐる。迅速な速力とその啼聲が耳に聞えるやうである。一氣に息をもつかせない、堂々たる格調である。京都の整然たる街衢を思ふ時、「すぢかひに」といふ把握が生きてくる。

牡丹散つてうちかさなりぬ二三片

初夏の庭園に咲き盛る牡丹の花の散つた二ひら三ひらが、その下の、土の上に重なり合つてゐる。

【牡丹】 ボタン 俳句の上で夏の季に屬する。毛茛科毛茛科の落葉灌木。支那の原産。觀賞用として廣く庭園に栽培せられる。莖高一米—二米近く、多く枝梗を分つ。早春枝頭に紅芽を發し、後新枝を抽き葉を互生する。葉は羽狀複葉で平滑であり、長い葉柄を具へてゐる。四五月頃、美大豐艶の花を開く。花に單瓣・重瓣・大輪・小輪の種

別があり、色も紅・白・紫等種々ある。花瓣は倒卵形で圓頂、邊緣に不整の鋸齒があり、雄蕊が多數で、花絲及葯共に黄色。園藝的變種多く殆ど二百種を下らない。古來、菊・芍薬と共に三佳品と稱せられ、詩歌に繪畫に珍重される。その根皮は藥用に供せられる。異名―はつかぐさ・ふかみぐさ・なとりぐさ・やまたちばな等。

鑑賞批評

まことによく牡丹の重厚華麗な趣を出してゐる。「牡丹散つて」と字餘りに敘したのも重々しく散る牡丹の花びらの姿を表現するのに効果的であり、「打重なりぬ」には單なる客觀的の描寫を越えて、作者の豊かな心持が籠められてゐる。印象の鮮明な、而も深みと氣品のある句である。「ニサンペン」とよむ漢音もこの場合にふさはしく耳に響く。因みに蕪村には牡丹の句が多い。

牡丹切つて氣の衰ひし夕かな
地車のとゞろと響く牡丹かな
廣庭の牡丹や天の一方に
等何れも佳吟である。

さみだれや大河を前に家二軒

五月雨が降りしきり、その爲に水嵩の増した大河を前に控へて、小さな家が唯二軒あるばかりである。

【さみだれ】 五月雨。梅雨のこと。陰曆五月頃、即ち陽曆六月頃降る霖雨。つゆ。

【大河】 タイガとよむ。

鑑賞批評

濁流の轟々と漲り流れてゐる大河の力強い感じを、それに堪へて立つてゐる頼りなげな、二軒の家によつて一層強め、五月雨の豪壯な趣を遺憾なくあらはしたものである。「大河を前に」は「大河の前に」「大河の前の」などは異なつた強さがあり、リズムの上からいつても緊密さを持つてゐる。蕪村の雄渾な描寫能力を示すものとして定評のある作である。蕪村には五月雨の佳吟が少くない。

五月雨や滄海をつく濁水
五月雨や貴船の社頭消ゆる時
五月雨や水に錢ふむ渡し舟
五月雨や佛の花を捨てに出る

夕風や水青鸞の脛を打つ

夏の夕、吹き來る涼風に、賀茂川に川波が白く立ち、淺瀬に佇んでゐる青鸞の脚にひた／＼と打寄せる。

【青鸞】 アヲサギ 季は夏。蒼鸞とも書く。鸞目鸞科鸞目鸞科あをさぎ屬の涉禽。翼長四十五種内外の大形の鸞で、頭部

は白く、頭上・前頭、及びこれより出る飾羽みづかは青黒色。頸は長く、灰白色の地に數個の青黒縦線を有し、前頭の

下部から總狀の長飾羽を出す。背面は蒼黒色で、風切羽は灰黒色。下面は頸以下白く、脇は青灰色を帯びて大なる黒條を有する。嘴及び顔の皮膚裸出部は黄色、腿も黄色でそれ以下の脚は暗綠色。東部シベリアから支那及び

鑑賞批評

我が國に亘つて分布し、我が國では樺太から臺灣まで各地の河川・湖沼の附近に見るが数は多くない。鷺類は多く保護鳥であるが、本種とごりさぎとは獵鳥に屬する。

「俳諧品彙」に「加茂川」と前書があるのでその情景であることは明らかである。

水中に靜かに立つ鷺と、打寄せる波とを配して靜動相對して、水邊夕景の身に沁みるやうな涼氣が感じられる。「脛を打つ」に吹く風の程度も波の微細な働きも現れてゐる。繊細な句である。

涼しさを鐘をはなるる鐘の聲

ゴーンと撞かれた鐘の音が長く餘韻をひきつゝ、鐘を遠ざかつてゆく、その響に一脈の涼味を感じる。

【涼しさ】 季は夏。

【鐘】 カネ 金屬製の鳴器で、吊して打ち叩くもの。時鐘・梵鐘・陣鐘・警鐘・樂鐘等があるが、現代では單に鐘といへば専ら梵鐘をいふ。こゝもその例。

【梵鐘】は所謂大鐘で、又釣鐘・鯨鐘等ともいひ、もと支那の寺院で一山の諸堂に號令する爲に用ひたもの。形狀は上部は球狀、中部は圓筒狀をなし、最上部に龍頭と名づける釣手がある。大きさは、高さ四、五尺、徑二尺

鑑賞批評

前後のものを普通とするが、時に巨大なものもある。（京都方廣寺の鐘は高さ一丈五尺、徑九尺）我が國の古鐘には、支那・朝鮮渡來のものも多く、又嵯峨淨金剛院所傳の鐘は文武天皇二年の作とせられ、本邦鑄造のもので現存中最古のものとせられる。平安朝時代には銅の産出も少かつたが、割合に大鐘を鑄、鎌倉時代には日本式ともいふべき形のものを出すに至り、技術も完備したが、室町時代に至つては既に衰微に向つた。

「鐘をはなるる鐘のこゑ」とは人の意表に出づる把握である。「涼しさを」とは、鐘の聲の宗教的な意味を禪的に受取つた言葉であらう。つまり罪障消滅的な、身輕になつたやうな氣分を表すのであらう。機智に富んだ作。

夕立や草葉を掴むむら雀

俄かに大粒の夕立が叩きつけるやうな勢で降り出した。そこらに遊んでゐた群雀は慌てて草の葉にとりついてゐる。

【夕立】 季は夏。

【むら雀】 むらスズメ 群雀。群れをなした雀。

〔雀〕 燕雀類の鳥。嘴は圓錐形をなして黒く、體は小

形、羽毛茶色で黒い斑文がある。かしましくさへづり、よく躍り歩く。人家近くにむれ棲み、春季兩三回産卵し、繁殖力が盛んである。農家の害鳥。

鑑賞批評

「草葉をつかむ」に切迫した急場の趣があり、雀の面くらつてゐる様が巧みに捉へられてゐる。そしてそこに夕立の豪快さが如實に具象化されてゐるのである。

「草葉」といふ語に、萱などの茂つた広い空地が想像され、夕立の勢が一さうさかんに感ぜられる。

短夜や波うち際の捨て篝

夏のしら／＼明けに磯に出てみると篝火のもえさしが波打際にうちすててある。

【短夜】 ミジカヨ 夏の夜。日暮から夜明までの時間が短いからいふ。季は夏。

【捨て篝】 ステカガリ 篝火の燃えさしの打捨てられたもの。

〔篝〕 かゞり火。鐵の籠に柱をつけ、立てて上に焚く火。

夜中の警固、或は漁業などの火とする。

「かゞり」は「赫」の活用「かゞる」の名詞で「かかやき」の意であらうといはれる。

鑑賞批評

波打際に簪の名残を見るのは、静かな夏の夜明けの光景として、爽快味を満喫せしめる。簪には白い烟でも立つてゐるのであらうか。

漁村では、夜網を曳く時、簪を焚く場合がよくある。又沖に出た釣舟の目標に火を焚くこともある。さういふ簪であるかも知れぬ。

この外、

短夜や小見世明たる町はづれ

短夜や枕に近き銀屏風

短夜やいとま賜はる白拍子

等の佳吟がある。

石工の鑿冷したる清水哉

石工が石を切り出す鑿を傍の清冽な清水に冷してゐる。

【石工】セキコウ 石を切つて細工する職人。いしく。石屋。

【鑿】ノミ 木材・石材等の加工に用ひる工具。石材加工用の鑿は全部鐵製で、硬石加工用のものは末端を尖らせ、

軟石加工用のものは平刃を附ける。

【清水】シミヅ 天然に湧き出でる清らかな水。季の上では、古くは雑で、「掬ぶ」「堰く」等の詞を添へた時に限り夏とされたが、今は單に清水だけで夏のものとする。

鑑賞批評

鑑賞批評

どこかの石切山の實景と思はれる。使用の烈しさによつて熱をもつた鑿が、清水に浸されることによつて一層水の冷たさを感じしめる。淡泊ないひ廻しの中に言ひ知れぬ味をもつた句である。安永二年以前の作。

唐黍の驚きやすし秋の風

秋になつた。唐黍の葉は逸早く秋風の音を立ててゐる。

【唐黍】タウキビ たうもろこし。玉蜀黍と書く。禾本科の一年生草本。園圃に栽培せられる。莖は充實し、直立して高さ二米に達する。葉は五生して披針形をなし、平行脈を有する。七八月頃花を開く。花は單性で雌雄同株、雄花は莖の頂端に生じ、稍薄の穂に類する。雌花は葉腋に生じて穗狀花序に排列し、苞につつまれた果實を結ぶ。

果實は先端に紫色絲狀の毛を有する。種子は食用に供せられる。
【驚きやすし】 敏感で物に感じ易い。唐黍の長い葉は早くも初秋の風にさは／＼と音を立てるところからいふ。
「唐黍の驚きやすし」は擬人法である。

鑑賞批評

唐黍の葉すれの音を捉へて、さわやかな初秋の感じを出してゐる。その葉すれの音に耳を立てて、秋の訪れを感じるあたりに詩人らしい感受性が動いてゐる。「唐黍の驚きやすし」といふ擬人法も厭味なく、利いてゐる。

かなしきや釣の絲吹く秋の風

釣りを垂れてゐると絲の吹き挽むほどの冷やかな秋風が吹いてそとろに悲哀感を誘はれる。

【かなしき】 見るもの、聞くものに誘はれる秋の悲哀感。 【釣り】 ツリ 釣絲をくくりつけた釣針に餌をつけて水に

投じ、來つて之を食ふ魚を其の釣針にひきかけて捕へるこ

鑑賞批評

釣絲のたわみに秋の寂寥が動いてゐるやうに感ぜられる。この句も蕪村の繊細な一面を表したものである。この句を蕪村は後に改めて第一句を「江渺々」と置いた。然るに弟子の几董がそれに異論を稱へて、元の「かなしさや」に復せしめたといふ。「江渺々」と置きかへた蕪村の氣持は、餘りに感傷的な言葉を氣にした、どうも自分らしくないと思つた詩的な懷疑からであつたであらう。

月天心貧しき町を通りけり

月が中天にあつて晝のやうに明るく照らし出してゐる貧乏町の中を通つて來た。

【月天心】 ツキテンシン 月が天の眞上に昇つたの意。

〔天心〕 天のもなか。天の中心。

鑑賞批評

貧乏町のごた／＼した汚なさが月明の中に靜まり返つてひっそりとしてゐる、その靜寂を味はつてゐるのである。「月天心」とはいかにも中天に月のかかつてゐる感じを出してゐる。路上に動く人影、道の兩側のごた／＼した物の影がくつきりと浮んでくる。

柳散り清水涸れ石處々

柳は散りすぎ、流れは落ちて、石が處々に露はれてゐる。

【柳】 ヤナギ この句の詞書に「遊行柳のもとにて」とあ

る。遊行柳は下野芦野附近にあり、西行の歌「道のべに

清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ」で有名な柳である。芭蕉の「奥の細道」にも「田一枚植ゑて立去る柳かな」と詠まれて、更にこの柳を名高くした。

【清水涸れ】 これは西行の「道のべに」の歌に因んでゐる。【石處々】 石が處々にあらはれてゐるの意。説明語を省いて表現を簡潔にし、餘韻を持たせてゐる。

鑑賞批評

此の句は表現の特異性が注目される。殆ど定型を超越したやうな、断片的な調子である。而もそれがかういふ枯淡な境地を寫すのにいかにもびつたりしてゐることが感ぜられる。羅列的に投射された物象が互に有機的に働き合ひ、調和して一幅の好繪をなしてゐる。

霜百里舟中に我月を領す

四圍には廣々と霜が降り、夜氣冴ゆる中を、我は舟中であつて縦いままに寒月を賞してゐる。

【霜百里】 シモヒヤクリ 四圍の山野に廣々と霜が降りてゐるの意。誇張法である。いかにも大膽豁達な手法である。

【月を領す】 月を所有する。月を我が物とする。ほしいままに賞翫する。

鑑賞批評

漢語脈を縦横に驅使して雄渾な格調を成してゐる。蕪村の漢語趣味を表す句である。然し一面に於て形式が勝ちすぎてゐるといふこともいへるであらう。

蕭條として石に日の入る枯野かな

草が枯れて障るものもない野の上に、今しも夕日が石の背後に沈まうとしてゐる。

【蕭條】 セウデウ ものさびしいこと。ひっそりしたこと。
【石】 野の上のころがつてゐる石。

【枯野】 カレノ 草の枯れ果てた野。その閑寂な趣が俳句にふさはしい爲に、古來多く作句の對象にされてゐる。

鑑賞批評

「石に日の入る」がこの句の眼目である。枯野の蕭條たる感じがこれによつて印象的に生かされてゐる。

猶蕪村にはこの外

山を越す人に別れて枯野かな

大徳の糞はらひりおはす枯野かな

等の秀吟がある。

斧入れて香におどろくや冬木立

冬の林に伐材に來、一斧を加へて樹の香の高くにほふのに驚いた。

【斧】 ヲノ まさかりの小形なもの。伐材に用ひる工具。

の意。

【香】 カ 木の匂ひ。樹木の體臭。樹木はそれ／＼独自の香を持つてゐる。

樹木は冬季になると今まで外に發してゐた生活力をさめて内に充たし、寒氣に備へる。従つて冬季はその生活力を反映する香りがその組織内に充ちてゐるのである。

【冬木立】 フユコダチ 冬の木立。「木立」は「木の群立ち」

鑑賞批評

高い木の香が一時に發散して來るやうに感ぜられる。「斧入れて」とは何ともいへぬうま味のある表現である。

三 備 考

1 指導研究

(一) 詩的表現はその生命を音律に存するが故に、讀むといふよりも以上に進んで暗誦しなくてはならないことはいふまでもない。わけても俳句は短詩型であるからそれが容易く行はれる。舌頭に千轉して、その音律を中心とした全表現に熟し、更にその機構に通曉しなくてはならない。

(二) 解釋に於ては、各自の讀みから發展させなくてはならないことはいふまでもないが、それと共に、かういふ短詩型の表現に於ては、各自の想像に任せてゐる領域が比較的廣いから、未熟者や初心者と思ひもよらぬ迷路に走ることもないとはいへない。あくまでそこに表示せられてゐるものを理解し、更にそれによつて暗示的に現定してゐる所に隨つて解釋する態度と方法とに出でしめなくてはならない。それが爲には、教師はよき教授者であるよりも、よき聽手であることの方が有效的確な方法であるらしい。十分な用意の下に、しかも白紙になつて生徒各自の所感を聽く所に、眞の指導の手がかりが把握せられるであらう。

猶、蕪村の特色と位置に關しては、正岡子規の「俳人蕪村」は適切な問題の取上げ方をしてゐるやうに思はれる。即ち芭蕉の句に對して、蕪村の句が積極美・客觀美・人事美・理想美・複雑美・精細美を有し、用語に於て、漢語・古語・俗語を驅使すること多く、句法上にも漢詩的・古文的に新天地を示し、文法上にも独自の用法が認められることを指摘し、更に題材・修辭に關しても舊套を墨守し俗調に墮した作者ではなかつた點等をあげて、芭蕉に匹敵する俳人であつた所以を論じてゐることは、蕪村の句を學習させる上に参考になることが少くない。

2 参考

蕪村の句の特質についての頼原退藏氏の所論を「蕪村」(日本文學大辭典)から左に引用する

蕪村の標榜した所はいふまでもなく芭蕉に復れであつた。而してそれは獨り蕪村のみでなく、況く當時の俳壇全般に亘つて動いた革

新運動の根本的精神であつた。而も蕪村は夙く巴人の膝下にある頃、師風に泥まざる自由の精神に覺醒し、その天賦の才と晩年の精進とは、遂に彼をして中興俳壇の大先達たる實を收めしめたのである。即ち芭蕉の精神は、彼によつて故に最も完全に再現されたのである。然しこの再現は、芭蕉の俳諧と蕪村の俳諧とが全く同一たることを意味してはゐない。彼らの藝術は、その素質に於て實は大きな相違が見出されるのである。芭蕉の風雅は自然そのものに直面して、その中に心を深めて行かうとするのであつた。彼が身を野ざらしと觀じた旅に日を送り、行雲流水の間にさびとしをりを得て來たのはその故であつた。蕪村も亦素よりその漂浪生活の間には長い行脚の日を含んでゐる。だが彼の俳諧に精采を増して來たのは、その行脚時代の事ではなくて晩年京都に定住してからの事であつた。それは蕪村の俳諧に於ける工夫修養が、専ら古人のすぐれた藝術的思想と作品とに接して、そこに詩境の統一を求めようとしたからである。彼は嘗て門人召波から俳諧を問はれた時、「俳諧は俗語を用ひて俗を離るゝを尙ぶ」と答へ、更に離俗の法について「詩を語るべし」と云ひ、畫家のいふ所の去俗論を引いて懇に示した。要するに蕪村は畫も詩も俳諧もその理想とする所は俗を離るゝに在り、俗を離るゝには多く讀書すべしといふのであつた。芭蕉のさびは一切の私意私情を去つて、句とすべき対象と同化し、融合する所から生れた。だから彼の句には常に彼自身の姿が見られ、彼自身の生活があつた。而してこのさびの心境を深めて行く爲に、芭蕉は所謂まことをせめる不斷の工夫を怠らなかつた。蕪村の離俗も亦畢竟彼の藝術を純化せしむべき爲の工夫に外ならぬ。句とすべき対象に纏はるすべの俗情から脱却して、そこに初めて至純な藝術的の感激は見出されるであらう。蕪村はそのためにまづ讀書によつて美に對する高い鑑識眼を養ひ、美的情操の陶冶を謀らうとしたのである。それは芭蕉のさびを求めると全く一致相通するものであつた。併し芭蕉は直ちに対象そのものを諦視した心の中にさびを味ははうとし、蕪村はかうして洗練された美意識の統制によつて句境を純化しようとしてゐる。隨つて蕪村の句には、必ずしも彼自身の姿と生活とは見出されない。言はば芭蕉の俳諧は即ち芭蕉自身の生活であり、蕪村の藝術は結局藝術そのものに終始してゐる。そこに兩者の素質に大きな相違が認められるのである。蕪村の藝術が匆忙たる行脚生活の時代よりも、家庭に安住して靜かに書に對し、徐ろに詩想を練り得るに至つてから、眞にその特色を發揮したのは當然の事であつた。蕪村の藝術に於ける美意識の統制は、外象に對する鋭い美的直覺力となつて働いてゐる。外象の中に潜む感覺的な美しさは、彼の官能を通じて極めて鮮明に而も最も統一された形で描き出された。

夕風や水青鷺の脛を打つ

蕭條として石に日の入る枯野哉

の如き、その印象的な客觀美は嘗て正岡子規をして大に傾倒せしめた所であつた。明治中期の俳壇に蕪村の名が高く顯揚されたのは、天保以後の所謂月並調が専ら小主觀に捉はれたマンネリズムに墮してゐた際に、この自由清新な客觀的描寫は、決して單なる寫生を意味してゐるものではない。成程

牡丹散つて打重りぬ二三片

楠の根を靜かに濡らす時雨哉

などの如き、注意深い寫生から生れたやうな句もあるが、「打重りぬ」といひ、「靜かに濡らす」と表現したところには、なほ外象に對して豫め用意された美意識の閃きが見られる。況んや

指南車を胡地に引去る霞かな

易水に根深流るゝ寒さ哉

の如き、固より寫生の世界ではない。一は支那の太古における原始生活への空想を基調とし、一は荊軻の悲壯なる故事を背景として生れたもので、それは所詮ローマンスの世界に外ならない。讀書によつて俗を離れようとした蕪村の句境は、かうしてロマンチズムへと導かれたのである。蕪村の句が頗る古典趣味に富むのも、要するに漢詩や我國の古典文學等の中にこのロマンチズムを求めたからで、その用語に好んで漢語や古語が選ばれたのも當然の歸趨であつた。彼は古典的情趣を俳諧の上に顯現することによつて、その俗化を救はうとしたのである。而も蕪村はこの古典的情趣の間に、常に新鮮な現實味を失はなかつた。前に擧げた二句にしても、さうしたロマンチックな世界を背景として廣漠たる平野に搖曳する霞、寒さうに流れて行く根深の色とが、強い現實味を以て眼前に迫つて來るであらう。即ち蕪村の外象に對する美意識の完全な統制は、茲に空想と傳奇の世界を現實の中に渾然と融和させてゐる。而してその統制が鋭い直覺力として働き、外象の感覺的美に向けられてゐる事が多い點に於て、なほ蕪村の句はより客觀的であると言ひ得らるるであらう。蕪村は既に讀書を以て唯一の離俗法だと説いてゐるだけに、その藝術には多分の知識的な要素が含まれてゐた。併し勿論そ

これは外面的に遊離したものでなく、指南車や易水に關する知識は、やがて現實を美化し詩化するべき情趣そのものとなるのであつた。だが美意識の統制が十分でなかつた場合、この智的要素は單に技巧的な修飾に終らないとも限らなかつた。

ひえ鳥を甘重^{はた}れて雲雀哉

蓼の葉を此の君と申せ雀鮮

前者は「伊勢物語」に富士山の高さを形容して、「たとへばひえの山をはたちばかり重れあげたらむ程して」とあるのによつて、雲雀の高く舞上るさまを現はし、後者は管の王子猷が竹を愛して此君と言つた故事を、雀鮮に添へた蓼の葉の上に轉じたのである。その才は見るべきであるが、畢竟一種の智的遊戯に外ならない。これらはなほ氣の利いた洒落、乃至軽い滑稽として許されるかも知れないが、

角文字のいざ月もよし牛祭

茯苓は伏しかくれ松露は露はれぬ

の如きに至つては、全く貞門・談林時代の俳諧と本質を同じくするものである。もとより蕪村自身も、かうした句は一時の興に任せて作つたに過ぎないであらうが、少くとも彼の藝術に於ける智的要素が、技巧の傀儡として用ゐられる傾の多かつたことは認めればならない。

藪入の夢や小豆の煮えるうち

錢龜や青砥も知らぬ山清水

の如きは、寧ろ蕪村のひそかに得意とした作であらう。然しそこには既に其角が洒落風に墮したと同じ危機を孕んでゐたのであつた。

蕪村の俳諧が芭蕉のそれに比して、屢々第二義的と評されるのも、要するにこの智的技巧の故である。芭蕉の晩年の句が、すべて對象の内在性に深く心を潜めて居るのに對して、蕪村はなほ往々外形的な美に執してゐた。それは確かに兩者の藝術的素質に、逕庭を認めさせる點であらう。けれども「句を得ることは専ら不用意を貴ぶ」（春泥句集序）と喝破した蕪村であつた。彼が決して所謂心頭に發した作を喜ぶものでなかつた事は明かである。

知「俳諧之大道」無^レ他、蟪月賞花使^レ遊^レ心於塵寰外^一、當友^レ蕉翁其嵐之流亞^一、專以^レ脫^レ俗氣^一爲^レ最^一。（取句法）

と言つたのも、亦日々四老に會して不用意に句を得よと召波に示したのと同じ精神であつた。即ちかうした古人の雅懷を探つて、常に自分自身を高い藝術的雰圍氣の中に置くのが、俳句の大道を知る法だとしたのである。それは畢竟芭蕉が古人の求めた所を求めよと説いたのと相通するものであつた。而して蕪村がその古人の最とした所は即ち芭蕉に外ならなかつた。たゞ蕪村の生きた時代と彼の藝術家としての個性とは、必ずしも芭蕉と同一の俳句を生ませなかつたけれども、芭蕉の精神が蕪村によつて、革新の俳壇に最も輝しく再現された事は、何人と雖も否定出來ないであらう。

一六 鴨越

一 解題

1 出典

源平盛衰記卷三十七「義經鴨越を落す並畠山馬を荷ふ附馬の因縁の事」の殆ど全文を採録したものである。
 源平盛衰記 戦記物語四十八卷。源平二氏の盛衰興亡を記したものであつて、扱つた題材は平家物語とほぼ等しく、平家物語より稍、詳密である。その爲、古來平家物語との關係に就いて、種々論じられてゐる。平家物語の異本の一種であるとする説。反對に平家物語の原本であるといふ説、である。今兩者を比較してみると盛衰記には、編次や記事に重複や矛盾が少からずあつて、幾つかの異本によつて集成した形迹があらはであり、「異本ニ云」「或本ニ云」「異説ニ云」など記して異本の説を引擧してゐることが多い。かう檢閲してみると、本書は平家物語から派生した異本の一つで、幾多の異本を参考して集大成したものであることは明かである。本書は平家物語の異本中最も延慶本・長門本に近似してゐるが、この三本について言へば、延慶本が先づ出で長門本がこれに次ぎ、盛衰記は最後に出したもののやうに思はれる。本書の成立は大體に於て、鎌倉時代中期から末期までの間にあるものと見られる。

古來いはゆる戦記物語の代表作として、平家物語・源平盛衰記・太平記の三書が擧げられるが、この中では平家物語が最も傑出してゐる。平家物語は第一にその全篇の結構に於て、次にその材料の取扱方に於て、次にその描寫の伎倆に於て、更に全篇を貫く統一的精神に於て、他の二書を抜いてゐる。源平盛衰記は平家物語に比し、内容は豊富となり、記述は精

細となり、文章は修飾を増してゐるが、その爲に却つて煩瑣不統一に陥り、文學的價値を減殺してゐる憾みがある。源平盛衰記は一般的には前述の如く瑕の多い文章であるが、同時に部分的には甚だ描寫の秀れた所がある。例へば、宇治川の先陣、鴨越の如きがそれである。

2 作者

未詳。林道春は「葉室時長平家物語作者ノ隨一也ト公卿補任ニアリソレハ四十八卷ノ盛衰記ナルベシ」(野槌)といつてゐる。葉室大納言時長説は一般的にも行はれてゐるが單なる臆説で確證はない。

3 主眼及び採擇の趣旨

鴨越の戦に於ける義經並源軍の勇猛果敢な武者振りを原文によつて讀むと共に、源平盛衰記の持味を味ふに在る。文學的教材であると共に國民的教材の一つでもある。前課の蕪村の俳句に對して、形態的に對照されると共に一が靜寂清澄な自然を扱つたものであるのに、これは人間界の矢たけびの聲を寫したものである點に目ざましい對照の妙があるであらう。

二 解釋

1 語釋

【同じき七日の曉】 壽永三年二月七日。義仲の爲に西國に追はれた平家は、代々の根據地西國にあつて徐ろに勢力を回復し、再び捲土重來の意氣を以て東上して來た。そして清盛の時から縁故の深い要地に城郭を築き、堂々と京師を窺ふ。範賴・義經は再び出征の途に登つたのである。【同じき】と言つたのは、同日未明一谷の正面である生田門に於て、大手の大將軍範賴の率ゐる源軍が、熊谷次

郎直實・平山武者所季重等を先驅として押寄せ、兩軍の間に激戦が展開されてゐるのを承けた言葉である。

【鷲尾】 ワシノヲ 鷲尾三郎經春。鴨越の山中で義經に見出されて、その道案内者に立つた。爾來常に義經に従ひ、遂に義經に伴なつて衣川に死んだ。

【一谷】 イチノタニ 神戸市須磨町にある斷崖。その中に鴨越がある。後出の鉢伏・磯の途等の地はその上にある。

【二月】 キサラギ 舊曆二月。新曆のほゞ三月に當る。

【霞の衣たちへたて、緑を添ふる山の端に、白雲絶え絶え
聳えつつ、先づ咲く花かとあやまたる】

七五調を用いた美文で、一わたり名文のやうであるが、
よく読んでみると観念的に美化された個々の敍景が統一
なくつぎ合されてゐるといふことになりはせぬか。

【霞の衣たちへたて】と「緑を添ふる山の端に」とは個々
の状景としては互に矛盾であらう。「白雲絶え絶え聳えつ
つ」といふのも落付かぬ描寫であり、「先づ咲く花かと
あやまたる」も、とつてつけたやうな唐突な感じがする。
【霞の衣たちへたて】 春霞が立つて向うの山との間を視
覺的に隔ててゐる、の意。

衣は人の身體を隔てるものであるから「隔てる」を媒
介概念として霞を衣に喩へて「霞の衣」といふ。隱喩法
である。次に「衣」の縁語として「たち(裁ち)を出し、
之に「立ち」の意をかけてゐる。懸詞である。

【緑を添ふる山の端】 早春のことであるから、草木が芽
ぐんで来て、山の緑が加はるのである。「山の端」は、
山のはし、山容を劃する線のあたり、の意。

【白雲絶え絶え聳えつつ】 白雲がちぎれ／＼に山の端高
く立つてゐるさま。
【先づ咲く花かとあやまたる】 眞先に咲く櫻花かと思ふ

やまられる。「あやまたる」の「る」は自發の助動詞。

【仄暗き】 ホノグラキ うすぐらい。

【道には泥みけれど】
【泥む】 ナヅむ (一) 滞り澁る。難澁する。(二) 一方に
のみかゝはる。拘泥する。こゝは(一)。

【矢合はせ時を定めれば】

盛衰記卷三十六「清章鹿を射る並義經鴨越に赴く事」
の條に「…軍は七日の卯刻に矢合と定められたりけれ
ば、義經、田代冠者を招きて宣ふやう、土肥次郎實平等
を具して、七千餘騎にて一谷西の城戸口山の手を破り給
へ。義經は音に聞ゆる鴨越を落し候ふべし、とて云々」
とあるのによつて明かである。卯刻は今の午前六時から
八時までの間であるが、こゝは卯刻の初め即ち午前六時
を指してゐるものと思はれる。

【矢合はせ時】 ヤアはせ下キ 戦を開始するに當つて、
兩軍よりその合圖として鏑矢を射合ふ(矢合はせ)時刻。
【矢合はせ】は複合名詞で、「合はせ」は動詞「合はす」
の連用形の名詞化されたものである。之に「時」が更に
添はつたのである。「鼻垂れ小僧」と一般。

【明くるを待つに及ばずして】 夜明を待つてゐることが出
來ないで。「及ばず」は、「能はず」「叶はず」の義。軍記
物獨特の用法である。本文一二六頁一行——二行に「平

家の軍兵煙に咽び火に責められて、今は敵を防ぐに及ば
ず……」とある。

【引懸け引懸け打ちけるに】 馬を急がせ／＼して道を進む
意。「引懸け／＼」は連続的に仕向をなす意。「打つ」は
馬に騎つて行くこと。

【篠が谷】 ササがタニ・シノがタニ

【此奴ばら】 コヤツばら こいつら。

【ばら】 (接尾) なかま。ともがら。たち。ども。ら。

【雑兵】 ザフヒヤウ 身分の卑い歩卒。

【軍神に祭れ】 軍神に供へよ。武士の間で習慣的に用ひら
れる語であつて、必ずしも實行を豫想せずに用ひられる。

【軍神】 ゲンシン (一) 武運を守護する神。(二) 生前最
も壯烈な武功があつて軍人の模範となる將士の尊稱。こ
こは(一)。

【祭る】 儀式を供へて神靈を慰む、の意である。

【尋承】 ジンジョウ (一) てびき。案内。(二) 又その人。

こゝは(一)。

【辰の半ば】 タツのナカバ 今の午前九時頃。

【辰】 今の午前八時から十時までの間をいふ。

【楯】 タテ 戦争の用具。敵の刀槍矢丸を防ぐに用ひるも
の。國々に存在し、その形状・大小は一定でないが、す
べて木・革・金屬を用ひて製造される。我が國の昔時には、

通常楯・楯などの厚板で作られた。

【矢束をくつろげたり】 矢束を解いていつでも矢を自由に
射られるやうにしてゐる。

【矢束】 ヤタバネ 箆の末に附けて、箆にさした矢の動
き亂れぬやうに、之を束ねる緒。

同じ文字で、「ヤツカ」とよみ、矢の長さを表す語として
用ひられることに注意。

【前は海、後は山、波も嵐も音あはせ、左は須磨、右は明
石、月の光も優ならん】

文章の調子はよいが、前後の急調な文の間にあつて目
に立ち、やゝ文章を弄んだ嫌ひがないでもない。

【追手】 オフテ 戦の正面を指す。大手とも書く。こゝは
一谷の正面たる生田森方面を指す。源氏の大将軍範頼が
正面から押寄せたのである。

【半ば】 ナカバ こゝでは、最中、たけなは(酣)、の意。

【鏑】 カブラ 鏑矢の略。矢の一種。矢竹の先に鏑(木又
は角で作り、燕の形に似たもの。中空で、三つの穴をあ
け、空中を行く時、風に鳴るやうにしてある)を著け、
更に鏑の先に雁股(鉞形の鉄)を附けた矢。「鳴矢」又
は「鳴鏑」ともいふ。もと狩獵に用ひて禽獸を威嚇する
ものであつたが、後には戦場に於て、開戦其の他の合圖
としてこの矢を放ち合ふやうになつた。

【劫火】ゴフクワ 佛説に世界を焼き盡くして灰燼となすといふ大火。世界壊滅の時に起るといふ。

佛教の宇宙觀によると、世界の成立より破壊に至るまで成住壞空の四劫があり、之等を合して一大劫といふ。而してこの四劫の中、壞劫即ち世界の破滅する時に風火水の三大災が起つて世界を滅却するといふ。劫火はこの三大災の一である。而して壞劫が終ると虚空に何物もない空劫の時期が循環して來て、此の空劫が終ると再び成劫、即ち世界の成立に入るといふ。而してこの四劫の循環は諸衆の業を積んだ力を原動力とするといふ。

【劫】ゴフ 佛語。刹に對して極めて長時間の義。永劫。

【上七八段】カミシチハツタン 斷崖の上部四五十間ほど。【段】約六間。和漢名數。「日本、六尺五寸爲二一間。六間爲一段、六十間爲一町、三十六町爲二里。」

【留るべき様なし】蹈み留まらうにも留まりえやうがない。【べき】は可能。可能性あり、の意。「様」は、さま。やうす。

【徒歩】カチ

【大鹿毛】オホカゲ 大いなる鹿毛の馬。

【鹿毛】馬の毛色の一。鹿の毛に似て、茶色なもの。

【佐藤三郎兵衛】サトウサブラウビヤウエ 名は繼信。陸奥の人信夫莊司元治の子。忠信の兄。義經が藤原秀衡の

許に在つた時から之に仕へ、屢々軍功をたてた。後義經の奏請によつて兵衛尉となつた。屋島の戦に、義經の身代りとなり、平教經の矢に當つて死んだ。時に年二十八。【大夫】タイフ 義經の乘馬の名。大夫黒のこと。藤原秀衡の驢したもの。

【鹿】シシとよむ。

【馬場】ババ 乗馬の練習をなす所。

【逸れども】ハヤれども 「逸る」きはひ立つ。せきこむ。あせる。

【さすが】副詞「さすがに」の略。(一)さうは思ふものの。何といつても。(二)秀れたものほどあつて。音に聞えた程あつて。こゝは(一)。

【いぶせき】(一)覺束ない。いぶかしい。(二)氣がふさぐ。(三)きたない。見苦しい。こゝは(二)で、見るも恐しい、位の意。

【礎】ガケ 急阪。音セン。

【やすらへば】ためらつてゐると。躊躇してゐると。しりごみしてゐると。

【何處を落すべしとも見えず】どこを落したがよいとも判断がつかない。「べし」は、適當。

【軍將】グンシャウ 軍を統率する大將。こゝは義經を指すこと言ふまでもない。

【占形】ウラカタ 占をして現れた象。運試し。

「占形なるべし」は、運試しにならう、の意。

【葦毛】アシゲ 馬の毛色の名。白い毛に、黒又はそれに近い色の毛の混じたものの稱。

【白覆輪】シロフクリン すべて器物の角とか縁とかを金物で覆ふことを覆輪といふ。白覆輪は銀を用ひて覆輪したもの。こゝは鞍の前後の山形の上に銀の覆輪を施したものをいふ。

【黄覆輪】キフクリン 金を以て覆輪した鞍、の意。

【上七八段ばかりは小石交りの白砂なれば、轉ぶともなく落つるともなく下りつつ、巖の上にぞ落ち著きたる】

二頭の馬が、急角度の崖の上をなづみく下りて行く様が見事に寫されてゐる。木の間隠れに片唾をのんで見守つてゐる義經以下の人々の様子も見えるやうである。

【轉び下り】マロビクダリ

【越中前司盛俊】エツチウノゼンジモリトシ 平盛國の子。大力の勇士。壽永三年一谷戦で戦死した。

【嘶え】イバえ 馬のいなゝくこと。

【篠草】ササグサ 篠や草。

【御曹司】オンザウシ 貴族の子弟のまだ部屋住の人を敬つて呼ぶ稱呼。こゝは勿論義經を指す。(次課参照)

【曹司】(一)古昔、禁中又は官省などに於ける下官又は

女房などの用部屋。つばね。へや。(二)古昔、大學寮で教授をなす教室。(三)部屋住の公達。

【平家の軍左様あるべし】平家の軍の運勢は、今の占の通りであらう。平軍に準へられた鹿毛の馬が身を打損じて再び起ち得なかつたことを指していふ。

【人だに心得て落すならば】乗手の人さへ怖氣づかないで地形をのみこんで落ちついて下りるならば。

【だに】さへ。「だに」は「輕きを舉げて他の重きを類推せしめる語」で、「馬もあわてずに崖を下るであらう」といふ意味を言外にひゞかしてゐる。

【心得て】のみこんで。落ちついて。

【流】リウ、又は、ナガレ 元來は「旗の垂れ」のことであるが、こゝでは、旗を數へる言葉として「流」と同義に用ひられてゐる。

【礎を落すには手綱數多あり】斷崖を下るには手綱の繰りやうが澤山ある。機に應じて種々の繰り方を用ひねばならぬ。

【馬に乗るには、一に心、二に手綱、三に鞭、四に鐙とて四つの義あれども、所詮心をもちて乗るものぞ】

馬に乗るには、第一に心の持ち方、第二に手綱、第三に鞭、第四に鐙といつて四つの要件があるが、結局は心の持ち方が根本であるぞ。

【殿原】 トノバラ 人々。二人稱複数の敬稱。「原」は當字

で、「輩」とも書く。複数を示す接尾語。

【馬の立て様】 馬の用ひ方。馬のあつかひ方。

【本】 ホン 手本。模表。

【下知】 ゲチ 命令。指揮。

【馬の尻足引敷かせて、流れ落しに下したり】

複雑微妙で急速に移動する状況を巧みな簡潔な筆で活

寫してゐる。

【尻足】 は後脚のこと。「引敷かせて」は斜め前に突つ張

つた馬の後脚の全長を斜面に密着させて、の意。

【流れ落し】 は、人馬が右の姿勢のまま、急傾面をすり

落ちることをいふ。

【兵ども】 ツハモノども

【白旗三十旒城の内へ指し覆ひ】

白旗三十旒を城の上空へ指しなびかせて、の意であら

うが、「覆ひ」といふ語は城との距離から考へてやゝ擴

大の嫌ひがある。「城の内」といふのも妥當であるまい。

【轡並べて】 クツバミナラべて 馬首を並べて。

【轡】 口食の義。くつわ。馬の口に含まする具。金屬で

作り、之に手綱をつけて馬を御するに用ふ。

【手綱掻い繰り】 タヅナカイクリ、手綱をたぐりつゝ、の

意。馬上に於ける身體の中心をとり、又馬の動作を抑制

する爲の動作である。

【掻い】 「掻き」の音便。こゝは接頭語として用ひられ

てゐる。

【繰る】 (一)順次に引出す。廻らして引出す。(二)順に

送りやる。(三)順に敷へ行く。

こゝは(一)から出て、手綱を抑へゆるめて馬を操縦する

ことをいふ。

【さと】 神速なさまを表す擬態。

【壇】 ダン こゝでは急阪の中途にやゝ平らかな所のある

のを言つたのであらう。

【刀の刃に草覆へる様なれば】

この比喩、危険感を出てゐるがもとの實景から離れて

ゐる。奇警であるが實感が十分伴はないと思ふ。

【見え渡る】 見渡される。見えつゞいてゐる。

【渡る】 遠く及ぶ、普く至る、の意。

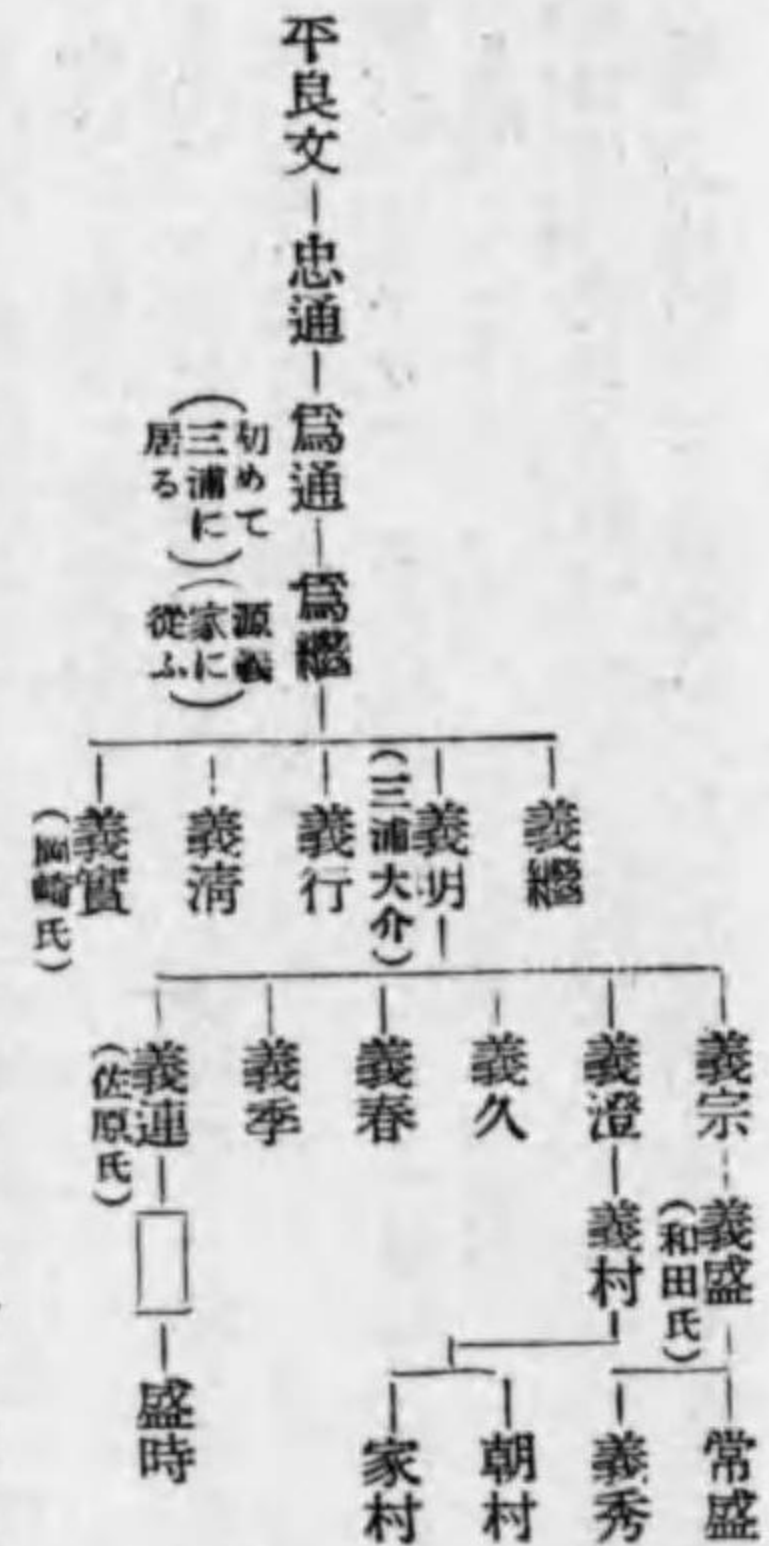
【堅唾を呑み】 カタツをノみ 「堅唾」は口にためてある

唾。それを呑むといふのは心をこめ氣を凝らして事の成

り行きを危み待つにいふ。

【三浦黨】 ミウラタウ 相模國三浦半島地方に居住した武

士の一團。平氏から出た。左にその系圖をかゝげる。



「三浦黨」の「に」は、所屬團體を示す助詞。「の」又

は「に屬する」の意。

【佐原十郎義連】 サハラノジフラウヨシツラ 前出系圖參

照。義連は頼朝の臣であつたが、此の役には義經に従つ

て出征した。

【甲斐】 カヒ 甲斐國。東海道十五ヶ國の一。現山梨縣。

【信濃】 シナノ 信濃國。東海道十三ヶ國の一。現長野縣。

【鷹使ふ】 タカツカふ 鷹狩をすること。鷹狩とは、飼ひ

ならした鷹を放つて鳥や兎を捕へさせる狩獵。古來世界

の諸國に行はれ、我が國でも仁徳天皇の御代に既に行は

れた。

【起いても】 オコいても 「起しても」の音便。追ひ出して

も、の意。

【立てても】 追ひ出しても。何れも事の小さなをいふ。

【傍輩に見落されしと思ふには】 後れて仲間の者どもに輕

蔑されまいと思ふのに。

【傍輩】 ハウバイ なかま。同輩。

【見落す】 「見貶す」の意。見さげる。輕んずる。

【思ふには】 この「は」は感動の助詞。

【これに劣る處やある】 この重大な場合に後れをとる程、

不名譽なことがあらうか。これにすぐる不名譽はない。

【や】 は反語。この係りに對しては、連體形で結ぶ。

【畠山】 ハタケヤマ 畠山重忠。平良文の遠孫。重能の子。

世々武藏の豪族。治承四年頼朝伊豆に兵を擧ぐるや、父

及び叔父山田有重等は京都にあつて平氏に仕へてゐたの

で重忠は頼朝の徵發に従はなかつた。然し密かに頼朝に

歸する意があつた。頼朝の軍大いに振ひ兵を率ゐて武藏

に至るに及び、長井渡に赴いて降を請ひ、許されて從軍

した。義仲追討の時も平家追討の時も殊功を樹てた。後、

藤原泰衡を討つや先鋒として功があり、事平いで葛岡郡

を賜はつた。頼家が嗣立するに當り、忠直の故を以て、

遺命により之を保護した。元久元年重忠の子重保が平賀

朝雅と隙を生じ、朝雅はその妻の母の牧の方に訴へた。

牧の方は北條時政の後妻で、時政に重忠父子に反志のあ

る旨を説いた。時政は兵を遣して重保を鎌倉の邸に圍ん

で殺し、偽つて重忠を召した。重忠は百餘騎を従へ郷を

發し、二股川に至り、子重保の殺されたこと、及び義時が大兵を率ゐて來り討つを知り、鶴峯に兵を屯し、子重秀と奮戦し、矢に當つて死んだ。年四十二。重忠は武勇絶倫、資性精忠、頗る威望があつたので、北條氏に忌まれたのであつた。

【赤緘】アカヲドシ 赤色の革又は緒を以て札板を綴ち連ねた緘。「緘」は「緒通し」の義、緒を以て緘の札(小さい長方形の鐵片、これをいくつも連ねて緘とする)をとちつらねること。この革又は緒を「緘毛」といひ、その色彩や性質によつて緘の外見が左右されることが多い。従つて緘の名稱にも、色彩の方から來たものが多く用ひられる。緋緘、紅緘、赤絲緘、赤革緘、黒絲緘、萌黄緘等。

【護田鳥尾】ウスベウ 護水鳥とも書く。五位鷲に似た鳥といふ。「護田鳥尾の矢」とはその羽の薄くて黒い處の少いのを用ひて矧いだ矢をいふ

【栗毛】クリゲ 馬の毛色の一。全體褐色で、鬣と尾とがやゝ濃い褐色のものをいふ。

【鞭打】ムチウチ 馬の尻の、乗手によりて鞭にて打たれる所。

【三日の月程なる月影】三日月位の大きさ、形の白い毛模様。「月影」は「月のかたち」の意で、白い毛模様を喩へていふ。

【大事の悪處】ダイジのアクシヨ 非常に險阻な處。

【親にかかる時、子にかかる折】

當時の俚諺で、親子相扶くる謂である。即ち、子が親に助けられる場合もあり、又時には親が子に頼る場合もあつて、親子は相扶けるものである、の意。こゝでは馬を子に喩へた。

【手綱・腹帯より合せて】手綱と腹帯とを縫り合せて一本の丈夫な綱となしたること。

【腹帯】ハルビ 馬の腹を括る帯。

【七寸】ナナキ 馬の丈を計る獨特な名稱。馬の丈を計るには四尺を標準とし、それ以上を單に一寸、二寸と數へて行く。こゝは四尺七寸以上もある大馬である。

【寸】キ 古代の尺度の單位、今日の寸に當る。馬の丈には後世尙ほこれを用ひる。

【すだち】素立。直立とも書き、「す」は「直」の意。まづすぐに生えた木。

【岩の迫】イハのハザマ 岩と岩との間に挟まりたる所。

【東八箇國に大力とはいひけれど】東八箇國に於て大力無双の勇士とはいはれてゐたが。

【東八箇國】ヒガシハツカコク 關東八箇國。即ち、武藏・相模・上總・下總・上野・下野・常陸・安房。

【人倫】ジンリン 人間のたぐひ。「倫」は、「類」。

【鬼神】キジン おにがみ。あらがみ。

【上下】シヤウカ 君臣。こゝは義經と家來達。

【舌を振ひける】

【舌を振ふ】(一)辯舌を振ふ。しやべる。(二)おどろきおそるゝさまにいふ。「舌を巻く」ともいふ。こゝは(一)。

【不便】フビン 可哀相である。

【日頃は汝にかゝりき】平常はお前の世話になつてゐた。

【字まん】ハグクまん いたはらう。

【然るべき八幡大菩薩の御計らひにやと申しながら】

「にや」と「と申しながら」とは別々の文脈をなすものであつて何れか一方を用ふべき所である。或はこのまゝ生かして「御計らひにやあらむ、しかりと申しながら」とも、解せられぬことはないが、語法上無理があるであらう。

【八幡大菩薩】「次課扇の的」の條参照。

【落しもはてず、白旗三十旋りと捧げ、……小魚のたまり水に集り、宿鳥の枝を争ふに異ならず】

かういふテンポの速い戦場の描寫こそ盛衰記得意の文章である。平家の軍兵のあわてさまがうまく描き出されてゐる。

【関を作る】トキをツクる 関の聲を擧げた。

かく過去の時に屬する事を現在の形で表すを修辭上、現在法といふ。事が現前に行はれてゐる感じを出す爲に用ひられる。

【城郭】ジャウクワク 城と城の外がこひ。こゝは單に城内といふ程の意。

【蜘蛛手】クモデ 蜘蛛様の義。蜘蛛の足が八方へ出たやうに、物の多く交叉した状態。

【蜘蛛手十文字に】といへば、「四方八方に」の意と解すべきである。

【城戸】キド (一)城の門。(二)通路にある門。(三)芝居などで見物人の出入口。こゝは(一)。

【打延べて】ウチノベテ 防禦にかゝることを打延ばして。

【物具】モノノグ (一)調度。道具。什器。(二)専ら戦に用ひる調度。即ち、鎧のこと。こゝでは、「鎧・物具」といつてゐるのであるから、「鎧以外の武器」の意に解すべきであらう。

【小具足】コグソク 鎧・腹卷等の下につける小道具のこと。即ち、脇立、籠手、臙當等をいふ。

【適々】タマタマ 丁度其處へ、の意。

「適々、馬に乗り弓矢を番ひける者も」の次に、「敵味方の見分けがつかずに右往左往に亂れ立つ味方の兵を敵と誤つてこれを射たので」といふ叙述を補つて、その下の

「味方討に討ち殺され云々」に續くべきであらう。

【度を失ひ】 狼狽するさまにいふ。

【度】 ド (一)長短。幅員。(二)物指し。(三)ほど。かぎり。(四)のり。きそく。(五)たび。かへり。(六)ころ。時代。(七)器量。品性。(八)角の單位。即ち直角の九十分の一。(九)經緯度の單位。即ち、地球の周圍の三百六十分の一。(十)溫度の單位。即ち寒暖計に盛つた目。(十一)佛語。(い)生死を海に喩へ、煩惱を此岸とし證果を彼岸とし、煩惱を脱し、生死の苦を出離して證果を得しめること。(ろ)佛門に入つて出家受戒すること。こゝは(四)の意。

【宿鳥】 ネドリ ねぐらに寝てゐる鳥。こゝは、これからねぐらを得んとする鳥。

【武藏坊辨慶】 ムサンバウベンケイ 熊野別當湛増の子。

幼名鬼若丸。比叡山の西塔に住したが、後源義經に仕へて無二の忠臣となり、最後まで形影相伴なひ、腰越狀の

2 文の構成

第一節 初—一九頁一行 二月七日の夜明け、軍陣の血祭りに出丸を屠つたこと。

第二節 一九頁二行—二四頁七行 鴨越の懸崖を下らんとして、先づ運試しを行ひ、その吉兆に勇を鼓して一軍どつと馬を乗り落したること。

(1) 鉢伏・磯の途より一谷の平軍の展望(一九頁二行—同頁八行)

苦忠・大物ヶ浦の危難・安宅の關の危機・衣川の立往生等幾多の挿話を傳へてゐる。

【屋形】 ヤカタ 貴族の邸宅。貴人の殿舎。館。

【今は敵を防ぐに及ばず】 今はもう敵を防ぎきれないで。

【そも】 それも、の略。

【然るべき人々をこそ乗せけれ】 一門の中でも重だつた高位高官の人々は乗せたが、「こそ」の係りに對して、「けれ」(已然形)で結ぶ。

【猛火の煙、蹴立の灰】 あたり一面は、猛火の煙と、敵味方の蹴立てる灰とに蔽ひ塞がれて。

【希】 マレ 「稀」に同じ。滅多にない、意。

【無慚といふもおろかなり】 いたはしいなどといったのではなか／＼追つ付くことではない。

【無慚】 ムザン (一)耻を知らぬこと。(二)いたはしいこと。こゝは(一)。

【おろかなり】 言葉が及ばない、言葉が足りない、の意。

(2) 懸崖を俯瞰し、源軍主従の躊躇(一九頁九行—二〇頁五行)

(3) 源平の運命占ひと吉兆の出たこと。(二〇頁六行—二二頁六行)

(4) 義經率先衆を率ゐて懸崖の中段まで下る。(二二頁七行—二三頁七行)

(5) 佐原義連先頭を切り、全軍續いて落したること(二三頁八行—二三頁四行)

(6) 畠山の剛勇仁慈ぶり(二三頁五行—二四頁四行)

第三節 二四頁八行—終 一谷の落城。

(1) 源軍城郭内に突入して狼狽する敵を蹂躪するさま(二四頁八行—二五頁九行)

(2) 辨慶、義經の命によつて屋形に火を放つた爲、平軍は猛火の中に潰亂して海岸に奔り、船を争うて多く溺死し、逃れた兵は源軍の手に懸殺されたこと(二五頁一〇行—終)

3 文意

源義經が一谷の戦に、敵の意表に出で、鴨越の險を突破して一舉に平軍を屠つたこと。

4 鑑賞批評

源平盛衰記の文はむらが多いといはれる。本課の如きは盛衰記中で最も秀れた文章といはれてゐるが、玉石混淆の傾向はやはり免れないやうである。大體に於て、その瑕となるのは、自然描寫の場面であつて、實感から離れた美文を弄してゐる點にある。又その優れた點は戦争の場面の活寫であつて、テンポの早い状態に呼吸を合せてよくその倉皇の趣を傳へてゐる。

又事柄の上から見る時は、巖頭に駒を立てる義經の颯爽たる武者振りは讀者の快哉を叫んで止まない點であらう。

三 備 考

1 指導研究

(一) 義経並源軍の勇猛果敢を理解するには、鴨越の地圖を、原文の敘述を手がかりとして、生徒各自の腦裡に描かされるなり、筆をとつて實際に描かせることが有効であらう。文中に加へられた挿繪はこの作業に指導的な働をつとめるものと思はれる。

(二) 文章の長短何れも先づ生徒の感想を問ひ、もし誤つた評價をなす者があれば、(冒頭の「霞の衣云々」の條などその蓋然性に富むであらう) その然る所以を評論し、長所は長所たる所以を明にして生徒の文章觀を深めるやうに指導したい。

2 參考

(イ) この物語の前後のつらなりについては、次章の「扇の的」の參考の條を参照のこと。

(ロ) 原文中本課に省かれた部分を左に録する。これは一二四頁の二行「上下舌を振ひける」のすぐ次に來るものである。

情龍樹論の疏を考ふるに、馬は是十二神將の樹體の中なりとも云ひ、又は南方旃檀香佛の變化身ともいふ。馬郁經には、觀自在菩薩、爲成大功徳力、重事成馬、來償人役。人の以六歩爲馬一步廣、天上には馬爲龍、人中には龍爲馬。又或經には、父は成吉馬爲子被乘、母は爲吉魚爲子被食、旁以不疏、此心を得たりけるにや。

補材

須磨寺や吹かぬ笛きく木下闇 芭蕉

句意は、須磨寺に詣でて、敦盛卿の事ども偲びつゝ折からの木下闇を徘徊してゐると、何處ともなく青葉の笛の音が

聞えてくるやうな思ひがする、の意。

この句は貞享五年芭蕉が吉野・奈良を経て須磨浦に遊んだ時の作である。彼はこの時鐵榜峯(一の谷の上で、即ち鴨越である)に登つて一の谷内裏跡を俯瞰し、當時の有様を偲んで深い感慨に耽つてゐる。この時の旅行は彼の紀行「笈の小文」に記録されてゐる。

「須磨寺」は神戸市須磨區須磨寺町にある。須磨寺は俗稱で、福祥寺といふのが本來の寺號である。光孝天皇仁和二年の創建にかゝり、昔は十七坊あつた巨利であるが、今は荒廢してゐる。寺寶に青葉笛、敦盛自筆歌、辨慶筆櫻の制札などがある。門前に若木の櫻、本堂の左に義経腰掛松がある。源氏物語須磨卷に出て以來名所となつた。

敦盛は經盛(清盛の弟)の第三子、優雅な上臈で笛を好み、その愛笛を「青葉の笛」といふ。一の谷の戦に熊谷直實に討たれた。生年十六。

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月 芭蕉

句意は、蛸が蛸壺の中に入りこんで、明日捕へられるとも知らずにはかない夢を結ぶ、自分もそれと同じやうに今夜明石に泊つてはかない夢を結ぶことである。夏の月の照らしてゐる明石の濱に、の意。

笈の小文の中にあり、「須磨寺や」の句のすぐ次ぎに出てゐる句である。この句も須磨明石を訪うて平家の末路に誘はれた無常觀が背景をなしてゐることはいふまでもない。「蛸壺」は一種の比喩であるが、この位一如の境に融け合つて居ればもう比喩の域を超えたものといふべきであらう。これと傾向を同じくする芭蕉の句に

病雁の夜寒に落ちて旅寝かな
といふのがある。

一七扇の的

一 解 題

1 出 典

平家物語流布本卷十一「那須與一の事」の全文を採録したものである。

平家物語（流布本）。十二卷付灌頂卷。平家三十年の興亡を敘し、それによつて變轉極まりない人生の姿を描き出した一大敘事詩であると共に、平安の都に生ひ立ち、そこで生長し、そこで爛熟した公卿文化が、關東を中心として勃興した地方武士によつて衰滅の悲運におかれるに至る、その重大な轉換期の犠牲者たる平家一門の没落を、深い同情と無常觀的態度とを以て描き來り描き去つた一大悲劇である。保元物語・平治物語・源平盛衰記と共に戰記物語としてこの時代が生んだ新しい文學様式であるが、素材の廣汎なことに於ても、又文藝的價値の傑出してゐる點に於ても、到底他の三書の比ではない。物語として、謡曲・淨瑠璃等の先驅をなしたのみでなく、その内容・文致等に於て、後代の文學に著しい影響を與へた代表的作品の一つである。

本文には流布本・長門本・八坂本・覺一本等異本頗る多く、編次内容にも少からぬ異同がある。明治四十四年に公刊せられた國語調査委員會編纂の「平家物語考」には諸本を分類して「三門十七類三十種」としたが、その後、山田孝雄博士は「十八類三十六種八十三本」をあげ、高木武博士は「二十二類四十四種」を分つてゐる。

2 作 者

平家物語の作者については、徒然草には、信濃前司行長がこれを作り、生佛といふ法師に語らせたとある。その他、葉室時長説（醍醐雜抄・鵲談集・尊卑文脈）、吉田資經説（醍醐雜抄・鵲談集）、源光行説（醍醐雜抄・鵲談集）、菅原爲長説（臥雲日件録）玄會法師説（同）、玄惠法師説（蔗軒日録）等があるけれども、中には増補者又は集成者を言つてゐるものもあるらしい。最も蓋然性に富むのは行長説であるが、元來が語物であるから、流傳の過程に於て幾多の人々によつて改竄増補せられた結果、原型から次第に遠ざかつて來たものと見られ、行長はその原作者に擬せられてゐる。又その成立の時代については、近年八坂本・屋代本等の古本によつて、建久以後、承久以前約三十年ばかりの間に成り、藤原將軍頃に増補せられたものであらうといふことになつてゐる。

3 主眼及び採擇の趣旨

屋島の戰に於ける一挿話を採つたもので、那須與一の悲壯な胸中と、その輝かしい結果とを中心とし、之と、殺伐な戰場に於ても猶失はれぬ當時の武人の風雅の嗜みとによつて生み出された美しい劇的場面を感銘深く讀み取らせる點に本課の主眼は存する。

平家物語中の名篇の一であつて、文藝的教材として、また國民的教材として代表的なものである。前課の「源平盛衰記」の文と味はひが比較されると共に、この二課は相竝んで軍記物語の特色を示すものである。

二 解 釋

1 語 釋

【さる程に】（接續詞）前文を受けて更に改めて説き起すに用ひる語。さうかうしてゐるうちに。

これは屋島の戰の一部で、「繼信最後の事」に引き續いた章である。

壽永三年二月一の谷の戰に敗れた平家は主上を奉じ

て海路四國に奔り、かねての本據である讃岐の屋島（現香川縣木田郡屋島町）に據つた。屋島は屋宇狀の臺地をなした島で、南は一條の潮干潟を隔てて四國本土に接し、小豆島・豊島を北方海上に控へた内海の要衝で、東面の屋島浦はよく多數の兵船を容れるに足りたので、平家はこの浦に臨む山に行宮を營み、山麓の海濱に陣屋を設け、北方諸島に兵を配して、専ら海上よりの攻撃に備へてゐた。この間源氏では、範頼一人軍を統べて陸路討西の途に功あがらず、壽永四年正月再び義經が起用せられた。義經は決勝を期し、攝津の渡邊に舟師を整へ、梶原景時の逆艦案を一蹴して、二月十六日夜半、單身手兵百五十騎を兵船五艘に分乗させ、烈風を衝いて先發、十七日拂曉阿波の勝浦に上陸し、近藤親家を案内として櫻間能遠の城を攻落、徹宵阿波・讃岐の境を越えて、十八日黎明、火を高松の民家に放つた。平軍は大いに驚き、陣を棄て主上を奉じて舉族海上に浮んだ。義經は直ちに屋島に進撃、汀に敵と矢を合せる一方、後藤實基等は行宮に火を放つた。平軍は漸く義經方の小勢なるを知り、一部は上陸して防戦に力め、佐藤繼信は義經を庇つて、能登守教經の矢先に當つて戦死する。平家物語では、この繼信の戦死を以てその章を終り、次に「那須與一の事」

といふ標題の下に、本文を起してゐる。猶、翌日平軍は志度浦に退き、陸路追撃する義經の軍と交戦したが、源軍の勢漸く加はるを見て、遂に西に奔つた。

【阿波】アハ 北海道六國の一。現香川縣。

【平家を背いて】ヘイケをソムいて 今日ならば「平家に背いて」といふところである。當時の語法。

【あそこの嶺、ここの洞より、十四五騎 三十騎、打連れ打連れ馳せ来る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ】
【あそこの嶺、ここの洞より、十四五騎 三十騎、打連れ打連れ馳せ来る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ】
類勢如何ともすることの出来ない平家、一戦毎に勢力を加へてゆく源氏、それが手に取るやうに描かれてゐる。猶、義經が風波を衝いて四國に渡つた時の手兵は百五十餘騎であつた。

【判官】ハウグワン (一)各官職を通じて四等官(長官・次官・判官・主典)中の第三等の汎稱。(二)尉、即ち檢非違使・衛門府・兵衛府の第三等官の稱。(三)檢非違使尉の專稱。こゝは(三)。

こゝでは源義經を指す。義經は幼名牛若、後遮那王、世に九郎判官といふ。義朝の第九子、頼朝の異母弟、母は九條院の雑仕常磐。平治元年(一一八九)生。この年平治の亂に遭ひ、父義朝の敗死後母及び二兄と共に捕へられたが、死を宥されて鞍馬寺に入つた。長じ

て復仇に志し、日夜武技を修め、承安四年遂に山を脱して陸奥に赴き、藤原秀衡によつた。途中元服して九郎義經を名乗る。治承四年(一一八四〇)兄頼朝の擧兵を聞き、馳せてその軍に富士川に加はつた。爾來範頼と並んで軍を統べ、壽永三年一月義仲の軍を宇治川に破り、二月平軍を一の谷に攻めて偉功を立てた。八月

功により左衛門少尉に任じ檢非違使別當に補せられ、次いで従五位下に敘して昇殿を許されたが、却つて頼朝の不興を蒙り、一時軍務を離れた。翌四年二月、再び、用ひられて平軍を屋島に破り、三月これを壇の浦に滅した。戦後、神器を奉じて京師に入り、更に宗盛以下の俘虜を伴つて東下し、腰越驛に到つたが、かねて義經の聲名及びその擧措に快からず、又その妄りに平時忠の女を娶つたのを悪んだ頼朝は、俘虜のみを納めて鎌倉入りを禁じた。よつて誓書(腰越狀)を以て情を陳じたが許されず、歸洛後頼朝の刺客に襲はれて遂に叛き、追求を受けつつ諸國を流浪して再び陸奥の秀衡に身を寄せた。秀衡の死後、その子泰衡の爲に急襲され、文治五年(一一八四九)衣川で自殺した。享年三十一。

【今日は日暮れぬ、勝負を決すべからず】とて、源平互に引退くところに】

平家は海に源氏は陸に陣取つた合戦も既に暮色に包まれて中止のやむなきに至り、互に引退くことになつたといふ敘事であるが、この一句もその場の情景をありありと映出して、讀者をその場面に引入れてしまふ力をもつてゐる。

【べからず】こゝでは、出来ない、不可能である、の意。「べかり」は可能の意。

【沖の方より、尋常に飾つたる小船一艘、汀へ向かつて漕ぎ寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横さまになす。あれは如何にと見るところに、船の中より、年の齡十八九ばかりなる女房の、柳の五衣に紅の袴著たるが、皆紅の扇の日出したるを、船のせがいに挟み立て陸へ向かひてぞ招きける】

讀者はいつのまにか、源氏の陣中に運ばれて、じつとその船を見守つてゐる、そして源氏の軍勢と共に「あれはいかに」と見つめてゐる自分を發見する。眼前に展開された光景の意外さ、優美さはさながら一幅の繪に向かふやうである。

【尋常に】ジンジャウに 立派に。殊勝に。けなげに。
【尋常】(一)八尺(尋)と一丈六尺(常)と。僅かの長短又は廣狭。(二)よのつね。なみ。あたりまへ。(三)轉じて、目立たずして、何となく品のよいこと。(四)再轉

して、よのつねでないこと。殊勝なこと。けなげなこと。すぐれたこと。立派なこと。「尋常に勝負いたせ」。

【飾つたる】カザつたる「飾りたる」の促音便。軍記物語には音便が急に多くなつて來てゐることに注意させて、本文の他の例をも指摘させたい。猶進んで、音便が軍記物語に多く現るゝに至つた必然性（即ち内容の勇壯活潑を反映するにふさはしい調子として、自然に現れ來つた現象であるといふこと）を生徒に考へさせたい。

【汀】ミギハ「水際」の意。

【渚】ナギサ 波の打ち寄せるあたり。浪打際。意味は「汀」と變りないが語感の相違から此の語をこゝに据ゑて同語の重複を避けたのであらう。

【七八段】シチハツタン 段はこゝでは約六間。和漢名數に「日本、六尺五寸爲二一間。六間爲一段、六十間爲一町、三十六町爲一里。」

【横さま】よこむき。源氏の方へ舷側を見せて停船したさまをいふ。

【あれは如何に】あれは何か、何の目的の爲の船であらうか、と源氏の將士が不審がるのである。

【年の齡】トシのヨハヒ 年齢。

【女房】ニヨウバウ (一)女官の曹司(部屋)。(二)女官。

(三)禁裏・院中で一房を賜はつて住む上位の女官。(四)

現今は普通人の妻の稱。こゝは(二)であらう。

源平盛衰記、第四十二卷「此の女房といふは、建禮門院の后立の御時、千人の中より選出せる雜司に、玉蟲の前ともいひ、又は舞の前とも申す。今年十九にぞなりける。雲の鬢霞の眉、花のかほばせ雪の膚、繪に書くとも筆も及びがたし。折節夕日に耀いていとど色こそ増りけれ。かかりければ西國までも召し具せられたりけるを、出だされてこの扇を立てたり」。

【柳の五つ衣】ヤナギのイツツギヌ

【柳】「柳襲」の略。襲の色目の一。表は白、裏は青。冬から春まで用ひる。

【五つ衣】「五重」ともいふ。女子装束の一。平安朝以來の女官及び上流婦人の装束の一で、袿を五枚重ね、或は五つ重ねたやうに仕立てたもの。併し必ずしも五枚と限つたのではなく、五枚・七枚・十枚・十二枚、時にはそれ以上も重ねて着用した。

四季それ／＼の色に應じて袿の色目、又は重ねの色目が變り、櫻がさね・藤がさね・卯の花がさね・紅葉がさね・柳がさね等種類多く、唐衣・上衣の下、單衣の上に着た。

装束要領抄、後附、女官「五衣、是は古の重桂なるべし、或は重ねぬ時もあり、時宜によるべし。ここに云へ

る五衣は、表何色にても、同じ色なる五つ重ねて、裏は一つ一つ紅の平絹を附けたり。(小つま、袖口おのおのわた入りたり。是を夏冬通じて用ひらるゝは不審なり。)又色變りとして、五つながら別色なるものあり。重ねやう、互に色を奪はぬ様に重ねる事、古來有職のならひ也と承りぬ。色がはりの時は、裏は古儀のならひに隨ふべし。五つながら同じきぬの時は、文も皆同じき也云々」。

【紅の袴】クレナキのハカマ 「緋の袴」に同じ。緋色の精好(良質な原料)を選び、練糸を經とし、生糸を緯として織つた、地質緻密で精美な絹織物、それで仕立てた袴をいふ。主として女官の着用するもの。

【皆紅の扇の日出したるを】皆紅の扇に、金箔で日輪を描いたのを。

【皆紅の扇】ミナグレナキのアフギ 地紙・骨共に紅色の扇。地紙だけ紅色なのは單に「紅の扇」といふ。何れも軍扇。

猶、軍扇に日の丸を用ひたのは源義家に始まるといふ。源平盛衰記「この扇といふは、故高倉院殿島へ御幸の時、三十本切立てて明神に進奉あり。皆紅に日出したる扇なり。平家都を落ち給ひし時、殿島へ來社あり。神主佐伯景廣この扇を取出して、是は一人の御施入、明神の御祕藏なり。且は故院の御情、帝業の御守たるべし。されば

此の扇を持たせ給ひたらば、敵の矢も還つて其の身にあり候べしと祝言して進らせたりけるを、此を源氏射外したらば、當家軍に勝つべし。射負せたらば源氏が利を得るなるべしとて、軍の占形にぞ立てられたる」。

【船のせがいに挟み立て】扇を長い竿に挟んで、その竿をせがいに、立てたのである。

【せがい】船の兩舷に渡した板。舟子の蹈んで漕ぎ、又棹さす所。あゆみ。ふなばた。ふなだな。楫。

【陸】クガ 陸地。

【後藤兵衛實基】ゴトウヒヤウエサネモト 藤原秀郷の苗裔。父は左衛門尉實遠。平治の亂に源義平に屬して待賢門を守り、平重盛を撃ち却け、進んで六波羅を攻めた。亂後は義朝と行を共にしようとして許されず、その女を寄託されてこれを護り、後中納言藤原能保に嫁せしめたといふ。頼朝舉兵後、義經の軍に従つて義仲を攻め、次いで屋島の戦には佐藤繼信と行宮を焼いて平軍大敗の因を作つたと傳へられる。右兵衛尉に敘せられた。

【射よとにこそ候らめ】射よといふ意味でござりませう。「射よとに候らむ」を強めた言ひ方。

【候らめ】サフラフラめ 「サフラフ」に推量助動詞「らむ」の已然形「らめ」(上の「こそ」の結び)の添はつたもの。

【たゞし】 但。「唯」に「し」を添へたともいひ、「正しくいへば」の義であるともいふ。上文に對して言ひ直し、疑惑或は例外等と言ひ添へる場合に用ひる接續詞である。或は又。こゝは「しかし、ひよつとすると」位に解してよいであらう。

【大將軍】 タイシヤウゲン (一)古昔、征討に派遣された官軍の總大將。(二)轉じて、全軍の指揮・統率を掌る人。こゝは(二)の意で、いふまでもなく義經を指す。

猶「大將軍の」の「の」は主格を表す助詞。

【矢面】 ヤオモテ (一)敵の矢の飛び來る正面。敵前。陣頭。(二)物事の局に當るもの。質問・非難の集中する地位。攻撃の真正面。

【御覽せられんところを】 原文にはこの上に「傾城を」といふ語があるが省略した。

【ん】 は未來助動詞「む」の連體形「む」の發音便。時制が的確に表されてゐる。口語では今日まだこの「む」に當るものはない。

【手だれ】 「手足」の轉。手利き。上手。

【さりながら】 然りながら、の意。とはいふものの。美人を御覽になるのは警戒を要するが、然し、の意。

【扇をば射させらるべうもや候らん】 扇はお射させなされるのが宜しうございませう。

【與一宗高】 ヨイチムネタカ 與一はその通稱。宗高はその本名。屋島役に義經に従ひ、扇的の功名によつて、丹波・信濃・若狹・備中・武藏の五箇國に於て莊園を賜はり、那須の總領となつた。後薙髮して京に上り、伏見即成院で往生の素懷を遂げた。那須莊に宗高の靈を祭つた社がある。

【小兵】 コヒヤウ (一)弓勢の弱いこと。精兵に對する語。(二)轉じて、身體の短小なこと。小柄。小づくり。

【手はきいて候】 腕は達者でございませう。

【手】 こゝでは、うでまへ。伎倆。

【さく】 (一)機敏にはたらく。活動する。(二)效目がある。效能が表れる。(三)物事に堪能である。腕がたつ。こゝは(三)。

【さん候】 さんザフラフ さやうでございませう。應諾するに用ひる敬語。「さん」は「然に」の音便。この音便化の影響で下の「候」が「ザフラフ」と濁る。

【かけ鳥などを争うて】 飛鳥を射る競争をして。

【かけ鳥】 (一)空を翔けてゐる鳥。(二)空を翔けてゐる鳥を射ること。こゝは(二)。

【争ふ】 アラソフ・アラガフ 競つて勝たうとすること。

【其の比】 ソのコロ 其の頃。

【かちんに赤地の錦を以て、おほくび・はた袖いろへたる直

【べう】 助動詞「べし」の連用形「べく」の音便である。【べし】 (一)推量。(二)可能。(三)適當。(四)當然。(五)義務。(六)命令。(七)意志。(八)斷定。(九)許容。こゝは(三)。

【身方】 ミカタ 「御方」とも「味方」とも書く。【射つべき仁】 きつと射ることの出來る人。必ず射あてる人。

【つ】 完了の助動詞。こゝでは強める意を表す。【べき】 「べし」の連體形。こゝでは可能の意。

【仁】 ジン こゝでは「人」の意。

【多く候なかに】

【候】 サブラフ 「候」を本動詞にした場合は「サブラフ」又は「サムラフ」。助詞詞の時は「サフラフ」。

【下野國】 シモツケノクニ 東山道十三國の一。もと上野國と共に毛野國といつたが、後、上・下に分れ、東を下

毛野國、西を上毛野國といひ、奈良朝初期以後、上野・下野と書くやうになつた。毛は草の意。現栃木縣の地で、二市八郡に分たれてゐる。

【那須太郎資高】 ナスノタラウスケタカ 藤原道長の玄孫那須權守資家七代の孫で、下野那須の總領。十一子があり、源平の亂に十子は皆、平家に屬したが、與一宗高のみ源氏に従つたと傳へられてゐる。

垂

かちん色の布で作り、おほくびとはたそでに赤地の錦をはいで色どりを美しくした直垂。

【かちん】 「かちいろ」に同じ。「かち」又は「かちいろ」の音便といふ。濃紺色。深藍色。褐色。

古く播磨國飾磨郡印南地方から染め出したもので、「しかまのかち」として有名である。普通から勝色の意にとりなして軍中に用ひて祝とした。

【赤地の錦】 アカチのニシキ 赤い織地の錦。

【おほくび】 「大領」の義。衣の前襟をいふ。「おくび」とも「おくみ」ともいふ。衽。

【はた袖】 袍・直垂・直衣・狩衣などの袖を廣くする爲に、袖の端に更に半幅で著ける袖。

【いろへたる】 「いろふ」は「色」を活用させた語。色を加へて美しく飾つた。

【直垂】 ヒタタレ こゝは「鍔直垂」のこと。鍔の下著。錦・練絹・生絹・布等で製し、裾と袖との端を括緒で括つたもの。但し錦製は大將軍のみの用である。

【萌黄緘】 モエギラドシ 萌葱絲で緘すること。

【萌黄】 葱の萌え出づる色、の義。黄と青との間色、淺綠、うすみどり。

【緘】 「をとす」は「緒通す」の略。鍔の札板を革・絲

又は布帛で綴ること。

【足白の太刀】 アシジロのタチ 太刀の足金（帯取の緒を通す金具。鞘のわたり巻のところに附いて二ヶ所ある）の銀製のもの。

銀をシロ、金をキ、銅をアカ、鐵をクロといふ。

【二十四差いたる】 箆に二十四本差したところの。

【切班の矢】 キリフのヤ きりふの羽で短いだ矢。

【切班】 矢羽の名で鷹などの羽の、黒と白と、斑（地色の中に他の色が斑點をなしてゐるもの）が切れてゐるもの。切班 切生・切文・切符。

その斑文によりて大切班・小切班・筋切班・薄切班などの名がある。

【首高】 カシラダカ 「頭高」とも書く。頭より高く突き出るさまにいふ語。

【薄切班に鷹の羽割合はせて作いだりけるぬための箇】

薄切班の羽を主とし、これに鷹の羽をとり合はせて短いだ鹿の角製の箇矢。

【薄切班】 ウスキリフ 切班の一種。黒の斑の色の薄いものをいふ。

【鷹の羽】 タカノハ 鷹の尾の羽。黒白の斑が重なつて列をなしてゐる。

【割合はせて】 まぜ合はせる。とり合はせる。

【作ぐ】 ハぐ 矧ぐ。鳥の羽を矢竹につけて矢を作る。

【ぬため】 鹿の角の、波のやうな紋のあるもの。觸目。

【箇】 カブラ 「箇矢」の略。矢竹の先に箇（木又は角で作られ、燕の形に似たもの。中空で、三つの孔をあけ、風に鳴るやうにしてある）を著け、更に箇の先に雁股（鉄形の鐵）を附けた矢。（なほ前課語釋参照）。

【滋籐】 シゲドウ 弓の幹を籐で繁く巻いたもの。雨露の爲に膠の離れるのを防ぎ、兼ねて裝飾の用とする。

【脇に挟み】 右か左かを弓手の語によつて答へさせたい。

【高紐】 タカヒモ 鎧の左右の綿上（鎧の胸の肩にあたる所）にある良緒。胸板の相引緒と結んで胸を吊る。脱いだ兜などを懸ける金の小鉤がついてゐる。

【見物させよかし】 見物させなさい。「かし」は感動詞で念を押す意味を持つ。

【仕つとも存じ候はず】 ツカマツつともゾンジサフラはず とも出来相にも思はれません。

【仕つとも】 「つかまつるとも」の促音便。「仕る」は、「爲」「爲す」「行ふ」の謙語。

【射損するものならば】 射そこなひませうものなら（それこそ）

【ながき身方の御弓矢の疵にて候べし】 長い後々までの身方の武道上の御恥辱でござりませう。「長き」は「疵」に

かかる。

【御】 大將軍たる義經を主として言つた爲の敬語。

【弓矢】 (一)弓と矢と。(二)武器。いくさ。(三)弓矢の道。武道。(四)弓矢をとる身。又、その家。武士。武門。こゝは(三)。

【疵】 (一)病所。患部。(二)あやまち。過失。缺點。(三)不名譽。耻辱。

【べし】 こゝは推量の意。

【一定仕らんする仁】 きつと仕遂げ得る人。

【一定】 イチヂヤウ きつと。確かに。

【仕らんする】 「仕らんとする」の約であるが、後、「仕らん(仁)」と同義となり、その音調上の効果が用ひられた。軍記物語に多い語法。

【仰せつけらるべうもや候らん】 仰せられた方がよろしうござりませう。「らる」は崇敬の助動詞。

【べう】 は「べく」の音便。この「べし」は適當の意。

【西國】 サイゴク 中國・四國・九州地方の稱。

【向かはんする】 「向かはんとする」の約。

【下知】 ゲチ 指圖。命令。指揮。

尙、「下知を」は、今日の「下知に」に等しい。

【背くべからず】 そむいてはならない。

【べから】 「べかり」の未然形。こゝでは義務の意。

【それに】 それに對して。

【仔細を存ぜん人々】 異存のある人々。文句のある人々。

【仔細】 シサイ かれこれと言ひ立てる程の事情。差支への事柄。

【とうとう】 疾く疾くの音便。さつさと。

【歸らるべし】 お歸りなさい。「る」は崇敬の助動詞。「べし」は命令。

【外れんをば存じ候はず】 外れるかも知れませんが。當るか當らぬか見通しはつきませんが。

【御錠】 ゴヂヤウ 貴人の命令をいふ敬語。おほせ。おことば。

【まろほや摺つたる】 まろほや（圓寄生木。寄生木の形を圓くあらはした模様）の模様を、貝細工で摺り出したところの。

【摺る】 こゝでは青貝摺にすることをいふ。「青貝摺」とは、螺即ち青貝の殻で花紋を作り、これを器物の漆の下塗の上に貼布し、その上に全部漆を塗りかぶせ、乾かし後その花紋を磨き出す技。

【金覆輪の鞍】 キンプクリンのクラ 鞍の縁を金で覆ひ飾つたもの。

【覆輪】 鞍又は太刀の鞘の縁を金銀で覆ひ飾ること。

【手綱】 タヅナ 轡に結びつけ、乗り手が手に執り、馬を

御する用をなすもの。

【かいくつて】手で繰つて。たぐつて。

【かい】接頭語「かき」の音便。他の動詞に冠してその意を強める。

【矢比】ヤゴロ 矢を射當てるに程よい距離。

【扇のあはひ】扇との間。

【あはひ】(一)物と物とのあひだ。(二)人と人との間柄。交際。こゝは(一)。

【比は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折節北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。船は揺りあげ揺りする漂へば、扇も申に定まらずひらめきたり】

その場の光景を眼のあたりに見るやうに寫し出すと共に、浪風の強い海中での狙ひうちに至難なことを現して、與一の苦衷を窺はしめ、更に後文への伏線となつて、與一の成功を一入輝かしいものにしてゐる。

【二月十八日】 壽永三年二月十八日。【二月】は「キサラギ」とよむ。

【酉の刻】 トリのコク 今の午後六時頃。精しくは午後六時から同八時までの間。

時間が少し遅すぎるやうである。長門本や盛衰記には「日も暮れ程」と言つてをり、延慶本・八坂本には、時間は示して居らぬ。

【串】クシ 「的串」の略。こゝは扇を挟んだ竿。射藝に於て的を懸け、或は挟むに用ひる柱のこと。

【くつばみを並べて】 馬首を並べて。

【くつばみ】 馬銜。「口食」の義で「くつわ」のこと。

【晴】ハレ こゝでは、おもてたつこと。はれがましいこと。

【與一目を塞ぎて、「南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の權現・宇都宮・那須温泉大明神、願はくはあの扇の真中射させてたばせ給へ。これを射損するものならば、弓切り折り自害して、人に再び面を向くべからず。今一度本國に歸さんと思し召さば、此の矢はづさせ給ふな」と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱りて、扇も射よげにこそなつたりけれ】

源氏全軍の長き弓矢の響に光輝を加へるか、泥を塗るか、たゞこの一矢によつて定まるといふ責任を負うた與一の悲壯な覺悟である。いかに腕に覺えがあるとはいへ、まだ若年の與一である。眼前に展開された最悪の事態を見ては、之を克服して全軍の期待に副ひ得るか否か、全く見通しがつかないのである。源氏の名譽に對する責任感に加へて、全軍の中から己れ一人が擇び出された名譽に對する責任感に更に切に相重なつて與一の双肩を壓する。萬一仕損じたならば、その場を去らず自決しよう。

ふ。「神明」は「神」に同じ。

【日光の權現】 ニツクワウのゴンゲン 現栃木縣上都賀郡日光町にある二荒山神社。大己貴命を主神とし、后田心姫命・御子味耜高彥根命を配祀する。延暦の頃僧勝道の開基。當時普陀落山神宮寺と稱した。今國幣中社。

【日光】の稱呼の起つた経路は、「フダラク」(普陀落)より「フトラ」(二荒)となり、それを「ニクワウ」と音讀し、その音の縁から「日光」の字を充てるに至つたのである。

【權現】とは「假り(權)」に現れる」の義で、本地の佛が他の姿に化身して現れるものをいふ。主神大己貴命を阿彌陀の化身として祭つたのである。

【宇都宮】 ウツノミヤ 現宇都宮市にある二荒山神社。舊名宇都宮大明神。祭神は東國鎮定の殊勳者崇神天皇の皇子豐城入彦命。日光權現と共に源氏の崇信が厚く、一般武人の信仰も深かつた。今國幣中社。

【那須温泉大明神】 ナスユゼンダイミヤウジン 現栃木縣那須郡那須村湯本にある温泉明神。延喜式に那須郡の官社と載せてあり、古來世に喧稱せられてゐる。

【願はくは】 どうぞ。何卒。漢文訓讀より來た語法。「願ふ」の延言「願はく」に助詞「は」を附けて副詞的なはたらきをなす。

【八幡大菩薩】 譽田別尊(應神天皇)を指す。奈良朝以後、本地垂迹説が信ぜられて、神佛混淆の結果起つた稱。本地は西方の阿彌陀佛で八幡神(即、譽田別尊)はその垂迹であるとするのである。

八幡神は古來弓矢の神として尊崇されてゐる。就中石清水八幡を始め鶴岡八幡・宇佐八幡が最もよく知られてゐる。

【別しては】 とりわけて。殊に。特に。

【我が國の神明】 この「我が國」は與一の故郷下野國をい

【射させてたばせ給へ】射させて下さいませ。
【たばす】賜はす。こゝは敬語の助動詞のやうに用ひられたものである。

【人に再び面を向くべからず】二度と人に顔向けが出来ない。

【本國】郷國の下野を指す。

【見開いたれば】見開いてみると。

【射よげ】射よささう。「よげ」は形容詞「よし」の語幹に接尾語「げ」の添はつたもの。

【與一鎗を取つて番ひ、よつ引いてひようと放つ。小兵といふ條、十二束三つぶせ、弓は強し、鎗は浦響く程に長鳴りして、あやまたず、扇の要際一寸ばかり置いて、ひいふつとぞ射切つたる】

何といふ晴れがましい成功であらう。音楽的な調子の高い筆致がその場の光景をさながら手に取るやうに活寫してゐる。源平兩軍のどよめきが耳に聞えるかと疑はれる。

【番ひ】ツガひ 矢を弦にあてがふこと。

【よつ引いて】よつびいて 「能く引きて」の音便。

【ひようと】 矢などを射放つ音を表す擬聲語。

【小兵といふ條】 小兵とはいひながら。

【條】こゝでは、とはいふものの、とはいへ、の意。

【十二束三つぶせ】 矢の長さの數へ方。一束は一握り（四指を横にならべた長さ）の長さ。十二束三つぶせといへば十二握つて、更に指（拇指を除いたあとの指）三本を伏せて蔽ふだけの長さ。「束」は「ソク」又は「つか」。

普通の矢は十束。長いになると十三束三伏・十五束などがある。爲朝は十三束三伏の矢を用ひた。

【浦響くほどに長鳴りして】 浦全體が鳴り響くほどに長時間鳴り渡つて。

【あやまたず】 この語がこゝに据つた爲に、寸分の隙もない緊密な表現をなしてゐる。

【要】カナメ 「蟹の目」の義。その形が似てゐるからいふ。扇の骨を綴る爲に、小孔を貫いて嵌めこんだくさび。銀・眞鍮・角、又は鯨鬚などで製する。轉じて肝要な事、主眼、の意。

【ひいふつと】 放たれた矢が非常な勢で射切つた音の形容。

【鎗は海に入りければ、扇は空へぞ揚りける。暫しは虚空に閃きけるが、春風に一揉二揉もまれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日のかゞやくに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家絃を敲いて感じたり。陸には源氏箎を敲いてどよめきけり】
事件は終つた。輝かしい結末を以て完了した。その名

殘の光景が美しく印象的に描かれてゐる。夕日の流れて

ゐる海上に、皆紅の扇が白波の上に漂つてゐる光景は、

與一の功名と共に永く國民の腦裡から消え去ることがな

いであらう。

【虚空】コクウ (一)そら。空間。(二)佛語で、無相・無色なこと。(三)色のつかぬこと。目的のないこと。こゝは(一)。

【一揉二揉】 ヒトモミフタモミ 春風に一二度翻弄せられたのをいふ。

【さつとぞ散つたりける】 音便と係結とがいかに文勢に効果を與へるかを示す適例である。

【皆紅の扇の云々】 こゝでは特に、表現に浮び出た色調の美しさを味はせたい。日の丸と夕日の輝に綠波と白波とが相應する映照、更に海中の若武者を中にして陸と海との美しいざわめきを想像させたい。武道の極致が絢爛たる美的表現の中に完成されたのである。煙幕、毒ガス、ダムダム弾など何といふ著しい對照をなすことであらう。

2 文の構成

第一節 初一二七頁一〇行 屋島の戰の第一日、日が暮れかけて、兩軍將に引退かうとしてゐる所に、沖の方より平家の小舟が一艘現れ、日の丸の扇をさし上げて陸へ向つてさし招いた。

【浮きぬ沈みぬ】 浮いたり沈んだり（しながら）。

【ぬ】 完了の助動詞であるが、こゝでは對偶の動詞「浮く」「沈む」に附いて、その動作が交互に起ることを表してゐる。

【ぬ】は「つ」が動作的・直寫的であるのに比し、狀態的・敘述的であるのを特色とする。

【沖には云々。陸には云々】

こゝも對句的效果を擧げてゐる。海上のを絃とし、陸上のを箎としてあるが、これは殊語で代表させたのであつて、無論絃と箎とだけではないであらう。有り合ふものを何でも敲いたのであらう。

【絃】 フナバナ 船のへり。ふなべり。

【箎】 エビラ 矢を盛つて背に負ふ具。平胡篳から變化したものの。制によつて逆頰箎・竹箎・葛箎・革箎・柳箎・指箎・等がある。

「箎を敲いて」とは隣人の箎を敲いたのであらう。

【どよめきけり】 聲をあげて騒いだ。感嘆の聲を口々に發してざわめいた。

第二節 一二七頁一行—一三〇頁二行 これを見た義経は那須與一を召し、あの扇の眞中を射よと命じた。

(1) 扇の意味の穿鑿と與一の召喚。(一二七頁一行—一二九頁一行)

(2) 與一の装束、義経の命令。(一二九頁二行—一三〇頁二行)

第三節 一三〇頁三行—一三二頁一行 與一は馬を海中に乘入れ、冥目して神明に祈念し、死を覺悟して對つた。

(1) 與一矢比を測つて海中に馬を乗入れた。(一三〇頁三行—同一行)

(2) 的の状態と場面が晴れの場なること。(一三〇頁二行—一三一頁四行)

(3) 神明に向つて悲壯の祈願を行ふこと。(一三二頁四行—同一〇行)

第四節 一三一頁一行—終 狙ひ違はず、扇は與一の箭矢に要際を射切られて空に舞ひ上り、敵味方の感嘆の聲はしばし鳴りもやまなかつた。

3 文意

屋島の戦に、源氏方の弓矢の響を一身に引受け、死を覺悟した那須與一宗高が敵味方の環視の中で、美事に扇の的を射落した事。

4 鑑賞批評

終始緊張し、讀者をして手に汗握らしめるのは、この事件の立役者である與一の立場が悲壯であつた爲である。そしてそのことが彼の成功を一入輝かしいものにしてゐるのである。又一面、與一の成功は平氏の床しい態度によることが多大である。即ち與一の成功は平家にとつて最も不吉な占の結果であつたに拘らず、敵味方を超えて喝采を送つてゐる。これは平家が文化人であつた爲である。この床しい平家の態度に比し、平家方の武者一人が感に堪へず躍り出でて舞ひます所を義経が更に與一に命じて射殺せしめたのは、源氏がいかに興ざめた野武士であるといふ感じを抱かせるのであつて、

この詩的な場面を生んだのは専ら平家の手柄に歸せしめられなければならぬであらう。

又この事件がかくまで詩的な印象深い感銘を與へるのは敘述の筆が冴えてゐることによるのである。

三 備 考

1 指導研究

(一) 指導の第一の手がかりは與一の悲壯な心境の進展を生徒に追體驗せしめることであらう。そして「……此の矢はづさせ給ふな」と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱りて、扇も射よげにこそなつたりけれ」といふ天人冥合境がいかにして開かれたかについて思ひ及ばせることが肝要であらう。

(二) 次に與一の成功を輝かしいものにした平家の雅量を理解せしめることも考慮されなくてはならない。

(三) 文章の妙趣については先づ生徒の感想を叩き、その後教授者の補足が加へられることが望ましい。

2 参考

(一) 参考資料

(イ) 平家物語に描かれた事件の経過のうち、特に諸國源氏の興起から平家滅亡に至る間を、本課及び前課鶴越の歴史的背景を明らかにする意圖によつて左に略記する。

治承三年(一八三九)七月、平重盛薨す

治承四年(一八四〇)二月、清盛は御年三歳の安徳天皇を位に即け奉り、外祖父として天下の政を意のままに執行ひ横暴を極む。同年五月、源頼政以仁王を奉じて平家討伐の兵を擧げたが間もなく宇治に敗死し、宮も流矢に當つて薨じ給うた。同年六月、清盛は都を攝津國福原に遷したが、種々の反對に遭ひ、十二月には舊都に復した。

同年八月、源頼朝伊豆に兵を擧ぐ。十月、富士川に平軍戦はずして大敗した。
同年九月、木曾義仲兵を信濃に起す。

養和元年（一八四一）閏二月清盛薨す。年六十四。
壽永二年（一八四三）五月、平維盛は木曾義仲と越中礪波山に戦つて大敗した。

同年七月、義仲の軍京都に迫つたので、平宗盛は安徳天皇を奉じ、一門と共に西國に奔つた。八月筑前太宰府に到つたが緒方惟義の軍に追はれたので、四國に渡つて讃岐の屋島に居を定めた。平家はやがて山陽道八ヶ國、南海道六ヶ國を討從へた。木曾義仲が討手に向けたが閏十月、平家は之を備中水島に破り、再び勢を得た。

京都に歸つた義仲は鼓判官の讒奏を憤つて十一月法住寺殿を犯したので、頼朝は範頼・義經に命じて之を討たせ、義仲はこれを宇治・勢多に防いで敗れ、壽永三年正月近江國粟津に戦死した。この隙に乗じて平家は屋島を出て攝津に渡り、一の谷に城郭を構へて源氏に備へた。

壽永三年（一八四四）二月、一の谷の戦。義經背後越より急襲した爲、平軍忽ち潰亂し、宗盛は安徳天皇を奉じて屋島に逃れた。
壽永四年（一八四五）二月、義經は暴風雨を冒して四國に渡り、屋島の城に押寄せたが、平軍は船に移つて海上に避け、戦が決しなかつた。那須與一が扇的を射落し、又義經が海中に落した弓を拾ひ上げたのは、この日の夕暮のことであつた。

同年三月廿四日、壇の浦に於て源平兩軍の決戦が行はれた。阿波民部重能の變心から平家の謀が洩れ、四國・西國の武士も亦平家に背いた爲、遂に平軍の總崩れとなり、二位の尼は安徳天皇を抱き奉つて入水し、一門これに殉つて、平家は全く滅亡した。宗盛は捕へられ、俘虜として鎌倉に送られ、後斬られた。

建禮門院は安徳天皇 二位尼に續いて入水し給うたが、源氏の武士に救ひ上げられ、一門の生捕と共に都に送還せられ、五月、御落飾、九月大原寂光院に入御せられた。

(ロ) 平家物語の語法の特徴について。

(1) 擬聲・擬態の語の用例の非常に多いのは、平家の特徴の一であつて、これは一面この物語が言語を重んじた證據とすることが出

来る。平家にこれら擬聲・擬態の語の多いことは、教科書にとつた部分に現れる次の用例からも知ることが出来る。

よつ引いてひようと放つ（一三一頁一行）

ひいふつとぞ射切つたる（一三二頁一行）

春風に一様二採もまれて、海へさつとぞ散つたりける（一三二頁三行）

(2) 平安朝時代以前の文學に對する平家物語の音韻の特徴は、音便が著しく多いことである。

二十四さいたる切斑の矢（一二九頁四行）

矢面に進んで（一二八頁一行）

扇をば射させらるべうもや候らん（一二八頁四行）

音便の中でも特に耳立つて感ぜられるのは促音便と撥音便で、これは共に言語に活潑な感じを與へ、とりわけ促音便は剛強な感じを

與へる。

仕つとも存じ候はず（一二九頁八行）

扇も射よげにこそなつたりけれ（一三一頁一〇行）

以上は動詞の例のみであるが、この音便は動詞以外にも現れて、

よつ引いてひようと放つ（一三一頁一行）

などの例もある。尙促音は擬聲語・擬態語には特に著しく現れて、例へば

ひいふつとぞ射切つたる（一三二頁一行）

海へさつとぞ散つたりける（一三二頁三行）

などその用例が多い。

次に拗音や濁音は平安朝時代には優雅でないとして排斥せられたが、鎌倉時代の武士詞には盛に用ひられ、平家にもその例が多い。

よつ引いてひようと放つ（一三一頁一行）

此の著者 一定仕らんずると覺え候（一三〇頁八行）

薄切斑に鷹の羽割り合せて作いだりけるぬための簞（一二九頁六行）

最後の二例は文法上の音韻變化であるが、この例に入れて考へることも出来よう。

八 仁 王

夏 目 漱 石

一 解 題

1 作 者

夏目漱石 ナツメソウセキ 本名金之助。英文學者。小説家。慶應三年正月江戸馬場下（現牛込區喜久井町一番地）に、名主夏目小兵衛直克の末子として生れた。三歳の時養子に遣られたが、數年後實家に歸つた。一ツ橋中學校（東京府立第一中學校の前身）を半途退學後二松學舎・成立學舎に學び、明治十七年東京大學豫備門豫科（第一高等學校の前身）に入り、二十一年本科に入り、二十三年卒業、帝國大學文科大學に入學、英文學專攻。特待生となつた。明治二十六年大學卒業、更に大學院に入學。高等師範學校（東京高等師範學校の前身）・松山中學校・第五高等學校に教鞭を執り、三十三年文部省の命により英文學研究の爲英國へ留學。三十六年歸朝。第一高等學校教授に任じ、東京帝國大學講師となつたが四十年一切の教職を辭し、朝日新聞社員となり、文藝的述作を同紙上に掲載することとなつた。四十二年滿洲遊行、翌年胃潰瘍の爲吐血して重態に陥つたが、この大患によつて人及び藝術上に一轉機を來した。四十四年博士號辭退。大正五年十一月胃潰瘍の爲大出血二回、十二月永眠した。享年五十。

明治二十四年頃から句作に専念して正岡子規と交遊が厚く、俳壇にも一地位を占めてゐた。三十八年一月から「ホトトギス」に「吾輩は猫である」を掲載して一躍文名を轟かした。三十六年から繪筆を弄び、歿年なる大正五年頃も頻りに書畫をものしてゐる。又大正五年夏から秋にかけては漢詩を多く作つた。

著作は「夢十夜」「倫敦塔」「燕露行」「坊ちゃん」「草枕」「虞美人草」「三四郎」「それから」「門」「彼岸過迄」「行人」「心」「硝子戸の中」「道草」等があり、絶筆「明暗」は未完のまま遺された。小説・俳句・書簡・紀行・小品・批評・隨筆等總べて漱石全集に收められてゐる。

その作風は初めは著しく浪漫的な色彩に富んだものが多く、當時の文壇の主潮をなしてゐた自然主義的傾向の外に超然として筆を驅り、餘裕派・低徊趣味等と評せられてゐたが、後次第に寫實的傾向に深まり、「三四郎」「それから」以後、漸く本質的の鑛脈に掘り當てたやうに、内へ内へと深く心理解剖を掘り下げて行つた。かくの如くして作者の發見したものは、人間の性格に根強く培はれてゐる自我主義であつた。自我主義の發見は、作者をますます厭世家にし、人間嫌ひにした。けれども最後の「明暗」を書く頃、作者は心境上更に一飛躍をして、則天去私といふ廣い人間愛の方へ考へ方が向つてゐた。

2 出典

漱石全集中の「夢十夜」と題する小品のうちの第六夜の殆ど全部を掲げたものである。

「夢十夜」は明治四十一年七月二十五日から、同八月五日まで東京朝日新聞に掲載せられたもので、「こんな夢を見た」といふ書き出しでいろ／＼な夢を描いてゐる。明治四十三年五月、「永日小品」「滿韓ところどころ」「文鳥」と共に「四篇」と題して春陽堂から單行せられた。漱石全集第九卷、同普及版第十三卷所收。漱石全集 全十四卷、同普及版 全二十卷同決定版 全十九卷、岩波書店内漱石全集刊行會發行。

3 主眼及び採擇の趣旨

本課の主眼は、作者が夢物語に托して大藝術家運慶の仁王製作に於ける自在の妙境を示す手腕の冴えを活寫し、併せて一種の藝術制作論を試みた點にある。

文藝的教材であるが、運慶の如き大藝術家の風采を描出してゐる點では國民的教材でもあり、一種の藝術制作論を試みてゐる點では文化的教材でもあり得る。

前課が戦記物語の秀れた現實描寫を示すものであつたのに對して、本課は現代文學の、夢幻的空想に托された生彩ある描寫である點に對照の妙味がある。

二 解 釋

1 語 釋

【仁王】ニワウ 「二王」とも書く。伽藍守護の爲に、寺門の兩脇に安置した一對の金剛力士の像。
【金剛力士】は金剛神・執金剛・金剛夜叉・密迹金剛などともいひ、金剛杖を執つて帝釋天の宮門を守る夜叉神で、佛の出世に逢へばこの世に下り、世尊を衛護し、道場を防守するといはれ、印度に於ても古くから護法善神の一として寺門等に安置する風があつたが、それが支那を経て我が國に傳はつたものである。仁王像の多くは筋骨の逞しい裸身の像で忿怒相（佛・菩薩が大日の教會により、諸々の惡魔を降伏する爲に、悲心を以て現する威猛の相）をなし、一は口を開き、他は閉じてゐる。この口の開閉は阿吽の二字を表示したものであるといふ。阿は開口の始聲で吽は閉口の終聲。聲音によつて哲理を

説く眞言宗ではこの二字を以て一切言語・聲音の元初歸着となし、更に宇宙の根本原理をこの開閉の二音に認めたと。鎌倉時代にはこの像の傑作を多く出した。

【運慶】ウンケイ 「雲慶」とも書く。鎌倉時代初期の佛師。佛師康慶の子。七條佛所（定朝から二十餘代續いた佛所で京都七條にあつた）第六世で、南都の大佛師職であつたが、後、東寺の大佛師職に補せられ、文治から建久に互る南都復興に當り、東大寺及び興福寺の諸佛像を制作した功によつて法印に敍せられ、備中法印と號した。歿年は詳でないが、一説に安元二年（一八三六）といふ。父康慶に就いて藤原式の佛像彫刻を學び、壯年時代からこれに寫實味を加へた自己獨得の作風を初め、その後専ら剛健な所謂運慶風の作をなした。慈悲相でも忿怒相でも往くところとして可ならざるはなかつた巨匠で、鎌倉

時代彫刻の隆盛はその力による所が多く、鎌倉佛師の祖といはれる。その子湛慶・康運・慶辨・康勝・運賀・運助等彫刻をよくしたが、湛慶が最も名高い。

運慶の作に擬せられる佛像は頗る多く、その名によつて國寶に指定されたもの丈けでも十數體はあるが、今日その遺品として確證あるものは、圓城寺の大日如來、東大寺南大門の仁王像中東方金剛、興福寺北圓堂の本尊彌勒菩薩及び世親・無著の二菩薩像等である。

【護國寺】ゴコクジ 神齡山悉地院大聖護國寺。東京市小石川區大塚坂下町に在る。新義眞言宗豊山派の別格本山。延寶八年(二三四〇)將軍徳川綱吉が僧亮賢をして創立せしめたもので、綱吉の生母桂昌院の觀音像を本尊とする。元祿十年、更に境内に觀音堂を建立した。享保二年、神田門外の護持院が焼失した時、その再建を停めてこゝに移し、從來の護國寺を護持院、觀音堂を護國寺と改稱せしめ、後永く護國寺は護持院の附屬と見られたが、明治維新の際再興して今日に至つた。徳川時代に關東眞言宗の中心をなした名刹である。

因に護國寺山門には仁王像二體が左右に配置されてある。
【山門】サンモン 「三門」とも書く。寺院の總門。寺院は昔時俗塵を避けて閑寂な山中に建てられたので、

みな山號を稱し、その門を山門と呼ぶ。左・右・中の三門を並列して一門となす故に、又「三門」ともいふ。後にはたゞ一門であるものも三門と稱した。「三」は空・無相・無願の三解脱門に由來するといふ。

【刻んで】キザんで 彫刻して。

【刻む】(一)切つてこまかくする。(二)彫刻する。ほりつける。(三)刻み目をつける。(四)分割する。

【評判】ヒヤウバン うはさ。世評。世間のとりざた。

【散歩ながら】サンボながら 散歩かたぐ、散歩がてら。

【下馬評】ゲバヒヤウ (一)下馬先で、主人の供をして待つてゐる雜人がしあふ評判。(二)門外者の批評。素人評。

(三)政府の變動又は高官の任命に關する下々の取沙汰。こゝは(一)。

【下馬】こゝでは「下馬先」の略。社寺・城門などの下馬札の立つてゐる前の地。

【赤松】アカマツ 「めまつ」ともいふ。松科、まつ屬の常緑喬木。樹皮は赤褐色で、少しく齒牙縁を有する二針葉を束生する。雌雄一家で、雄穂は長橢圓形・黄色、雌穂は卵形・紫色。花候は五月頃で、翌秋、卵狀橢圓形の毬果を結ぶ。

【其の幹が斜に山門の莖を隠して、遠い青空まで伸びてゐる】

亭々たる巨樹の姿がほしいまゝに描き出されてゐる。「其の幹が斜に山門の莖を隠して」に幹の巨大さを、「遠い青空まで伸びてゐる」に素晴らしい丈の高さを眼前に見るやうである。

【莖】イラカ (一)屋根を葺く煉瓦。(二)瓦葺の屋根。

(三)切妻屋根の下の三角形の部分。こゝは(二)。

【朱塗】シユヌリ 朱色に塗ること。又、その塗つたもの。

【照り合つて】ウツリアつて 互にひき立てあつて。

【照り】「映照」の意で、「ウツル」と訓む。色と色とがよく合ふこと。

【目障り】メザハリ 見るに邪魔となること。見る目の障りとなること。又、そのもの。

【切つて】横切つて。

【古風】コフウ むかしのさま。いにしへの姿。いにしへぶり。

【鎌倉時代とも思はれる】

作者の夢(この夢は勿論、構想上の技巧に基く寓意的なものである)の中に、鎌倉時代の巨匠運慶が現代東京の真中に現れて仕事を初めてゐるのであるから、その仕事場たる護國寺山門附近の巨樹の姿に鎌倉時代を感じるのは極めて自然な心理過程であらう。

【鎌倉時代】カマクラジダイ 鎌倉幕府が政権を握つて

ゐた期間で、始終の年月については諸説あるが、普通には建久三年(一八五二)源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから、元弘三年(一九九三)北條高時の滅亡に至るまでの約百五十年間をいふ。

【明治の人間】メイヂのニンゲン 明治時代の人間。こゝでは、今の人間、現代の人間、の意。

本書の書かれたのは明治四十年である。

【車夫】シャフ 人力車を挽く人。車引き。くるまや。

【辻待】ツジマチ 人力車力などが路傍にあつて客を待つこと。

【退屈】タイクツツ (一)倦みあくこと。倦み怠ること。(二)ひまで苦しむこと。無聊。こゝは(一)。

【大きなもんだなあ】

「もん」「もの」の音便。

【私や】ワタシヤ 「わたしは」の音便。

【思つてた】「思つてゐた」の略。

「ゐる」が助詞「て」につゞくととき、會話語では往々「ゐ」が省かれる。

【なんだつてえませぜ】何だつていひますよ。「聞くところによると」とか「噂によると」とかいふ意で、聽者の注意を促す語。

【なん】「なに」の音便。こゝでは、これから語り出さう

とするさいた話の内容を漠然と指す。

【ぜ】「ぞ」の轉。文の終につけて語勢を強める助詞。

【日本武尊】 ヤマトタケルノミコト 日本書紀には日本武尊、古事記には倭建命と記し奉る。御本名は小碓命。一に倭男具那王（日本童男）と申す。景行天皇の皇子。御母は皇后稻日大郎女。景行天皇の十二年（七四二）に御誕生。幼にして剛膽、父天皇を驚し奉つたが、壯年に及んでは容貌魁偉、御身長一丈に餘つたといふ。二十七年勅命を奉じて熊襲を平げ給ひ、歸途、吉備・難波の諸賊を御平定、翌年歸京遊ばされた。更に四十年東夷鎮定の勅命を拜し、往途駿河では天叢雲劍の威靈によつて野火の難を拂ひ、走水の海では妃弟橘媛の犠牲によつて海上の難を免れ給うた。その歸途、御劔を尾張にとゞめられ、近江の伊吹山の賊を討たうとして病を得給ひ、四十三年（七七三）伊勢の能褒野に薨去し給うた。御年三十二。

【端折つて】 ハシヨつて

【はしよる】 「はしをる」の約。(一)裾を折つて帯にはさむ。(二)はぶく。切り捨てる。こゝは(一)。

【運慶は、見物人の評判には委細頓著なく鑿と槌を動かしてゐる。一向振向きもしない。高い所に乗つて、仁王の顔の邊を頻りに彫り抜いて行く】

制作への集中ぶりがありくと描かれてゐる。何らの

不安もなく確信に充ちた態度で鑿をふるつてゐる名人の手腕の冴えが見えるやうだ。

【委細頓著なく】 何の頓著もなく。少しもかまはず。

【委細】 キサイ くはしいこと。つまびらか。こゝではすべてに、何事にも、一向、全然、等の意。

【頓著】 トンヂヤク 俗に「トンチヤク」ともいふ。

(一)もと「食著」で、佛語。多く求めて厭足することのないのを食といひ、貪心が固著して離れないのを著といふ。(二)轉じて、ものにかまふこと。心にかけること。

懸念。顧慮。案じ。こゝは(二)。

【鑿】 ノミ 木材に孔を穿ち、溝を掘り、又は鉋の適用に困難な場所を削る等に用ひる工具。その柄頭を槌で打ち、又手でおして、穿ち或は削る。種類が多く、刀先の形状によつて平鑿、丸鑿、鎚附鑿等がある。

【槌】 ツチ 物を叩くに用ひる工具。頭は圓柱形で、その中央へ丁字形に柄をすげたもの。木製のものを才槌、鐵製のものを金槌といふ。

【一向】 イツカウ (一)ひたすら。ひとむきに。(二)全く。すべて。まるで。少しも。こゝは(二)。

【烏帽子】 エボシ・エボシ 帽子の一種。天武天皇の御代にあつた圭冠から轉じたもの。もと、禮冠の下に冠つたものであるが、延喜の頃から冠と離して單獨に用ふる

しい」「めいてゐる」等の意を表し、嫌ふ心持を含む。

(四)あやしい。疑はしい。こゝは(三)。

【わいわい】 多人數がやかましく聲を立てるさま。騒ぐさま。

【自分はどうして今時分まで、運慶が生きてゐるのかなと思つた。どうも不思議なことがあるものだと思へながら、やはり立つて見てゐた】

夢の中では一般に、どんな超現實的な現象に遭遇しても、別に不思議な感じは起らないものである。ここで作者が運慶の出現を不思議がつてゐるのは、作者が意識的な見方で夢の心理を取扱つてゐることを露呈してゐる。尤も作者としてはこれらの點も十分承知の上で筋を運んで行つてゐるのであらう。

【奇態】 キタイ (一)珍しいかたち。奇狀。(二)珍しいさま。奇しい状態。(三)珍しいこと。怪しむべきこと。不思議なこと。こゝは(三)。

【頓と】 トンと 「頓」は當字。(一)一向に。さらに。少しも。さつぱり。絶えて。全く。(二)「どんと」に同じ。十分に。しかと。すつかり。こゝは(一)。

【一所懸命】 イツシヨケンメイ 一所賜はつた知行の地を命にかけて頼みとする義から轉じて、命がけで事をする。之から轉化して、一生懸命とも書く。

やうになつた。貴人は冠・袍の装束でない時に用ひ、衆人は儀式の時に冠る。古へは紗・絹などを黒く漆塗にして縫ひ、柔かであつたが、鳥羽天皇の御代から紙で張り、漆を塗り、固く作るこゝになつた。そしてそれらは佐比といふ皺を持つてゐたが、中頃、きらめき烏帽子といふ皺のないものが出来、更に後には又、皺烏帽子になつた。種類は立烏帽子・風折烏帽子・平禮烏帽子・引立烏帽子・細烏帽子・もみ烏帽子等多い。もみ烏帽子は軍の時冑の下に冠るやうに揉んだものであり、本體は立烏帽子である。

【素袍】 スハウ (スオウと發音) 「素襖」とも書く。直垂大紋から轉化した服で、古昔は庶人の常服であつたが江戸時代に至つて侍の禮服となつた。地は布に限られ、腰板・相引に家の紋を染め出し、胸紐・菊綴には革を用ひた。下に素袍袴を着ける。色も地質も上と同じで、主に鼠又は藍を用ひる。

【括つて】 ククつて

【括る】 まとめて結ぶ。一つにたばねる。しぼる。

【古くさい】 フルクさい 陳腐である。古めかしくて興味がない。古びてゐる。

【くさくさ】 (一)いやな香がする。(二)香がする。(三)塾語に用ひて「感じがする」「傾向がある」「似てゐる」ら

【流石は運慶だな。眼中に我々なした。天下の英雄はただ仁王と我とあるのみといふ態度だ。天晴だ】

一人の若い男の言葉を假りて制作の三昧境を示したものである。つゞいて言つた「あの鑿と槌の使ひ方を見給へ。大自在の妙境に達してゐる」といふ言葉も亦よくその消息を具體的に指示してゐる。

【流石は】 サスガは 秀れた丈けあつて。音に聞えただけあつて。本分に違はずして。やはり。いかにも。
【眼中に我々なした】 我々の批評など更に問題にしてゐない。

【天下の英雄】 テンカのエイユウ 廣く天下に知られた大英雄 三國蜀志、劉先生傳「今天下英雄、唯使君與操耳。」

【天下】 (一)一國 國內。(二)世界。萬國。あめが下。
【天晴】 アツバレ 「あはれ」の急呼で、感嘆して驚讚するに發する語。「天晴」は當字。

【すかさず】 機を外さずに。ぬかりなく。
【大自在】 ダイジザイ 個我を脱して大道に合したところから生ずる絶對的な自由。こゝでは、異常な鍛錬の結果意圖せずして自ら合目的に働く技術に於ける自由の意。

【妙境】 メウキヤウ (一)たへなる場所。甚だすぐれた地。

(二)圓融自在の境地。精巧・善美の極地。すぐれた境地。至妙の境地。こゝは(二)。

【運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り抜いて、鑿の齒を堅に返すや否や、斜に上から槌を打ち下した。堅い木を一刻みに削つて、厚い木屑が槌の聲に應じて飛んだと思つたら、小鼻の開いた怒り鼻の側面が忽ち浮き上つて來た。その刀の入れ方が、如何にも無遠慮であつた。さうして少しも疑念を挟んでゐないやうに見えた】

潑刺とした描寫である。鑿の動きが、それにつれて飛ぶ厚い木屑が目に見え、耳に聞えるやうだ。運慶の彫刻家としての位や力量が的確な鑿の一轉一動にも示現せられてゐる。こゝに至つて、眞の制作は作家の意識的な努力を超えた力量の發現であり、信念の發露である趣を呈する。

【木屑】 キクヅ 木材を切り又は削りなどした屑。こくづ。

【槌の聲に應じて】 槌の音に伴なつて、の意であるが、「槌の音に伴なつて」より遙に緊密な表現である。

【小鼻】 コバナ 鼻梁の左右、鼻孔の外側の小高い所。鼻翼。

【怒り鼻】 イカリバナ 怒つた形相の、鼻翼のふくれた状をいふ。

人が怒る時は精神が昂ぶる爲に呼吸が荒くなり、鼻翼が膨大する。

【無遠慮】 ブエンリヨ (一)遠慮せぬこと。憚らずに思ふまゝにすること。(二)狎れて、禮を亂すこと。不作法。不謹慎。こゝは(一)。

【疑念】 ギネン うたがふ心。うたがひあやしむ心。こゝはどういふ風に刻まうかと疑ひ惑ふ心。

【無造作】 ムザウサ ざうさなないこと。氣輕なこと。慎重でないこと。

【なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんぢやない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋まつてゐるのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すやうなものだから、決して間違ふ筈はない】

これもさつきの若い男の言葉であるが、眞の制作が超意識的努力であることを示す有力な文字である。一つの眉、一つの鼻も作家は勝手に作り爲すのではない。作家の胸中に結晶した内面像が彫む作用に即して實現し來るのである。

【彫刻】 テウコク 造形美術の一。木・石・金屬・土・石膏・漆喰・貝殻・象牙・角・硝子・陶磁・乾漆等を材料として、三延長的に物象を形成する藝術。丸彫と浮彫との二形式がある。丸彫が對象を、それ自身に纏つた一體

として、立體的に表現するに對し、浮彫は或平面に於ける凹凸の關係によつて表現するもので、高浮彫・平肉彫・薄肉彫等の區別があり、古來寺院その他の建築の一部、例へば壁・柱・扉等に裝飾として施されたものが多い。

【道具箱】 ダウグバコ 特に大工道具を入れておく箱をいふ。

【先達て】 センダツて 先頃。この間。

【暴風】 アラシ「荒風」の義。「し」は風の古語。烈しく吹き荒ぶ風。

【「あらし」は暴風雨のことにもいふ。

【樫】 カシ「樫」とも書く。「樫」は國字。植物學の分類ではあかがしの別稱であるが、林業の方では樫類といへば殼斗科、かし屬中の常緑なるもの(しらがし・あかがし・いちぬがし・うらじろがし等)を總稱してゐる。普通いふ所の樫はこの林業上での範圍と略同じであるが、防風・防火の爲の庭園樹又は生垣として或は器具材、薪炭材として廣く用ひられるのは、あかがしとしらがしとである。質は粗くて堅い。

【薪】 マキ 燃料に供する木。たきもの。

【木挽】 コビキ 材木を大鋸で挽き割るのを業とする人。おがひき。鋸匠。木挽職。

【手頃】 テゴロ 己の手又は力に程よく適ふこと。

【片つ端から】 残らず。一つ一つ。全部。

【藏して】 カクして

【藏す】 (一)人に知られないやうにする。(二)しまふ。をさめる。(三)秘密にする。(四)葬る。こゝは(二)。

【遂に明治の木には、到底仁王は埋まつてゐないものだと悟つた。それで運慶が今日まで生きてゐる理由もほぼ解つた】

軽いユーモアをこめた筆致の中に、落し話的に結論が示されてゐる。仁王の像は自然の中に埋まつて居るのではなくて、藝術家の靈腕の中に潜んでゐるのである。秀れた藝術家は自然物の上に己の内面像を具象化するのである。明治の木には仁王は埋まつてゐないといふことは明治時代即ち現代には運慶など秀れた彫佛師がゐないと

いふ意味である。さすれば運慶が今日まで生きてゐる理由もほぼ解つた、といふ作者の心理過程も理解されると思ふ。
「運慶が今日まで生きてゐる理由も云々」の中に用ひられてゐる「生きてゐる」といふ語は二つの概念、即ち、「自分はどうして今時分まで運慶が生きてゐるのかなと思つた」といふ句に示された「肉體的生存」の意味と、その遺作が後世永く價値を失はないといふ「抽象的生存」の意味とを懸けた輕妙な手法である。これは新しい意味の懸詞と見られよう。然しかういふ技巧はやはり文を輕くする傾向を持つことは免れ難いものではあるまいか。

2 文の構成

第一節 初—一三五頁二行 護國寺の山門で仁王を彫んでゐる運慶と見物人の評判。

第二節 一三五頁三行—一三八頁七行 運慶の天晴れな彫刻ぶり。

第三節 一三八頁八行—終 運慶が今日まで生きてゐる理由。

3 文意

夢に見た運慶の仁王彫刻の有様と、彼が今日まで生きてゐる理由。

4 鑑賞批評

「夢十夜」は單なる夢の記録ではない。殊にこの第六夜には作者の藝術制作論が寄託せられてゐる。随つて、作者の制作體驗が根柢に潜んでゐる。夢を假りて制作の三昧境を、又その本質を具體的に描き出さうとしてゐる。そこに興味があり、底力が感じられる。

文章は相變らず漱石らしい明快な牙えを示してゐる。特に運慶の鑿の使ひぶりは縦横に活寫されて目ざましい限りである。そしてこの文にも、非人情乃至餘裕派と呼ばれるところの、對象を或る距離を置いて見る態度が感ぜられると思ふ。

三 備 考

1 指導研究

時間や場所の制約を超えて、想像の赴くがまゝに話の筋を運んでゐる所に夢らしい特色がある。最後の「運慶が今日まで生きてゐる理由もほぼ解つた」といふ落ちが、そこに書かれてゐるだけの運びでは、必ずしも首尾の整つた落ちとはいへない、茫漠とした所がある。これも一つの夢らしい特色かも知れぬ。が、さういふ時間や空間の制約を超越した敘事であり、現實離れのした筋であるに拘らず、却つてその故に明確な描寫が成立してゐる。青空を背景とし、大きな赤松を前景に配した護國寺の山門といひ、見物の群集といひ、無我の状態で没頭してゐる運慶の彫刻ぶりといひ、實に鮮明な印象を與へてゐる。何よりもまづこの鮮明な印象の成立を指導の目標とすべきであらう。そして最後に、そこに寄託せられてゐる作者の藝術論ともいふべきものを考へさせるのが適切な順序であらう。が、この出發點から到達點へは如何に辿り着かせるか。そこに指導の具體的方法が考へられなくてはならぬ。それにはまづ、山門や運慶の描寫及び見物人の一人である「若い男」の感嘆によつてその光景についての印象を鮮明にし、次には之に對する「自分」の感想・行動を本文によつて読み進らせ、更にその問題と解決とを抽出させることによつて、その思想的中核が把握せられ、その爲に用意せられて

る描寫の事實・性質などが理解せられて來るであらう。

併し、さういふ思想的中核は、やはり思想的中核であつて主題ではない。具體的感動である主題に含まれた發展に過ぎない。随つてこれは一の抽象によつて理解せられる内容であつて、表現の具象性に即していへば、あくまでも運慶の仁王彫刻ぶりに外ならぬ。かういふ文で、寄託せられた藝術論といふ如き問題を取扱ふと、思想的な中核を眞の主題であるかの如く考へて、主題の表現に於ける具象性を逸し去ることが往々ある。この點も亦指導上肝要な點といはねばならぬ。

2 参考

(一) 挿繪説明

運慶像 京都市六波羅密寺藏。木彫で高さ二尺六寸ある。今日では黒色を呈してゐるので、彩色の細部は不明で、玉眼のみ人目を射るが、其の手法はむしろ鎌倉初期以來の傳統的技法を示してゐる感がある。殊にその衣紋の取扱ひに於ては鎌倉後期と思はれない位の古風の趣があるが、其の顔面の表現に於ては、多少硬直に流れ、自ら空疎の感を齎してゐる所に後期的の力量の缺乏を表白してゐる。鎌倉時代肖像流行の最後の作例の一として適當なものであらう。

仁王像 運慶快慶合作。これは奈良の東大寺大佛殿前の南大門に護立する仁王の像である。東大寺は治承年間平重衡の爲に焼かれたが、頼朝の世になつて直ちに再興に着手し、文治元年には大佛の開眼供養があり、正治元年には南大門が上棟され、これに安すべき仁王像はやゝ遅れて建仁三年に造立されたのである。作者は大佛師運慶と同じく快慶とであつて小工數十人を率ゐて之を造つたといふ。運慶は康慶の子、快慶は康慶の弟子で當時何れも大佛師として最も著名な作家であり、鎌倉彫刻の特色はこの二家によつて代表せられる程である。而してこの二家の合作たるこの仁王像こそ正に當代彫刻の特質を最もよく發揮した代表的の大作と云はねばならぬ。阿吽の兩像相呼應して見るからに力に満ちてをり、身體の均衡も四肢の作法も巧みなもので潑瀾たる動的表現と共にどつしりとした安定の趣にも缺くる所がない。この姿態に適は

しく刀法の峻烈なもので筋肉は隆々と盛り上り、天衣下裙は巖高く波打つて颯爽たる威容、おのづから人を壓する慨がある。而してこの刀法の峻烈さに拘らず、細部も忽せにせず筋肉にも天衣にも寫實味を存して居り、且つは活動の姿も力の表現も誇張に過ぐる程の事なく、よく渾身に氣魄が充實してゐる。これが木彫として三丈に近い高さがあるを思へば、當代に於ける寄木造の進歩と、斯かる巨像を破綻なく刻みこなす自在な運刀の冴えとに驚かされる。斯くの如き像が藤原の穩麗な造像の直後に殆ど忽然として現れたことは、鎌倉初頭に於ける彫刻界の元氣と活動のいかに素晴しかつたかを想像せしむるに十分であり、之を代表する運慶・快慶等の彫刻史上に於ける位置の重大なことも首肯されるであらう。

(二) 参考文献

この篇は出典の項で述べた如く「夢十夜」と題されたものの一つで、一夜の夢に假託してあるけれども、そこには作者自身の體驗からでなければ成立し難い制作の呼吸ともいふべきものが反映してゐるやうに思はれる。よつて今参考の爲に作者が制作の至境とした所を瞥見すべき一二の箇所を「草枕」の中から左に引用する。

この故に天然にあれ、人事にあれ、衆俗の群易して近づき難しとなす所に於て、藝術家は無数の琳琅を見、無上の寶璐を知る。俗に之を名づけて美化といふ。其實は美化でも何でもなし。燦爛たる彩光は、炳乎として昔から現象世界に實在して居る。只一瞬眼に在つて空花亂墜するが故に、俗累の羈絆牢として絶ち難きが故に、榮辱得喪のわれに過る事念々切なるが故に、ターナーが汽車を寫す迄は汽車の美を解せず、應舉が幽霊を描く迄は幽霊の美を知らずに打ち過ぎるのである。

惜しい事に雪舟、蕪村等の力めて描出した一種の氣韻は、あまりに單純で且あまりに變化に乏しい。筆力の點から云へば到底此等の大家に及ぶ譯はないが、今わが畫にしてみようと思ふ心持ちはもう少し複雑である。複雑である丈けにどうも一枚の中へは感じが収まりかゝる。頰杖をやめて、兩腕を机の上に組んで考へたが矢張り出て來ない。色、形、調子が出來て、自分の心が、あ、此處にあつた

と忽ち自己を認識する様にかゝなければならぬ。生き別れをした吾子を尋ね當てる爲、六十餘州を回國して、寝ても痛めても、忘れる間がなかつた或る日、十字街頭に不圖邂逅して、稻妻の遮るひまもなきうちに、あつ、此所に居た、と思ふ様にかかなければならぬ。それが六づかしい。此調子さへ出れば、人が見て、何と云つても構はない。晝でないと思はれても恨はない。苟も色の配合が此心持ちの一部を代表して、線の曲直が此氣合の幾分を表現して全體の配置が此風韻のどれ程かを傳へるならば、形にあらはれたものは牛であれ馬であれ、乃至は牛でも馬でも、何でもないものであれ、厭はない。

芥川龍之介の「侏儒の言葉」の中から「創作」と題する一章を擧げる。

藝術家は何時にも意識的に彼の作品を作るのかも知れない。しかし作品そのものを見れば、作品の美醜の一半は藝術家の意識を超越した神祕の世界に存してゐる。一半？ 或は大牛と云つても好い。

我々は妙に問ふに落ちず、語るに落ちるものである。我々の魂はおのづから作品に露るることを免れない。一刀一拜した古人の用意はこの無意識の境に對する畏怖を語つてゐないであらうか？

創作は常に冒険である。所詮は人力を盡くした後、天命に委かせるより仕方はない。

少時學^{シゲ}語^ゴ苦^ム難^ナ圓^{エン} 唯道工夫半^ハ未^ミ全^{ゼン}

到老始^{オシ}知^チ非^ヒ力^{リキ}取^キ 三分人事七分天

趙嘏北の「論詩」の七絶はこの間の消息を傳へたものであらう。藝術は妙に底の知れない凄みを帯びてゐるものである。我々も金を欲しがらなければ、又名聞を好まなければ、最後に殆ど病的な創作熱に苦しまなければ、この無氣味な藝術などと格闘する勇氣は起らなかつたかも知れない。

一九塔 影

河井 醉 茗

一 解 題

1 作者

河井醉茗 カハキスキメイ 詩人。名は又平。明治七年五月大阪府堺市の商家に生れた。明治二十年(十五歳)頃から當時漸く行はれて来た新體詩の書に親しみこの頃から新體詩・短歌・俳句の投書をした。同二十三年頃は寢食を忘れるまで讀書に耽り、文學への志望が熾烈であつたが、一家及び親戚の烈しい反對にあひその後の十年間を商人として送らねばならなかつた。その間「文庫」に詩を寄せて次第に認められ、同誌の詩の選を囑せられるに至り、同三十三年遂に堺の家を棄て家族と共に上京し、「文庫」の記者となつて漸く文學生活に入ることを得た。翌年處女詩集「無弦琴」出版。同年四月早稻田大學の前身、東京專門學校に入學。中途退學して同三十六年電報新聞社に入社した。同三十八年第二詩集「塔影」出版。同三十九年雜誌「女子文壇」を主宰した。同四十年六月詩壇の若い人々を中心に自ら詩草社を起し、雜誌「詩人」を發行した。同四十一年の後半期に於て、従來の抒情詩・象徵詩風の文語體から口語體に轉じた。同四十三年散文詩集「霧」出版。大正二年女子文壇社を去つて婦人の友社に入つた。同十年詩集「彌生集」出版。同十一年職を辭して相州平塚海岸に一家をあげて移つた。同十二年「醉茗詩集」出版。同年十一月誕生五十年祝賀會が東京會館に開かれ記念として北原白秋・三木露風・川路柳虹編纂の「現代日本詩選」が贈られた。現在は自由な文筆生活を営んでゐる。

2 出典

「現代日本詩集」中の「河井醉茗篇」から採録した。「現代日本詩集」は改造社「現代日本文學全集」第三十七卷に、「現代日本漢詩集」と共に收められてゐる。昭和四年發行。

3 主眼及び採擇の趣旨

我が明治時代に新しく起つた新體詩の詩風を窺ふべく掲げた。本課は我が國古藝術の精粹たる五層塔の永遠崇高の姿を溢るゝ感激を以て歌ひ上げたものである。塔のさまざまの角度からの姿も、それにこめられた感激も、その感激を具象化する典雅な表現も、すべて渾然とした一體の相に於て理解させたい。

文藝的教材であるが、塔を扱つた點に文化史的の意義も存する。前課を承けて現代文學を掲げた。散文と詩との對照である。

二 解 釋

1 語 釋

【墨繩たたく番匠が】 墨繩を正しくあてて少しの誤差もなく立派な建築をする名工が、の意。

【墨繩】 スミナハ 大工が直線を引くに用ひる器。墨壺の一方に輪があつて之に絲を捲き、その絲が墨壺をくぐり墨汁を含んで出るやうにし、絲の端に小さい錐をつけたもの。その錐を物に突きさし、絲を眞直に張つて上へ引きあげて手を放せば、物の面に墨色の直線が印しづけられるのである。

【番匠】 コダクミ 大工。普通「バンジャウ」といふ。もとは大和飛驒などの諸國から京都に上つて勤番した大工を言つたが、後にはたゞ大工を意味するやうになつた。古雅なやまと訓みにして「コダクミ」といふ。木を取扱ふ工人の意である。

【掌上につくられて】 タナソコのウへにつくられて 手によつて造られて。「掌上に」といふ表現は、名工の纖手よく雲表をそびえる大塔を作り得たものよといふ感歎の表現である。手練の手先によつて造られて、の意。

【朝狭霧の晴れゆけば】 アシタサギリのハれゆけば

【狭霧】 サギリ 霧に同じ。「狭」は美稱の接頭語で、語感の上で趣を添へてゐる。

【朝】で休止を入れないとこの一句の調子が生きて來ない。こゝで休止を入れることによつて、この「朝」といふ語の清爽感がはたらくと思ふ。

【寶珠を天に捧げ持ち】 ハウジユをソラにササげもち

【寶珠】 寶の珠。塔の絶頂に載せられた珠。九輪の上に水煙があり、水煙の上に龍車といふ珠があり、更にその上の絶頂に寶珠が載せられてゐるのである。

【天に】 ソラにと訓む。

【捧げ持ち】 塔を擬人して書いたのである。

【岸に聳ゆる五層塔】 キシにソビゆるゴソウタフ 作者の觀てゐる塔は湖に臨んで建てられてゐるのである。

【五層塔】 五重塔の別名。「層」は、かさなり、段、の意で「重」と同義であるが、音が清澄で、塔の高く聳ゆる姿を表す上に「重」よりもふさはしく感ぜられるから採られたのであらう。

大意

一分の狂ひもあらせじと、名匠が墨繩を引いては一所懸命に心を籠めた手練の手先に造り上げられた五層の高塔、夜の間立ちこめた狭霧が朝明けと共に晴れてゆく

と、巨人の如き此の塔が尖頭の水煙の寶珠を大空高く捧げ持つて、岸邊に高く高く聳え立つてゐる。

【藏めし經も蠶みて】 ヲサめしキヤウもムシバみて 塔の中にをさめられた經文も蠶魚に喰はれて。

塔は本來佛舍利を藏める爲に作られたものであるが、同じ佛の縁によつて、こゝでは經を藏めてあることにしてあるのである。

經文が紙魚に喰はれるといふことは、塔中にいつき込められた經文もむしばむまでの年次をへたことをいふ。

造立せられてより幾星霜を移り移つての心持である。そしてそれは言葉を換へると次の「供養忘れし末の世」といふことになる。今は昔の信仰も情熱もなくなつた、佛法末世の世の中であるとの心持にひゞく。

【經】 キヤウ (一)梵語 Sūtra の譯。佛陀の言を録したものの、三藏(經・律・論)の一。(二)支那の經書。詩經「書經」。こゝは(一)。

【供養忘れし末の世の】 クヤウワスれしスエのヨの こゝは簡單にいふと、佛教の教も人々の心を去つてしまつた末世、の意。

【供養】 死者の靈や佛などに財物を供へて回向すること。

【末の世】 釋迦入滅以後、二千年を過ぎると末法となる

と佛説にある。佛法の衰へた世。

【雲をさへぎる勾欄に】 クモをさへぎるコウランに 雲の行き來をさへぎり止めるばかりに高くそびえたつた塔の勾欄に、の意。裏に「末世の雲をさへぎる」心持がひゞき、佛心に累する妄執の雲を遮るといふ氣持が流れてゐる。

【勾欄】 折れ曲つた欄干。但し、勾欄は一の提喻であつて、塔全體の建築美を、この一つで代表させたのである。寫眞の勾欄を見せ、その屋根と屋根との中間の美しい建築美を考へさせるが良い。

【清き鉤の痕見れば】 キヨキカンナのアトミれば 名工の手腕を偲ばせるすが、しい鉤のあとを見ると。

鉤は代表的に使はれたので、鑿の跡、その他いろ／＼の技巧を含み大體「名工の腕の冴え」といふことである。一鉤一鑿をも忽にせぬ注意の行届いた手の跡。

【塵に氣韻も残るかな】 チリにニホヒもノコるかな 塵にさへ何となく名工の細工の氣品が感ぜられる、の意。

大意

大切な御經も紙魚に食はれ、御供養もすっかり忘れられてゐる末世ではあるが、其の末世汚濁の雲霧を遮るかのやうに高く聳える塔の、欄干に残つてゐる名匠入念の鉤

深底に礎をすゑて、の意。

【金輪際】 佛語。須彌山の最下底金輪に接する處、即ち大地の最深地底をいふ。「金輪際」といふ語は、今日は俗語に用ひられて、「金輪際罷成らぬ」といふ様に、どうしても、絶対に、といふ意味に用ひられてゐるが、元來は前に説いたやうに、佛教語である。

【夜は北斗をうかがへり】 ヨルはホクトをうかがへり 夜空に見ると、塔の尖端は星空高く、恰も北斗星をうかがつてゐるかの如く見える。

【北斗】 天の北極より約三十度の距離に輝く七個の星。北斗七星のこと。その列んだ形が柄杓に似てゐる所からこの名を得た。天文学で大熊星座と呼ばれる。

「北斗をうかがへり」といふ擬人法が遺憾なく效を奏して塔影を神秘的な高さに導いてゐると思ふ。

これは恐らく岑參の「塔勢如湧出、孤高聳天宮」等の句を思ひ浮べて書いたのであらう。

大意

天地の氣澄み冴ゆる秋は頂上に据ゑられた承露盤に清冷な甘露を承け、四方の扉は寂然と閉されたまゝである。佛法守護の荒神たる四天王達に四方を護られて、大地の深底に礎を据ゑた塔影は、夜は星空高く、恰も北斗星の祕密をうかがつてゐるかの如くである。

の跡を見ると、譬へ様もない氣高さが感ぜられ、塵埃一つにまで何ともいはれぬ風韻が感ぜられる。

【秋は露盤に露うけて】 アキはロバンにツユうけて

【露盤】 承露盤の略。塔の九輪の心柱を含み、屋根棟の四集する所の上にある銅製方形の盤を言ふ。ここに天よりの甘露を受けるものといはれてゐる。

【扉は神祕に閉されぬ】 トビラはシンビにトザされぬ 四方の扉は神祕を内に籠めておごそかに閉されてゐる、の意。

寂然と閉ざされたまゝ開かれることのない塔の扉に神祕的な感じを抱いたのである。扉の内部の神祕をもその中にこめて言つてゐる。

【四天の神に護られて】 シテンのカミにマモられて 四天王達に守護されて。

【四天の神】 四天王。須彌山の中腹に四方に城を構へ、上は三十三天の主なる帝釋天に仕へ、下は八部の鬼神を支配して、佛法及び佛法歸依の人を守護するといふ荒神。持國天王（東方）廣目天王（西方）增長天王（南方）多聞天王（北方）のこと。

塔は佛舍利を藏して意義功德の廣大なものであるから、四天王が守つてゐると歌つたのである。

【金輪際根を埋め】 コンリンザイにネをウヅめ 大地の

【家に住まざる山鳩の】 山に住んで、俗な人家などには住むものとも思はれぬ山鳩が。

【巢くふに所得たればか】 俗世を離れた此の高塔を我が恰好の棲み所と思つたのか。

【得たればか】 は最後の「歸るらん」にかゝつてゐる。

【巢くふ】 巢を構へる。棲む。

【所得たればか】 適當な場所を見つけたからか。

【虚空杳かに翔れども】 コクウハルかにカケれども 折々虚空遙かに飛翔して行くけれども。

【畫棟の朱の古びたる】 グワトウのアケのフルびたる 其の昔朱色に美しく彩色せられた塔が、今は何ともいへぬ寂びた色合に古びてゐる。

【棟】は「むね」をいふ語であるが、こゝでは彩色せられた塔の建物全部をさしてゐる。

【浮圖を慕うて歸らむ】 フトをシタうてカへらむ 心なき山鳩も飛び去つては再び歸つてくるが、これは此の塔を慕うてであらう。

山鳩に人間感情を投入した言ひ方である。

【浮圖】 梵語 Būdha の音譯。本來は佛のことであるが、轉じて、僧、寺、寺塔の意にも用ひられる。こゝは、寺塔の意。

大意

山に住んで、人家に住むを屑しとせぬ山鳩が、この高塔のみに我がよき棲みかを見出したのであらうか、大空遙かに飛翔し去るけれどもやがて又畫棟の紅の古びたこの塔を慕うて歸つて来るやうである。

【落暉は西に傾いて】 イリヒはニシにカタムいて

【落暉】 落日。「暉」は、音キ、ひかり。

【五重の屋根の歴然と】 五層の屋根がくつきりと。

【歴然】 アリアリと訓む。まぎ／＼と。はつきりと。鮮明に。分明に。くつきりと。

【重なりうつる草の上】 草原の上に重なりうつつてゐる。

【月は廂に浮かび出でて】 眼を轉じて東の空を見ると、塔の廂の彼方に月が薄く浮かび出で。

落日と新月とが時を同うして塔をはきんで空にかゝる春の夕べ、さながら繪の如き光景である。

【廂】 ヒサシ 五重塔のはり出した屋根を「ひさし」といつたのである。元來は家の軒に別に差出した小屋根をいふ語である。

【九輪の影は水に在り】 塔の尖端なる九輪の影は湖水の面に投影してゐる。

九輪の影が水に映つてゐるといふのは、湖面が穩かに風いでゐることを表し、春の夕べの静かさを漂はせてゐる。

【九輪】 クリン 塔の上には露盤があり、その上に覆鉢といふ半球形のものがある。其の覆鉢と最尖端の水煙との間に立ててある柱に九枚の、丁度錢を水平に並べたやうなものがある。これを九輪といふ。

大意

春の夕日は西に傾いて五重塔の塔影はくつきりと草原の上に重なりうつつてゐる。見ると新月が薄く塔の廂のなから浮かび出で、塔の頂きの九輪の影は靜かな湖の面に投ぜられてゐる。

【雲の崖より吹き落ちて】 空に浮かぶ雲の絶間の崖端から吹き落ちて、の意。

次の句の冒頭に現れる「風」が主格である。「雲の崖」といふ語は作者の一の思ひつきであらう。一句、風を趣向的に扱つてゐる。

【風、湖水を拭ひ去る】 風が湖面を洗ひぬぐふかのやうに吹き過ぎると、の意。

讀む時は風、で一寸休止をおかねばならぬ。風を擬人した言ひ方。「拭ひ去る」がやゝ利き過ぎて風の過ぎた後、小波が靜まつて湖面が鏡の如くなつた光景を思はせるが、次の句に「波の面」とある所を見れば、また小波が立つてゐるのであらう。

【波の面に刻まれし】 小波の立つてゐる湖面に影を浮か

べた、の意。

次の句の「藝術」にかゝる。塔影が小波たつ湖面にゆれ映つてゐるのを「刻まれし」と印象的に言つたのである。

【藝術の花に咲きちらふ】 藝術の花、即ちこの氣高く美しい塔影の上に流れた、の意。

次の「時」にかゝる。「藝術の花」とは塔影の美觀を花に譬へた言葉である。「花に」の「に」は「の上に」の意。「咲きちらふ」は「花」の縁で用ひられた言葉で、或は咲き又散るといふので時間の経過を美しく詩的に言つたものである。猶、「ちらふ」は「散る」の延言で、繼續の意味がある。

【藝術】 アートと訓む 英語 Art

【時の力の遠きかな】 時の悠遠なるかな、の意。

花の如き藝術が長く朽ちせぬを、時の力と感じた氣持であらう。

大意

大空より吹き落ちた風が湖面を洗ふやうに吹き過ぎると、小波立つ湖面には塔影が揺れ映る、その塔影の上に流れた時の流の悠遠さよ。

この一節は、今までの見方から角度を轉じて脚下の湖面に投ぜられた塔影を把へ、その上、小波に揺るゝ動的の

姿を描き出してゐる。鮮かな變化の妙と思ふ。

【その世に媚びし歌反古は】 その時世の好尚に迎合して、それに調子を合せた下らない追従和歌は、の意。

藝術的操持のない流俗歌人の作の無價値さを喝破して、眞の藝術を之と對照せしめようとする意圖に出た言葉。

【歌反古】 ウタホゴ 反古同然の無價値な歌。

【曆の嵐に破れたり】 歲月のたつうちに跡方もなく亡びてしまつた、の意。

「曆」は年月日を記すもの、即ち時の記録であるといふ所から、「時」の意味に用ひたのである。「破れたり」と言つたので、その破つた主體を譬喩的に「曆の嵐」といつたのである。

【生命の岸を下に見て】 次の「天に呼吸するあらゝぎ」といふ句と對句をなしてゐる。そして、意味は二重的に綾をなしてゐる。その第一は、「湖岸を遙かに下に見て、大空高くそびえる」といふ、塔の實景である。その第二は生死の世界に沈淪し、時の流に生滅するはかなきものの世界を、眼下に見下して、無限悠久の世界に永遠に生きるものである塔の意である。この二つが映畫の二重寫しのやうに重ねられてゐるのである。

譯は「はかなく一時的な生命しか持たないもの（歌反古

の如きもの)の世界をはるかに見下して岸上高くそびえ」の意。

【天に呼吸する塔の】 ソラにイキするアララギの 天空に 獨尊、孤高の雄姿を聳やかして、永劫の生命を呼吸して みる堂々たる塔の、の意。

「天に呼吸する」といふ擬人が迫眞の力を持つてゐるやうに思ふ。

【あららぎ】(一)いちろ。(二)塔。伊勢の齋宮で、佛語を忌んだ謂はゆる忌詞で、經を「染紙」といひ、僧を「髮

長」といつたのと同じ類。「たう」と言はじとての異名である。こゝは(一)。
【高き姿を水に見よ】 崇高な姿を、水の面に見よ、の意。
大意
その世に迎合した歌反古は歲月の經つうちに跡方もなく亡びてしまつた。それに比して、この塔ひとり、生命に沈淪する世界を直下に見下しつゝ、永却の生命に生きて大空高く聳え立つてゐる。この崇高な姿を、靜かに影を映せる水の面に見よ。

2 文の構成

第一節 名匠の手に造られた五層塔の雄姿を空高く描き出した。

第二節 經は蟲ばみ、供養は廢つて、塔の本義は忘れられながら、鑿の痕、鉤の跡、のみならず堆き塵にまで藝術味の残つてゐる事の悦びを歌つた。

第三節 秋の塔影。底つ岩根に礎を定め、頂は北斗に接しつゝ、四天の荒神に守護されて屹立する神々しい姿を描いた。

第四節 人家に住まぬ山鳩も、此の高塔を立去りかねて翔り去つては再びたち歸ることに寄せて、塔に對する永久なる讚美を暗示した。

第五節 入目を西に送り、新月を東に迎へつゝ、草原の上に、湖の面に投ぜられた塔影の靜かさを描く。

第六節 小波たてる湖の面に映りゆらぐ塔影に、遠く久しい時の流を感じた。

第七節 阿諛追従の詩歌の忘れ去らるゝ間に、千古の生命を大空高く呼吸する五層塔の水にうつれる姿を讚嘆した。

3 文意

五重塔に見出された藝術の永遠性。

4 鑑賞批評

「人生は短く、藝術は長し」と古人もいふ。藝術家が魂を籠めて造り上げた藝術作品は、その作家の死後も變らぬ光輝を見せて、永久に天地間に留まる。我が古代の造形藝術の中で、殊にこの感の深いものに五重塔がある。この佛教思想に胚胎して、均整と、統一と、高きを慕ふ憧憬の心との象徴された五重塔を、我が國獨特の典雅と均整とを併せ持つ輕快な七五調を以て歌ひ上げたのがこの詩である。塔は奈良あたりの一古刹の、湖水に臨んだ高塔、例へば猿澤池に影をうつす興福寺の五重塔などを思ひ寄せたのであらうか。

「墨繩ただす番匠が」と劈頭の句から既にその清新にして典雅な格調の中に引き入れられるを覚え、よみ進むに隨つて溢るゝ如き感激が、五重塔をさまざまな度角から印象的に浮彫して、その崇高永遠なる姿を眼前に屹立せしめるを覺える。統一的に見れば、主觀と客觀との共感に成る律動の波である。之を外より見れば、氣高く床しき五層塔の姿であり、内より見ればその姿に作者の情緒が波動をなしつゝ移入されゆく姿である。

作者が此の詩に七五調を用ひたのは一つの成功と見るべきであらう。作者は又、用語に於ても、この題材に相應はしい典雅な言葉を用ひてゐる。

三 備考

1 指導研究

(一) 詩歌の本質はその調べに流露してゐるのであるから、これが指導に當つては、心を澄まして靜かに反覆讀誦して、

朗々高誦し得るまでに至らしめ、その全體的把握に出發して、語句や格調の特色は勿論、その詩情の深さに及ばなくてはならない。

(二) 之が取扱ひに當つては先づ五重塔の宗教的意義と、その藝術作品としての様式、價值等に就いて、本文挿繪の法隆寺五重塔其の他を參考として豫備説話を行ふことが本文に入るに當つての心構を得る上に肝要であらう。

(三) 詩教材として、卷一の一七に於ける北原白秋、卷三の一四に於ける島崎藤村等の詩風に比してこの作者の特色を考へさせ、明治の詩壇に於ける位置をも知らしめたい。

2 參考

(一) 挿繪説明

法隆寺五重塔 法隆寺伽藍の重要な一要素をなす建物。推古天皇十五年開創。天智紀九年の火災記事によつて和銅以後の再建となす説もある。印度傳來の方式から出たもの。この塔も勿論佛舍利を藏める爲に建てられたものである。最近その中心柱が深く地中に礎を置いてその上に建てられてゐることが發見されたが、舍利はその礎の中に封藏されたものである。その全體の形が如何にも落ちついて安定の感が強い。其の調子は後世の塔とは全然違つたもので、斷然として一頭地を抜いてゐる。この安定感の生ずる原因は各層が上に至るに従つて遞次に縮小する程度が他の塔よりも強いのと、屋根の挺出の大なると、九輪が全高の二八・三%に達して比較的高い爲である。塔の内部は中心柱の四方に、佛傳中の四つの場面が塑像を以て造られてゐる。現今の塔は元祿年間の大修繕により、外部の大部分の材料は新しくなつた。

(二) 參考文獻

(イ) 九輪について世界美術全集第六卷から伊東忠太氏の説明を左に擧げる。

凡そ佛塔の頂きには必ず九輪が立つ、これは屋上に立てられた裝飾ではなく、地下の礎の上に立てられた中心柱の上部が屋上に露出し

て居るので、これに種々なる道具を取付けて約束の形式に造り上げるのである。九輪は椽又は刹と云ひ、又相輪と云つて塔の表幟でありその約束とは、最下部に露盤と稱する四角な臺を据ゑ、その上に覆鉢と呼ぶ半球體に近いものを載せ、その上に請花といふ蓮華の形を置き、その上に九つの輪を重ねて旛裝する。輪は一の輪から九の輪まで、漸次にその大きさを減少する。輪の上に水煙とて中心柱の四方に四枚の羽の如き透彫が附けられる。俗に鬮骨などといふ地方もある。水煙の上に龍車と云ふ球があり、更にその上の絶頂に寶珠といふ珠が載せられて終るのである。後世の九輪は屋根飾の如く軽く考へられ、意匠に力を籠めたのは無くなるが、これは實に莊重な考案に成つてゐる。

(ロ) 現代日本詩集中の明治大正詩史概観(北原白秋氏執筆)から醉若氏に關する部分を左に擧げる。

「文庫」派の一團 河井醉若は「文庫」詩壇の師兄として時には保姆役としてその一團の中心にあつた。「文庫」はその前身「少年文庫」(二十二年)その前身の「少年團」(二十年創刊)を過去の幼稚な星雲として進化し來つたものであつた。藤村出現以前のまだ深い臆氣と微光との中を運行しつゝ、單純な少年の感傷と詩魂とにいち早く一群の燭光を點したが、その燭光の連珠はそれはあまりに幽かであつた。「文庫」としての光芒が認識されたのは、改題新刊した二十八年の八月以來のことである。「文庫」は常に主として青年詩人の搖籃として、稍々保守的な平靜と永遠の詩の純愛とに頼つてゐた。かの新抒情詩統一の前期より、與謝野鐵幹の新詩社の「明星」全盛期、所謂星叢時代にもその後の象徴詩勃興期に交つても、「文庫」はやはり新進詩人の登龍門として光つてゐた。然し、稍々その傍流の位置に在つた。本流とも思へなかつた。

「文庫」派は一の詩の新運動を期して結ばれた詩派といふでもなかつた。たゞおのづからにして詩の選者たる醉若の周圍に集つた同好の少青年達の環狀星雲に外ならぬ。この「文庫」より出生した主なる新詩文人を列記すれば、醉若、横瀬夜雨、伊良子清白、小島鳥水、千葉江東(龜雄)、塚原伏龍(後の島本赤彦)、小松原春子(窪田うづぼ)、水野舟葉、等が出て、更にその末期三十六七年の頃には、澤村胡夷、北原白秋、長田秀雄等の新進が起つた。有本芳水、三木露風、萩原朔太郎等の名も詩歌の投書中に見えた。三十七年の交には三谷蘆華、中村星湖、安成二郎、川路柳虹の徒も參加した。この一派の殘餘は四十年二月「文庫」の改造に際し、獨立して新たに醉若と共に詩草社を興し、その雑誌「詩人」に據つた。

文庫調について、こゝで所謂「文庫調」の典型なるものについて解説しておく必要がある。由來文庫調なるものは誰が定めたのでもない。醉茗を中にしておのづからさうなつたのである。總じて七五の主調である。その調律は幾分固く整齊してゐて、節と節との連關が自然の流露といふよりは何かの思ひつきで轉換する技巧的傾向があり、漢詩の絶句のやうでもある。内容の香氣はや、俳趣を溶かした田園味が多く、時には感傷に稚く、謬れば古臭で常凡となる。近代の熱情と感覺とからは疎く、ハイカラではない。是れを強ひて泰西に求むればウォーヅウオスの田園詩風にでも通ふものかと思はれる。然し當時の泣董・有明の清新體に對し、悠々獨特の詩風を以て、世の質樸な青年の詩魂を生育し開發した點は業蹟の見るべきものがあつた。そのすぐれた正調は今日の日夏耿之介、西條八十等の意外のところまで遺響を好愛され、傳承されてゐる。

河井醉茗 さて、河井醉茗は二十四年の夏既に美妙の「青年唱歌集」に「花散る里の弱法師」「鐘の音」の詩二篇を採録されたといふ。その後「少年文學」の投書家たる機縁によつて後の「文庫」の詩の選者に呼ばれた。その處女詩集「無弦琴」の公刊は「若菜集」に遅ること僅かに四年、乃ち明治三十四年一月であつた。收むるに「ちねの海」以下詩三十三篇と外に小曲十五篇とを以てしてゐる。その詩風は溫藉にし、平明、虔讓にして自然、清閑にして又爽涼である。

世づかぬ吾の子なれども

さすが産毛を撫でし時

親といふにも憚りし（「こざくら」の第三聯）

失つた吾が子を傷むこの純性。このうぶな純情。その人その詩であらう。彼は大正末版行の「醉茗詩集」に序して「自然は私の視る神であつた。自然が有つてゐる奇蹟と、驚異と、神祕とを凡て無條件に享受しようとした。山岳の如き嚴肅、平和の如き柔和、大海の如き流動、それを互細に體驗して我が情感に感らうと思つた。」と言つてゐる。然しながら此の詩人には眞に自然の神に參入するほどの精緻な直覺的觀照、一念の凝視、主觀の白熱、それらに徹し盡くさぬ何かの弛緩があるのではないか。この點より見れば、清白の冷嚴、夜雨の人間意力と熱泣とが正しく是れに近い。唯、「私は單純に自己の體驗を自然化しよう」とさへ試みた。」といふ言葉はその爲人に最もふさはしい朝の呼吸であるやうに感じられる。淡々として常に若く、昂らず矜らず、自由に時世と移つてゆく聰明と無停滯とが人をして適かしめ

ない所以であらう。

墨繩たゞす番匠が

掌の上につくられて

朝狭霧の晴れゆけば

寶珠を天に捧げ持ち

岸に聳ゆる五層塔（「塔影」の初聯）

この日本的閑靜とよき均整とは恐らく醉茗の典型を成すものであらう。その第二集「塔影」(三十八年刊)には、その他「落葉を焚く歌」「行く春の海邊に立ちて」「靈芝」等の佳什がある。その後の詩集としては、「影」(三十八年)、「玉蟲」(三十九年)、「霧」(四十三年)がある。以來口語詩の物興につれてその詩風が一變した。その詩「雪炎」は彼としては劃時的の作品である。

110 一心

島木 赤彦

一 解 題

1 作 者

島木赤彦 シマキアカヒコ 歌人。本名は久保田俊彦。前姓は塚原。伏龍・山百合・柿の村人・柿蔭山房主人等と號した。明治九年十二月長野縣諏訪郡上諏訪町に生まれ、後、久保田家を嗣いだ。三十一年長野縣尋常師範學校を卒業し、大正三年(三十九歳)まで十六年間初等教育に従った。その間に新體詩を雑誌「文庫」に發表し、次いで正岡子規の提唱した根岸短歌會の歌風を慕ひ、後専ら伊藤左千夫に師事した。その作品は概ね「馬酔木」「アカネ」「アララギ」等の諸雑誌に發表されたが、なほ信濃の友人と相計つて雑誌「比牟呂」を發刊したこともあつた。大正三年諏訪郡視學を辭して上京してからは、専ら萬葉風の和歌の創作と研究とに没頭し、傍ら淑徳女學校に國語を教へた。「アララギ」の編輯をなし、多くの門人を養成して長くアララギ派の重鎮となつた。十五年三月、胃癌の爲、長野縣諏訪郡下諏訪町高木の自邸に歿した。享年五十一。

著書には歌集に「山上湖上」(太田水穂)「馬鈴薯の花」(中村憲吉)「切火」(氷魚)「太虚集」(自選十年)「柿蔭集」等があり、評論に「歌道小見」「萬葉集の鑑賞及び其批評前篇」があり、童謡集に「赤彦童謡集」「第二赤彦童謡集」「第三赤彦童謡集」等がある。總べて赤彦全集全八卷(岩波書店出版)に收められてゐる。

2 出 典

赤彦全集第七卷の「文藝と教育に關する論文及感想」中の「一心の道」と題する文の大部分を採録した。この文は大正五年「信濃教育」六月號に發表されたものであるが、もと同年五月十三日萬葉集研究會にての談話である。備考参照。赤彦全集 全八卷 昭和五年 岩波書店發行

3 主眼及び採擇の趣旨

人間の「一心」の威力が如何に大なるものであるかを深く省察せしめ、この「一心」境を生徒の生活の中に開かした

本課は生活態度の指導に資すべき人間的教材である。

一八・一九とつゞいた文藝的教材の後を承けて意志的な教材を据ゑた。七、第三の眼あたりと呼應するであらう。

二 解 釋

1 語 釋

【一心】 イツシン (一)多くのもの一致した心。(二)一方にのみ向けた心。傍目もふらず或目標に向かつて全心を集中すること。専心。一心不乱。(三)自己の心。こゝは(一)。

【人の世の中で真正に強いものは「一心」限りないと思ふ】 作歌道に、全心の集中と直接の表現とを説いた作者の信念が卒直端的に吐露されてゐる。
【限り】 キリ だけしか、と譯したら當る。のみ。だけ。たゞそれのみと限定する助詞である。

【「一心」になつたら、弱いものも強くなる】

この最も著しい例は我が子を庇ふ母性の姿であらう。これは人間界だけに止らず、自然界に於ても屢々見受けられる現象である。雛保育中を蛇に襲はれた雉子や百舌の悲壯な死闘等がそれである。
又少し俗になるが、不意の出火などの際、平常ならば到底扱ひ得ない重い家具等を夢中に運び出したといふことなども吾々の耳にする所である。

【切れないものも切れて来る。摧かれないものも摧かれてしまふ】 一心をこめてかかると普通では切れないやうな

堅いものも奇蹟的に眞二つになり、普通では推し得ない堅固なものも奇蹟的に粉碎されてしまふ。

「思ふ念力巖をも徹す」の境地である。漢の李廣が巖に矢を徹した話や、菊池寛の「青洞門」に於ける了海の働き等が思ひ合はされる。

【不可抗力】 フカカウリヨク 如何とも抵抗し難い力。

こゝは、普通の「不可抗力」とやゝ用法を異にし、一心をこらす所に生ずる天來不可思議の力を指していふ。この力に對しては何物も抗し難いのである。

【我々が若し他人から力の感受を望めば、他人の「一心」に接觸するより外はない】

他人から力の感受を望むのは、その力によつて我自らの内なる力を鼓舞し、以て生活態度の積極化を希求する爲である。

他人の「一心」に接觸する具體的な方法は、直接その人の態度なり行動なりを諦視するか、或は其の人の著書に就いて見ることであらう。

【他人から力の感受を望む】 他人から強い力を感得受容することを望む。

【若し「一心」になれぬ場合は、縦ひその心がどんな状態にあつても、力には成り得ないやうである】

これも作者の體驗から生まれた言葉である所に底力が

感ぜられる。

【母が來ることに合致する條件ならば、どんな條件でも肯定される】

例へば「泣かないでおとなしく待つてゐたら、今に母ちゃんは歸つて來るよ」と言へば、今までは泣いてゐた子供は嗚咽しながら一所懸命に泣き止まうと努力するであらう。

「泣かないでおとなしく待つ」といふことは、母が來ることに合致する條件として子供に受け容れられるからである。

【合致する】 ガツチする 一致する。

【條件】 デウケン (一)くんだり。かど。箇條。(二)物事を制約し規定する事項。きめられた事柄。(三)法律行爲の效力の、よりに發生し、又は消滅する不確定なる將來の事實。こゝは(二)。

【肯定される】 カウテイされる こゝでは、承知される、受け容れられる、の意。「れる」は受身の助動詞。

【母が來ることに合致せない條件ならば、どんな條件でも一切が遠慮なく否定される】

例へば、「母ちゃんは御用がたくさんあるから待つてゐても駄目だよ。玩具を買つてあげるから歸らう。」といつて賺しても子供は頑として應じない。「御用がたくさん

ある」といふことも「玩具を買つてあげる」といふことも、母の來ることに合致せぬ條件だからである。

【否定】 ヒテイ 然らずとなすこと。非とすること。承知しないこと。肯定の對。

【肯定と否定には善惡の條理はない】 その場合に子供が「肯定し他は否定するのは、善惡の條理に従つてなすのではない。たゞ母を待つことのみが絶対であり、すべてであつて他を顧みいとまがないのである。

【泣く子と地頭には勝てぬ】 俚諺。どうしてもかなはぬこととの譬へ。

【地頭】 チトウ 土地の頭人の意。(一)莊園の領主が、土地管理者として設けた私官。(二)鎌倉時代に、莊園を管掌した職名。租税を徴收して之を本所・領家・國衙に納め、非違の檢察・盜賊の逮捕・京都及び鎌倉の警衛を掌り、守護の命により軍役を勤めた。源賴朝が文治元年勅裁を経て全國に設置して公官となつた。かくして地頭は地方民に絶対的の權力を以て臨んだので、人民畏怖の的となり、かういふ諺を生むに至つたのである。

【我々の問題はここから出發し得ると思ふ】 我々大人の生活態度上の問題は、この、子供の一心が何物をも打負かすといふところから發足すると思ふ、の意。

子供のひたぶるな生活態度を見、之に反省せられて大

人の生活態度も、こゝにその出發點があると感じたのである。

【子供が發達して、大人になればなるほど、「一心」になるのが面倒になるやうである。智慧が複雑になり、經驗が複雑になり、境遇が複雑になるからである。】

【智慧】「經驗」「境遇」等は、心の態度を決定する諸要素である。ところがこれらの要素は人間が大人になるに従つて次第に複雑多岐となり、心がある一つの態度を決定しようとする場合、それらのお互の間、又は、お互自身の内部に於て是非利害に對する。意見の齟齬を來して全體としての統一が困難となる。この困難を克服することは容易でないであつて、作者のいふ「一心になるのが面倒になる」所以である。

中學三年生といへば丁度子供から大人への過渡期に當る。各自、子供の時と現在に於ける「一心になり」やうを比較反省せしめたい。

【發達】 ハツタツ こゝは、心身の成長發達、をいふ。

【面倒】 メンダウ 爲すに煩しいこと。行ふに厭はしいこと。

【智慧】 物事を分別して知曉する心の作用。物事を計畫し處理する心の作用。

【複雑】 フタザツ かさなりまじること。いりくむこと。

【經驗】 ケイケン (一)實際にためしこゝろみたこと。こゝろみ。ためし。(二)こゝろみ又は、ためしによつて得た知識又は技術。(三)感官を通じて得た知覺。又、知覺によつて結合せられた知識。こゝろは(二)。

【境遇】 キヤウグウ 身に到來した運命又は附随した事情。まはりあはせ。しあはせ。貧賤・富貴、幸福・不幸、順境・逆境等がある。

【一生「一心」になる經驗を持たずして果てる大人も少くない】

前述の如く、複雑多岐に陥つた大人の生活に於ては全心的な統一が容易ならぬまゝに、その場その場と妥協してゆくうちに遂に一生が終つてしまふといふ人も少くないといふのである。

【その代り、一旦大人が「一心」になつたら 其の力は大きい力である。複雑を綜合し統一した力であるから「泣く子」の力とは根柢が違ふ。鍛錬された力である。沓え入つた力である。所謂意志の威力である】

大人が如何なる場合に一心になるかは後廻しにして、もし一旦大人が一心になれば、そこには強大な精神力が生起する、否、生起するから一心になれるといふ方が順當かも知れない。何故その力が強大かといふと、複雑多岐な精神的諸傾向を統一して、目ざす一方向に向つて

集中させるといふ、容易ならぬ困難を乗切る程の力だからである。そしてその力が 複雑な精神的諸傾向の上に立つてゐるといふことは、それだけ広い地盤の上に立つてゐることになるのである。

「複雑を克服統一する」といふ努力は、之を傍看すれば、その主體が天に「鍛錬」されてゐることである。従つて複雑を克服統一し切つた力は、鍛錬し極められた力である。「沓え入つた力」といはれる所以である。これがいはいゆる鋼鐵の如き意志の威力である。

大人が一心になるのは、その人に或る精神的目標が見出されて、それに向つての意欲がその人の全生活を支配する時である。作者はこの文の終(本課では割愛した。参考欄参照)に於て「男の集中の目當ては事業の上にある。女の集中の目當ては戀の上にある。」と述べてゐる。

猶、作者自身に就いていへば、これは作者が歌道への没入から悟得した信念であつて、天地人生の悠遠寂寥相に參入することが作者の歌道上の理想であり目標であつた。

【子供の「一心」に條理がなくても力になり得るやうに、大人の「一心」も威力たり得るに於て、善惡正邪の條理を絶してゐる所がある】
子供に於けると等しく大人の「一心」も正邪善惡のす

ちみちを超越して、即ち正邪の區別なく、威力を發揮し得る、の意。

【一生の内に一度位は「一心」になつて何かに傾倒して見てこい】

窮屈な教訓的口吻がなく、大きく胸襟を開いた態度が感ぜられて快い。

【傾倒】 ケイタウ (一)かたむきたふれること。又、かたむけたふすこと。(二)さかさにして内にあるものを盡く出すこと。(三)心をよせしたふこと。全心をあげて敬慕すること。こゝろは(三)。

【それが若し一生を通じて傾倒し得たら、凡下の力も多少の威力になり得ないとは限らぬ】

「凡下」といひ、「多少の」といひ、作者自身を背景としての信念と自信とがひゞいてゐる。島木赤彦氏の一生を暗示する意味深い言葉と思ふ。

【凡下】 ボンゲ 下凡。よのつねの人間。なみ普通の者。天才に對していふ。

【天才ならばそんな事を求めずして自ら到り得るかも知れぬ】 天才ならば、一心不亂の境地を努力して求めないでも、自然に到り得るかもしれぬ。

凡人の道を説き出す爲の前置きといふ位の意味で述べられた假説であらう。

【天才】 テンサイ 天賦の秀れた才能。又、その人。

【諸君も天才かも知らぬが、其の邊は割引して天才でないと思ひじてゐる方が間違が少い】

自ら「鈍間」を以て任じた赤彦氏の面目を發揮した言葉である。微笑ましいユーモアが感ぜられる。

【凡下の輩「一心」になり得る工夫如何と云々】

凡下の輩の下に主格を表す助詞「が」略されてゐる。

【材料】 サイレウ こゝでは、吾々の心が一心になる爲の事物、即ち、対象をいふ。

こゝで、中學生等の諸々の學科をその材料にあてはめて考へさせ度と思ふ。

【さうして自分の「一心」境に參じ得る機縁と何等かの關係を考へる事が必要である】

それらの對象に、何らか自分が一心境に參入し得べき機縁が見出されはせぬかといふことを考へてみる必要である、の意。

【「一心」境】 イツシンキヤウ 一心といふ境地。「境地」は、心の位置状態。

【參じ得る】 サンジウる 「參ず」は、參入する、進み入る、の意。

【機縁】 キエン (一)佛語。衆生の根柢に佛陀の教を受くべき因縁あること。(二)因縁。ちなみ。きつかけ。

【(三)】をり。しほ。こゝは(一)。
【第一に、「一心」になる場合は心の働く範囲が狭くなる。従つて興味の局面が縮小される】

「一心」になる場合は、吾々の心が或一つの目標に向つて集中される結果、今まで淺く多方面に働いてゐた心の活動範囲が局限され、從來多方面に向けられてゐた興味が止揚されて一焦點に集るやうになることをいふ。「第一に」とは、こゝでは「第二に」「第三に」に對するものではなく、論旨を明確にする爲に副詞的に据ゑられたものである。

【局面】(一)碁盤又は將碁盤の上。又、其の相互の勝敗の變化。ばんめん。(二)物事のなりゆきの状態。場面。

【人間の持つ興味の種類は無限に多数である】

生徒自身に彼等の生活の中から指摘せしめられたい。

【人間自然の本能に根ざす】人間が持つて生れた本能に基づき、の意。

【本能】ホンノウ 生後の経験又は教育によらずして自然に要求し、自然に行動する先天的性能。一般に、自己保存の本能・種族保存の本能・團體本能・適應本能等に分類される。

【根ざす】(一)根が土中に延び入る。根がつく。(二)原因する。もとづく。(三)さす。こゝは(一)

械的仕事に變形させた能力。熱・風・水・電氣等は動力の根源で、多くは馬力を單位として之を測る。

【今人】コンジン 今の人間。この頃の人。

【今人よく自由を説く。自由とは何ういふ意であるか知らないが、人間自然の要求を要求のまゝに悉く満足せしめんとするを自由とするならば、私は自由に對して不自由を要求する。自然に對して不自然を要求する】

不動の信念に立つ作者の毅然たる言擧げである。世人多くの説く「自由」の意味は、正に作者の解釋の通りであらう。自由を以て、本能の解放なりとする誤つた自由觀は、明治時代歐洲文化の輸入以來久しく我が國の思想界に氾濫し來つたものである。

【釋迦】シャカ 佛教の教祖。釋迦牟尼又は釋迦文ともいふ。釋迦(梵 Sakya)とは元來種族の名であるが、この名を以てその種族から出た佛教々祖の名としたのである。西紀前五世紀の中葉、中印度の北端に國を占めてゐた釋迦族の一國たる迦毘羅衛城主の淨飯王の太子として生まれた。時は四月八日、藍毘尼園無憂樹の下で、母摩耶夫人が分娩の期近づいて實家なる拘利城へ赴く途上の出來事であつた。傳説によると、生誕と共に「天上天下唯我獨尊」と獅子吼したといふ。名を喬答摩又は悉達多と稱し、天性聰明、廣く諸般の教育を受けて之に熟達し

【蒸氣機關の湯氣は四方八方に擴散するを以て自然の要求とする。自然の要求であるからと言つて、あの蒸氣を自由に四方八方に擴散させてしまつたら、機關を動かす力には成り得ないのである。四方八方へ擴散せんとする湯氣の要求を抑へて、之を一箇所の狭い口に集注して、茲に始めて機關を動かす動力を生じ得るのである】

譬喩が比類なく適切で、論旨を明快に表し得て餘す所がない。

【蒸氣機關】ジャウキクワン 蒸氣の熱エネルギーを機械的動力となす装置の機械。氣筒内に蒸氣を送りその壓力によつてピストンに往復運動を起し、ピストンの他端をクランクに結合して往復運動を回轉運動に變更する装置のもの。原動力機として用途が廣い。

【擴散する】クワクサンする ひろげ散らされる。

【擴散す】の未然形「擴散せ」に受身助動詞「らる」の連體形「らるる」が接續したのであるが動詞の語尾「せ」と助動詞の語幹「ら」とが反切作用によつて一音節化して「さ」となつたのである。猶、「らるる」といふのは、文語の形であつて、標準口語としては「られる」である。これは作者の郷里信州の方言と見るべきであらう。

【動力】ドウリョク 機械を動かす力。天然に存在するエネルギーを工業用とする目的で、原動機によつて、機

た。十九歳の時拘利城主善覺王の女耶輸陀羅を迎へて妃とし、一子羅睺羅を儲けた。幼い頃から、沈思に耽り、憂鬱・厭世の傾向があり、農夫の田に耕すのを見ては生活苦を思ひ、老人や、死者や、病者を見て人生の煩悶愈々深く、父王が深く之を憂へて、或は美女或は音樂等によつてその傾向を轉換せしめようと百方手を盡したのも空しく、二十九歳(一説十九歳)の年、一夜決然として王城を脱し、出家入山して修道の途に上つた。この山が檀特山であるといはれる。かくて太子は南方毘舍離、摩訶陀の諸國を遍歴し、幾多の修業者、學者について道を求めたが、未だ生死の迷を絶滅する究竟の解脱に達し得ず、遂に自ら刻苦思索して之を發見しようと尼連禪河の邊なる苦行林に六年の修業をした。けれども身體が衰瘦するのみで解脱を得なかつた。こゝに於て徒らに身神を衰耗せしめることの非を悟り、河水に浴して身を清洗し、村の長の女須闍陀の供養した乳糜を受けて氣力を恢復し、佛陀伽耶の菩提樹下に端座して、「正覺成らずんばこの座を起たじ」と誓つて解脱の法を觀じた。是に於て、幾多の惡魔に打勝ち、遂に三十五歳の二月八日曉天に及んで廓然大悟して正覺を得、再び苦界に沈むことなき難苦解脱の境に入つた。これを成道正覺といひ、一求道の沙門はこゝに佛陀即ち覺者となつたのである。是より

佛陀は自分の悟達した大法を宣傳して廣く衆生を救濟せんとして、傳道の旅に出で、先づ初めに婆羅奈斯城の鹿野苑に赴いて、かつて苦行を共にした阿若憍陳如等の五人を教化し、彼らは前後して佛弟子となつた。こゝに於て佛と法と僧とが具足して三寶の佛教々團が組織された。成道後三年に郷里迦毘羅城に歸つて父淨飯王、妃初め一族の人々を度し、摩揭陀・憍薩羅の二國を中心として恒河沿岸の中印度諸國を遊化し、諸人の來つて弟子となる者甚だ多く、或は國王・長者の歸依を受け、竹林精舎・祇園精舎の如き幾多の道場を獻ぜられ、教團の發展を惡む輩のさまざまの迫害中傷に耐へて、教を説くこと四十五年、その教化は恒河の南北に及んだ。最後に衆僧を率ゐて雪山方面に赴き、拘尸那揭羅に到つた時俄に疲勞を覺え、城外、跋提河畔の沙羅林に入り、樹下に臥して、諸弟子に對して、我が滅後も嘗て定め説いた戒・法を大師とし、放逸を戒しめ、勤行精進して生死を超脱せよと靜かに臨終の遺誡を與へ、その夜半、寂然として涅槃に入つた。時に二月十五日、壽八十であつた。遺骸は拘尸那揭羅の末羅族により、無上の尊崇と嚴肅な葬法によつて荼毘に附し、後、佛骨を諸國に分奉し、各々佛塔を建立して崇拜した。

成道より入滅に至る約五十年の傳道は世界的宗教の先

驅をなしたもので、其の説法は滅後に結集せられて三藏或は大藏經の源泉となり、其の教義は、錫崙、緬甸、暹羅等に傳はつて南方佛教となり、西域、支那、日本等に傳はつて北方佛教となつた。

【檀特山】 ダントクセン 北印度ガンダラ國にある山名。

【釋迦】 の項参照。

【妻子】 サイン 釋迦の妃耶輸陀羅とその子羅睺羅を指す

【釋迦】 の項参照。

【王位王冠】 王位の意。同義の語を重ね印象を強める反覆法である。

猶釋迦が「王位王冠を捨てた」とあるのは、釋迦は太子であつて王位王冠を繼承すべき地位にあつたので簡單にかう言つてしまつたのである。

【菩提樹】 ボダイジュ 釋迦がその下で正覺を得た佛陀伽耶の菩提樹をいふ。

【菩提】 無上の正道、の意。

【安居】 アンゴ 僧侶の夏時に遊行を休み、家に籠り居て靜かに修業すること。

【口腹の慾】 食慾。人間本能中最も強力な自己保存本能。釋迦は一心境に澄み入る爲に、王位を捨て、妻子を捨て、遂には自分自身をも捨て去つた。そして捨身の極まるころに、新しい世界と、人類とを得たのである。

【大力者】 ダイリキシヤ この「力」は腕力や單なる腦力でなく、深遠な精神力であることを生徒に發見せしめた

い。釋迦の教は普く人類の上に及び、長く人間の迷ひ・苦しみを救うてゐるのであるから、大力者といはれる所以である。

【お釋迦様】 オシヤカサマ 大衆的にくだいて親み呼ぶ稱

【古來哲人多く山に入つたのは、煩惱の苦界を絶つて一心專念の境地を求めたからである】

我が國でいへば空海や最澄の如きはその最も著しい例であらう。

【哲人】 テツジン 知慧明らかに深く宇宙の眞理に通じた人。

【煩惱の苦界】 ボンノウのクガイ さまざまの慾望に迷はされる苦患の世界。

【煩惱】 無明貪愛のまどひ。情慾願望のまよひ。心神をわづらはしなやましめる一切の妄念。

【苦界】 苦患ある世界、即ち、六道生死の世界。

【絶つ】 タツ 超越する。ぬけ出す。遠く離れる。

【境地】 キヤウチ こゝでは、場所、の意。

【故らに無言をせざれども一人をれば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなければ、境界をければ何により

てか破らん】

わざ／＼意を用ひて無言の行をするのではないけれども、一人で住んで居るから、多辯の機會なく、おのづから口舌の罪を犯さないやうにすることが出来る。必ず佛の禁戒を守らうといふのもないが、犯し破るべき境界がないから破りやうがないのである、の意。

これは鴨長明の「方丈記」の終に近い一節である。人寰をかけ離れた山居が、おのづから求法の道にかなふことが語られてゐる。

【無言】 ムゴン こゝは、無言の行、の意。言語を發しない戒行。

【口業】 クゴフ 口舌によつてつくりなす業、即ち、妄語・綺語の類。こゝでは、口舌によつて作りなす罪、といふ意に解してよいであらう。

【業】 梵語 (一)我々の身・口・意によつて成す善惡の所行、未來の果を感すべき因となるもの。(二)前世に於ける善惡の所行により、現世に於て受くる應報。

【修めつべし】 口業の罪を犯さないやうに身を正しくすることが出来る、の意。

【修む】 ヲサむ (一)よくなるやうにする。つくらふ。(二)學び習ふ。研究する。(三)正しくする。ととのへる。

【つ】 こゝは完了の意なく、單に強勢に用ひられてゐる。

「べし」(一)推量。(二)可能。(三)命令。(四)適當。
 (五)斷定。(六)義務。(七)當然。(八)許容。等の意を表す。こゝは(二)で、出来る、の意。
 【禁戒】 キンカイ 佛教で、禁じ戒められたこと。十戒の意。十戒とは、殺生・偷盜・邪淫・妄語・飲酒の五戒に、食肉・邪見・毀・謗・欺訛の五惡、又は、說過罪・自讚毀他・瞋・慳・謗三寶の五惡の禁戒を加へた稱。
 【境界】 キャウガイ (一)因果の理によつて各自が受ける境遇又は地位。(二)境遇。分限。(三)範圍内。こゝは(三)で精神上、又、空間上の限られた範圍の意。
 【何によりてか破らん】 「か」は反語である。何で破らうか、何にも破り得やうがない、の意。
 【それらの徒は涙を流して申して居るのを、物好きなどと思つては罰が當る】

それらの人々は、眞剣に言つてゐるのに、その山居を物好きでやつてゐるなどと考へてはとんでもない罰當りである、の意。
 【それらの徒】 「一心」の境を求めて山に入った人々。こゝでは鴨長明等を指す。
 【徒】ト(一)ともがら。なかま。(二)徒行。かち。(三)兵卒。足輕。(四)しもべ。(五)囚人。めしうど。(六)微役。こゝは(一)。
 【物好き】 モノズキ 特殊の物事を好むこと。又、その人。ものごのみ。
 【罰】 バチ (一)神佛が、人の惡行に罪を與へてこらすこと。(二)惡事のむくい。たたり。こゝは(一)之を「バツ」と訓めば、罪、又はあやまちある者に科するこらしめ。しおき。の意で、單に人間界の事となる。

2 文の構成

第一節 初—一四四頁終 世の中で眞正に強いものは「一心」あるのみである。
 第二節 一四五頁一行—九行 世の中で容易に「一心」になり得るのは、子供である。子供の「一心」は條理を超越してゐるが、その前には何人も征服されてしまふ。問題はここから出發する。
 第三節 一四五頁一〇行—一四七頁二行 大人は複雑な世界に住んでゐるから容易に「一心」になり得ないが、一旦「一心」になつたらその力は恐るべきものである。

第四節 一四七頁三行—一四八頁一行 人間は一生に一度位、「一心」になつて何かに傾倒してみたい。それには「一心」になり得る工夫を考へ色々の對象を研究してゐることを提唱したい。
 第五節 一四八頁二行—終 「一心」になるには多方面へ分散する興味を抑制統一して目ざす一點に集中せしめるにある。先哲の例。

3 文意

大事業を成すには「一心」の力による以外に道がないことを論じ「一心」道を提唱した文。

4 鑑賞批評

論旨が實踐的で、讀む者に力強くはたらきかけてくるのを感じる。更めて吾々の生活が反省せられると共に、その生活態度を建直すべき道が眼前に啓示された思ひがする。それはこの文が、作者の一生をかけた作歌上の體驗を踏まへてゐるからであらうと思ふ。引用された實例が共に適切で論旨を闡明して餘す所がない。

文章は質實で、重々しく、句々の末まで作者の信念が行きわたつて居て、寸毫も浮華の跡がない。そこに、眞實に生き眞實に徹した作者の姿が見える。

三 備 考

1 指導研究

(一) 本課は生活態度の指導に觸れた文章である。従つて單に文意を傳へるに止まらず、生徒の内面生活に實踐的な意欲を發動せしめるまで指導を押し進めねばならぬであらう。それには生徒に「一心」を傾注すべき目標を見出させるやうに誘導してやるのが第一である。中學三年位ではまだこの目標を明確に見出すといふことは困難かも知れないが、さうい

ふ場合は、たゞ單に學業成績を上げるといふ目標を掲げてやつてもよい。

(二)「一心」の威力を發揮した實例を更に補足してやることも有効であらう。

2 参考

(一)「一心の道」中から本課に割愛された部分を掲げる。

(一四七頁二行に續いて) 安珍清姫日高川といふ事がある。清姫が一心になつたら蛇體になつた。蛇體などは人が嫌ふものである。そんなものに成らぬ方が我々には都合がよい。都合がよくても悪くても、蛇體になつたから仕方がない。さうして夫れが我々の心に響く。響くから何年たつても傳説として、口から口へ傳へられるのである。八百屋お七は火放けをした。吉三に逢ひたい一心から火を放けたのである。役人が何うかしてお七を助けようと思つて訊いて見た。お前は火を放けるつもりでは無かつたのであらう。過つて火を失したのであらう。いゝえさうではござりませぬ。吉三さんに逢へると思つて火を放けました。役人もこれでは助ける譯に行かない。焙刑を宣告して江戸の町を馬に乗せて引き歩く。衆人環視の中を馬上に曳かれつゝお七には其の衆人が眼に入らない。吉三を思つてゐるからである。お七の足の下から火が燃えはじめ。火が燃えてもお七は吉三の事を思つてゐる。一心の力は五體を燒き盡しても、吉三を思ひ詰めてゐる事が出来る。火放けは重罪である。誰もお七の火放けを結構であると思ふ人はない。思ふ人はないが、大正の今日も猶お七のお墓へ線香を立てて拜む人が多い。火放けを拜むのではない。女の一心をいぢらるのである。子規先生は、お七のこの時の心を考へれば、いぢらしくて／＼堪らないと云はれてゐる。織田勢が武田勢を打ち破つて甲斐の惠林寺に押し寄せた。惠林寺の坊さんが織田勢の云ふ事を聴かないで、自ら寺に火をかけた。猛火の中に端座しながら、心頭滅却火亦涼、と偈し去つて死んだのは有名な話である。これだけ一心になられたら織田勢も手の付け様がない。心頭滅却火亦涼は死にがけの未練である。泣言である。神様や佛様なら斯んな泣言を言はずに大人しく黙つて死ぬに違ひない。坊さんは神様でもない、佛様でもない。人間の弱さに斯んな泣言を言つたのが、我々には却つて人間らしく哀れに響くやうである。餘り神様すぎると、我々凡下には想像が附かなくなつて一寸都合の悪い事がある。斯様な意味に於て惠林寺の坊さんの一偈は、我々修業者の参考になる。私は今諸君と萬葉集の研究をやつてゐる。萬葉集の歌が何故一千年來渾べての歌集に絶して大きな力を我々に感得させるかと云へば、矢張りこの「一心」に外ならない。萬葉集の作者は、ど

んな事柄に對しても苟も歌ふとなれば、何處迄も眞面目に正面から其の事柄に對き向つてゐる。さうして一心をそれに集中してゐる。其處から力が生れて来るのである。随分露骨な事も歌はれてゐるが、夫れが何處までも眞面目であつて巫山戯て居らない。巫山戯て居らないからどんな場合でも、決して厭味、低卑、弛緩、倦怠を感じしめない。古今集以後のものになると大抵の場合にそこが違ふ。我々は大人である。以下本文に接續。

(本課の終りに續いて) 然らば、夫れ程迄にして一心を集中するとして、その一心を何に向つて集中したらばよいか、といふ問題になる。是は非常に重大な問題である。集中の目當てによつて、自身乃至社會に大きな影響を興へることになるからである。さうして此の問題は、勿論個人々々によつて異なる所であつて、一概に論じ去るのは難事である。併し乍ら、私は斯ういふことだけは只今の所信じてゐる。夫れは男の集中の目當ては事業の上にある。女の集中の目當ては戀の上にあるといふことである。事業といふのは廣い意味の事業である。戀といふのも廣い意味の戀である。この事は詳しく私の考へを申し上げねばならぬことである。男の方からも、女の方からも誤解されさうな問題である。或は雙方から叱られるかも知らぬと思ふ問題である。次回までに成る丈け筋道を立てて置いて、御聽きを願ひたいと思ひます。

(二) 本課の終りに引用された鴨長明「方丈記」の一節に就いては、醇正國語卷九一四「日野の閑居」一一二頁参照のこと。

三 今

市島 春 城

一 解 題

1 作 者

市島春城 イチジマシユンジャウ 教育家・文學者。名は謙吉。萬延元年(二五二〇)新潟縣に生まれた。東京帝國大學文學部卒業。新聞記者となり、衆議院議員に新潟縣から當選すること三回。一方、早稻田大學の前身、東京專門學校創立時代より之が講師となり、且つ經營に參畫した。隨筆家として名があり、「春城隨筆」「春城筆語」等の著がある。

2 出 典

春城筆語。昭和三年八月十三日早稻田大學出版部發行、四六判、洋裝、四一五頁。初に「はしがき」を掲げ隨筆を書く氣持を「漫興に驅られて時に間筆を弄し、雜録を作ることが多年私の習癖で、毎年、六七冊の隨筆が出来る。無益の事と思ふが、習癖は容易に悛まらぬ。時には獨り自ら嘲けることもあり、午睡を食るに比すれば優ると強ひて理窟をつけて見たりもする。」と説明し、本書「春城筆語」の成立については「記事の七八分は、昨年、震災に壞れた家を改造するとして、半歳餘り假寓に在つた折の執筆に係るから、私としては幣屋復興の記念としたと思ふ。」と記してゐる。本文は「人物雜感」、「明治初頭文壇の回顧」、「烟霞游記」、「漫興偶錄」、「車上縱談」、「百道樂」の六篇からなり、本課に採擇した「今」は「第四漫興偶錄」中の一文である。

3 主眼及び採擇の趣旨

人生に與へられたるは刻々に過ぎゆく「今」あるのみ。「今」こそ起つて努むべき時であり、「今」を失ふことはやがて己れの全生涯を失ふことなるを了得せしめ、奮起一番を促したい。前課と觀點をかへて、而も等しく生活態度の指導に資すべき人間的教材である。

二 解 釋

1 語 釋

【私はいくら字書を繕いて見ても、「今」といふ字より、以上の力強い字を發見することが出来ない】

「いくら字書を繕いて見ても」といふあたりから一體に技巧的な言ひ方で、主題提示の仕方もやゝ抜打的な感じもないではない。前課「一心」の冒頭と形は似てゐるがその態度にはかなりの相違があるであらう。「字」と言はずに「言葉」と言ひ度い所であるが、上の「字書を繕いてみても」といふ技巧に合せる爲に「字」といつたのであらう。

〔字書〕 ジシヨ 字引に同じ。漢字を蒐め、部首によつて分類し、點畫に従つて排列し、其の字音を指示し、意義を説明した書物。

〔繕く〕 ヒモトク (一)帙を紐解く。(二)書を開いて讀む。こゝは(一)。

二一 今

昔、書籍は帙入りになつて居て、之を開き讀む時には帙についた紐を解くことになつてゐたことから出た言葉。

【古來の賢哲】 コライのケンテツ ひかしからの賢人哲人すぐれた人。

【百代の師たり、萬世の範たる金言】 百代の師たる金言、萬世の範たる金言といふのを一つにしたもの。

「百代の師たり」と「萬世の範たる」とは同義の語であつて、之を反覆して、印象を強めようとしたのである。對句的な修辭を用ひた點を注意。

【百代の師】 永久に亡びない師。師といへば人間であるが、それを「永久に亡びない」と、逆説的に用ひた表現法である。

【金言】 キンゲン (一)貴重すべき言句。模範とすべき言句。格言。(二)佛陀の黄金身の口より出た永久不滅の

三〇九

聖語。こゝは(一)。

【案出】 アンシユツ 考へ出すこと。

【正にこれ七首肺肝を穿つの語である】

【正に】 マサに 正しく。確かに。誤なく。

【これ】 文勢を強める爲に挿入された代名詞。

【七首肺肝を穿つの語】 物事の中核を射抜いた言葉。

【七首】 ヒシユ あひくち。懐劍。

【肺肝】 ハイカン 肺臓と肝臓。人體中の最も中樞なる

所であることから轉じて、物の核心、中樞をいふ。

【穿つ】 ウガツ (一)穴をあける。(二)貫く。つきぬく。

(三)極める。穿鑿する。(四)妙處をいひ表す。あばく。

(五)押分けて行く。(六)貫き着る。はく。こゝは(三)。

【人生唯「今」あるのみ】 人生に與へられたものはたゞ「今」

あるのみである、の意。

この言葉に至つて始めて、論旨が明快な姿を現した感

じがする。

【昨日は去れる「今」であり、明日は來らんとする「今」で

ある】

「人生唯「今」あるのみ」を更に展開せしめたもの。油の

乗つた名調子である。

【假設】 カセツ (一)假りに設けること。假にしか定める

こと。(二)幾何學の定理等に於て假定せられる事項。こ

こは(一)。

【日月は移り、動植物は代謝し、天地は須臾も息まない】

「日月は移り」はこゝでは、時間の経過をいふに非ずし

て、太陽と月との空間上の移動をいふ。この二つは天體

の中で最も著しい存在であるから、これらを以て天の運

行の須臾も息まないことを代表せしめたのである。太陽

の移動といふことは勿論人間感覺を基準とした言ひ方

である。次に動植物は地に於ける最も著しいものであるか

らその代謝を以て、地上變化の須臾も息まないことを代

表せしめたのである。

【代謝】 タイシヤ 古いものが去つて新しいものがこれ

に代ること。新陳代謝。「謝」は「去る」の意。

【須臾】 シユユ しばらくの間。暫時。「須」も「臾」も

「しばらく」の意。

【息まない】 ヤスまない。又はヤまない。休止しない。

【刻一刻】 コクイツコク 時間の間斷なき経過を表す副

詞。

【宇宙の本體】 ウチウのホンタイ 宇宙の實體。

宇宙の實體が推移してゆく今であるといふのは、佛教

の諸行無常といふのと同じことであるが、佛教では、變

轉流動の相を示すが眼目であるに對して、この「今」

といふ考は、それを現實に引きするてながめる點が、若

い者に力強くひゞく所である。

【宇宙】 (一)天地四方と古往今來と。空間と時間と。天

地古今。(二)天地又は世界。こゝは(一)。

【本體】 (一)まことのかたち。もとのさま。(二)聲音・

形相を具有する個體。(三)幾多の性質中、殊に重要でそ

のものの成立に缺くべからざる性質。(四)現象の因りて

生ずる實體。自ら成り、自ら存する絶対唯一の實體。こ

こは(四)。

【この瞬間こそ髓の底までも振り起す力がある】

「髓の底までも」とは「心のしんそこまでも」の意。

【髓】 ズキ (一)動物の骨中の腔所に充填する結締組織

の黄色の柔軟物。(二)植物の莖幹の中心にある柔軟な部

分。莖幹の成長と共に壓迫せられ、年を経るに従つて遂

に消失するものが多い。(三)中心。主要。(四)奥義。妙

處。こゝでは、骨髓・心髓などの意である。

【既往】 キワウ 既に過ぎ去つた時。以前。過去。

【畢竟】 ヒツキヤウ つまるところ。結局、所詮。

【既往は「今」の葬られた残骸であり、未來は「今」のまだ

生れない陰影であつて、其所には何物もない】

【既往は「今」の葬られた残骸】 過去は「今」の過ぎ去

つた空しいあと、の意。「今」を擬人した言ひ方で「今」

といふものが、死んで墓場へ送られ、土中へ埋められた

なきがら、といふ字義である。

【未來は「今」のまだ生れない陰影】 未來といふのは、

「今」がまだ顯現しない以前のかげにすぎない。「陰影」

といつたのは、まだ實體でないことを強調していふ爲で

ある。

【陰影】 インエイ かげ。光を受けない暗い部分。

【死兒の年を數へる】 死んだ子供の年齢を、今年まで生き

てゐたら幾つになつてゐるのにと、指折り數へてかへら

ぬ愚痴をこぼすこと。過去の事をくどいても甲斐のない

ことに譬へいふ。

【來年を語れば鬼が笑ふ】 俚諺。「來年のことを言ふと鬼が

笑ふ」といはれる。現身は一寸先も測り難いのに、それ

に氣付かず、暢氣に來年はなどと先の話をする愚かさを

指摘したものである。

【鬼】 オニ (一)死人の魂。亡靈。亡魂。(二)人に祟を

する亡靈。もののけ。(三)想像上の怪物。地獄の獄卒。

頭に角があり、口は横に裂けて鋭い牙を有し、裸體で腰

に虎の皮の褌をまとひ、相貌は瘳惡で怪力がある。(四)

恐しい人。勇猛な人。残忍な人。(五)借金取り。債鬼。

(六)鬼ごつこで人を捕へる役となるもの。(七)食物の毒

見。こゝは(三)。

【既往は追ふべくもなく、未來は期し難い】 過去のことを

言つても甲斐がなく、これから先のことはあてにならない、の意。

【追ふべくもなく】 追つて取戻すことが出来ようやうもない、の意。

【べく】助動詞「べし」の連用形。こゝは、可能。

【も】強勢に用ひられた助詞。

【期し難い】
【期す】キス (一)期限とする。限る。定める。(二)待設ける。豫期する。あてにする。(三)約束する。ちぎる。

【天地不息の大道】 テンチフソクのタイダウ 天地が一瞬たりとも休止することなく、常に若々しく、生々發展してやまないといふ大なる法則。本文一五一頁の「日月は移り、動植物は代謝し、天地は須臾も息まない」を要約したもの。佛教思想に似て、しかもその根柢の態度に於て積極的なものを含む命題である點に注意。

【これを未來に期す】 自己の爲すべきことを今實行しないで將來をあてにすること。

【特に未來といふ別境地の存するものではない。「今」——現在の推移——これがやがて未來である】

表現が適切で懈怠心を鞭うたれる思ひがする。本課の

已に關する罪の有無一切を自ら是認すること。例へば刑事被告人若しくは被疑者が、檢事又は司法警察官或は豫審判事に對して事實を自認すること。こゝは(一)。

【白】は、申し上げる、陳述する、の意。

【全力を「今」の一字に注ぎ、斷乎として「今」の一瞬を守る】 全力を「今」してゐる仕事に注ぎ、きつぱりと、「今」といふ一瞬間を大切に失はないやうにする、の意。

【一字に注ぎ】といふ言ひ方は、「一瞬に注ぎ」と解するが良い。「字」の字に拘泥すると論旨に同化するのをさまたげるやうに思はれる。

【斷乎】 ダンコ おしきつてなすさま。きつぱりとしたさま。斷然。こゝは懈怠や誘惑を排するさまにいふ。

【守る】 目守る、の義。(一)目を放たず見る。見詰める。(二)注意してうかがふ。(三)害のないやうにと庇ふ。侵されないやうにと防ぐ。大切に失はないやうにする。

【大成】 タイセイ (一)完全に成し遂げること。立派に作成すること。(二)多くのものを集め、組織立てて作り上げる。こと。(三)大きな成功。こゝは(一)と(三)を合したやうな意に用ひてある。

【今】を外にして競争場裡に立つ事は難い】

【今】を外にして「イマをヨソにして「今」をほつておいて。「今」に於て努力しないで。

精彩はこゝにあるのであらう。

【別境地】 ベツキヤウチ 別のところ。別個の場所。別個の時空的存在。

【薄志弱行者】 ハクシジヤクカウシヤ 意志が薄弱であつて事を斷行する氣力の弱い者。少しの困難にも堪へ得ぬ者。

【遁辭】 トンジ 責任などを逃れん爲にいふ言葉。逃げ口上。

【未來などいふ空虚を假定するのは愚である】 未來などといふ空しくあてにならぬものを空想に描くのはおろかなことである。

【何ぞ直ちに起つて今これを爲さざる】
文勢を強める爲に漢文調を用ひたのである。「爲さざる」の下に助詞「か」が省かれてゐる。

【期し難い假定に遁れる】 未來などといふ空虚を假定して未來に期すなどといふ遁辭をのべてゐるのは。

【優柔怯懦】 イウジウケフダ ぐづぐづして臆病で決斷の乏しいこと。

【優柔】 (一)やさしくものやはらかなこと。(二)ものやはらかで不活潑なこと。はきくせぬこと。

【怯懦】 臆病で決斷力の乏しいこと。おちおされること。

【自白】 ジハク (一)自ら白狀すること。(二)訴訟上、自

【競争場裡に立つ事は難い】 萬事が競争の世の中に立つて、勝利を捷ち得ることは不可能である。

【裡】は、うち、なか。

【鬪は「今」である】 勝利を得る爲た、かふ時は「今」である。

【果斷】 クワダン きつぱりとした思ひきり。

【果斷の決心があり】とは、「果斷の決心が湧出する」の意。

【剛健の意氣】 つよくたけしい心もち。

【意氣】 イキ (一)氣だて。心だて。氣象。(二)心もち。心に意志の發動した状態。(三)意氣地。(四)あかぬけしであること。粹。通。こゝは(一)。

【直截の邁進】 傍目もふらず、勇敢に進むこと。

【直截】 チョクセツ まつすぐなこと。右顧左眈せぬこと。「截」は、(一)たちきる。(二)物事の明かに分れるさま。はつきり。

【邁進】 マイシン 勇敢に進むこと。勇を鼓しつゝつとめて進むこと。

【邁】は、ゆく、遠く行く、過ぎ去る、月日がたつ、つとむ、はげむ、力行する、の意。

【その間一毫の惰容を赦さぬ】 「時は今」と叫ぶ時、その心の中には、すこしのなまけ心もあることを許されぬ、の

意。

【一毫】 イチガウ すこし。わづか。

【毫】は、動物の細毛をいふ。極めて細いもの故、微少の意に用ひる。

【情容】 ダヨウ おこたつたやうす。

【全力の發動】 全力が外に向つてはたらし出すこと。

【渾身の熱血】 全身に満つる熱意。

【精神一到】 セインイットウ 精神が一つに集中すること。朱子語類の「精神一到何事不成」から出た語。「到」は「向く」「注ぐ」等の意。

【一意】 イチイ ひたすら。ひとすぢに。

【禮讚】 ライサン (一)佛を禮拜してその功德を讃嘆すること。(二)ありがたがること。たふとぶこと。こゝは(一)。

【黒田如水】 クロダジヨスキ 豊前中津城主。名は孝高。入道して如水と號した。家はもと播州姫路の城主であつたが、父の識隆の時織田信長に歸した。天正五年中國の役起るや、羽柴秀吉に従つて毛利氏を攻めた。天正八年居城姫路城を秀吉に讓つて、山崎城に徙つた。これより後深く秀吉の信任を受け、その腹臣となつた。山崎・賤ヶ嶽・小牧・筑紫の役に至るまで常にその帷幕に參與し

六年尾張國愛知郡中村に生れた。十六歳の時遠江に行き今川氏の臣松下之綱の奴となつたが、幾許もなく去つて織田信長に仕へ、屢々武功を建てた。信長は其の才幹を愛して頻りに登用し、三千石を與へた。永祿十一年京畿の守護職となり、十二年には長濱の地一萬石を食んだ。元龜元年信長に従つて朝倉氏を討ち、姉川の戦に先鋒として功をたてた。天正元年淺井長政を小谷城に滅ぼし、功によつて長政の舊封二十二萬石を與へられた。天正二年從五位に敘し筑前守に任ぜられた。五年信長の命を奉じて中國に入り、頻りに毛利氏の屬城を陥れ、五ヶ年の間に播、備、美、但、因の五國を戡定し、九年十二月安土に歸つて信長に謁した。十年正月再び備中に入り、四月高松城を圍み、六月に至つて之を陥れた。會々本能寺の變起り、秀吉急に毛利氏と媾和し、軍を回して明智光秀を討つて山崎に滅ぼした。清洲に行き信長の嫡孫(第一子信忠の子)秀信を擁立して主とした。十月從四位下左少將となつた。既にして信長の第三子織田信孝は柴田勝家と圖り、秀吉を除かうとしたので、十一年三月賤ヶ岳の戦に勝家を敗つて、之を斃し、尋で信長の第二子織田信雄をして信孝を岐阜城に殺さしめた。五月參議に任じ、從四位上に陞つた。十一月大阪城を築いて之に移つた。是に於て秀吉の威望日に盛んで、且つ秀吉に織田氏

て畫策の功頗る多く、世人今張良と稱した。十五年七月豊後國六郡を與へられて十二萬石を領し、中津城に居る。十七年四十四歳家を子長政に讓り致仕入道して如水と號した。蓋し、秀吉は心ひそかに孝高の宏度を嫌忌し立てて巨藩となすを欲しなかつたので、孝高はこれを揣り、殃を取るを恐れて茲に及んだのであるといふ。然し秀吉は深くその才を惜み致仕の後も近く召して、顧問に當てること元の如くであつた。十八年小田原征討の師起るや、孝高また之に従つて軍議に與つた。文祿征韓役に際しては、淺野長政と共に、命を奉じて海に航し、慶長再征の軍には、元帥小早川秀秋を佐けて再び渡航し、蔚山の急を救ふ等其功が尠くなかつた。慶長五年石田三成等が徳川家康と難を構へて兵を起すに及び、孝高時に中津にあつたが、志を家康に通じ、長政をして軍に従はしめ、自ら西國に於て頻りに三成の黨與を降した。關ヶ原戦終り長政が功によつて大封を受くるに及び、東上して戦捷を賀し、且つ家康に謁した。家康は篤く之をもてなし、之を重用せんとしたが辭して受けず、本國に歸つて靜かに老を養ひ、慶長九年三月卒した。年五十九。

【豐太閤】 ハウタイカフ 豊臣秀吉のこと。幼名日吉丸、通稱藤吉、初め氏を木下といひ、後、羽柴と稱し、更に豊臣と改めた。織田信秀の足輕木下彌右衛門の子。天文

を凌ぐ態度が目立つて來た爲、信雄は大いに怒り、秀吉を討たんとして救を徳川家康に請うた。家康之を容れ、長久手、小牧に於て秀吉の軍を破つた。秀吉は前途の成功を急いたので求めて家康と和を媾した。十一月從三位大納言となり、十三年三月正二位内大臣となつた。五月長曾我部元親を討つて四國を平定した。七月關白となり從一位に敘せられた。此時家康は猶濱松に在つて屈しなかつたので、遂に妹を家康に嫁し、且つ母を質と爲してこれを誘うた。家康即ち十四年九月上洛して秀吉に謁見し、臣禮を執つた。十二月太政大臣に任ぜられた。十五年征西の途に上り、島津氏を降し、十八年北條氏を小田原に亡し、更に奥羽を定むるに及んで、海内始めて統一し、天下盡く豊臣氏の命を奉ずるに至つた。十九年關白職を養子秀次に讓つた。文祿元年大陸經營の抱負を實現せんとし、兵を朝鮮に派して諸道を征略し、又明軍と戦つた。三年子秀頼が生まれた。秀吉之家を讓るの志があり、時に世上秀次不軌を圖るの風評があつたので、七月秀次の官爵を削つて高野山に放ち、尋いで切腹せしめた。此年、明、和を求め來つたので之を許し、兵を撤せしめたが、明年明の國使來るに及んで、書辭無禮であつた爲、之を斥け、慶長二年再征の軍を發した。然るに三年八月病に罹り、同十八日伏見城に薨じた。歳六十二。遺命し

て征韓の軍を撤せしめた。京都阿彌陀峯に葬つた。詔して正一位を贈り、次いで祠廟を京都の西に建て、勅して豊國大明神の號を賜うた。

【太閤】 タイカフ 關白職を子に譲つた者の稱。

太閤として、秀吉が最も有名である所から、後世、單に、太閤といへば秀吉を指すやうになつた。俗に、「太閤は秀吉に奪はれ、黃門は光圀に奪はる。」といはれる。

【偉業】 キゲフ 偉大なる事業。下賤より身を起して四海を平定し、位人臣を極めた所の大事業。

【殿下】 デンカ (一)宮殿又は殿堂の下。(二)皇太子・親王・諸王等皇族の御名の下につける敬稱。(三)昔時、關白・將軍などに用ひた敬稱。こゝは(三)。

【秘訣】 ヒケツ 事をなすに最も效が多くて、しかも他人に知らせぬ法。「秘」は、「秘密」、「訣」は「おくのて」「おくぎ」等の意。

【願はくはそれを承りたい】 どうか、その秘訣をお伺ひ致し度い、の意。

【願はくは】 願ふところは。望むところは。どうか。何卒。

【願はく】 は「願ふ」の延言。「は」は格助詞。「は」を濁るのが誤であることに注意させたい。

【承る】 ウケタマハル (一)仰を受ける。(二)謹んで承諾する。(三)様子を聞く、傳聞するの敬語。こゝは(三)

【過去を追はず、未來を慮らず、今日一日の事業を一心不乱に爲したに過ぎぬ】

「過去を追はず」とは、過去の事に未練執著を残さず、くよ／＼せぬといふ意味であつて、過去の經驗を現在乃至未來に活用することをしなかつたといふのではない。

「未來を慮らず」とは未來の空想に耽りすぎたり、取越苦勞をしたりして實行力を弱められるやうなことがないといふ意。未來の事を全然考へないといふ意味ではない。

「過去を追はず」も、「未來を慮らず」も共に「今」を強調する爲の語である。それらの語の眞意が誤解されないやうに指導されたい。

【一心不乱】 イツシンフラン 一事に心を注いで他を顧みないこと。一意専心。

【豊公も「今」の禮讀者であることが知られる】

「知られる」の「れる」は自發の助動詞。

【英雄豪傑】 エイユウガウケツ 何れも、才智、武略の秀れてゐる人。「淮南子秦族訓」に「智過萬人者謂之英。千人者謂之俊。百人者謂之豪。十人者謂之傑。」

【因んで】

【因む】 チナむ 或物事に關係あるを機會として或事をなす。緣による。たよる。

【茶人】 チャジン (一)茶の湯を好む人。茶道に通じた人。(二)普通に變つたことを好む人。一風變つた好事家。こゝは(一)。

猶、「茶の湯」に就いては參考欄參照の事。

【千宗旦】 センソウタン 茶人。幼にして紫野聚光院の喝食となり、後寺を出で、利休二男、千宗淳の家嗣となる。父宗淳に茶道を受けて其の藝を能くし、今日庵咄齋と稱した。性閑を好み、榮利を慕はず、能く深く祖父の意を得、其の心汲々として止まず、茶事を以て己が任となし、家聲大いに振つた。萬治元年(二二一八)歿。年八十一。

【一遺事】 イチキジ 一つの事跡。

【遺事】 (一)古來から残り傳はつてゐる事跡。(二)生前になしおいた事跡。(三)もれ落ちた事跡。こゝは(二)。

【宗旦が新たに茶室を建てたをり】

この茶室は、京都市小川、裏千家邸内に現存し、廣さ二疊、道幸附である。その庵號「今日庵」の由來は本文中の挿話に詳しい。

【茶室】 チャシツ 點茶の爲に特に工夫された室。俗に茶席・席などともいふ。これに數寄屋と圍の二種がある。

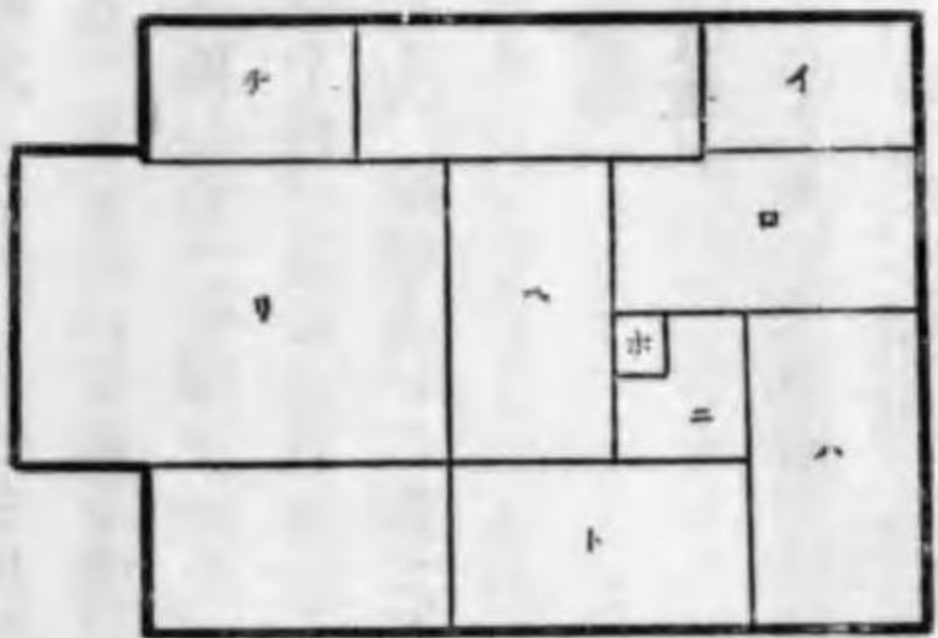
こゝは前者。

「數寄屋」は母屋と離れて別棟に建てられた茶事専用の建築を云ひ(珠光庵の扁額に數寄の二字を掲げたところから數寄屋といふに至つたといふ)。「圍」は母屋に連結して造られたもの(一説に、珠光が東山東求堂十八疊の間を屏風で約四分の一を圍つて茶席に供したのに始まるといふ)。

茶室の構造は、一見極めて無造作な草庵風を旨とし、茶席の外、水屋(茶事の準備室)・待合(客が客入り前に相)・露地等から成る。

茶席の廣さは小は一疊半から大は十八疊に及ぶものがあるが、四疊半を正式とし、五客を容れるのを標準とする。室内の意匠及び細部の作り方は好みによつて様々であるが、客座が主人の右手になるのを本勝手、左手になるのを逆勝手といふ。構造の概略をいへば、爐を切り、床を設け、欄口(客の出入口で、幅二尺)に木の引戸をつけ、その上部の壁に多く連子窓をつける。勝手口(茶道もいひ、主人が茶を立)及び主寶口(給仕口ともいひ、勝手)は水屋に續く。窓の位置・大いさ・形等は自由で風爐先窓・床脇窓等色々あるが、茶席は、落付きを重んずる爲一般に窓は小さく、室は稍暗いめに作る。曉の茶事の時

道具拜見、その他、特に明りを要する場合の爲に突上窓(天窓)をつけることもある。又、道幸(洞庫ともいふ)と稱して、茶室内道具疊の横に、勝手の方へ張出して小さい戸棚を設けることがある。老人が、茶道具を一々勝手から運ぶ手数をはぶく爲にこゝから出し入れする所。



【茶室平面圖】

イ 床 貴人 客 爐 道 踏 水 手 勝
ハ 客 貴人 疊 疊
ニ 爐 疊
ホ 爐 疊
ヘ 道 具 疊
ト 踏 込 疊
チ 水 屋 手
リ 勝 手

【別懸】 ベツコン とりわけて懸意なこと。
【大徳寺】 ダイトクジ 臨濟宗大徳寺派の大本山。京都市上京區紫野大徳寺町にある。元應元年(一九七九)大燈國師がこの地に法堂を創めて住したが、花園・後花園兩天皇の歸仰を得、寺地を賜はり伽藍を建立し、天弘三年には朝廷の祈願所となつた。その後二回火災に遭ひ、天正十年豊臣秀吉がその主織田信長をこの寺に葬つて以來

諸堂漸く修營された。林泉の美がある。
【名僧】 メイソウ 名高い僧。秀れた僧。
【清巖和尚】 セイガンヲシヤウ 大徳寺の僧。近江國の人。寛文六年(二三二六)歿。年七十二。
【和尚】 ヲシヤウ (一)師僧。道を教へ傳へる僧。修業を積んだ僧の敬稱。僧侶。坊主。(二)武術などの師匠。(興福寺寶藏院の僧侶が、槍術を教へた故事による。)くわしやう。わじやう。
【普請】 フシン (一)佛語。あまねく同志の寄進を請うて堂塔を營繕すること。(二)建築。土木。こゝは(一)。
【落成】 ラクセイ 工事の出来上ること。落は家屋新築の際に行ふ儀式。「左傳、昭公七年」に「楚子成章華之臺。願與諸侯落之。」とある。轉じて「出来上る」竣功する」等の意。
【庵號】 アンガウ 庵の名稱。
【いかさま】 (一)名詞。いかがはしいもの。にせもの。(二)副詞。いかにも。なるほど。こゝは(一)。
【古語】 コゴ むかしの言葉。
【懈怠比丘期明日】 ケタイノビクミヤウジツヲキス 修業をなまけ怠つてゐる僧は明日は明日はといつも明日ばかりをあてにしてゐる、の意。
この語出典未詳。

【憺怠】 なまけること。おこたること。

【比丘】 梵語、Bhiksu。巴利語 Bhikkhu。乞士と譯す。佛門に歸依して具足戒を受けた男子。出家。僧。女なるを比尼尼といふ。

【額字】 ガクジ 額の文字。

【額】 (一)ひたひ。 (二)分量。員數。(三)紙、帛又は板などに書、畫をかくて、室内若しくは門などに掲げおくもの。額面。扁額。(四)かくぎん(額銀)。こゝは(三)。

【揮毫】 キガウ 書畫をかくこと。毫を揮ふ、の意。

【毫】 (一)細毛。(二)筆。(三)極めて僅かなこと。こゝは(一)。

【需めた】 モトめた 要求した。

【需める】 (一)求める。欲する。要求する。(二)待つ。ためらふ。こゝは(一)。

【倉卒】 サウソツ (一)あわただしいこと。(二)俄かなこと。(三)いそがしいこと。こゝは(一)。

【追つて】 オつて (一)やがて。まもなく。(二)つけ加へて。なほなほ。こゝは(一)。

【認めて進し申さう】 書いてさしあげませう。

【認む】 シタタむ (一)ととのへる。支度する。(二)食事する。食ふ。(三)書きしるす。(四)みとめる。みとどける。みきはめる。(五)處置する。處理する。

【進す】 シンす たてまつる。さしあげる。

【申す】 マウス (一)「語る」・「言ふ」・「告ぐ」の敬語。「申し上ぐ」(二)請ふ。願ふ。「申し請く」(三)「爲」の意を丁寧にいふ語。爲す。仕る。「御供申す」こゝは、(三)。

【然様】 然様にては今日庵の意にかなはず】 そのやうなことでは今日庵といふ庵號の趣旨に合はない、の意。

【然様】 シカヤウ さやう。そのやう。事を他日に延ばすやうなことをいふ。

【意】 イ (一)心。(二)思。考。(三)わけ。意味。(四)趣意。おもむき。(五)私心。私欲。(六)意志。意思。(七)意識。こゝは(四)。

【かなふ】 (一)うまく合ふ。あてはまる。相應する。適當する。ふさふ。(二)なし得る。成就する。思がとどく(三)匹敵する。及ぶ。(四)親和する。むつぶ。こゝは(一)。

【即座】 ソクザ その場。即席。

【即】 (一)就く。位を踐む。(二)近づく。接する。觸れる。(三)いますぐ。(四)すなはち。そこで。よつて。(五)外ならず。とりもなほさず。(六)もし。萬一。(七)もえさし。こゝは(三)。

【唐紙】 タウシ 支那で製し我が國に輸入した紙。楮皮に

嫩竹を交ぜ煮て漉いたもので、表面は粗剛で質は脆く裂け易い。墨汁の吸収宜しき爲、書畫用とし、又、表装の裏附に用ひる。これを模造した國産品の和唐紙をも唐紙といふ。

【辨じかねた】 ととのへることが出来なかつた。

【辨ず】 ベンズ (一)わかる。(二)片付ける。(三)整へる。調へる。こゝは(三)。

【かねる】 こゝは、出来ない、の意。

【僅かに】 ワヅかに (一)すこしばかり。(二)やつと。かつがつ。こゝは(一)。

【當惑】 タウワク 事に當つて惑ひ苦しむこと。思案盡きて途方に暮れること。

「當惑した」といふのは誰のことか、生徒に指摘させた

千宗易(利休)―千宗淳(少庵)―千宗旦―
―(表流)千宗左―良休宗左……………
―(裏流)千宗室―常叟宗室……………

【歸院】 キケン 寺に歸ること。

【院】 (一)周圍に垣をめぐらした一構への大きな家。

(二)役所。(三)學校。(四)寺。(五)上皇 法皇・女院のいます御所。又、その尊稱。こゝは(四)。

【不審を抱き】 いぶかしく思つて。あやしく思ひ。

い。

【妻女】 サイジョ (一)妻と娘と。(二)妻。こゝは(一)。

【眉掃】 マユハキ (一)白粉をつけた後、眉を拂ふに用ひる小さい刷毛。(二)(イ)野薊。(ロ)眉掃草。こゝは(一)。

【間に合ひますなら】

【間に合ふ】 マニアフ その場の役に立つ。その場の用を辨ずる。

【立所】 タチドコロ その場。即座。

【千家】 センケ 千利休を始祖とする茶道の家。後、二家に分れた。表千家は嫡流の家、裏千家は、利休の孫宗旦の三男仙叟宗室の起した家で、宗旦の隠居所千家の裏に住するを以て名づけた。(利休に就いては参考欄参照)

【不審】 フシン (一)つまびらかでないこと。たしかに分らぬこと。不詳。(二)うたがはしいこと。あやしむべきこと。

【つい】 こゝは、副詞 (一)はからず。意外に。思はず。(二)すぐに。ちよつと。ほんの。こゝは(二)。

【さた】 沙汰 (一)朝廷の命令。官府の指令。(二)さばきしらす。(三)たより。しらせ。(四)うはさ。ひやうばんこゝは(三)。

【茶室開き】 チャシツピラキ 新しく建てた茶室を初めて開き用ひること。

【茶を點てた】 チャをタてた

【茶を點てる】 抹茶を湯にかきませこしらへること。

【その日を越さず】 その日をすぎさず、の意。

【越す】 コス (一)物の上を過ぎゆく。(二)上に及ぶ。

(三)まさる。すぐれる。(四)行く。来る。去る。こゝは(一)で時間的の意味。

【茶をふるまつた】

【ふるまふ】 振舞ふ。(一)自動詞 おこなふ。はたらく。

(二)他動詞 物を出してもてなす。こゝは(一)。

【趣向】 シユカウ (一)おもむき。こころざし。(二)しくみ。かんがへ。工夫。細工。こゝは(二)。

【感に入つた】 非常に感心した、の意。

2 文の構成

第一節 初―一五四頁二行 人生に於ける「今」の重大性。

(1) 人生に與へられたものは刻々に移りゆく「今」といふ刹那のみである。(初―一五一頁一〇行)

(2) 事を成さんとするには「今」に於て努力する外に道はない。(一五二頁二行―一五二頁一〇行)

(3) 事を未來に期する如きは、永久に之を失ふことである。(一五二頁二行―一五三頁六行)

(4) 「今」禮讚。(一五三頁七行―一五四頁二行)

第二節 一五四頁三行―終 「今」を大切にされた故人の例話。

(1) 豊太閤の例。(一五四頁三行―同八行)

(2) 千宗旦の例。(一五四頁九行―終)

3 文意

二一今

三二一

人生に於ける「今」の重要性を強調して、人々の「今」に於て努力すべきことを慫慂す。

4 鑑賞批評

古來幾多の賢哲達によつて説かれ來つた趣旨であるが、作者の態度にひた押しな熱意が感ぜられ、中學生の讀物としてかなりな効果が期待されよう。

現在の推移としての未來の解き方などは、古人にもまだ無かつた清新な解釋で、今人にはたつきかける力に富んでゐると思ふ。

又、人間の努力を天地不斷の動きにもとづける考へ方は、易の「天行健、君子以自強不息。」あたりから來てゐるであらうが、この文では表現の仕方新しく、やはり意味深く感ぜられる。

たゞこの文章は一面、熱意が餘つて、やゝエンファサイズが利き過ぎた傾きがあり、その結果、文の品格・落付等の點に於て幾分の不満も伴ふかと思はれる。然しこの點については教材の性質上、必ずしも觸れる必要はないであらう。

例話の第二は興趣に富んだ逸話であるが、名僧清巖和尚がやゝ木偶扱ひされ、幾度も千宗且の引立て役を勤めさせられてゐるやうに感ぜられる。

三 備 考

1 指導研究

(一) 論旨が平明で作業に特別の困難はないと思ふ。本文中特に指導を要する表現は、一五三頁一行から二行へかけての「特に未來といふ別境地の存するものではない。「今」——現在の推移——これがやがて未來である。」といふ一節であらう。このところが會得されたら、生徒は既に發動的に文意中の人となつてしまふであらう。

- (二) 「人生唯『今』あるのみ」といふ語は、一步謬れば利那主義の出發點となる懼れなしとしない。三年生の生徒にこの懸念は杞憂であるとはいひ切れないであらう。指導者の態度の中にこの點に對する顧慮がありたいと思ふ。
- (三) 例話も適當なものを補充して話して聞かせたらよいと思ふ。

2 参 考

(一) 原 文

本課には省略したが、原文には冒頭に次の如くある。

「七八年前に『日本及日本人』が百字百人觀を其の新年號に載せたことがある。其際私の取當てたのが『今』といふ字であつた。其の舊稿は既に佚して手許に無いが、『今』に對する私の説は大體左の如くである。」

かくして本課の初から黒田如水の話の前までが、二字下げて印刷されてゐる。即ちその部分は、「日本及日本人」に載せたといふ舊稿の梗概に相當する譯である。

(二) 参 考 資 料

(イ) 古聖賢の遺した嘉言の一斑を次に掲げよう。

士不_レ可_レ以_レ不_レ弘毅。任重而道遠。仁以爲_レ己任、不_レ亦重_レ乎。死而後已、不_レ亦遠_レ乎。(論語、泰伯篇 孔子ノ語)

勸 學 歌

陶 淵 明

盛年不_レ重來。一日難_レ再晨。及時當_レ勉勵。歲月不_レ待人。

勸 學 文

宋 子

勿_レ謂今日不_レ學而有_レ來日。勿_レ謂今年不_レ學而有_レ來年。日月逝矣。歲不_レ我延。嗚呼老矣。是誰之愆。

○

佐 藤 一 齊

送昨日、迎今日、送今日、迎明日。人生百年、不_レ過_レ如此。故宜_レ慎一日。一日不_レ慎、遺_レ醜於身後。可_レ恨。羅山先生謂、暮年宜_レ謀一日事。余謂、此言似_レ淺非_レ淺。(言志四錄)

(ロ) 茶の湯(茶道)に就いて日本家庭大百科事彙から左に引用する。

茶は桓武天皇延暦二十四年僧最澄が入唐して、茶種を持歸り、比叡山麓坂本に植ふたのを濫觴とし、延喜頃も盛んに飲用された。後一時中絶、建仁寺開山榮西禪師が建久二年宋から歸朝した時、江南の茶種を筑前背振山に下し、山城梅尾明惠上人も一部を受けて梅尾に植ふ宇治に移し、漸次全國的となつた。茶は唐の陸羽の茶經にその効能を記してゐるが、榮西も「喫茶養生記」を著し、茶徳を頌し第一に養生の仙藥・延命の妙術と稱した。鎌倉時代末葉から遊興としての「茶の會」が行はれ、茶の識別をして樂んだ。室町中期から茶數寄と茶飲み二種の茶會を生じ、前者は永正頃から流布し、大永以後盛んになつたもので、東山義政はこの機運を助長した。茶道の形態が成つたのは義政に仕へてゐた南都稱光寺の僧珠光からで、東山御所には數寄屋といふ奥座敷を造つて、抹茶を以て茶道の法則故實を作つた。後、武田信光の裔仲村紹鸞は珠光の門人宗悟・宗陳に従ひ、一家をなし、納屋與四郎別名千宗易(利休)に傳へた。利休は秀吉に仕へ、茶道を改定し、後世の茶道の範を作した。天正十九年秀吉に切腹を命ぜられた。年七十四。二子道安・宗淳、宗淳の子宗且より千家表・裏・官休庵が分派した。

茶道と現代生活とは一見甚だ縁遠いやうであるが、實は茶道に學ぶべき點が非常に多い。先づ第一は心の落着である。茶道を學んだ人は如何なる場合、如何なる人の前に出ても泰然として自己を持する落着がある。寸尺の天地にも靜かに樂しきを見出す心の餘裕がある。第二に茶道は主客互にうちとけて而も禮を亂さず、物事に拘泥しないですべて臨機應變に取りなして行くといふ社交の要諦を具へてゐる。第三に茶道は一舉手、一投足にも無駄や無理がなく、すべて合理的である。これを日常生活の上に應用すれば、坐作進退宜しきに叶ひ、隨つて今日のいはゆる能率を著しく増す事が出来る。第四に器物の取扱法を心得るので手足の過ちがなく物を取落す等の不調法がない。第五に器物の鑑賞眼が自づとすぐれてくる。

(ハ) 茶道の大成者利休に就いて同書の解説を擧げる。

「千利休、千家流茶道の祖。名は宗易。俗稱與四郎。抛筭齋利休居士と號する。千家と號した。泉州堺の人。室町幕府の同朋千阿彌(田中道祝)の孫。紹鸞に茶道を學び、臺子の法を傳授され、これを小間に移して茶道を大成した。初め織田信長に仕へ、後、豊臣秀吉に寵遇せられたので、諸侯のその門に教へを乞ふ者多く、茶道興隆の因となつた。大林和尚に參禪し、天文十四年受戒。天正十三年正親町天皇より利休居士の號を賜ふ。同十五年秋、北野大茶湯の催があつた。晩年西芳寺に隱棲した。天正十九年、紫野山門の上に己が木像を置いたため秀吉の怒にふれて割腹自盡。年七十一。一説にその女吟子、秀吉が召したのに應じなかつた爲ともいふ。大徳寺聚光院に墓がある。二男宗淳家をつぐ。門弟多く、南坊宗啓(南坊流祖)・織田長益(有樂流祖)・細川忠興(三齋流祖)・蒲生氏郷・牧村貞勝(古田重勝 織部流祖)・藪内紹知(藪内流祖)・圓乗坊宗圓(圓乗坊流祖)等は名高い。」

(ニ) 「今」を逸しなかつた例話一つ。

歳暮、舊得庵、謂_ニ林羅山_一曰、余未_レ讀_ニ通鑑綱目_一。請_フ、先生以_ニ明春_一、爲_レ余講_レ之。羅山曰、子心誠求_レ之、何待_ニ來年_一。即以_ニ除日_一講起。(先哲叢談)

補材

時過ぎ行くに非るなり。吾等過ぎ行くなり。(ツルゲニエフ)

世人は歲月が過ぎ去るやうに考へてゐるけれども、よく考へてみると過ぎ去るのは歲月ではなくして、吾等人間である、の意。

一見奇警な語のやうに見えるが、よく玩味してみると鮮かに人生の眞實感を捉へてゐる。「吾等過ぎ行くなり。」といひすてた言葉が何と力強く吾々にはたらきかけて來ることであらう。

ツルゲニエフ イワン・セルゲイウッチ・ツルゲニエフ Iwan Sergeievitch Turgeneff (一八一八一—一八八三)ロシアの文豪。オーレルの名家に生まれた。モスクワ大家からベテルブルグ大學に轉じ、更にベルリン大學に學んだ。一八四六年

「獵人日記」を著して露西亞文壇に重きをなした。一八四七年ロシアを去り、主として巴里に住み、この地に歿した。彼は文學上、プーシユキンの系統に屬し、ロシア文學史上の最大散文藝術家の一人である。その特色は沈鬱な厭世思想と、時代並びに社會に對する批評と、又その優美な文章にある。

作品としては、「獵人日記」(一八四六)、「父と子」(一八六一)、「煙」(一八六七)、「處女地」(一八七六)等がある。本課の主眼を要約したものととしてツルゲニエフのこの語を掲げた。これは「藤村讀本」中、島崎藤村の感想を集めた中の引用文より採つた。

三 昭和 日本

德 富 蘇 峯

一 解 題

1 作者

德富蘇峯 トクトミソホウ 新聞記者・評論家・著述家。本名は猪一郎、文久三年(二五二三)一月、熊本縣上益城郡津守村字杉堂の矢島家(母の里方)で生まれた。幼年時代を兼北郡水俣で送つたが、明治三年、父が一家を擧げて熊本に移るに及び、熊本の東郊大江村に住み、兼坂止水の塾に入つて主として漢學を修めた。六年(十一歳)熊本洋學校に入りアメリカ風の教育を受け英語を學び、基督教の感化を受けた。九年八月洋學校が閉鎖されたので上京して英語學校(一高の前身)に入學したが、その冬、新島襄の主宰する、京都の同志社に轉じた。こゝで普通科を卒業したが、「クリスト教辯説論」を讀んで同教に對する疑を抱き、十三年同志社を去つた。十五年郷里大江村に大江義塾を創立して塾生の教育に當つた。十八年「第十九世紀日本の青年及其教育」(後「新日本の青年」と改題)といふ論文を書いて田口卯吉、井上毅等に認められ、これを機として著述を以て世に立つことを決心し、「將來の日本」と題する長論文を田口卯吉の經濟雜誌社から出版したが、これが非常な好評で、蘇峯の文名は忽ち天下に知られた。十九年上京し、翌年民友社を創立、雜誌「國民之友」を發行して、平民的急進主義の思想と、清新な文體を以て、天下の青年を魅了した。更に二十三年國民新聞社を興して「國民新聞」を主宰發刊した。二十九年内務省參事官となつたが、この頃から「國民之友」は苦境に陥り、三十一年遂に廢刊した。爾後主力を國民新聞に注ぎ、國家主義思想に立脚して、世論の指導に當つた。四十四年貴族院議員に勅任せ

られた。昭和四年國民新聞社を退き、同年大阪毎日・東京日日新聞社社賓に迎へられた。その著「近世日本國民史」に對し、大正十二年帝國學士院から恩賜賞を授與された。現に帝國學士院會員・文政審議會委員・教科書調査會委員・臨時國語調査會委員である。著書は「蘇峯文選」の外數多あるがその代表的なものとしては「近世日本國民史」「靜思錄」「吉田松陰」「將來の日本」「新日本の青年」「天然と人」「文學斷片」「人物管見」「事務一家言」「日本帝國の一轉機」「支那漫遊記」「昭和一新論」等がある。

その文章は、暢達自在で千言たちどころに成るの概があり、殊に前半期の文章は頗る清新なものであつて、日本の文章道に及ぼした寄與は、何人も及び得ないほど偉大な足跡を止めてゐる。

2 出典

「昭和一新論」徳富猪一郎著。昭和二年二月十一日民友社發行。菊判假綴、本文一四一頁。卷頭に朝見式勅語を掲げ次に本書の序文とも言ふべき「御踐祚」の一文を載せ、本文としては、第一總論以下第二十五奉仕的精神の復活に到るまで夫、五六頁の短文が廿五篇収録してある。「昭和日本」と題して本書に採用したのは卷頭の「御踐祚」と題する文章であつて、一部分省略されてゐる。筆者の日附によれば本文は昭和元年十二月二十五日、即ち今上陛下御踐祚の日に執筆せられたものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

現下の世界的混亂期に際し、吾々昭和の日本國民が、國の内と外とより迫る重大な難局を克服して、我が國運の振張を實現すべき根本の心構へをしつかりと少年の胸にうち立てさせたい。

この文は今日から見ると既に歴史的な文章であるが、その根本精神に於ては永く指導性を失ふことがないであらう。力強い國民的教材である。

二〇・二一兩課の人間の教材の後を承けると共に、本巻の結びとしてこゝに本課を据ゑた。

二 解 釋

1 語 釋

「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我が國のみ此のことあり。異國には其の類無し此の故に神國といふなり。」とは北畠親房の神皇正統記の開卷第一に特筆大書したる文字なり

ここに正統記の文を引用したのは、以て本課の趣意にふさはしい嚴肅感を卷頭に漂はせ、その雰圍氣の中から今上天皇御登極の奉頌の言葉を導き出す爲の用意であらう。

〔大日本〕

「日本」ニツボン 國語流に和げてニホンともいふ。「日本」の字面は日本書紀神代卷に、「於是陰陽始爲夫婦、及至産時、先以淡路洲爲胞、意所不快。故名之曰淡路洲。廼生大日本(日本此云耶麻)豊秋津洲」とあるのが文獻に見える初めである。(尤もそれだからといつて「日本」といふ文字が神代から用ひられたといふ意味では無論ない。之については次に引用する正統記の考證を参照されたい。)古事記にはこゝの條に「大倭」と書い

てゐる。

「日本」の國號に就いて、神皇正統記の考證を次に引用しよう。

「又は耶麻土といふ。これは大八洲の中國の名なり。(中略)中洲たりし上に、神武天皇東征より代々の皇都なり仍りてその名をとりて、餘の七州をも、すべて耶麻土といふなるべし。(中略)大日本とも、大倭とも書くことは、この國に漢字傳はりて後、國の名を書くに、字をば大日本とさだめて、しかも耶麻土とよませたるなり。大日靈の御國なれば、その義をもとれるか。はた日の出づる所に近ければ、しかいへるか。義はかかれども、字のまゝに日の本とはよまず、耶麻土と訓ぜり。我國の漢字を訓すること、多くかくの如し。おのづから日の本などいへるは文字によれるなり。國の名とせるにはあらず又いにしへより大日本とも、若くは大の字を加へず日本と書けり。(中略)唐書に、高宗咸亨年中に、倭國の使はじめて改めて日本と號す、その國東にあり、日の出づる所に近きをいふと載せたり。この事、我國の古記には

確ならず。(中略) 唐の咸亨の頃は、天智の御代に當りたれば、誠に件の頃より日本と書きて送られけるにや。〔神國〕 シンコク 神が創造し給ひ、その御照覽の下に神の御子孫が永遠に之を統治し給ふ、といふ、一切が神意を以て貫かれた國家、の意。

〔天祖〕 テンソ 普通は、天照大神を申すけれども、こは神世七代の神達、とりわけ、國常立尊及び伊邪那岐尊、伊邪那美尊を申す。正統記開卷劈頭本文引用の部分に續いて「神代には、豐葦原の千五百秋の瑞穂の國といふ。天地開闢のはじめよりこの名あり。天祖國立尊、陽神陰神に授け給ひし勅に聞えたり。」とある。

古事記によれば、天地初發の時、五柱の別天神、即ち、天之御中主神、高御產巢日神、神產巢日神、宇麻志阿斯訶備比古遲神、天常立神に續いて出現し給うた神で、豐雲野神、宇比地邇神、妹須比智邇神、角杵神、妹活杵神、意富斗能地神、妹大斗乃辨神、淤母陀琉神、妹阿夜訶志古泥神、伊邪那岐神、妹伊邪那美神と共に神世七代と稱する。

猶、日本書紀の本文、並にその後引用された三種の一書によると、天地開闢の初に出現した神が國常

てゐる。

〔天祖〕始めて基を開き、神世七代の神々が始めて國の基をお開きになり、の意。

即ち、國常立尊以下の神々の神勅を受けた伊邪那岐・伊邪那美の二神が淤能基呂島に天降り給うて、大八洲を初めとして、國土の統治神たる天照大神を初め、月讀命、建速須佐之男命等諸々の神を生み給うたことをいふ。

古事記上卷、神世七代の次に、

「於是天神諸命以、詔伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱神、修理固成是多陀用幣流之國、賜天沼矛而、言依賜也。(古訓古事記リヨル)」

とある。〔天祖〕の項で引用した正統記の文に、「天祖國常立尊、陽神陰神に授け給ひし勅云々」とある所から考へると、正統記の著者は、國常立尊を以て「天神」を代表させて言つてゐることが知られる。

〔日神長く統を傳へ給ふ〕 天照大神が永くその御血統を萬世一系の皇室の上に傳へてゐらせられる、の意。

〔日神〕 ヒノカミ 天照大神を申し奉る。御名は大日靈貴尊。其の御徳を貴んで天照大神、又日神と稱す。伊邪諾尊の皇女、母は伊邪冊尊。書紀の所傳によると、伊邪諾、伊邪冊の二神既に大八洲を生み給うて後、共に議つて曰「吾已生大八洲國及山川草木。何不再生天下之主者。」

立尊となつてゐる。

「伊邪那岐命・伊邪那美命」イザナギノミコト・イザナミノミコト 神世七代の第七の夫婦神。天神より修理固成の神勅を蒙り、天浮橋に立ち、天沼矛を執つて共に滄海を探つて於能基呂島を得、この島に天降つて夫婦となり、伊豫之二名島(四國)・筑紫島・淡路島・隱岐島・壱岐島・對馬・佐渡島・大倭豊秋津島の所謂、大八洲を産み、次に山・海・風・火等の神を産み給うた。以下古事記の所傳によると、伊邪那美命は火神を生み給ふ際、火に燒かれて神去り給うた。伊邪那岐命は之を追うて黄泉國に至り給うたが、そこに女神の怪奇な姿を見て大いに畏れ、遁れて筑紫日向の橋小門之阿波岐原に到つて禊祓をし給うた。この時多くの神が生まれたが、最後に、天照大神・月讀命・建速須佐之男命の三神が生まれ給うた。即ち「於是洗左御目、所成神名、天照大神神。次洗右御目時、所成神名、月讀命。次洗御鼻時、所成神名、建速須佐之男命。」と記されてゐる。伊邪那岐命大いに歡喜し給うて、天照大神に高天原を、月讀命に夜之國を、須佐之男命に海原を治めしめ給うた。

猶、書紀本文の所傳によると、大八洲に續いて海・川・山・木・草の神を産み、次に日神大日靈貴・月神・素盞鳴尊を生み、その次に火神を生んで神去り給うたとなつ

と、こゝに日神を産み、大日靈貴と名づけ給うた。續いて月神、素盞鳴尊を生み給うた。(猶、この條、古事記の所傳については前述の「伊邪那岐命・伊邪那美命」の項参照。) 大日靈貴尊光華明彩、六合の内に照り徹つた。

二神大いに喜び、命じて高天原を治めしめ給うた。天照大神既に高天原の主となり、農業、養蠶、織物等を獎勵して大いに治績をあげ給うたが、幾何もなく素盞鳴尊の亂暴を憤り、一時天窟屋に隠れ給うたが、群神の請によつて再び出でて、高天原に照臨し給うた。御子天忍穗耳尊を立てて太子となし、豐葦原中國を治めしめんとする御意志であつたが、當時中々國には、大國主尊の勢力が強大であつたので、先づ武甕槌神、經津主神等を遣はして之を平定せしめ給うた。會々忍穗耳尊が瓊々杵尊を生み給うた。大神は特にこの御孫尊を愛し、父尊に代つて中々國を治めしめようとし、授くるに三種の神器を以てし、且つ、「葦原千五百秋之瑞穂國是吾子孫可王地也。宜爾皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆當與天壤無窮者矣。」(書紀一書ニヨル)と詔して、思兼神・天兒屋命等所謂五伴緒神を從ひ降らしめ給うた。

瓊々杵尊以來世々八咫鏡を以て天照大神の御靈代として皇居に奉安し給うたが、十代崇神天皇六年に至り、大和笠縫邑に移し奉り給ひ、更に八十餘年を経て十一代垂

仁天皇二十五年、伊勢の五十鈴川の上に宮を建ててこゝに鎮め奉うた。これが即ち伊勢神宮であつて、皇室及び國民崇敬の中心となつてゐる。

〔異國〕 イコク 「異朝」となつてゐる本もある。外國のこと。

〔北畠親房〕 キタバタケチカフサ 南朝の柱石。家は村上源氏より出で、權大納言師重の子。永仁延慶の間、果進して從四位に敘し參議に任ぜられ、元應元年中納言に遷り、正二位に敘し、元亨三年大納言に陞り、後醍醐天皇の第二皇子世良親王の傅となつた。元徳二年(三十八歳)親王の薨に遭ひ、痛悼して剃髮し、名を宗玄と改めた。元弘元年後醍醐天皇隠岐より還幸し給ひ、建武中興の政を布き給ふに際し再び出でて仕へた。因つて從一位に敘し准大臣となつた。延元元年足利尊氏謀反を起すや嫡子顯家を輔けて王政の復興に努め、延元三年五月、顯家戦歿の後は自ら陣頭に立つて回復に力めた。當時親房の計畫は官軍の主力を以て奥州を定め、ここを本據として中央の回復を圖らうといふにあつた。延元三年顯家の弟顯能が陸奥守となり、義良親王を奉じて奥羽を鎮定せんとするに當り、之を輔けて奥州に向せんとしたが、途中暴風雨に遭つて船は四散し、親房の乗船一艘のみ、常陸に漂着した。これより六年間常陸に於て悪戦苦闘し

た。即ち初は小田治久の據る小田城に入つて賊軍に當つたが、高師直大兵を率ゐて來り攻むるに及び治久賊に降つた爲、親房は關城に移つた。「神皇正統記」の成つたのはこの間である。既にして關城も陥つたので、吉野に走つた。爾來吉野にあつて後村上天皇を輔佐し、吉野朝の恢復に心肝を砕いた。正平九年賀名生に薨じた。

〔神皇正統記〕 ジンワウシヤウトウキ 歴史書。六卷。北畠親房著。

神代より始まつて、後村上天皇に至るまで、神々の御徳、天皇御代々の御事蹟を略述し、以て建國の由來を明かにし、國體の尊嚴を示し、我が國が神祖の直系正統の天皇によつて統治せられ來り、又永久に統治せらるべきこと、而して吉野朝が正統の天皇であることを明かにした史書。君の御爲には政道の御心得となり、臣下の爲には日本國民としての自覺を促したものである。本書は近世の思想界を風靡して尊皇愛國の思想を鼓吹した。明治維新の大業が成つたのも、本書の影響によることが多大である。

〔開卷第一〕 カイクワンダイイチ 書物を開いた一番始めのところ。

〔特筆大書〕 トクヒツタイシヨ 特に目立つやうに著しく書き記すこと。

【今や我が日の神の御子は、天壤と共に萬世一系窮りなき寶祚を嗣がせ給ふ】

大正十五年(二五八六)十二月二十五日、大正天皇崩御と共に皇太子裕仁親王踐祚し給うたことを申す。

〔今や〕 イマヤ 副詞。今にも。

【我が日の神の御子】 皇太子裕仁親王を申し奉る。「我が」とは、親王を我等の日の御子と親しみ呼び奉る言葉。

【日の神の御子】とは、皇太子殿下が、日の神、即ち、天照大神の直系にわたらせ給ふにより、飛躍的によび奉る稱である。

【天壤と共に世萬一系窮りなき寶祚】 天地と共に永遠に盡きることのない萬世一系の皇位、の意。

文脈がやゝこたつてゐるやうである。「萬世一系」は「窮りなき」を修飾する副詞であらうと思はれるが、さうとすれば單に「萬世」とした方が無理がないであらう。「萬世一系」の語が餘りに熟した句である爲に、「萬世」といはうとしたはづみに覺えずかういつてしまつたのでもあらうか。もし「萬世一系」の語を生かさうとするなら、「天壤と共に窮りなき萬世一系の寶祚」とでもしたら文脈が通るであらう。

【寶祚】 ハウソ 帝王の位。又、帝王の齡。こゝは前者。「寶」は美稱。「祚」は、(一)さいはいひ。神から授かる

福祿。(二)さいはいひす。神が福祿を授ける。(三)くらゐ君主の位。帝位。

【吾人草莽の小民】 われら民間の微臣。

【吾人】 ゴジン われ／＼。われら。

【草莽】 サウマウ・サウバウ (一)草の生ひ茂つたところ。くさはら。くさむら。(二)民間。在野。こゝは(一)

【小臣】 セウシン 身分の低い臣下。

【至情と赤心とを披瀝して】 まごころをひらきあけて。

【至情】 も「赤心」も共に、まごころの意。重ね用ひて文意を強めたのである。

【披瀝】 ヒレキ 披瀝(ヒレキ)義。心中の考を包むことなくうちあけること。

【一片の頌辭】 いささかのたたへことば。

【一片】 イツペン (一)ひとひら。ひときれ。(二)一方かたかた。すこし。こゝは(二)で謙遜の意を表す。

【頌辭】 ショウジ (一)功徳を褒め述べる言葉。ほめことば。「頌」(一)ほむ。たたふ。功徳をほめたてる。(二)ほめことば。ほめた詩文。(三)詩經の詩の一體。盛徳をほめ歌つて神に告げるもの。(四)かたち。禮儀を以て姿を整へること。禮容。

【謹んで按ずるに】 謹んで考へてみますのに。皇室に關する事を述べる時に冒頭する言葉。

〔按ず〕 アンズ (一) おさへる。ひき止める。抑止する。(二) なる。なでさする。(三) しらべる。とりしらべる。罪人又は悪事を檢舉する。巡察する。(四) かんがへる。〔案〕に同じ。こゝは(四)。

【皇室典範】 クワウツツテンパン 明治二十二年二月十一日、憲法と共に欽定發布せられた、皇室の法規。皇位繼承・踐祚即位・成年立后立太子・敬稱・攝政・太傅・皇族・世傳御料・皇室經費・皇族訴訟及び懲戒・皇族會議補則の十二章六十二條及び同増補から成つてゐる。

【天皇崩スルトキハ皇嗣即チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク】

皇室典範の全體を通じての第十條であり、第二章踐祚即位の第一番目である。この前に第一章皇位繼承の項が第九條まであるのに次ぐ。

〔天皇〕 テンワウ 日本帝國の主權者の御稱號。古訓、「スメラミコト」、又は「スメミマノミコト」といふ。天皇の文字は唐書高宗の上元二年八月の條に、「皇帝稱天皇、皇后稱天后。」などとあつて、支那で用ひられたものを我が國でも用ひたのである。天皇には又、天子・皇帝の別稱があり、下より稱する語に、一人・至尊・主上・内・上・天神御子・日之御子・現人神・明御神・大君・御門・内裏・禁裏・十善の君等があり、敬語には陛下と稱する。古事記及び日本書紀には神武天皇以下歷代皆天

皇の稱を用ひてゐるけれども、皆追書に係る。欽明紀九年四月の條に百濟の使の奏上を擧げて、「伏願可畏天皇西蕃皆稱日本天皇云々」とあり、又推古紀に聖德太子の唐に贈り給うた國書を擧げて、「其辭曰、東天皇敬白西皇帝云々」とあるのが、實際にこの稱を用ひた初見である。蓋し此の頃に及んで漸く天皇なる文字を使用する事となつたものであらう。文武天皇の大寶令には「天子、祭祀所稱」とあり、令義解に「謂告神祇稱爲天皇」と見える。之を以て見れば當時の制では、陛下自ら天皇と稱し給ふことは、神祇に對する時に限られてゐたことが知られる。

〔崩す〕 ホウズ (一) くづる。山崩る。(二) 天皇の死。君王の殞落。天子の崩御は恰も山岳のくづれる如き大事なる意。こゝは(二)。

〔皇嗣〕 クワウシ 天皇の御世嗣。
〔即チ〕 スナハチ (一) 今。只今。すぐに。直ちに(二) とも直さず。(三) もし。萬一。こゝは(一)。

〔踐祚〕 センソ。踐祚とも書く。皇太子が皇位をうけ継ぎ給ふこと。先帝の崩御直後に行はれ、三種の神器を承けさせ給ふ。上古には踐祚と即位との間に區別がなかつたが、清和天皇の朝、貞觀儀式の制定あるに及び、二者を區別して、時日を隔てて行はせられ、踐祚は、天皇が

祖宗の神器を承けて皇位を繼承し給ふことをいひ、即位は、更に儀を整へ、禮を大にして、天皇登極の大事を群臣百僚以下臣民及び外國使臣に宣り知らせ給ふ儀禮となつた。踐祚後直ちに元號を改められる。

〔祖宗〕 ソソウ (一) 祖は始、「宗」は本の義。(二) 天子の御祖先。(三) 創業の始祖と中興の祖と。(三) 現代以前の代々の君主の稱。こゝは(一)。

〔神器〕 シンキ こゝは、三種の神器、即ち、天照大神から天孫瓊杵尊に賜はつた八咫鏡・天叢雲劍(又、草薙劍)・八咫瓊曲玉の三器。凡そ皇位の繼承には必ずこの三種の神器の傳授を伴ふ例である。但し、現今踐祚に當つて承け給ふのは三種の内、神瓊のみが天照大神以來のもので鏡と劍とは摸造品である。即ち、神鏡は伊勢神宮に神劍は熱田神宮に奉祀されてゐるのである。次に詳説する。

「八咫鏡」起源が明かでない。記紀、岩戸隠の條に、萬神が天安河邊に會合して日神を再現させ奉らんと計つた時、「中臣連遠祖天兒屋命、忌部遠祖太玉命、天香山之五百箇真坂樹、而上枝懸八坂瓊之五百箇御統、中枝懸八咫鏡、下枝懸青和幣白和幣、相與致其祈禱焉。」とあるのが初見である。書紀の一書によると、「上枝懸以鏡作速祖天拔戸兒凝戸邊所作八咫鏡、中枝懸以玉作

遠祖伊弉諾尊兒天明玉所作八坂瓊之曲玉」とある。「八坂瓊曲玉」起源が明でない。書紀の一書に、素盞鳴尊が、根の國に赴くに當り、天照大神に暇乞ひの爲、昇天し給はんとする時、羽明玉といふ神が、八坂瓊曲玉を尊に奉る。尊は之を持つて天上に到り大神に獻じ給うたと傳へてゐる。猶、「八咫鏡」の項参照。

「天叢雲劍」記紀の傳へる所によると、この劍は、素盞鳴尊が、出雲國簸川の上に於て八岐大蛇を退治し給うた時、その尾の中より獲たまうたものである。尊は之を以て、神劍なり、私すべからず、として天照大神に獻上し給うた。

天孫降臨に當つて、大神はこの三種の神器を瓊杵尊に授け給うた。尊は之を拜受して高千穂宮に奉安し給ひ神武天皇が都を大和國橿原に遷し給ふに及んで、特に三器を尊崇して殿内に奉安し給うたが、崇神天皇の御時、神威を濟さんことを恐れ、劍・鏡の二種を摸造して殿内に奉安し、原物を大和國笠縫邑に移し、磯城神籬を立て、皇女豐鍬入姫をして之を齋ひ奉らしめ給うた。爾來摸造の劍・鏡は神聖と共に皇位繼承の信憑として常に至尊の御身を離れることがない。

給うた。伊勢大神宮が是である。即ち、大神宮は、天照大神の御靈代として神鏡を齋き祭る所であつて神鏡そのものを祭つてゐるのではない。

後、景行天皇の御代、皇子日本武尊勅命を奉じて、蝦夷征伐に向はんとして、途次、伊勢神宮に詣で給うた際、倭姫命神劍を日本武尊に授け給うた。尊、之を奉じて東國に下り賊徒を征し給うたが、駿河國焼津に於て賊の爲に野火に焼かれ給はんとした際、神劍を抜いて草を薙ぎ、火を滅して遂に賊を平げ給うた。よつて名を改めて草薙劍と稱する。尊は御歸途、伊勢國能褒野に到つて遂に薙給ひ、神劍は尾張國熱田に熱田神宮を建てて尊と共に奉祀せられた。

又、皇居に奉安せられた神璽は壽永の亂に海に沈んだが、浮かび出て宮中に還つた。

猶、摸造の鏡は、天徳四年・寛弘二年・長久元年の三度、火災にかゝつて焼損したので唐櫃に收められてあつたが、壽永の亂に安德天皇と共に海に沈んだが、浮かび出て内裡に歸つた。

摸造の劍は、壽永の亂に遂に海底に沈んだので、晝御座劍を以て代用し、後、土御門天皇の時、伊勢より御劍を奉つてから、これを神劍に定め給うた。

南北朝五十年の間、神器は儼として南朝に在つたが、

後、龜山天皇の時、南北合一して神器を後小松天皇に傳へ給ひ、爾來今日に傳へられてゐる。

【國史】 コクシ (一)一國の歴史。(二)我が國の歴史。こは(一)。

【昭乎】 セウコ あきらかなる貌。

【瞭か】 アキラカ 眼睛明らかなこと。あきらか。

【蓋し天子の位、一日も曠しくすべからずとは、歴世の宣命にも明記せられたる所なり】

「天子の位、一日も曠しくすべからず」といふ意味の言葉は、續日本紀宣命には一箇所も見出されない。仁徳紀の初に大鷦鷯尊と菟道稚郎子とが互に位を譲り合ひ給ふ條に「大鷦鷯尊對言、先皇謂皇位者一日之不可空。故預選明德立王爲貳祚、之以嗣授、之以民云々」とあるのが一箇所見出される。

降つて現代に至ると大正天皇踐祚後朝見の御儀に於ける勅語に「朕俄ニ大喪ニ遭ヒ哀痛極リ罔シ、但ク皇位一日モ曠クスヘカラス國政須臾モ廢スヘカサルヲ以テ朕ハ茲ニ踐祚ノ式ヲ行ヘリ」と宣ひ、今上天皇踐祚後朝見の御儀に於て賜はりたる勅語には「遽ニ登遐ニ遭ヒテ哀痛極リナシ但皇位ハ一日モ之ヲ曠クスヘカラス萬機ハ一日モ之ヲ廢スヘカラス哀ヲ衝ミ痛ヲ懷キ以テ大統ヲ嗣ケリ」と仰せられてゐる。

【曠しくす】 ムナしくす 空位にする。

【宣命】 第一課「國語と日本精神」語釋の條参照。

【國家の變故に際する毎に、帝國の舊章古典は恆に吾人の指導者たり】

之を國史上に例を求めると、一、建武中興に際しては神武天皇の御政道及大化改新がその指導者となつて居り二、明治維新に際しては、神武天皇の御政道、及大化改新、建武中興の御政道、並びに、古事記、神皇正統記、大日本史、日本外史等の古典が、その指導者となつてゐる。

【變故】 ヘンコ 非常の事柄。事變。

【舊章】 キウシヤウ 先王の禮樂・刑政等。昔ののり。古いおきて。從來の法令

【古典】 コテン (一)昔の儀式又は法式。(二)古代の書物又は記録。(三)クラシック。こゝは(一)。「舊章」と同義。修辭上反覆したのである。

【吾人】 コゝは、意味を擴大して、國民の意に解すべきであらう。

【今や親しく其の實物教訓に接す】 國家の變故に際する毎に、帝國の舊章・古典が恆に國民を指導するといふことの實地の教訓を目のあたりに見た、の意。

こゝは、大正天皇崩御と共に、皇儲裕仁親王が古か

らのおきてのまゝに皇位を踐み給うたことを拜して、舊章・古典の教訓を感じた心持である。

【實物教訓】 ジツブツケウケン 實物を以てする教訓。實地の教訓。

【恭しく惟みるに】 ウヤウヤしくオモンみるに 謹んで考へてみますのに。前の「謹んで按するに」と同じく皇室に關することを言ふ時に冒頭する語。

【惟みる】 オモンみる 「おもひみる」の音便。つらつら考へてみる。おもひめぐらす。

【今上天皇陛下】 キンジャウテンワウヘイカ 現に日本帝國を統治し給ふ天皇を申し奉る。人皇第百二十四代に當らせ給ふ。御名は裕仁。明治三十四年四月二十九日東京青山東宮御所に於て御降誕。學習院初等科時代に乃木大將の御傳育を、東宮御學問所時代に東郷大將の御傳育を受けさせられた。大正五年立太子式を擧げさせられ、大正八年五月、御成年式御舉行、大正十年三月海外御巡遊の途に就かせられ、英・佛・白・蘭・伊の諸國を巡訪し給うて、同年九月恙なく御歸朝遊ばされた。同年十一月天皇久しきに亘る御疾患の爲、大政を親らし給うること能はざるを以て、皇室典範第十九條の規定により攝政とならせ給うた。大正十三年一月、久邇宮邦彥王第一王女、良子女王を立てて皇太子妃となし、御成婚式を擧げ給う

た。大正十五年十二月二十五日大正天皇遂に葉山の御用邸に於て崩御あらせられた。御壽四十八。この日今上天皇直ちに踐祚し給ひ、改元して昭和と稱し給ふ。昭和三年十一月十日京都御所に於て即位式を挙げさせ給うた。昭和八年十二月二十三日皇太子繼宮明仁親王御降誕遊ばされた。

天皇天資聰明にましまし、深く國運の隆昌、國家の繁榮に叙慮を注ぎ給ひ、昭和元年十二月二十八日 踐祚後朝見の御儀に於て勅語を喚發して昭和日本の目標を示し給ひ、又昭和八年三月二十七日には國際聯盟離脱に關する詔書を發し給うて國民の奮起を促し給ふ等、日夜國務に勵精し給ふは誠に恐懼感激の極みである。

〔陛下〕 ヘイカ 天皇・大皇太后・皇太后・皇后の敬稱。「陛」は宮殿の階段をいふ。直接申すは恐れ多い故、階の下を以て稱し奉るのである。

〔天資聰明〕 テンシソウメイ うまれつきさとかかしこいこと。

〔仁孝の徳〕 仁慈孝行の徳。

〔蚤に〕 ットに 早くより。

〔蚤〕 サウ (一)のみ。(二)早し。つとに。(三)爪。

〔治し〕 アマネし 隅なく及ぶこと。

〔攝政〕 セツシヤウ (一)古昔、君主に代つて萬機の政を

攝行する官。我が國では、幼帝又は女帝などの時に置かれた。應神天皇の朝、御母神功皇后が始めて攝政とならせられ、爾來、皇族を以て任ぜられたが、清和天皇御幼少の砌、藤原良房が之に任ぜられてから、藤原氏が専ら之に任ぜられるやうになつた。(二)明治二十二年發布せられた皇室典範第五章によつて定められた機關。即ち、天皇未だ成年に達し給はざるか、若しくは久しきに亘る故障があつて、大政を親らし給ふこと能はざる時、天皇の御名に於て天皇の大權を行ふ憲法上の機關であつて、成年の皇太子又は皇太孫を以て之に任ぜられるを原則とする。こゝは(二)。(今上天皇陛下)の項参照。

〔先帝〕 センテイ 先代の天子の意。こゝは、第二百二十三代、大正天皇を申す。御名嘉仁。明治十二年八月三十一日東京青山御所に御降誕。御生母柳原愛子。明宮と稱し奉る。二十年八月東京宣下。九月學習院に御入學。二十二年十一月三日立太子式御舉行。二十七年學習院御退學。赤坂離宮内に御學問所設置。三十三年五月九條節子姫と御成婚式舉行遊ばされた。三十四年四月二十九日第一皇子迪宮(今上)御降誕。三十五年第二皇子淳宮(秩父宮雍仁親王)御降誕。三十八年光宮(高松宮宣仁親王)御降誕。四十年韓國御巡遊。四十五年七月三十日御父治明天皇崩御につき御踐祚、大正と改元。大正三年四月十

〔御經驗〕 ゴケイケン

〔御〕 尊敬の意を表す接頭語。

〔經驗〕 (一)實際にためし試みたこと。又、それから得た知識・技能。(二)觀察・實驗等の方法によつて得た知識。(三)感官を通じて得た知覺。又、知覺によつて結合せられた知識。こゝは(一)で政治上の御經驗をいふ。

〔皇太子として世界を周遊あらせられたる如きは、國史上未曾有のことなり〕

前述、「今上天皇陛下」の項参照。

〔皇太子〕 クワウタイシ やがて皇位を繼承し給ふべき皇子。ひつぎのみこ。まうけのみき。東宮。春宮。

〔周遊〕 シウイウ めぐりあそぶこと。

〔國史上未曾有のこと〕 日本歴史上、未だ一度もないこと。

〔未曾有〕 ミゾウ まだ嘗て一度も無いこと。

〔洵に〕 マコトに

〔洵〕 シンジュン (一)川の名。うづまさ。(二)まこと。まこと。(三)遠し。(三)句に通ず。

〔其の生を享け〕 生れ合せ、の意。

〔其〕 我自らを指す。

〔享く〕 ウク (一)受く。納む。食む。(二)當る。(三)まつる。たてまつる。すゝむ。もてなす。

一日昭憲皇太后崩御。四年十一月十日京都に御即位の大禮を行はせ給うた。十二月第四皇子澄宮(三笠宮崇仁親王)御降誕。五年十一月三日東宮裕仁親王立太子式御舉行。十年三月東宮殿下歐洲御巡遊に御出發。九月御歸朝十一月皇族會議の結果皇太子攝政に御就任の議決定。十三年一月、東宮殿下久邇宮良子女王殿下と御成婚式御舉行。十五年六月長慶天皇御在位宣布の詔書下る。同十二月二十五日崩御。翌昭和二年二月七日御大葬儀が行はれ多摩御陵に葬り奉る。御壽四十八。

〔庶政〕 ショセイ もろもろのまつりごと。

〔庶〕 もろもろ。多し。修る。肥ゆ。幸。希ふ。近し。妾腹の子。支族。人民毒蟲を驅除す。據に通ず。

〔總ぶ〕

〔總ぶ〕 スブ (一)箇々のものを一つにする。別々のものをまとめる。しめくくる。とりつかねる。(二)支配する。管轄する。總攬する。一手にまとめる。こゝは(二)

〔百揆〕 ヒヤクキ 庶政をはかる官。百官。

〔揆〕 はかる。はかりごと。

〔攬り〕

〔攬る〕 トる 取り持つこと。持つ。つまむ。但しこゝは、「總ぶ」と同じく、一手にとりまとめるの意。總攬を分つて對句にしたのである。

【福祉】 フクシ、さいはひ。幸福。

【社】 さいはひ。

【冥加】 ミヤウガ (一)冥々の裡に神佛の加護を蒙ること
目に見えぬ神佛のお助け。冥助。冥利。(二)冥加金の
略。(三)おかげ。おたすけ。こゝは(一)。

【感佩】 カンバイ かたじけなく心に感ずること。深く感
じて心に忘れぬこと。

【佩】 (一)帯ぶ。つく。まとふ。もつ。はく。(二)おび
だま。おびもの。おほおび。玉飾の大帯。

【皇政維新の大改革以來、既に六十年を経過せり】

慶應三年(二五二七)將軍徳川慶喜大政を奉還して王
政古に復つてから昭和元年(二五八六)まで、丁度六十
年である。

【皇政維新】 ワウセイキンシン 明治維新を指す。明治元
年を中心として政治上・社會上に行はれた大變革。

その眼目は、(一)政治上 (イ)七百年の武家政治が滅
びて大政が天皇に復つたこと。(ロ)諸大名の私有してゐ
た土地及人民を、朝廷に奉還し奉つたこと。版籍奉還。

(ハ)行政組織を改め、從來の藩を廢して新たに府縣を置
いたこと。廢藩置縣。(ニ)や、後れて、内閣制度の創設
と立憲政體の創立。(ホ)地方自治制の實施。

(二) 社會上 (イ)四民平等制の確立。公卿・大名の

なりゆき。(六)意氣。氣焰。こゝは(五)、なりゆき上、
おのづから、の意。

【世界大戰】 セカイタイセン 我が大正三年(一九一四)
八月歐洲に勃發し、大正七年(一九一八)十二月に休戦
大正八年(一九一九)六月媾和條約の成るまで、前後約
五年に亘つた大戦争。獨逸・奧太利・土耳其・ブルガリ
ヤ對佛蘭西・露西亞・英吉利・白耳義・伊太利・日本・
セルヴィヤ・ルーマニヤ・北米合衆國の間に戦はれた曠
古未有の大戦。

西洋諸國は最近五十年來互に帝國主義を奉じて、自國
の經濟的・政治的勢力の膨脹發展に努め、それが爲に激烈
な軍備競争を引起した。それら諸國の中でも獨逸はウイ
リヤム二世(カイセルとよばれる)の時代に目覺しい對外活躍を試
みて、屢々列強の勢力均衡を破る處があつた爲、英・露・
佛等の強國は常にその對策を怠らなかつた。又、バルカ
ン半島のスラヴ諸國は近年著しく民族的自覺を強め、同
民族たる露國を後楯として活動を始めた。セルヴィヤの
如きはその最も著しいものであつた。獨・奧兩國のドイ
ツ民族はこのスラヴ族の運動に對し、トルコと提携して
バルカン半島方面にドイツ民族の勢力を張ることに努め
た。殊に奧國は頻りにセルヴィヤに壓迫を加へた爲、セ
ルヴィヤ人の奧國を憎むことが著しくなつたが、遂に一

名稱を廢して華族となし、諸藩士を士族とし、平民の苗
字を稱するを許し、華族と平民との婚嫁を許し、穢多・
非人の稱を廢して平民に編入した。(ロ)資本主義經濟の
發足。(ハ)士民の斬髮・廢刀。(ニ)交通機關の架設。
(ホ)義務教育制度の制定。(ヘ)徴兵制度の創設。等であ
らう。

猶、皇政維新とは、天皇の御親政となつて世の中の一
切がすつかり新しくなつたこと、の意。

【而して帝國の國運は、世界の變遷と與に、勢ひ變遷せざ
るを得ざるものあり】

今日の國際關係は昔日のそれと異なり、密接な有機的
關聯の上に立つてゐるので、思想・政治・經濟・軍備等
の上に於て移りゆく世界狀勢に即應變化して行かねば國
家の存立を完うすることは出来難い、の意。

【國運】 コクウン 國家の運勢。學問・思想・藝術・宗
教・道德・法律・政治・經濟・軍備等がその内容をなす。

「運」(一)めぐりくる命數。めぐりくる善惡の象。まは
りあはせ。天命。天運。運命。(二)うつりかはる時勢。
時折。(三)幸福なまはりあはせ。

【勢ひ】 イキホひ (一)いきほふこと。いきほふ力。競
争力。(二)人を壓する威力。(三)元氣。氣力。活動力。
發動せんとする力。(四)様子。有様。(五)はすみ。機會

九一四年六月セルヴィヤ黨の一青年が奧國皇太子フェル
ディナンド公を暗殺した爲、奧國とセルヴィヤとの開戦
となり、次いで奧國を援くる獨、セルヴィヤを援くる露
兩國及び同じくセルヴィヤに加擔する英佛の參戦となつ
た。

獨軍は開戦と同時に疾風の勢でベルギーを蹂躪し、直
ちに佛國に侵入して巴里に迫つたが、マルヌの會戦で佛
國軍司令官ジョッフルの爲に喰止められ、以後陣地を固
めて英・佛聯合軍と對峙した。

東方では最初露軍が北獨逸に侵入したが、獨將ヒンデ
ンブルグの爲にタンネンベルクで破られて退却した。獨
奧兩軍は更にバルカン半島に南下して戦争の發頭人たる
セルヴィヤに大打撃を加へ殆どその國土を占領した。英
佛兩國は一軍を派してセルヴィヤを援助し、又一部はト
ルコを攻めたが失敗に歸した。

一九一六年に至つて獨軍は全力を擧げて西部戦線の突
破を試み、攻撃の銳鋒をヴェルダン要塞に集中した。こ
のヴェルダン攻撃は數箇月に亘つた激戦で、獨・佛兩軍
ともに死力を盡して攻防に當り、特に獨軍の拂つた犠牲
は莫大で、屍の山を築き、砲撃の爲地形の一變した程の
猛攻撃を續けたのであるが、佛軍の防禦の勇敢巧妙の爲
に遂に之を抜くことが出来なかつた。

又、日本は東洋平和と日英同盟の誼とを重んじ、開戦後間もなく獨逸に宣戦し、東洋に於ける獨逸の勢力を一掃する爲、陸軍は支那膠州灣を攻めて之を陥れ、海軍は南洋の獨逸諸島を占領し、尙獨逸艦船の海上に跋扈するのを掃蕩して、東洋方面の平和維持に努めた。

海軍に於ては獨逸は英國の敵ではなかつた。一九一六年五月ユトランド沖の大海戦に於て獨逸艦隊は英艦隊の爲に全く壓倒せられてしまつた。以來獨逸海軍は潜水艇を用ひて地中海・大西洋等に於て、盛んに聯合國の艦船を撃沈した。獨逸は又一方、飛行機・飛行船を飛ばして聯合國の市街に爆弾を投下した。殊に一九一七年初に無制限潜水艇戦を宣言してより、人道を無視して海上に暴威を逞くし、中立國船船にも残酷な危害を加へた爲、久しく中立を守つてゐた北米合衆國も之に憤慨して遂に同年聯合國側に参加するに至つた。

開戦當時のドイツ國民の舉國一致の態度は目覚しいものがあり、政治・經濟・社會の諸設備を巧みに戦時體制に變更して、軍國の眞面目を發揮したが、國家は全然聯合國の爲に封鎖状態に陥り、戦期の長引くに従ひ、食料品その他日用の物資は缺乏し、物價は騰貴し、國民生活は漸く窮乏を告げて來た。それに伴つて社會主義者の平和運動や労働者の不平の聲が昂まるに至つた。さうし

て一九一七年以後國內の主戦・平和兩派の論争が劇化し爲に首相ベートマン・ホルウェヒも遂に辭職した。之に反し英・佛兩國は最初から獨逸軍國主義撃滅の決心を固めて變らず、殊に一九一七年以後英國にロイド・ジョージ内閣が成立し、佛國にクレマンソー内閣が出現してから、戦争遂行の決心は益々鞏固となつた。但し兩國とも國民の生活が物價騰貴や食料品缺乏によつて苦しめられたことは少くなかつた。

聯合國の一たる露國は農業國で殖産興業がまだ十分に發達してゐなかつた爲、軍需品が缺乏し、その上作戦の祕密が屢々スパイの爲に獨逸側に洩れて大敗を重ねたので、戦争の中止を切實に希望するやうになつた。多年專制政治の下に壓迫され來つた國民の不平は、この戦時生活の苦痛と、社會主義者の運動とによつて昂められ、遂に一九一七年三月に至つて革命勃發し、皇室ロマノフ家の專制政治は倒れ、皇帝ニコラス二世は死刑に處せられた。聯合國は革命政府を後援して獨逸との戦争を繼續させるに努めたが、同年十一月第二回革命が行はれて政權は全く過激共產黨派レン・トロツキー等の手に歸しソヴェート政府が建設せられ、こゝに共產主義政治が行はれ、交戦を中止して獨逸と和約を締結した。露國革命によつて聯合國の對獨封鎖線の一角はこゝに崩潰した。

イタリヤ方面では一九一七年末に獨逸軍が大舉して進撃し、伊軍は潰走して一時伊太利は危機に瀕した。

獨逸は露國と媾和して後、東方より廻送した兵力を合せ、一九一八年三月から七月に亘つて西部戦線に於て掉尾の大攻撃を執行し、前後四回に亘つて必死の猛攻奇襲を繰返したが、遂に目的を達することが出来なかつた。

聯合軍之に乗じて佛將フォッシュ元帥の總指揮の下に進んで着々獨逸軍を壓迫し、獨逸はもはや戦線を維持することが出来ず全線に亘つて總退却を開始した。又伊軍は攻勢に出て續々獨逸軍を撃破した。十一月に至り獨逸兩國内に革命が勃發し、兩國の皇帝は相次いで帝位を去り、兩國何れも民主的の共和國を建て、新政府によつて同月休戦條約が結ばれた。

越えて大正八年(一九一九)六月、佛國ヴェルサイユで媾和條約が締結された。その結果、獨逸は莫大の償金の外數多の物資を聯合諸國に引渡し、陸海軍は兵數を制限され、海外植民地はすべて放棄し、歐洲の大國としての勢力を甚しく減損したのみでなく、アルサス・ローレンの二州を佛國に割讓し、その他國境地方を失つたことが少くない。爲に獨逸の受けた打撃は非常なもので、獨逸は暴落し、物價は暴騰して、その戦後生活の惨狀は實に慘憺たるものであつた。

又獨逸は元來異民族の多い國家なので、戦後は國土が四分五裂して塊・匈・チェッコスロヴァキア等の數國となりトルコはその歐洲の領土を殆ど喪失した。

聯合國は獨逸の植民地を統治し、又領土を擴めたものもあるが、莫大の戦費の爲、財政疲弊に悩んでゐる國も少くない。媾和條約と共に國際聯盟が成立して世界の事件は聯盟によつて處理され、ヴェルサイユ條約の實行を監督し、將來世界の平和を維持すべき任務を負ふこととなつた。

【無比の大國たる露】

〔露西亞〕 ロシヤの建國は九世紀の中葉、ノルマン人ルリクに始まる。十三世紀の初に行はれた元の西征はロシヤ全土を蹂躪してヴォルガ河畔に欽察汗國が建設されたが、約二世紀の後、同汗國の衰微に乗じてモスコイ大公イワン三世が擡頭し、次第に勢力を四隣に扶植し、遂に汗國を剿滅してロシヤ統一の基をたてた(一四八〇)。イワン三世の孫イワン四世は前時代以來の政策を踏襲して南はカスピ海の北岸まで勢力を伸ばし、公然と皇帝を稱し、東はシベリヤ侵入の緒についた。然しその死後、内亂が起つて國勢は衰頹した。この内亂に乗じて起り、内亂を平定して帝位を篡奪した(一六一三)のがミハイル・ロマノフで、自らルリクの後裔と稱した。最近の革命ま

で續いたロマノフ王朝はこゝに始まる。この當時ロシアは國勢が微弱であり、約二世紀に亘つて蒙古人の支配下に在つたので東洋風であつて、到底西歐諸國と相交る丈の文化を持つてゐなかつた。十七世紀の末、有名なベートル大帝が出て、大いに西歐文化をロシアに取入れ、専心、近代ロシア帝國建設の途を拓いた。其の後カザリン二世・アレキサンダー一世等が出て領土を擴張し、内政に外交に文化政策に大いに活躍した。然しこの頃からフランス大革命による自由思想は潮のやうに專制治下のロシアに流れ入り、各種の社會運動が相次いで起るに至つた。然しながら二十世紀のロシアは專制と侵略とに終始し、太平洋を望んで東へ東へとシベリヤ侵略の歩武を進めて遂に日露戦争の爆發となつた。敗戦を機會に革命團體は大同團結してロマノフ家に迫り、一九〇五年、議會と憲法とを闘ひ取つた。然し折角闘ひ取つた議會政治も、その後の反動政府の壓迫の爲に華々しい發展を見るに至らず、急進分子レーニン、トロツキー等は多く海外に亡命して世界大戰に及んだ。以下〔世界大戰〕の項を参照。

【無比の強國たる獨】

〔獨逸〕 五世紀の末葉、ゲルマン民族フランク族が西ヨーロッパに建てたフランク王國が、八四三年及八七〇年

の二回の内紛による分割によつて東フランク・西フランク・イタリアに三分された。これが後の、ドイツ・フランス・イタリア三國の發祥である。東フランク、即ち、ドイツ(オーストリアを含む)では十世紀の中葉にオットー大帝が出て國內の叛亂を平げイタリアを併せ、九六二年ローマ法皇から帝冠を受けて神聖ローマ皇帝と稱した。以後、ドイツ國王は歴代この稱號を用ひた。十三世紀後半はドイツの大空位時代と呼ばれ、秩序は破壊され國家は分裂し、諸侯は、各自の領土統治のみに力を用ひた。十七世紀の初め、ブランデンブルグ選舉侯がもとドイツ武士團の所領であつたプロシヤの地を併せてプロシヤ公と稱した。その三代後のフレデリック一世は、イスパニヤ繼承戦に、ドイツ皇帝を援けた功によつて王號を許されたので、プロシヤ王となりフレデリック一世と稱した。次いでフレデリック一世の孫フレデリック大王の時、ドイツ皇帝チャールス六世が歿して(ドイツ皇帝は宗主的に全ドイツを、實質的にはオーストリアを支配してゐたのである)皇女マリア・テレサが立つてオーストリアの全土を相續するや、オーストリア繼承戦争を惹起し、フレデリック大王は兵をオーストリアに進めてシレジアを占領し、次いで之をプロシヤに割讓せしめ、マリア・テレサの相續權は承認した。十八世紀末から十九世

の盟主となつた。

一八七〇年、イスパニヤ王位繼承問題が原因となつてプロシヤとフランスとの間に戦争が起つた。プロシヤの大軍は疾風の如くフランス國內に侵入し、佛帝ナポレオン三世をセダン城下に破つて之を捕虜とした。フランスは王政を廢して假共和政府を建て、専ら防禦に努めたがその效なく一八七一年、巴里陥落し、遂に償金五十億フランを出し、且、アルサス及びローレンをプロシヤに割讓して媾和した。

この戦役中にドイツ統一の議が漸く熟したので國王ウイリアム一世は國民の希望を容れ、一八七一年、戦役中大本營のあつたヴェルサイユ宮殿でドイツ皇帝の位に即き、ついでベルリンに聯邦會議を開いて聯邦の憲法を制定し、プロシヤ國王はドイツ皇帝の位を世襲することとなり、こゝに統一の事業は完成した。これよりウイリアム一世は宰相ビスマルクの輔佐を得て戦後の經營に努め軍備、産業、貿易等に飛躍的發展を遂げ、且つアフリカ及び太平洋に植民地を獲得して歐洲最強國の一に躍進するに至つた。

ドイツは普佛戦争後フランスに備へる爲に、一八八二年、オーストリア・イタリアとの間に三國同盟を締結した。

紀初頭にかけてプロシヤ王國及びオーストリア帝國は佛國ナポレオン一世の勢力下に置かれ、神聖ローマ帝國は解散して皇帝フランシス二世は單にオーストリア皇帝となり、フランシス一世と稱ふるに至つた。一八一二年ナポレオン一世がモスコイ遠征に失敗するや、列國は大同團結を作つて佛蘭西に攻入りナポレオン一世は失脚し、ウィーン會議の結果、フランスはその侵地を還し、オーストリアはネーデルランドを棄ててイタリアの北部を得、ロシアはポーランドの大部分を取り、プロシヤはサクソニアの北半を得、そしてドイツの三十五州と四自由市とはドイツ聯邦を組織した。かくてドイツ聯邦内のプロシヤとオーストリアとは互に權力を争つてゐたが、一八六二年、プロシヤ國王ウイリアム一世はビスマルクを宰相に、モルトケを參謀總長に任じて銳意治を勵み、軍備を擴張して國力の充實に努めた。

一八六六年、豫てオーストリアをドイツ聯邦外に放逐してドイツの統一を完成しようとしてゐたプロシヤは、さきにデンマークから奪つたシュレスウィヒ・ホルスタインの處分でオーストリアと衝突して遂に之に宣戦し、イタリアの援を得て、オーストリア軍を破り、その結果、オーストリアはドイツ聯邦を退き、戦後、プロシヤは北ドイツの諸小邦を併せて北ドイツ聯邦を組織して自らそ

ウィリアム一世の孫、ウィリアム二世（カイゼルと呼ばれる）が立つや、帝は夙にドイツを世界的の大國家とする抱負を有し、陸海軍の大擴張を斷行し、勤勉不屈の國民性を利用して、殖産興業の發展を圖つたので、國力が充實してその富強は列國を凌ぐやうになつた。

一方フランスは普佛戰爭後、次第に國力を回復し、共和政體の基礎が確立してから産業は發展し、軍備は充實して來た。次いでフランスは一八九一年、ロシアと二國同盟を結んでドイツに對抗するやうになつた。

又英國は大陸外にあつて光榮ある孤立を堅持して獨力で能く三國・二國の兩同盟に對峙してゐたが、ドイツの意表的な發展の爲に三國同盟の力が歐洲の均衡を破らうとするに至つて、傳統の孤立主義を棄て、遠く我が國と日英同盟を結び、近くは佛・露と三國協商を約してドイツに對抗することとなつた。

かくて三國同盟と三國協商とは次第に對立激化し、一九一四年に至つて世界大戰の勃發となつた。以下「世界大戰」の項を参照。

【無比の舊國たる塊】

「塊太利」 オーストリア 一八六六年、ドイツ聯邦を追はれて獨立し、翌年ハンガリヤと聯合してオーストリアハンガリー帝國を建てて、尙世界の八大強國の一たる地

位を保つたが、一九一四年八月歐洲大戰が勃發した。以下「世界大戰」の項を参照。

右に述べた如くオーストリアは單獨國家としては一八六六年に始まるが、その發祥は遠く九世紀の東フランク國に溯ることが出来る。無比の舊國とはここまで溯つて言つたのである。

【其の國命を革め】 三國が、帝國から共和國にあらためられたことをいふ。革命を訓み下した言ひ方。

「革命」 カクメイ 易經に「湯武革命、順乎天、而應乎人。」とあるのに基く。(一)天命があらたまる義。前の王統が覆つて他の王統が代つて統治者となること。(二)憲法の範圍をこえて武力を以て國家の基礎・社會の組織を急激に改める政治上・社會上の變革。こゝは(二)。

【東洋に於ける一大帝國たりし清國も、亦宣統帝位を去りて、中華民國となりぬ】

「清國」 シンコク 支那に建てられた滿洲族の國家の名十七世紀初頭滿洲人愛親覺羅努爾哈赤によつて興り、次第に近隣を併せ、明を破つて瀋陽に都した。その子太宗は内蒙古諸部を略し、國號を清と改め、皇帝を稱し、明の滅亡後國都を北京に移して支那全土を一統し(一六六一)以後、中華民國成立(一九一二)に至るまで約三百年間、存続した。明の中世頃から東漸の勢を示した歐洲

人は清國建設の前後から頻繁に支那と交通し、基督教の宣教師が西洋の學術を支那に傳へた。次いで聖祖康熙帝世宗 高宗乾隆帝の三代は清朝極盛の世であり、北は内外蒙古及ジュンガル諸部、南は緬甸・暹羅・安南等みな清に歸服し、西藏も亦服屬した。同時に清朝は漢人の學者を優遇して大部の書籍を編纂せしめると共にいはゆる考證の學が起り、詩文・戯曲・小説等が發達して清朝文化が大成した。ヨーロッパ人に對しても強硬で、北滿に於けるロシアの侵略をも撃退した程であつた。然るに高宗の晩年政綱漸く弛み、次の仁宗から徳宗に至る間、歐羅巴人の権力次第に東洋に伸び、先づ英國と衝突して阿片戰爭(一八三九—一八四二)起り、これによつて弱體を外國に知られ、次いで長髮賊の亂に苦しみ、ロシアには北滿を奪はれ、伊犁・バミール・西藏等は英・露に讓るなど國威の失墜を繰返し、この前後から朝鮮問題・臺灣歸屬問題・琉球所屬問題に關して我が日本との間に紛議を生じた。徳宗の代の中頃から清朝は全く衰亡期に入り、日清戰爭(一八九四—一八九五)に敗れて無力を曝露して以來、列國の支那に於ける利權競争激甚を極め、一時支那分割論さへ唱へられ、米國の支那門戸開放論となり、その排外運動の結果北清事變(一九〇〇)が起つて更に局面を惡化した。滿洲問題に關して利害を異

にした日露兩國間に日露戰爭(一九〇四—一九〇五)起り、戰後、清朝は立憲政治を以て國勢を恢復しようとしたが果さずして一九一一(明治四十四年)漢人孫逸仙黃興等の革命起り、中華民國が成立して、清朝は滅亡した(一九一二)。

【宣統帝】 セントウテイ 清朝最後の皇帝。西紀一九〇八年(明治四十一年)三歳にして帝位に即き、一九一二(明治四十五年)退位。清朝亡ぶ。

中華民國二十一年滿洲國の成立するや迎へられて執政となり、大同三年(一九三四)三月一日滿洲國の帝政實施と共に國都新京に皇帝即位式を舉げ、年號を康德と改めた。

【中華民國】 チュウクワミンコク 西紀一九一一年漢人の革命成るや、革命の元老孫逸仙は推されて臨時大總統となり臨時政府を組織した。翌一九一二年(明治四十五年)此年を以て民國紀元元年とする。二月孫文辭し、袁世凱は參議院に推されて臨時大總統となり、翌年(大正二年)第一回民國國會を北京に開いた。

舊革命黨員等は袁世凱の專横を憤り、同年七月第二の革命軍を起したが大敗して孫文・黃興等は海外に奔つた。かくて同大正二年十月國會の選舉によつて袁世凱は大總統に、黎元洪は副大總統に就任し、支那共和國即ち、中

華民國が正式に成立し、列國が之を承認した。

民國四年(大正四年)袁世凱が皇帝たらんとするや、第三次革命起り、袁氏は引退して悶死した。黎元洪が後に立つた。民國六年に至り張勳は宣統帝の復辟を企てたが失敗し、黎元洪は此事變後引責辭職し、馮國璋が之に代り、同年八月獨塊に宣戰した。一方參戰に反對して國會解散を命ぜられた南方民黨派は南方に奔り、孫文を大元帥に戴いて廣東政府を樹立し、北京政府と對立するに至つた。一九一九年上海に南北和平會議が開かれたが意見一致せず、會議は遂に無効に終つた。加之、北方では直隸派(馮國璋派)と安徽派(段祺瑞派)の反目となり、南方では文人派(孫文派)と武人派(岑春煊派)との對立となり、南北とも内訌が絶えなかつた。北方に於ては次いで奉天派の主領張作霖と直隸派の領袖吳佩孚との間に軋轢を生じ、前後二回の奉直戰起り、戰に勝つた張作霖は東三省の獨立を宣言した。一九二六年、突如南方に國民革命起り、孫文の繼承者たる蔣介石は學生軍を率ゐて廣東を平定し、次いで翌年國民黨政府を樹立し、共產黨と分離して大いに畫策したが、一時野に下り、雌伏の後民國十七年三月南び起つて北伐に向ひ、着々功を收め、五月末には形勢全く定まり、張作霖は六月北京を退却して奉天に向ふ途中、便乗の列車が爆發して急死した。南

軍は一齊に北京・天津に進出して、兩市相次いで國民軍の青天白日旗を掲揚してこゝに北伐は完成し、北京は北平と改稱され、東三省も作霖の子張學良の下に國民政府の統治に服することになつた。同年十月、民國憲法を發布し、蔣介石は國民政府首席に就任した。以來蔣介石は英・米・ソと結んでその支援によつて支那全土を統一せんとし、一方排日を國是として日本の支那大陸に於ける勢力を驅逐せんと企て、爲に昭和六年九月滿洲事變勃發して、七年三月滿洲國成立し、次いで昭和十二年七月支那事變の勃發となつた。

【帝國の名實兩つながら全くして】帝國としての名儀實質兩方とも足り整つて缺くるところなく、の意。

【魏然】ギゼン 高く聳え立つさま。

【列國の表】世界の國々の表面。

【西洋に於て稍、これに庶幾きもの大英帝國あるのみ】

日本と英國とは共に堂々たる世界の二大帝國であるが之を實質的に比較してみると、第一精神的方面に於て、國家の中心及國家的精神の旺盛さに於て英國は到底日本の比ではない。第二、政治的・領土的方面では日本は未だ英國の比ではない。こゝで作者は全體的の比較に於て精神的方面に重點を置いて日本を以て勝れりとなし、之に英國を追隨せしめた趣意を述べてゐるのである。

【庶幾】チカシ 近い。「コヒネガフ」ともよむ。
【大英帝國】「大」は美稱。英國のこと。

英國の濫觴は五世紀の中頃から、ゲルマン民族のアングロ・サクソン族が海を越えてブリテン島に侵入し、土人を北方へ逐つて新たに七王國を建てたことに始まる。九世紀の初めウエセックス王エグバートが七王國を統一してイングランド王國の基を開いた。

その頃ノルマンといふ北方の民族が頻りに西歐洲の諸國を侵略してゐたが、十一世紀の初めにその一派のデーン人は一時イングランドを併合したが、間もなく擊退せられた。

一〇六六年ノルマンディ侯ウィリアムが大舉して侵入し、アングロサクソン族を破つてイングランドの王位に登つた。ノルマン王統は僅か四代で絶え、ウィリアムの外曾孫ヘンリー二世が佛蘭西から來て王となつたが、その子ジョン王に至り専横の行多く、失政續出するに及んで貴族・僧侶はロンドン市民と共にジョン王に迫つて彼の定めの大憲章に署名せしめて人民の生命及び財産の安全を保護した。これが英國憲法の基である。

一三三九—一四五三年に亘つて佛國との間に百年戰爭が始まり、イングランド王エドワード三世は佛國王位繼承權を主張してフランスに侵入し、佛國は一時危殆に

瀕したが、ジャンヌ・ダルクの出現によつて英軍の敗北に歸した。

一四五五—一四八五年にかけて内亂薈薇戰爭が起つたが、チュードル家のヘンリー七世が出て内亂を鎮定してチュードル王朝が成立した。次いで立つたヘンリー八世はローマ法王と絶つて英國教會を起した。女王メリーが一時舊教に復したが、一五六三年エリザベス女王の立つに及んで再び新教に基づく英國教會を復活し、大いにスペインの無敵艦隊をイギリス海峡に撃破して、一躍海上の覇權を握り、國威を發揚した。この時産業も學藝も空前の發達を見た。又一六〇〇年には東印度商會を設けて印度拓殖の端緒を開いた。

エリザベスが歿してチュードル朝が絶えたので、ステューアード朝の始祖ジェームス一世がスコットランドから入つてイングランド王となつた。ジェームス一世は王權神聖を唱へて専制政治を行ひ、屢々議會と衝突した。その子チャールス一世も失政多く、議會と争ひ、武力で議會を彈壓しようとしたので内亂起り國王は捕へられて一六四九年死刑に處せられた。こゝに於て共和政治が布かれ、クロムウェルが執政官となつたが間もなく退き、前王の長子チャールス二世が迎へられて、王政が復活した。然し王は屢々民權を蹂躪し、その弟ジェームス二世

が立つと、舊教の復活を企て、王權神授を稱へて横暴を行つたので、國民は怒つて王を廢し、その女婿たるオランダ大統領を迎へてウィリヤム三世とし、議會の公にした「權利の宣言」を守らせた。これを名譽革命といふ。

ジェームス一世以來イングランド王はスコットランドの王位をも兼ねてゐたが、兩國は議會を別にしてゐた。アン女王の時兩議會全く合して一七〇七年、大ブリテン王國となつた。女王の死後、ジェームス一世の外曾孫ジョージ一世が一七一四年ドイツのハノーヴァー家から入つて王統を繼いだ。これが今日のイギリス王室の始祖である。

一七五六—一七六三に亘る英佛植民地戦争で英國は佛國からカナダと印度を奪ひ、なほオーストラリアやニュージーランドを領土とした。紡績機械の發明があつて産業革新の始つたのもこの頃である。

一七七五年北米の十三州は佛國の後援を得て獨立戦争を起し、一七八三年全く獨立を完成した。

一八〇五年ナポレオンをトラファルガルの海戦に破り續いて一八一五年更に之をウォーターローの戦に撃破して國威大いに揚つた。

一八〇一年アイルランドの國會を合併し、爾後「大ブリテン及びアイルランド合衆王國」と稱する。

一八〇六年には和蘭人から喜望峯植民地を奪ひ、一八五三年にはトルコ救助のため、ロシアとクリミア戦争を行つた。一八八二年にはエチオピア占領を開始し、同九二年の南阿戦争を経て一九〇九年、南阿聯邦の組織となつた。

一九一四—一九一八年に亘り世界大戦の主盟としてよく堅忍奮闘した結果、世界の覇を競つた獨逸を屈服させることが出来たが、經濟上の癒し難い創傷をうけた。

大戦後英國は佛國と共に國際聯盟の主柱となり、佛米等と提携してヴェルサイユ體制の維持に任じ來つたが、近年同體制を破棄して世界に新しい秩序を齎さんとする新興の日本、獨逸、伊太利との間に次第に尖鋭な對立を馴致するに至つた。

一方國內的には一九二二年アイルランドが自由國となつたのを初め、海外の諸領土漸く獨立の銳鋒を現し來つて英國の前途は内外共に樂觀を許さない。

【世界大戦の結果は、從來把持したる國際政局の平衡を打破して、未だ整一せる新局面を開展せず】

大戦前、三國同盟對三國協商によつて保たれてゐた歐洲の平衡が、大戦による三國同盟の没落によつて全くその平衡を失ひ、加之戰勝國も戰敗國も政治・經濟・思想の各方面に於て大混亂に陥り、その不安定な状態が續い

て安定した新しい場面が容易にひらけて來ない、の意。

〔國際政局の平衡〕 國家間の政治的勢力のつり合ひ。

〔國際政局〕 コクサイセイキョク 國家間に於ける相關的な政治上のなりゆき。

〔平衡〕 ヘイカウ (一) 天秤の皿に載せた物體と錘との重さが相等しく、杆が水平の位置をとること。(二) 力の釣合。こゝは(一)。

〔新局面〕 シンキョクメン 新しい場面。

〔局面〕 (一) 碁盤又は將碁盤などの面。又、その勝敗の變化。(二) 事の成行のありさま。

【二天四海看來れば、大風雨・大洪水の後たらすんば、大火事の後たり】 世界中、拾收すべからざる大混亂に陥つてゐる、の意。

【介在】 カイザイ 間にはさまつてあること。

【善處】 ゼンショ (一) 機宜に應じて、うまく處置すること。(二) 佛語。人界・天上又は諸佛の淨土。こゝは(一)。

【而も其の無秩序は、單に形而下の事のみならず。今日は世界に於ける思想上の一大混亂期にして、我が日本帝國も亦其の驚波駭浪の中に立てり】

その混亂無秩序は、單に目に見えるものの上のみに起つてゐるのではない。今日(即ち、昭和初頭)はそれらの目に見える物事の根柢をなす思想の上に大いなる混

亂を捲起してゐる時期であつて、我が日本帝國もその思想大混亂の中に捲き込まれてゐる、の意。

〔無秩序〕 ムチツジヨ 秩序を失つてゐること。順序すぢみちのないこと。「秩序」物事の條理。物事の正當な順序。

〔形而下の事〕 こゝでは、世界大戦による、民族並びに國土の分割・離散・併合・獨立等の現象や、一國內に於ける政治組織・經濟機構の變革、産業界の異變、國民生活の逼迫、戰闘による各種文化施設の破壊等を指す。

〔形而下〕 ケイジカ 哲學上の用語 Concrete の譯語。易經繫辭傳「形而上者謂之道、形而下者謂之器。」とあるに基く。形體を有する物。知覺せられる現象。有形。形而上の對。

〔今日は世界に於ける思想上の一大混亂期にして〕

現今、世界に於ける思想の混亂は、經濟上の資本主義對共產主義乃至社會主義と一般思想界に於ける國家主義對自由主義との尖鋭な對立抗争とを出發點とし、更にこの二つの相反する立場を止揚せんとする國家社會主義乃至ファシズムの前記の對立に向けられた挑戦とを中心として展開されてゐるといへよう。

以下それらの思想について説明を加へる。

〔資本主義〕 シホンシキ Capitalism 資本主義とは、

財産私有制の下に於ける個人が、大資本を所有して生産手段を獨占し機械化された大規模な集團的生産を營むことにより、利潤を獲得せんとする經濟組織である。資本主義に於ては、商品生産は單なる欲求充足の爲のものではなく、利潤獲得の爲の生産であり、すべての財は商品化し、人間の勞働力も亦商品化する。

資本主義は社會の歴史的發展の一定段階であつて過去の社會制度と同様に發生・發展・崩壞の過程を辿るものである。それは封建社會の胎内から生れ、次のより高い社會形態にとつて代らるべきものである。

資本主義の歴史。歐洲に於ける十五・六世紀以來の新航路の發見、商業貿易の發達、諸植民地の掠奪、新大陸からの金銀の流入等によつて商人は巨額の資本を蓄積した。かくてこれらの商人はその巨額な商業資本によつて從來のギルト的生産制限を破り、多數勞働者による集團的生産を始めた。かくて集團的生産の發展は技術的分業の發達、勞働組織の變革、新發明の利用を可能ならしめ遂に産業革命を發生せしめるに至つた。産業革命は生産力の異常な増大、工場制度の確立、勞資二階級の分化・對立を生み出し、こゝに資本主義が確立するに至つた。

其の後資本主義は絶えず發展し植民地の平和的武力的征服によつて殆ど全世界の隅々まで擴大した。

七年、歐洲大戰中にロシアに革命起つて政權は共産派レーニン・トロツキー等に歸し、一九一九年三月に至つてロシア共産黨を中心に、各國の最左翼派によつて純粹の共産主義團體たる第三インターナショナル(コミンテルン)が組織された。

爾來コミンテルンに加入した共産黨は露・獨・英・佛・米・白・和・埃等であり、日本・支那・西班牙・伊太利等には非法黨として存在する。

「自由主義」ジエウシトギ Rebelarism 歐洲に於ける封建社會の崩壞と共に、資本主義の勃興に伴なつて起つた一切の社會的束縛を脱却しようとする主義。

個人的には身體・生命・思想・學問・信仰・言論等の自由を、社會的には職業・教育・結社・契約・戀愛・結婚・家族成員等の自由を、政治的には參政權・立法行政機關の民主化等を意欲し、主張する主義。

「國家社會主義」コツカシヤクワイシトギ State Socialism 近代ドイツに起つた經濟的及び政治的思想の一。現在の國家制度は飽くまで之を維持し、産業政策上、國家的統制によつて或程度まで社會主義的の制度を採用し、資本家と勞働者との對立を調整し、富の分配を公平にし、社會の平衡を保持するを目的とする主義。

(我が日本帝國も亦其の驚波駭浪の中に立てり)

然し資本主義の發展は必然的にそれ自らの中に内在する次の社會的矛盾が表面化せざるを得なかつた。即ち、(一)資本家相互の對立、従つて資本主義國家間の對立を惹起し、(二)富の偏在によつて社會の平衡は失はれ、少數の大資本家と貧困なる勞働者の大群との對立を生み、兩者間の鬭争は社會を不安混亂に導くに至つた。

世界大戰はこの激化された矛盾の爆發であつた。そしてこの矛盾を除去して社會を再建しようとして現れたものが社會主義であり共産主義であり、更に國家社會主義である。

「共産主義」キヤウサンシユギ Communism 十九世紀後半、ドイツ人カール・マルクスの唱へた唯物史觀に基づくもので、資本主義社會の強力的變革によつて一切の財産を萬人の平等な利益の爲に社會全體の共有とし、世襲的特權を廢し且つ一切の社會的に必要な勞働が個人の能力に應じて社會の全員に分擔せらるべきことを主張する説である。

その歴史一八四七年、マルクス・エンゲルスを指導者としてロンドンに於て共産主義同盟が結成された。次いで國際勞働者の大同團結たる、第一インターナショナル(一八六四—一八七六)、第二インターナショナル(一九〇〇—一九一四)が相次いで結成されたが、一九一

前述の世界に於ける思想混亂の縮圖が大戦後の我が國の社會狀勢の上に見出されることを述べてゐる。

「日本に於ける資本主義」我が國に於ける資本主義發達の途は明治維新によつて拓かれた。そして日清・日露兩戰役を経て急速な發展を辿り、世界大戰に於て飛躍的發展を遂げた。即ち、世界大戰は交戰諸國の莫大な消費と生産力の破壊とを齎し、交戰諸國の日本に對する大量軍需品の注文を必要ならしめた。かくして日本は突如として國內國外に廣大な市場を得、貨幣は流入し利潤は急激に増大し、従つて物價が騰貴し、空前の好景氣が続いた。然るに大戰が終結し、軍需品の注文が絶え歐洲諸國が生産を恢復して再び東洋へ進出し来るや日本資本主義は異常な打撃を蒙り、財界の恐慌、銀行會社の破綻頻出し、爾來日本資本主義はこの創痕から癒ゆることなく、いはゆる慢性的不景氣といふ特殊の状態を呈してゐる。而もかゝる中であつて獨占的の巨大金融資本(三井・三菱・住友等)は益々その制覇の途を進みつゝあり、一方漸く國內の平衡が失はれて勞資の對立抗争は年と共に激化し、各種の社會運動が熾烈となるに至つた。

「日本に於ける社會主義運動」我が國の社會運動の濫觴は既に明治十五年に始つてゐるが、三十四年には安部磯雄・片山潜・木下尚江・幸徳秋水等によつて「社會民主

黨」が組織されたが即日解散を命ぜられた。日露戦争起るや、幸徳・堺等は「平民新聞」を發行して非戦論を唱へ、社會主義を宣傳した。同十一月同新聞は發行禁止となつた。平民新聞解散後、安部・木下等は「新紀元」を出して基督教社會主義を唱へ、堺・西川等は「光」を出して「日本社會黨」を結んだ。四十年一月幸徳・堺等は日刊「平民新聞」を起し、再び社會主義者の大同團結が實現したが二月、黨は解散を命ぜられ、新聞は禁止された。かくて安部・片山・西川等の社會改良派と幸徳・堺・山川・大杉等の革命派とは明白に對峙するに至つた。四十三年幸徳等の大逆事件が發覺し、運動は一時全く跡を絶つに至つた。

大正元年に至つて大杉と荒畑寒村とによつて「近代思想」が發行され、三年、堺・山川・高島素之等の出した「新社會」はマルクス主義を標榜した。三年に勃發した歐洲大戰の影響は日本にも及んで民主主義思想の勃興、普通選挙の要求が起つた。次いでロシア革命の影響は労働運動の急進化を齎し、社會主義運動は再び活潑となつて來た。かくて大正九年には社會主義者の大同團結たる「社會主義同盟」が組織せられたが、創立の翌年政府の解散命令によつて崩壊した。十一年八月山川均は「方法轉換論」を發表して社會運動の大衆化、實際化を主張し

て、日本社會運動史に劃期的な段階を作つた。十二年六月には第一次日本共產黨の檢舉、九月には大震災の混亂に際して大杉夫妻殺害事件、十二月には難波大助の大逆事件が起り、政府は共產主義運動彈壓の爲に、治安維持法を發布した。

他方無産階級政治運動の主張は普選實施の要望と共に具體化し、十四年十二月、日本最初の無産政黨たる「農民労働黨」が結成されたが、加藤内閣は直ちに之が禁止解散を命じた。爾來幾多の變遷推移を経て左右兩派の對立はいよ／＼激甚となつた。

昭和六年九月滿洲事變の勃發を機として社會民衆黨は二分して、社會民主主義派は日本大衆黨及び日本労働黨と合同して右翼的な全國労働大衆黨を組織した。一方左翼派の一部は日本共產黨の秘密運動に奔つた。

昭和七年七月の總選挙では無産黨の當選代議士五名に達した。この總選挙に於て社會民衆黨は「一君萬民社會主義」を唱へ、「財産奉還論」を主張した。其の後、全國労働大衆黨は社會民衆黨と合同して社會大衆黨を結成して今日に及んでゐる。

「日本共產黨」大正十年の夏、初めて第三インターナショナル日本支部として秘密に組織せられ、十二年六月の檢舉によつて潰滅に歸したが、その後再建運動が行はれ

て十五年十二月第二次共產黨の結成を見た。昭和三年三月の一道三府三十縣に亘る第一次檢舉、翌年四月の第二次檢舉によつて潰滅したが、七月には再び結成された。六年二月より七月に亘る數次の檢舉と滿洲事變による國家主義思潮の高揚とによつて現在では殆どその影を没してゐる。

「日本に於ける國家社會主義」この思想が明確な姿を現したのはこの文章より後れて、はゞ昭和六年の滿洲事變前後である。この主義は、皇室を中心として一君萬民の精神の上に立つて國家革新を斷行し、國內の相尅を解消し、民族の海外發展への血路を開くと共に、所謂皇道を四海に宣布發揚せんとする思想である。今日の日本は今や軍部・政黨・民間をあげて殆どこの行き方に統一せられつゝあり、滿洲事變、五・一五事件、二・二六事件、支那事變等、一としてこの指導精神の積極的發動ならざるはない。

【物質的の鎖國の不可能なる如く、思想上の鎖國は、猶更不可能とする所にして】

現代は、交通機關の驚異的な發達の爲、世界各國間の文化的交渉が深まり、學問・思想・藝術・政治・經濟・宗教等一切の文化部門に亘つて、密接な有機的關聯の下に存在するのであるから、物質的にせよ思想的にせよ、

鎖國の不可能なことは自明である。

〔物質的の鎖國〕 物質上の鎖國。外國と貿易を絶つて、例へば、綿花・羊毛・石油等を輸入しないこと。

〔物質的〕物質的の、の意。「的」は英語の形容詞 Democ-ratic などの語末の -ic を訛つたものといふ。(一)名詞にそへて之を形容詞化し「なる」「の」の意を表し、(二)名詞を副詞化して、その性質を帯びその状態をなす意を表す。こゝは(一)。

〔鎖國〕サコク 外國との通商交通を禁止すること。

〔鎖〕は、とぎす、の意。

〔思想上の鎖國〕 國をとぎして、例へば、共產主義などが國內に入らぬやうにすることをいふ。

〔思想〕シサウ 思考作用の結果として生じた意識内容又は、思考内容。

〔外來の惡思想・惡傾向〕 個人主義・共產主義・革命思想乃至、暴力的・享樂的・頹廢的傾向等を指す。

〔傾向〕ケイカウ かたむき。精神内容の向ふ方向。

【我が固有の本領】 我が國本來のもちまへ。

萬邦無比の國體や、忠君愛國の精神、生々發展の精神等所謂日本精神を指す。
作者はその著「大正の青年と帝國の前途」に於て、作者の所謂精神的帝國主義を説き、天皇の御稜威御仁徳を

四海に宣布すべきことを唱導してゐる。

【所謂彼の惡を禁するにあらすして、我の善を奨むるにあらすんばあるべからず】 いはゆる、「他の惡を禁止して入れないといふやうな狹隘窮屈な態度をとらず、一步上に出て我自らの善を奨勵助長して他の惡を雲散霧消せしめる」といふ行き方に出なければならぬ、の意。この句の出典未詳。

【あらすんばあるべからず】なければならぬ、の意。漢文訓讀の文脈をそのまゝ用ひたのである。

【而して其の善思想・善傾向の泉源は、主として我が國民の中樞たる皇室にこれを求め、且これに則る事に力を效さざるべからず】

【其の善思想・善傾向】とは、直前の「我の善」を承けて之を分化した語で、前出の「外來の惡思想・惡傾向」と對照せしめた言ひ方である。

【泉源】といつても必ずしもその時代を上古乃至建國の頃のみに限るのではあるまい。即ち、「其の善思想・善傾向」とは神代の古より今日に至るまで皇室と國民とが一體となつてその間に涵養育成し來つた日本精神をいひ、「我が國民の中樞たる皇室に求め」の「皇室」とは、三千年の國史を通じての皇室、の意味であらう。更に「主として」とは、それらの善思想・善傾向は勿論君臣一體の

中に生れたものであるが、皇室がその指導的立場に立ち給ふから、しかいつたのであらう。

日本精神の泉源となるべきものを皇室の上に求めてみると、一、皇祖天照大神以來の明德・仁徳・勇武・平和の御徳、二、神武天皇御建國に當つて「六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩うて宇となす」といふ生々發展の思想、三、治國の御方針が、皇室を中心として君臣一體となつて所謂大家族主義によつて萬機を公論に決するといふ御精神であること、更に、民族的傾向としては、團結、不言實行、風雅等が見出されると思ふ。

【中樞】 チユウスウ (一)まん中。中心。(二)主要な部分。樞軸。こゝは(二)。「樞」は戸の開閉を司るくる。

【則る】 ノツトる のりとする、の音便。則として従ふ。模範とする。手本とする。準則とする。

【效す】 イタす つくす。つとめる。

【涵養】 カンヤウ ひたしやしなふ。草木に水をやつて生育を助ける義から轉じて學問・見識などを養成することをいふ。

【育化】 イクワワ そだてみちびく。

【化】 (一)ばける。ばかす。怪物。幻術。(二)死ぬ。移る。生育す。死滅す。(三)人を導く。人に感ず。さとす。教が行はれる。(四)徳教。貿易。風俗。習慣。

【性情】 セイジヤウ 性質と心情。うまれつき。こころだて。きだて。こゝは「思想」に對する「情」的方面をいふ。

【感發】 カンパツ 心に感じひらくこと。こゝは、他動詞に用ひてある。感じひらかせ、の意。

【興起】 コウキ ふるひ立つこと。はげみ立つこと。

【除外例】 ジョグワイレイ 除外すべき例。或範圍の外におくべき例。或規定の外におくべき例。

【若し仔細に國史を探求せんか】 もしこまかに國史を探してみるならば、の意。「か」は疑問の意を表す助詞。

【仔細】 シサイに こまかに。精密に。くはしく。

【一部】 イチブ (一)一組。(二)全部。全體。(三)或組。(四)書籍一揃。(五)全部中の或部分。こゝは(四)。

【太平記】 四、村上義光の解題を参照。

【披きても】 ヒラきても 開いて見ても。

【如何に我が國民の或者が、脱線の言動を逞しうしたりしかを知るべし】

北條高時・足利尊氏以下の逆賊等の大逆的言動は今更こゝに説明するまでもないであらう。

【脱線の言動】 ダツセンテキゲンドウ 常軌を逸した言行。道をふみ外した言行。

【脱線】(一)汽車や電車などが線路から外れること。

(二)常軌を逸して横道に外れること。(三)中心以外にそれること。演説などで題目以外の枝葉にわたること。

【的】こゝは、名詞に添うて之を形容詞化し「その性質を帯びたる」といふ意味を表す接尾語。「物質的の鎖國」の項参照。

【逞しうしたりしかを知るべし】 ほしいまゝにしたかを知ることが出来るであらう、の意。

【逞しうす】 タクマシうす (一)心のまゝにふるまふ。ほしいまゝにする。思ふ存分にする。(二)勢を盛んにする。「か」は疑問の助詞であるが、こゝでは、上の「如何に」と照應して文勢を強める働をしてゐる。

【べし】こゝは、可能。推量の意味も加味されてゐるであらう。

【長養】 チヤウヤウ そだてること。

【長】は、こゝは、そだてる、生育す、やしなふ、のばす、の意。

【竭さざるに於ては】 盡くさない場合は。

【竭す】 ツクす 盡くすこと。

【其の極或は寒心すべき結果を來さざるとも限らず】 作者のこの憂慮は、大正時代に於ける共產主義運動の悔るべからざる状態に發したものと思はれる。

【其の極】 ソのキョク そのあげく、そのはて。「其の」

は前の「國民の忠良性を培育長養せしむる所以の道を竭さざる」こと、を受けていふ。

〔寒心すべき結果〕ぞつとするやうな結果。

〔寒心〕カンシン 肝を冷やすこと。心に恐れを抱きぞつとすること。

〔べき〕こゝは、推量・豫想。

〔此の一義は、須臾も忘るべからざる要件にして、殊に現今の世界思想混亂期に於て最も然りとす〕

一六一頁の「此の一大混亂期に際する吾人の覺悟としては、徒に外來の惡思想・惡傾向を防止するにあらざりて、我自ら我が本領を發揮せざるべからざるにあり。所謂彼の惡を禁するにあらずして、我の善を獎むるにあらざればあるべからず」といふ趣旨を更に具體化して力説した言葉である。

〔此の一義〕此の一つのすぢみち。

〔一義〕イチギ (一)一つの道理。一理。(二)一通りの意義。こゝは(一)。

〔要件〕エウケン (一)必要な條件。(二)用事の次第。用むき。こゝは(一)。

〔最も然りとす〕最もさうである。「然り」は「須臾も忘るべからざる要件(なり)」を承ける言葉。「とす」は指定又は斷定する一つの言ひ方。

通な性質・傾向を持つてゐるといふ意味を表す。

〔洶涌〕キョウヨウ 水の勢よくわき出づること。波の立ち騒ぐこと。洶湧ともいふ。こゝも、隱喩法で、思想の動搖をいふ。「洶」は、わく、水わく聲、鼓動の聲。水の勢。

〔掀翻〕キンボン はねかへすこと。はねかへること。揺り上げゆり下すこと。

〔掀〕(一)あぐ。かゞく。聳ゆ。高聲の貌。(二)根に同じ。ひく。

〔看過〕カンクワ (一)目を通すこと。(二)見たばかりで捨ておくこと。見逃すこと。見て見ぬふりすること。

〔吾人臣民は、かかる多難の時に際し、至尊の御新政を創始せられ給ふにつきて、深く宸慮を惱ませ給ふを拜察し奉らざるを得ざるなり。而も我が國民は悉く皇室中心主義者にして、至尊の御導きには、智愚・賢不肖を問はず、皆獎勵せざる者なし。今日の急務は、ただ至尊の乾徳天の如き範を垂れ給うて、我が臣民を御指導あらせ給ふ一事に存す〕

天皇の赤子たるの眞情と信念との迸り出た言葉である。言々胸を打たる、思ひがして、襟を正さずにはゐられない。「而も我が國民は、悉く皇室中心主義者にして、至尊の御導きには、智愚・賢不肖を問はず、皆獎勵せざる者なし」とは、一見、現實に目を蔽ふ者の語

〔今日は國家多難の秋なり。如何に壯言美辭を以て泰平を謳歌せんとするも、我が帝國が世界的大波瀾の洶涌中に掀翻せられつつある實狀を看過する能はず〕

世には往々、怯懦の爲か、或は阿世の爲か、強ひて現實に目を蔽うて反動的な言辭を弄する者がある。作者のこの言葉はかゝる世俗の流言を排して、卒直明快に國家の現狀を指摘したものと云ふべきである。

〔秋〕トキ 重大な時、の意。非常重大の時といふ場合には特に「秋」を用ひ、且つ「トキ」と訓ませる。

〔壯言美辭〕サウゲンビジ さかんな言葉や飾り立てた立派な言葉。

同性質の語を反覆して印象を強める修辭法で反覆法といはれる。漢文調の文章に多く用ひられたが、今日の文章では餘り用ひられなくなつてゐる。

〔謳歌〕オウカ (一)聲を揃へ合せて歌ふこと。(二)天子の徳をほめたゝへること。こゝは(二)から轉じて、太平の世をたゞへる意味に用ひてある。

〔世界的大波瀾〕世界にあまねく及んでゐる大動搖大混亂の意。

〔波瀾〕は、世の動搖を波にたとへた語。隱喩法と呼ばれる。

〔的〕は、こゝでは、名詞にそつて、その名詞に普遍共

に似てゐるが、文章を貫く沈痛の氣はさやうな疑惑を挿むことを許さない。作者の胸中を推測するに、彼らは資本主義の不合理に對する反動から、祖國の本質を深く省察することなく、誤つて一時共產主義の徒となつてゐるが、もし一度陛下の御聲を聞き、陛下の御宸念を承つたならば、必ず豁然として日本人たるの自覺に蘇らすにはゐない、といふ熱烈な信念に燃えてゐるのであつて、迫り極まつた衷情は「今日の急務はたゞ至尊の乾徳の如き範を垂れ給うて、我が臣民を御指導あらせ給ふ一事に存す」と、至尊に向つてうつつたへ奉つてゐるのである。

〔皇室中心主義〕クワウシツチュウシンシュギ 萬世一系の皇室を中心として、全國民が團結し、我が帝國の繁榮と光輝ある歴史の尊嚴とを發揚せんとする主義。

〔至尊〕シソン (一)こ上のなくたふといこと。(二)天皇。君主。こゝは(一)。

〔智愚・賢不肖を問はず〕賢者も愚者もよの區別なく皆ことごとく、の意。「智愚・賢不肖」とは例の同義語の反覆である。

〔不肖〕フセウ (一)父に似ないこと。父に似ずおろかなこと。(二)愚なこと。「肖」は、似るの意。

〔獎勵〕シャウジュン (一)すゝめてさせること。(二)

従ひ行ふこと。こゝは(一)。

【急務】キフム 急を要する務。さしせまつた務。

【至尊の乾徳天の如き範を垂れ給うて】至尊の御聖徳の天の如く廣大無邊なるをてほんとして民の上に下し給うて、の意。

【乾徳】ケントク 天子の御徳。

【乾】(一)草木高く天に坤びる意。(二)天。空。(三)いぬる。西北方。(四)易の卦名。(五)君主。帝位。(六)つとむ。(七)かたし。強し。健やか。(八)かわく。ひる。ほす。(九)貨利を斂める。

【明治天皇】メイヂテンワウ 人皇第二百二十二代の天皇。

御諱は睦仁。孝明天皇の第二皇子。御母は一位中山慶子嘉永五年(二五二二)九月二十二日(陽曆十一月三日)未半刻御降誕。祐宮と御命名。萬延元年(二五二〇)七月十日立太子、九月二十八日親王宣下、睦仁と宣せられた。慶應三年(二五二七)一月九日踐祚、十月十四日將軍徳川慶喜の大政奉還を御嘉納あらせられ、四年八月京都に即位大禮。同年九月八日明治と改元、同十二月一條美子立后。天皇は幕末維新國歩多難の際に御位を繼ぎ給ひ、睿聖英武の資を以て千古不磨の宏業を遂げ給ひ、御治世四十六年、國是の確立・文化の刷新に大御心を注がせ給ひ、東洋の平和と世界文明の促進とを志し給ひ、

國威發揚、國力充實、新日本建設を完成し給うた古今東西に絶する聖帝であらせられる。天皇は又御繁務の傍ら和歌の道に親しみ給ひ、御製十萬首に達する大歌人であらせられる。

明治四十五年(二五七二)七月三十日崩御、九月十三日東京青山に御大葬。伏見桃山に葬り奉つた。寶算六十一。不世出の英主として國民舉つてその御偉徳を敬慕し官幣大社明治神宮に昭憲皇太后と共に祀り奉り、十一月三日を明治節として御聖徳を仰ぎ奉る。

【振古未曾有の皇運】太古より未だ嘗て見たことのない皇室の御隆運。

【振古】シンコ おほむかし。太古。「振」は、古、の義。

【恢弘】クワイコウ おしひろめること。

【恐れながら新政の典型は、一にこれに基づかざるべからず】作者の不動の信念と、峭厲透徹せる識見とが響いてると思ふ。

【典型】テンケイ (一)おきて。てほん。(二)かた。こ

こは(一)。

【基づかざるべからず】基づかなければならぬ、の意。断定した言ひ方。

【抑々】ソモソモ 接続詞。「そも」を重ねた語。(一)事物の由来などを説き起すに用ひる語。(二)上を抑へて下を起すに用ひる語。(三)たゞしは又。もしくは。あるひは。こゝは(一)。

【神武天皇】ジンムテンワウ 人皇第一代の天皇。御名は

狹野。又、神日本磐余彦尊と申す。鷦鷯葦葦不合尊の第四皇子。御母は海神の女玉依姫。瓊々杵尊以來歴代日向の高千穂宮にましまして四方を統治し給うたが、天皇の時に及び御兄五瀬命と議して、天業を恢弘せんことを計り、東征の途に就かせ給うた。日向から水路速吸之門(豊後・伊豫間の水道)で國神珍彦を得て案内とし、豊前宇佐を経て筑紫の岡田宮に至り、こゝに止り給ふこと一年、次いで安藝の多祁埋宮に止り給ふこと七年、更に吉備の高島宮に止つて、こゝで船戦の準備を整へ、難波を経て日下の琴津に至り、土酋長髓彦と戦はれたが、利あらず、五瀬命は流矢に當り給うた。再び海路紀伊に向ふ海上、五瀬命は薨じ皇兄稻飯命は海原に入り、三毛入野命は常世の國に入られた。天皇は熊野に上陸し、高倉下より靈劍をうけ、八咫鳥の先導を以て大和の宇陀に達し兄猪を平げ、弟猪を歸順せしめた。次に磐余邑の酋長、兄磯城を伐ち、再び長髓彦を征し給うた。饒速日命は長髓彦を討つて歸順し、程なく大和地方は平定し、畝傍樞

原宮に於て即位し給うた。これが紀元元年辛酉の年である。翌年論功行賞を行ひ、天種子命(中臣氏祖)・天富命(齋部氏祖)に祭祀を掌らしめ、皇祖天照大神を祀らせ、且つ、三種の神器を同殿共床に奉祀して、天祖の神靈とし、二氏を輔佐として政治を執り、道臣命(大伴氏祖)・大久米命(久米氏祖)・可美眞手命(物部氏祖)の三氏を護衛の任にあて、これらを世襲とせられ、縣主・國造をも定められた。在位七十五年で崩御。御壽百三十七。大和國高市郡山本村畝傍山東北陵に葬り奉る。

【業を創め給ふや】帝王の業を創始し給ふに當つて、即ち

日本國を建設し、之を統御、經營し給ふに當つて、の意。

【業】ガフ こゝは、帝業をいふ。即ち、天子がその國を統御、經營し給ふ事業。皇謨。

【創む】ハジむ 新たにおこす。あらたにひらく。

【や】こゝは、動詞・助動詞に接続して、に當つて、に際して、の時、等の意を表す。そして、それらに比し遙かに、活動的・飛閃的な語感を有する。

【六合を兼ねて以て都を開き】天地四方を合せて都を開きの意。

この句と、次の「八紘を掩うて而して宇となす」とは神武紀己未年の條に、「三月辛酉朔丁卯下合日、自我東征、於茲六年矣。頼以皇天之威、凶徒就戮。雖三邊

土未清、餘妖尙梗、而中洲之地無二復風塵、誠宜恢廓皇都、規摹大壯、而今運屬此屯、蒙民心朴素、巢棲穴住、習俗惟常、夫大人立制、義必隨時、苟有利、民、何妨、聖造、且當披拂山林、經營宮室、而恭臨寶位、以鎮元元、上則答乾靈、授國之德、下則弘皇孫養正之心、然後兼六合以開都、掩八紘而爲宇、不亦可乎、觀夫畝傍山、東南極原、地者蓋國之塙區乎、可治之、是月即命有司、經始帝宅、とあるに基づく。

〔六合〕 リクガフ 天地四方、即ち、上下東西南北。宇宙全體。〔六〕は、漢音リク、吳音ロク、この場合は、習慣上、漢音に従ふ。

〔兼ぬ〕 カぬ (一)合せる。合せもつ。(二)一つの物で兩様の働をする。(三)一人で二人を勤める。(四)はばかる。

〔八紘を掩うて而して宇と爲す〕 八方の地の果てまでをおほひかくして我が家となす、の意。

〔八紘〕 ハツクワウ 八方の隅。地の果て。八荒。

〔紘〕 (一)冠の紐。領の下に垂れ下るもの。(二)大綱。綱維。(三)つなぐ。大綱で引きとめる。(四)繩張りをする。(五)大いなり。宏大なり。こゝは(二)より轉じて、

地の果て、の意味となつたもの。

〔掩ふ〕 オホふ (一)かぶせる。させる。おほひかくす上からかけふさぐ。(三)全部を包む。包みかくす。(四)かばふ。庇護する。こゝは(一)。

〔宇〕 ウ (一)屋根の下の庇。のきば。のきした。(二)家。屋根。家屋。(三)無限の空間。(四)器量。人物。(五)端。一局部。こゝは(二)。

〔大規模〕 オホキボ 宏大なる結構。しくみ。

〔規模〕 (一)手本。正しい例。(二)しくみ。結構。(三)はまれ。面目。(四)趣意。口實とすべき一かどの功勞。こゝは(一)。

〔知ろしめす〕 統治したまふ、の意。「知る」の未然形「知ら」の母音轉化した「知ろ」に、崇敬助動詞「す」の連用形がつき、更に之に崇敬助動詞「めす」が添はつて成つたもの。「めす」は「見る」の語幹「み」に崇敬助動詞「す」の添はつた「みす」が母韻轉化して「めす」となり、助動詞化したもの。

〔首めに〕 ハじめに 始めに。第一番に。

〔五箇條の御誓文〕 ゴカデウのゴセイモン 明治元年三月明治天皇は文武の諸臣を率ゐて紫宸殿に出御せさせ給ひ新政の根本方針五箇條を宣布せさせ給うた。これを五箇條の御誓文といふ。

に。前に挙げ給うた五箇條を指し給ふ御言葉。〔國是〕 コクゼ 國家の方針。輿論の認めて是とする國政上の方針。〔萬民保全ノ道〕 國民を保護して安全にするの道。〔而して天皇は實に其の御言葉の如く行はせ給ひぬ。否御言葉以上に行はせ給ひぬ〕 疊みかけて意味を強めて行く言ひ方で、修辭上漸層法といはれる。

- 一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
 - 二 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
 - 三 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス
 - 四 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
 - 五 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ
- 我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先シ
シ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

【我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ】

武家政治が崩壞して天皇親政の世となるや、西歐の政治・經濟・學問・思想・制度・文物等が潮の如く我が日本に押寄せて、空前の混亂裡に新しきものが舊きものに取つて代つて、近代的國家としての形態が成立しようとすることを仰せられてゐるのである。

【朕躬ヲ以テ衆ニ先シ】 朕自ら國民の先頭に立つて、の意。

【天地神明】 テンチンシンメイ 天地の神々。天神地祇。

【神明】 神。神靈。神は明らかな明德を具へ給ふ故、神明といふ。

【斯國是】 コノコクゼ この國家の大方針。

【斯】 (一)これ。こゝ。(二)この。(三)かく。(四)こ

【聖澤】 セイタク 聖上の御恩澤。天子の御めぐみ。「聖」は天子の御上に冠し奉る語。

【隆運】 リユウウン 隆盛なる國運。

【草莽の微臣、此の國家の大事に際し、感迫り、情熱し、自ら裁する所以を知らず。たゞ忝しく滿腔の赤誠を披瀝し

て、天つ日嗣たる今上天皇陛下の萬歳を頌し奉るのみ」

新政の要諦に就いては、今上陛下の御善處を期待し奉つて、最早そのことには觸れず、ひたすら赤子の衷情を披瀝して寶壽萬歳をたたへ奉る氣持が吐露されてゐる。「感迫り、情熱し」思ひが、さしせまり、熱して來て、の意。對句法。

「自ら裁する所以を知らず」自分でどう處置したらよいか分らない、の意。

「裁す」サイす (一) たつ。衣服を仕立てる爲に布帛をたちきる。きり放す。(二) 物事を適宜に減らす。節減する。(三) はかる。取極める。見積る。(四) さばく。きりもりすること。處斷。(五) 轉じて自殺を自裁といふ。(六) 僅かに。

2 文の構成

第一節 初—一五九頁終

今上天皇の御登極を奉頌す。

(1) 御登極奉頌。(初—一五八頁八行)

(2) 國家の變故に際し、祖宗の遺し給うた典章が柄として國家・國民を指導して、あやまることなきを眼前に見ての感激を述べ。(一五八頁九行—一五九頁六行)

(3) 今上陛下の御爲人、及びその政治上其他の御經驗の多大に亘らせ給ふことを述べて、この聖天子の下に生を享けたる幸福を述べ。(一五九頁七行—一五九頁終)

第二節 一六〇頁—一六一頁四行

大戰後の世界の狀勢と國家の現狀。

(1) 大戰後に於ける世界各強國の變遷を述べ、我が日本帝國が、英帝國と共に列強を壓する隆運にあることを説く。(一六〇頁一行—一六〇頁九行)

(2) 大戰後に於ける世界の混亂を説き、我が日本帝國も亦、物質的に、思想上に世界的大混亂の渦中にある現狀を指摘す。(一六〇頁一〇行—一六一頁四行)

第三節 一六一頁四行—一六五頁二行

國家の現狀に對處するの道。

(1) この非常時に處する道は、徒に外來の惡思想を禁するが如き消極的手段を去つて、積極的に我が固有の本領を發揮して之を克服すべく、且つこの我が本領の源泉は之を皇室に求むべきことを論ず。(一六一頁四行—一六一頁一行)

(2) 我が國民の本領たる忠良性は、皇室の恩徳の感化によることを説く。(一六一頁二行—一六二頁三行)

(3) 徒に國民の忠良性に依頼し安心すべからず、進んで之を培養すべき必要を力説す。(一六二頁四行—一六二頁終)

(4) 國歩艱難の際に新政を創めさせ給ふ今上陛下の御宸念を拜察し奉り、日本國民は盡く皇室に忠順ならざるは無き故、至尊の天の如き聖徳を垂れさせて、國民を指導し給はんことを訴へ奉る。(一六三頁初—一六三頁一行)

(5) 神武・明治兩大帝の雄大、且つ積極的なる御經綸を引例す。(一六三頁二行—一六四頁七行)

(6) 明治時代に於ける國民精神の興隆は實に明治天皇の御聖徳の感化によるものにして、大正時代は先帝よくこの徳化の道を繼いで、隆運を守成し給うたのであると論ず。(一六四頁八行—一六五頁二行)

第四節 一六五頁三行—終

結語。思ひ迫り、衷情を披瀝して今上陛下の萬歳を頌し奉る。

3. 文意

今上天皇の御登極を頌し奉り、現下の世界的混亂の中に棹さすべき昭和の御新政の要諦を論じた文。

〔滿腔〕 マンカウ 全身。からだ中。全心。

〔腔〕 内部が空であること。中空。

〔天つ日嗣〕 アマツヒツギ (一) 天照大神の御系統を繼承し給ふこと。(二) 又、その方。(三) 天皇の御位。こゝは(一)。

〔萬歳〕 バンザイ (一) いつまでも生きること。いつまでも榮えること。ばんざい。(二) めでたこと。祝ふべきこと。(三) 個人又は團體の爲に祝福する意で唱へる語。こゝは(一)。

〔頌し奉るのみ〕 「頌」は前述「頌辭」を見よ。「のみ」は意味を強める助詞。

〔至誠の祈願〕 シセイのキグワン まごころからの祈願。

〔祈願〕 神佛に祈り願ふこと。

4 鑑賞批評

作者の持味たる雄勁自在な、熱意溢るゝ筆勢の中に不動の信念を率直に披瀝し、そこに傾聴すべき經世の識見が示されてゐる。特に心うたれるのは、若き新帝陛下の御上に注がれた溢るゝ眞情であつて、國を憂ひ、君民を戒むる老臣のおもかげが浮かび出てゐるやうに感ぜられる。第一課「國語と日本精神」に於て把握された日本精神の眞髓たる君臣間の美しい情誼が最も直接に、第一人稱の表現に流露せるものといふべきである。

三 備考

1 指導研究

- (一) この文章の成つた昭和初頭から今日(本教科書の編纂發行された昭和十二年末を指す)まで既に十年の歲月を経過し、この間、世界の形勢及び日本の地位に劃期的な變化が齎されてゐる。従つて、指導に當つては本文の時代性が頭に置かれるべきことはいふまでもないことであらう。
- (二) 本文中に指摘された、世界及び日本の思想的混亂の實狀に就いて更に具體的な説明がなされたい。祖國の現實を正しく認識する所に自ら國難に處すべき道が見出されるのである。尙この補足的説明の中で共產主義の我が國體と相容れない所以を明かにしたい。又祖國の現實を取上げたついでに、その重大問題の一たる人口過剩の問題にも觸れたいと思ふ。
- この祖國の歴史的現實の認識から、生徒自身に昭和國民たるの覺悟と、祖國の難局を克服すべき實踐的目標(對外的及び内部的の兩方面)とを見出さしめるやうに誘導したい。この事には指導者の慎重な配慮を要する。
- (三) 皇室が悠久なる國史を通じて我が國家の中心であらせられる所以を明確に認識せしめることはこの際特に重要事であると思はれる。それには巻頭引用の正統記の文に表れた國民的信念の如きは其の最も有力な資料であらう。猶ここに明

かにしておくべき皇祖天照大神と太陽との關係である。我が上代人は天照大神の御徳の廣大無邊なること太陽の如きを仰ぎ望み、之を太陽即ち日神に比し奉つたのである。太陽そのものを皇祖神となすのではない。又、一面、諸外國の君主との比較も大いに有效であらう。

(四) 本文の書かれた後、世界の形勢と日本の地位に劃期的變化の起つてゐることを説明し、滿洲事變並びに支那事變が、我が本領を積極的に發動して國難を打開し、世界に新しい平和を齎さんとする重大意義を有するものなることにまで説き及ぼし度い。

(五) 皇室の上に注がれた作者の深い情誼は、日本精神の眞髓として特に意を用ひて取扱ふべきであらう。

2 参考文献

(一) 「我が固有の本領を發揮」する點に就いて作者の著「大正の青年と帝國の前途」から左にその一節を掲げよう。

我が國民にとりて、何は失ふとも、失ふべからざるは、忠國愛國の精神なり。日本帝國の隆替消長は、實に我が忠君・愛國の精神の隆替消長の上に懸る。如何に學問ありとも、才能ありとも、忠君愛國の精神なき國民は、魂魄なき偶像に過ぎず。忠君・愛國の精神とは、君國の爲には我が學問、我が財産、時に臨んでは我が生命をも獻ぐる精神なり。如何なる場合にも、君國を先にして我を後にする精神なり。君國の緩急に際しては、自ら率先して之に奉ずる精神なり。古人の所謂「海行かば水づく屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、顧みはせじ。」の精神なり。君國の爲に其の身を致し、其の力を竭くすは、我が國民の先天的約束なり。然れども、世には往々井中の鮒の如く、我あるを知つて他あるを知らざる忠君・愛國者あり。口にのみ唱へて行はざる忠君・愛國の徒あり。此の如きは吾人これを取らず、吾人の唱導する所は、實に忠君・愛國の積極的發動にあり。その進取的・膨脹的發動に在り。忠君の第一義は、皇威を四海に布き皇澤を八荒に及ぼすに在り。愛國の第一義は、我が帝國を世界第一の強國・雄國・正善國たらしむるに在り。縱令聖影の御前に、一日百回拜禮したればとて、若し臣子の本分を閑却して、我が君國の爲に努力することを怠らば決して忠君の誠を竭くしたるものといふべからず。又縱令國家の爲に一死を辭せざる覺悟ありとも、若し國民としての當務を踐行せずば、決して愛國の實あり

るものとはいふべからず。忠君・愛國の精神を積極的に發動せしむるには、吾人は先づ君國の爲にする誠を以て、世界の善を擇取し、世界の美を採納して、我が精神の充實を期せざるべからず。世界を家として、此の精神を涵養せざるべからず。眼光豆の如く、心膽蕩の如き徒の忠君・愛國は往々却て君國を誤る。次には二重橋外に坐して、至尊の聖壽萬歳を祈り奉る誠心を以て、進んで四境の外に帝國の版圖を擴げ、皇威・國力を外に張らしむることに努めざるべからず。此の如くして、忠君・愛國の實、愈々顯著なりといふべし。我が帝國の狭少なる版圖に住める我が民族の増殖率は、頗る大を示せり。されば、我が國民の外に向つて膨脹せんことは必然の運命なりといふべし。退嬰・自足は斷じて我が國是に非ざるなり。人には各々特殊の事情の存するあれば、國民を擧げて海外に雄飛せよと望まんことは難し。人各々其の身の境遇と時の宜しきに順ひて、海外に行くべき者は行くべく、國內に留るべきものは留るべし。出づるものは、海外萬里に功を建つる雄志を把持して奮闘すべく、縦令、窮山絕谷の茅屋に繋がるものと雖も心は常に君國の爲に我が帝國の使命を遂行するに専らならざるべからず。要は我が國民各個の忠君・愛國の精神をして積極的に發動せしむるに在り。

(二) 皇室典範の主要部分を次に擧げよう。

第一章 皇位 繼承

- 第一條 大日本國皇位は、祖宗の皇統にして男系の男子之を繼承す。
- 第二條 皇位は皇長子に傳ふ。
- 第三條 皇長子在らざるときは皇長孫に傳ふ。皇長子及び其子孫皆在らざる時は、皇次子及び其子孫に傳ふ。以下皆之に例す。
- 第四條 皇子孫の皇位を繼承するは、嫡出を先にす。皇庶子孫の皇位を繼承するは皇嫡子孫皆在らざるときに限る。
- 第五條 皇子孫皆在らざるときは、皇兄弟及び其子孫に傳ふ。
- 第六條 皇兄弟及び其子孫在らざるときは、皇伯叔父及び其子孫に傳ふ。
- 第七條 皇伯叔父及び其子孫在らざるときは、其以上に於て最近親の皇族に傳ふ。
- 第八條 皇兄弟以上は同等内に於て嫡を先にし、庶を後にし、長を先にし幼を後にす。
- 第九條 皇嗣精神若しくは、身體の不治の重患あり、又は重大の事故あるときは、皇族會議及び樞密顧問に諮詢し、前數條に依り繼承の順位を換ふることを得。

第二章 踐祚 即位

- 第十條 天皇崩するときは、皇嗣即ち踐祚し祖宗の神器を承く。
- 第十一條 即位の禮及び大嘗祭は京都に於て之を行ふ。
- 第十二條 踐祚の後元號を建て、一世の間に再び改めざること、明治元年の定制に従ふ。
- 第十三條 天皇及び皇太子、皇太孫は滿十八年を以て成年とす。
- 第十四條 前條の外の皇族は滿二十年を以て成年とす。
- 第十五條 儲嗣たる皇子を皇太子とす。皇太子在らざるときは儲嗣たる皇孫を皇太孫とす。
- 第十六條 皇后、皇太子、皇太孫を立つるときは、詔書を以て之を公布す。

第四章 敬 稱

- 第十七條 天皇、大皇太后、皇太后、皇后の敬稱は陛下とす。
- 第十八條 皇太子、皇太子妃、皇太孫、皇太孫妃、親王、親王妃、内親王、王、王妃、女王の敬稱は殿下とす。

第五章 攝 政

- 第十九條 天皇未だ成年に達せざるときは、攝政を置く。天皇久しきに亘るの故障に由り、大政を親らすること能はざるときは、皇族會議及び樞密顧問の議を経て、攝政を置く。
- 第二十條 攝政は成年に達したる皇太子又は皇太孫之に任す。
- 第二十一條 皇太子、皇太孫在らざるか、又は未だ成年に達せざるときは、左の順序に依り攝政に任す。第一、親王、及び王、第二、皇后、第三、皇太后、第四、大皇太后、第五、内親王、及び女王。(以下略)

醇正國語 教授參考書 卷六

目次

一 國語の愛護	五十嵐 力	一
二 故山の姿	鶴見祐輔	一六
三 信濃路	伊藤左千夫 島木赤彦	四
四 故郷の花	(源平盛衰記)	五
五 平家雑感	高山樗牛	七
六 笛の音	吉田兼好	一〇五
七 鯉釣	水原秋櫻子 山口誓子 日野草城 鈴鹿野風呂	一三
八 影	松岡讓	一六
九 ミレ	相良徳三	一五
一〇 秋景	長壽吉	一七〇
一一 クレマンソーの雄辯	堀口九萬一	一八四

目次

目次

一 樹の根	和辻哲郎……………三〇〇
二 寒山拾得	森鷗外……………三二
三 見よや春	渡邊華山……………三三
四 戲作三昧	芥川龍之介……………三六
五 春寒	夏目漱石……………三六
六 雪線旅情	藤木九三……………三三
七 古城のほとり	島崎藤村……………三三
八 井伊大老	中村吉藏……………三七
九 天地の初の時	橋 曙 覽……………三七
一〇 人臣の道	北 島 親 房……………三八
一一 吉田松陰	徳 富 蘇 峯……………四〇

一 國語の愛護

五十嵐 力

一 解 題

1 作者

五十嵐 力 イガラシチカラ 號を巴干、又は甲島園主人といふ。明治七年十一月山形縣米澤市に生まれた。二十五年米澤中學校を卒業して出京。二十八年東京專門學校(早稻田大學前身)文學科を卒業。三十四年以來講師として母校に教鞭を執り、翌年同校の早稻田大學と改稱されると共に同學文科教授となり、更に大正十三年同大學文學部長に進み、大正十四年には文學博士となつた。「國歌の胎生及び發達」がその學位論文である。昭和五年文學部長を辭し爾來引續いて同大學教授として今日に及んである。

氏は國文學者として夙に國語の愛護を主張し、文章論・修辭學に造詣が深く、此の方面に「新文章講話」「作文三十三講」「修辭學大要」等の好著があり、國文學上の著作には前記學位論文の外「新國文學史」「平家物語研究」「軍記物語の研究」等が挙げられ、又「趣味の傳説」「八重葎」「半農生活」「我が書翰」「甲島園隨筆」等の隨筆も多い。これ等主なる著作を集めたものが「五十嵐集」である。

2 出典

「國語の愛護」から採つた。「國語の愛護」は昭和三年四月早稻田大學出版部から發行された講演集で、「國語の愛護」以下五篇からなつてゐる。

本課はその「國語の愛護」の主要部分の抄録であるが、もと本篇は大正十四年秋、大隈會館で日本處女會代表會席上に於てなされた講演であるから、採擇に當つてかなりの改訂加筆を試みた。(參考欄参照)

3 主眼及び採擇の趣旨

卷一「大和言葉」では國語の持つ深遠の味と不動の眞理について學び、卷四「結晶の力」では國語學習上の表現作用の重要性を究め、更に本學年初頭に「國語と日本精神」との不即不離の關係を明にした。かくて既に國語に對する認識の漸く明確なる生徒をして、本課は更に積極的に國語愛護の精神を涵養し、以て國語學習の根本精神を一層明確に自覺せしむると共に、進んでは國語を通しての國民文化の向上發達に貢獻寄與する覺悟を抱かしめたい。文化的教材たると同時に國民的教材として採擇し、而してこれを卷頭に据ゑた所以である。

二 解 釋

1 語 釋

【國語の愛護】 コクゴのアイゴ

「愛護」は、だいに守る、大切に保護する等の意。

國語の「愛」と言はず、強く「愛護」の語を以てする所に作者の傾向が示されてゐると言へよう。これは本課を精讀して自ら理解される所であるが、作者は單に概念的に、或は抽象的感傷的にこれを問題にしてゐるのではなくて、寧ろ現實的にこれを採り擧げ、意志的積極的に力説強調してゐるのである。これはとりもなほさず作者の國語觀の自らなる發露で、この信念と意志とは、全文を

通して片言隻句の間に溢れ、讀者の國語愛護の觀念を刺衝するものがある。

【獨立した國】 ドクリツしたクニ 獨立國。「主權國」とも言ふ。内治外交等の運用行使に關して、何等他國の權力による干涉束縛を受けない完全な意志組織たる國家、即ち自主獨立の主權を有する國家をいふ。

【維持】 キチ つなぎ保つこと。もちこたへること。「維」は、つなぐくくる等の意。

【國體】 コクタイ (一) 國柄。國の成り立。漢書、成帝紀「儒林之官、四海淵源、宜皆明於古今、溫故知新、

通達國體。故謂之博士。」(二) 統治權の所在並びに國民の信仰によつて名づける國の體様。「君主國體」と「民主國體」との二に分ち、傳統的に主權は君主にありとの堅い信仰に立つ我が國の如きは前者に屬し、歐米諸國の如き、外形上は君主・貴族・共和などの諸政治様式は持つてゐても、國民の實際的信仰が、主權は人民にあつて、君主貴族の如きはいはば世襲の官吏、人民の代表に過ぎずといふ根本觀念に立つものは後者に屬する。歐米諸國では主權の存在は、理論的に、また實際的に幾變遷を繰返してゐるのであるが、我が國は建國以來天皇主權の信仰で一貫されてゐるのであつて、實に萬國無比なる所以はこゝに存するのである。

【淳風美俗】 ジュンプウビソク 人情の厚い美しい風俗。淳美なる風俗。

「淳」は醇に通じ、「人情が厚い」の意。

【古藝術】 コゲイジュツ 昔から傳へられた古い藝術品。

【思想】 シサウ (一) 心理學上 Thought の譯語。物事を考へ、判斷し、推理する作用(思考作用)又その結果として得た意識内容。(二) かんがへ。心に思ひ浮ぶこと。こゝは(二)の意。

【傳達】 デンタツ つぎつぎに傳へとどけること。

「達」は、こゝはとどける、致す等の意。

【機關】 キクワン (一) Engine の譯語。或るエネルギー

1を活動させるやうに装置した機械。(1) Organ の譯語。行動の目的を達する手段として設けられたもの。國家機關と私人機關、合議機關と單獨機關、意思機關と執行機關などに分たれる。こゝは(二)の意で、「手段」位に譯せばよい。

【片時】 カトキ・ヘンジ ちよつとの間。

【重きを措かない】 オモきをオかない 重要性を認めない

「措」は、音「ソ」「置」におなじ。

【實體】 ジツタイ Substance の譯語。(一) 形式に對し、内容・本體・本質・實質をいふ。(二) 哲學上、(イ) 性質又は作用を支持し、箇々の性質又は作用を統一する本體。(ロ) 他に依存せず、それ自身で存在するもの。(ハ) 生滅變化する現象に對し、その背後根柢又は中にあつて恒常不變なる自存の基體。こゝは(一)の意で、國語を「形式」として、それに對する「内容」の意として用ひられてゐる。

【符牒】 フテフ (一) わりふの書つけ。竹又は木等にするしの文字を書き、これを割つて彼我各々半分を所持し、他日事あるときに合して證據とするもの。(二) しるしの書つけ。(三) 商品につける値段の隱語。こゝでは符號、しるし位の意に用ひられてゐる。

【表現方便】 ヘウゲンハウベン 表現の手段。

「表現」は、(一) あらはすこと。(二) 藝術上の術語。觀得した對象を、線・形・色・音・文字等によつて具象

的に表出すること。こゝは(一)の意。

【方便】は、(一)佛語として、佛道に導くための便宜の手段。(二)一般に、目的のために利用される手段。てだて。方法。(三)都合。勝手。こゝは(二)の意。

【真相】 シンサウ 眞實のありさま。本當のすがた。【人によつては、それほど國語に重きを措かないで……骨を折るのは愚かな事であると考へるかも知れません】(假設)

【表現即ち實體である。言葉即ち思想である。とさへいつてもよいかと思はれます】……(反駁)

【少くとも表現が實體の半分であると位には考へることが出来ませう】……(斷定)

假設—反駁—斷定と進むこの三段論法式的表現は、その中に國語の本質を解明し、その重要性を決定する根本條件を説きながら、而も此の複雑困難な問題を、極めて碎けた平易な言ひ方で形づけて行く手際の鮮かさを示したものである。

【ヘプソン】 Ralph Waldo Emerson (1803—1882) アメリカの詩人・思想家。ボストンに牧師の子として生まれハーヴァード大學卒業後、暫く牧師の職にあつたが、信仰上の懷疑から職を辭して歐洲に遊び、當代英國の文豪カーライルと相知り、生涯の友誼を結んだ。歸國後はコネコッドに居を定め、専ら著作生活に入り、時代の唯物

思想に反抗して理想主義の炬火を振り翳し、汎神論を背景とする個人尊重の暗示的な唯心論的哲學を説いた。併し學的哲學の組織といふよりも、直觀的に思想を閃かす哲人の風貌があり、人呼んで「コネコッドの哲人」と稱した。處女作「自然論」(Nature)をはじめ「代表的人物論」(Representative-men)その他多くの論文集を發表し、再三の歐洲講演旅行後八十歳で歿した。

【人といふものはただ半分だけが自分で、他の半分は自分の表現だ】

ヘプソンの次の文章の翻譯である。

The men is only half himself, the other half is his expression.

【資格】 シカタ 身分。地位。又その要件。

【乃至】 ナイシ (一)數・階級・種類の上下のみを擧げて中間を省略するに用ひる接續詞。(二)あるひは。また。かつ。こゝは(二)の意の接續詞。

【我】 ワレ 所謂「自我」である。英語の Ego, self 佛語で Je, moi, soi meme 獨語の Ich selbst と云ふものに當り、哲學上(一)對象を認識し、外界に働きかける主體を對象及び外界から區別する場合これを自我といふ。(二)あらゆる思惟・感覺・欲望・意志等の一切の心的活動の根源をなすもの、即ち自己同一性を保ち、意識の同一作用をなすもの。所謂「主觀」と同義語として用ひる。

(三)個人の肉體精神から更に進んで先驗的統覺を營む主體、等各方面から多様な解釋が下されてゐる。こゝは、「自分といふもの、我といふ意識」位の意味に用ひられてゐる。

【様式】 ヤウシキ (一)一定の形式。かた。仕方。(二)かたち。さま。こゝは(二)の意。

【言葉は思ふ事がいへれば澤山だ】

「書足_レ以_レ記_レ名_レ姓_レ」とは項羽の言であり、世の實用主義者の間にかゝる言辭を弄するもの如何に多いかは、生徒の日常屢見聞する所であらう。否寧ろ生徒自身の中に、無意識的にはあらうが、かうした無自覺な觀念に惑はされてゐる者がないとはいはれない。その粗大にして實際に適切ならざる見解である事は言を俟つまでもない事であり、殊に本課はかゝる觀念の徹底的な打破に役立つたねばならない。

【伊藤仁齋】 イトウジンサイ 徳川中葉の儒者。名は維楨、字は源吉、仁齋又は古義堂と號した。寛永四年七月京都堀川に生まれた。初め宋學性理の學に志し、疾病と家の反對に抗しながら獨學研究を進めたが、後漸く宋儒の説に疑を抱き、直ちに跡を孔子に接せんとして、所謂古學を提唱樹立した。時に年二十六。後家塾、古義堂を開いて弟子を教へたが、一生仕官せず、市井民間の哲人として終つた。三千の門下中には並河天民・中江岷山・北村馬

山等の駿材を生み、學統は子東涯に繼承せられて堀川學派が形成された。「宇宙は大活動にして之が根本原理を一元氣となす」といふ彼の生々活動の哲學は、當時消極的な靜寂主義に傾きつゝあつた儒教に新生面を拓いたものである。寶永二年三月歿、享年七十九。著書に「心學原論」「大極論」「論語古義」「孟子古義」「語孟字義」「童子問」等がある。明治四十年正四位を追贈された。

【井戸浚】 キドガヘ 井戸水を清める爲に水を汲みほし、底の塵芥をさらふこと。

江戸時代民間ではこれが年中行事の一で、當日は屋主・差配或は一家の主が指揮して、店子總出でこれに當るといふ風であつた。

【井戸浚の場合にも袴を着けずにはゐられず】

この話は、「先哲叢談」「近世叢語」にも見えず、北村氏の「古學先生碣銘行狀」にも見えてゐない。しかし何れの傳にも彼の謹嚴な君子であつたことが傳へられてゐるので、それを向ふ鉢巻、裸身で立ちふるまふ當時の井戸浚風俗に結びつけて言つたものであらう。

【芭蕉】 バセヲ 江戸時代の俳人。蕉風俳諧の始祖。姓は松尾、名は宗房、通稱忠左衛門。芭蕉の他、桃青・風羅坊の俳號がある。正保元年(二三〇四)伊賀國(三重縣)に生まれた。初め伊賀上野城代藤堂良精に仕へ、その子

良忠の近侍であつた。二十三歳の時良忠の早世に遇ひ、感ずる所あつて間もなく主家を脱出した。暫く京都に住んだらしいが二十九歳の時江戸に下り、漂泊の後三十七歳杉風の別墅に入り、庭内に芭蕉を植ゑて楽しんだ。世にこれを芭蕉庵と呼ぶ。在來滑稽諧謔の遊戯的世界に安住してゐた俳諧に慊らず、その革新に任じ、西行・宗祇・李杜の風を汲み、蕉風俳諧の基を開いて、その藝術的地位を確立したのは芭蕉の四十一歳の頃であつた。その後前後四回にわたり旅行を試み、最後の旅に於て元祿七年大阪御堂町花屋で長逝した。享年五十一。

彼は豊かな詩人的素質を有すると共に、極めて恬淡高潔な人格者で、十哲以下門下數千全國に普く、後代の文學に影響する所が大きかつた。句集としては「俳諧七部集」が代表的なものであり、紀行は「野晒紀行」「笈の小文」「奥の細道」など何れも傑作とせられてゐる。

【笠一蓋】 カサイチガイ・カサイツカイ。普通多く後者の訓に従ふがよい。一つの笠。

「蓋」は、おほひ。ふた。轉じてかさ。

【芭蕉は笠一蓋・杖一本でなければ心が落ちつかず】

奥の細道には「瘦骨の肩に懸れるものまづ苦しむ。紙子一衣は夜のふせぎ、浴衣・雨具・墨・筆のたぐひ、あるはさり難き錢などしたるはさすがに打捨てがたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。」とあり、野晒紀行にも

「腰に寸鐵を帯びず、襟に一囊を掛けて手に十六の珠を携ふ」とも、又「猶住家をさり器物のねがひなし。空手なれば途中の慾もなし」と言つてゐる。誠に終生旅を栖とし、旅に死した芭蕉にとつては、笠一蓋、杖一本の他身に帯ぶるものはみなこれ心を苦しめ路次の煩であつてその心を落ちつけなかつたのであつた。

【アッシジのフランシス】 St. Francesco of Assisi (1182—1226) 原名はジョヴァンニ・フランシスコ・ベルナルドネ (Giovanni Francesco Bernardone) 中世伊太利に出た聖僧。フランシス派教團の創始者。

アッシジの呉服商の子として富裕放縱な青年時代を送つたが、重患の爲心機一轉、敬虔な信仰生活に入り、圓頭跣足粗服繩帶、山野に修行をつみ、始め世人から狂人を以て目されたが、漸くにして信を起す者が多く、ローマに赴いて法王インノセント三世から教團設立を許可された。一二二二年遂にコルトナにフランシス會が設けられた。一二二六年遂にコルトナにフランシス會が設けられた。一二二六年遂にコルトナにフランシス會が設けられた。一二二六年遂にコルトナにフランシス會が設けられた。

【アッシジ】は中部伊太利チヘル (Umbria) 川に沿つた都邑。ゴシック建築の典型的なものがあつて、美術史上著

名な地。又聖者の歿後聖地巡禮の杖を曳く者が多い。因みに西洋では古來、その人の出所傳統を示す爲に、名前に生地や家名を of (英)、von (獨)、de (佛) で結ぶ例が多い。

【敵れ衣に繩の帯を締めなければ】 ヤブレゴロモにナハのオビをシめなければ

前項略傳の「圓頭跣足粗服繩帶、山野に修行をつみ」に當る。

【銘々】 メイメイ 「面々」の轉訛といふ。各々。各人。各自。「銘」は當字。

【適確】 テキカク たしかなこと。確實なこと。

【其の袴姿・笠杖姿・繩帶姿に、彼等銘々の人物が最も鮮かに最も適確に現れてゐると思ひます。】

こゝに作者は「表現即實體」の問題を解明してゐるのであるが、眞に適切な例證と言ひ得るであらう。「表現即實體」の問題は、言ひかへれば「内容即形式」の命題であり、それは古來哲學的究明の對象としてすらとり擧げられてゐる極めて困難複雑な問題である。その高遠な論理はともかく、讀者はこの例證によつて、「表現即實體」とまではいはないまでも、「表現即實體の半と位はいつでも差支へなからう」といふ作者の結論に對して、殆ど全幅的に肯定することが出来るであらう。

【爲人】 ヒトトナリ (一)うまれつきの性質。性格。人が

ら。(二)容貌風采。こゝは(一)の意。
【所以】 ユエン 「故」の音便。いはれ。わけ。仔細。「爲人を現す所以のもの」は、「よつて以て人となりを現す所のもの」の意。

【人格】 ジンカク (一)人がら。人品。(二)倫理學上、道徳行爲の主體、即ち自覺的・統一的・理想的特性を有する精神的存在。(三)心理學上、知情意の主體。(四)法律上法律的行爲の主體。(五)社會學上、共同生活の主體、即ち一個人として、獨立し得る資格。こゝは(一)の意。

【嗜好】 シカウ たしなみ好むこと。このみ。

【用意】 ヨウイ (一)意を用ひること。心づかひ。注意。

(二)支度。準備。こゝは(一)の意。

【嗜み】 タシナミ (一)このみ。「嗜好」に同じ。(二)心がけ。注意。(三)節制。つつしみ。こゝは(二)の意。

【品格】 ヒンカク しながら。所謂「ひん」といふに同じ

【開拓】 カイタク (一)山野を開いて田畑にすること。

(二)領土をひろめること。

こゝはその轉用で「運命を開拓する」は、幸運を招來するやうに前途をひろく意。

【好感】 カウカン 氣持のよい感じ。

【ひいては】 その結果は。

【文化】 ブンクワ (一)世の文學教化が進歩して開明になる事をいふ。世の中がひらけること。文明開化。(二)哲

學上 Culture の譯語、人類の本來所有する理想を實現して行く人間の價值活動の過程。又その成果の總體。藝術・道德・宗教を初め、國家・法制・經濟等のすべてを指す。こゝは(一)の意。

「文化」はもと耕作培養等の意味の語 Culture から出たもので、それ自身何等價值に關係なく、與へられた自然をそれに含まれた素質に應じて、人間本有の要求に合する様加工改造して理想を具現せしめる價值活動を意味するものである。隨つて文明 Civilization が一般に外的・物質的發達を意味するに對し、これは主として精神的・內面的なものを意味する。

【向上】 カウジャウ 現在の狀態を不完全だとし、これに満足せず、理想を實現し人格を完成しようと歩々自己の發展を企圖すること。上へ上へと進まんと企圖すること

【貢獻】 コウケン (一)みつぎものを奉ること。後漢書、光武紀「遣使貢獻」(二)力をつくすこと。こゝは(二)の意。

【末のこと】 スエのこと 取るに足りないこと。主要でないこと。

【末】は、正音「バツ」通音「マツ」本に對し、物事の大切でない部分。枝葉の事がら等の意味。

【豊富】 ホウフ ゆたかに富んでゐること。「國語を豊富にする」とは、何れの國語を問はず、衆美を

挿取包含してその内容を豊かにすることをいふ。

【守り立てる】 モリタてる (一)まもり育てる。保育する。(二)世話して地位に即させる。(三)衰へたものを再興する。こゝは(一)の意。

【我々の言葉を立派に守り立てるの】が、取りも直さず、我々個人銘々を立派にする所以であり、同時に國を輝かす所以でもあるのです】

國家を離れた個人は存在しない。隨つて個人に於ける言葉は國に於ては國語である。個人の圓滿な發達がひいては國家の進歩を至すと同様に、個人の言葉を立派に守り立てることが、つまり國語を豊富にし善美ならしめ、やがてそれが國家を光輝あらしめる所以であると説く。多少の論理的飛躍はあるが、理路整然として説き進めるその言々句々に作者の情熱は籠つて、肯首せざるを得ざらしめるものがある。

【亂脈】 ランミヤク 亂れてすぢみちのたたないこと。亂雑なこと。

【大亂脈を極めてゐる現在の國語】 原著の中に於て、作者はまづ第一に、外國語濫用の實例を列擧して、それが國語の主位を犯し、國語の純粹性を損ふことを述べ、第二に、地方の俗語が混入して、國語本來の意義や趣致に一種病的とも言ふべき不健全な變化を與へてゐることを指摘して、現在の國語が亂雑を極め

てゐることを説明してゐる。

【方針】 ハウシン (一)方位を示す磁石。羅針盤の方位をさし示す針。(二)めざす一定の目的。主義。こゝは(二)の意。

【歸す】 キス 歸着する。なる。

【語法・文法】 ゴハフ・ブンパフ 「語法」は、言語の組織に關する法則。「文法」は、文字の音・形、言語の成立・變化及び文章中に於ける言語の互に相關係結合するなどの法則。隨つて「語法」は自ら「文法」の中に包含されるものであるが、語法・文法と別々に並べ言ふ時は、「語法」は主として文章法を意味し、「文法」は専ら品詞論を指す場合が多い。

【第一】には、語法・文法に合つた、少くとも正しい言葉にする事】

原著第六章に次のやうな諸例を擧げて説明されてゐる。

御都合よろしいの時、御宅に行きます。(不正)

御都合の御よろしい時、御宅に伺ひます。(正)

季節によつて食物の撰み方に多少の注意を要する。(不確實)

食物の選み方は、季節によつて多少變へねばならぬ。(確實)

私は後藤市長であります(不正)

私は東京市長後藤某であります(正)

【第二】には、正しきが上に更にこれを美しく磨き上げる事】

原著第七章に「『うまい物を食べた』といふ事を言ひ表す場合に、『うまかつた』『おいしかつた』といへば、意味はわかる、文法にも合つてゐるが、唯だそれだけで、人を動かす味はひとふものがないでせう。それを『頬が落ちさうだ』といふと、意味がわかるばかりでなく、一種の面白味がついて来るではありませんか。途中で遊んでゐた』『居睡をした』といへば、平明合格といふただそれだけで、『道草を食ふ』『舟をこぐ』といへば、すぐに特別な味はひを感じさせられるではありませんか。』とまづ平明な例について一應の説明を試みた後、更に、「古事記」の中の「常夜往」稗田杉屏の「牛を追ふ」(卷一・第二課)などの語に説き及び、最後に、昔から我が國には美しい言葉がある、それは磨けば益々美しくなる可能性があるのであるから、注意して守り立てて行きたい、と結んでゐる。

【自ら狭く限るといふ事では面白くない】

偏狭な國粹主義者や保守頑冥な文法學者などの間に屢々論議される固陋な見解に對する抗議である。徒らに俳他の的な感情に驅られたり、たゞひたすらに戀舊思想にとらはれて、その結果舊來の國語にのみ執着し、國語の世界を狭く限定することは、單に國語の發展性を喪失せしめてしまふばかりでなく、延いては國民生活を沈滞に導く

やうな結果をすら招くことがないとはいへないであらう。

【本領】 ホンリヤウ (一)もとからの領地。舊來の知行所 (二)本來の持前。特色。特性。こゝは(二)の意、

【基調】 キテウ (一)もと音楽上の用語、Key-note の譯語。(イ)ある音階の第一音。(ロ)一楽曲中の根柢となる音階。(二)轉じて、すべて物事のよるべき根柢。こゝは(二)の意。

【要素】 エウソ 事物の成立・效力に必要な缺くことの出来ない性質。根源。もと。

【生し立てる】 オホシタてる そだて上げる。養ひ育てる
【第三には、正しい美しいと云つても、自ら狭く限るといふ事では面白くないから、自分の本領基調をちやんと立てこれに合し得る限り成るべく多くの要素を取入れて豊かな姿のものに生し立てる】

これは既に解りきつた問題として、原著には特別の例をあげて説明してはゐないが「現代の口語を本位とし基調として廣く衆美を總攝する。」といふことを目安にして、その本位を冒さず基調に合し得る限り、古今東西のあらゆる言語文體を攝取して、自らを肥し豊かにすべきことを論じ、且我が各時代の文章が無意識の間に始終これを行つて來た事實を、文體の變遷の上から概説してゐる。

【第四には、豊かな中に統一のあるものに發達させること】

第三の問題とも關聯して、原著には、「開國五十年史」の中から、「我が國は振古より瑞穂國と稱せられ、隨所に嘉穀穰々として野生した。」といふ一文を引き、全體が漢文式の雅文仕立になつてゐるのに、最後の「した」の一語だけが口語式になつてゐるのではをさまりがつかないものとし、これは當然前後一貫した調子に整へて「我が國は大昔から瑞穂國とも呼ばれて、見事な稻が到る處に自然に實つてゐた。」などすべきであると論じて、そこに統一の要件を提示してゐる。

【標準】 ヘウジュン 「標」は「木表」、「準」は「水盛」。(一)めじるし。めあて。(二)てほん。他ののりとなるもの。規範。こゝは(一)の意。

【國民生活の有力な表現たらしめると同時に、又これによつて國民生活そのものを向上發展させてゆくことが必要であると思ひます】

こゝに示された思想の飛躍が把握されないと、正しい理解には到達し得ないのではいかと思ふ。即ち既に説き來つた所は、すべて個人的考察に立脚した立論であつて、「言葉即思想」といひ、或は「表現は實體の半ば」といふも、要するにそれは個人の思想であり、また個人の實體に他ならなかつた。然るに此の結句の意味する所、その生活はもはや個人のそれであるよりも、寧ろ國家組織内にある一個の國民的生活なのである。随つて個人として

の國民生活を表現し、向上發展せしめることは、やがて國としての國民生活を表現し、向上發展せしめる根柢となることを意味してゐるのであり、更に國語の統一が國民精神の統一である一面をも言はんとしてゐる事はいふ

2 文の構成

第一節 初―二頁二行 國語は國民の愛護すべき最も大切なものの中の一であること。

第二節 二頁三行―五頁五行 國語の愛護すべき理由。

1 國語を輕視する人々の見解に反駁し、「言葉即思想」とはいへないまでも少くとも「表現は實體の半分と位はいへる」とその真相を規定する(二頁三行―三頁一行)

2 前條の規定を具體例に就いて實證する(三頁二行―四頁七行)

3 社會生活の上に於ける言葉の重要性に論及する(四頁八行―五頁五行)

第三節 五頁六行―終 國語に對する國民の義務と、現在の亂脈を極めた國語を向上せしむべき方針。

3 文意

獨立國の體面を維持し、更にこれを向上發展せしめて行く上に、國語は國民の最も愛護すべきものの一であるといふ、作者の抱く國語觀の吐露である。作者はこれを先づ個人に於ける言葉の意義と重要性から説き起す。「言葉即思想」とはいかないまでも、「表現は實體の半分」と位は言へると、その位置を規定し、この複雑困難な命題を實例に就いて解明した後、更にその社會生活上の重要性に論及し、かくして國家に於ける國語の重要性と、愛護すべき當然の理由とを闡明した上に、最後に亂脈を極めてゐる現代の國語問題を解決する方針を掲げて文を結んでゐるのである。

4 鑑賞批評

終始極めて平易な語句を以て論旨を進めてゐるのみでなく、「表現即實體」「内容即形式」等の如き高遠且複雑な問題に就いては、幾多實例を擧げてこれが解明を試みるなど、全く碎けた態度で筆を運んでゐるのであるが、これはその講演の聽講者の程度を目安に置いた周到な用意に他ならないのであつて、如何にも肯綮に値する態度と言ひ得るであらう。成程その言葉は平易で、その態度は婉曲で、誇張的な咏歎や、斷定的な言辭は全く見出すことは出来ない。併しそれでゐて、その根柢に流れる作者の信念的な情熱は見逃し得ないであらう。作者は唯概念的に、抽象的に國語問題を問題にしてゐるのではない。寧ろ意志的に、積極的に國語の愛護すべき所以を強調力説してゐるのであつて、言ひかへれば、日頃作者の中に醗酵してゐた國語觀が、率直簡明に吐露されたのに他ならないのであつた。優しく穩やかに、併し理路整然として押して行き、終に讀者をして肯首するを得ざらしめる體の迫力は、要するに作者のこの熱情の底から滲みいでる力に他ならない。そして行間に潜むこの確固たる作者の信念は、讀みの深まるにつれて鮮やかに浮かび上つて來る筈のものである。熟讀玩味に値する文と言ひ得るであらう。

三 備考

1 指導研究

(一) 本巻を境にして中學國語學習も愈々その後期に入る譯である。既に國語に就いては、或はその本質の問題に觸れ、或はその重要性を學び、また屢々その長所短所等が指摘されて來た。随つて生徒の中には國語に就いての一通りの認識・自覺が培はれてゐる筈である。本課はその既有的國語觀の上に立つて、更に一層これが明確を期すると共に、進んで積極的に國語愛護の精神を誘發し、國語學習の根本精神を明かにし、以て國語教育の第二の出發點の確立に資せらるべき課である。此の意味に於て十分な理解を期したい。

(二) 文中に引かれたエマソン・仁齋・芭蕉・フランシス等の人格風采は或は生徒にびつたりと來ないかも知れない。併しこれ等の人物は、「内容即形式」「言葉即思想」などの重要な問題の解明の手がかりを與へるのであるから、徹底的な理解が要求される所である。單に輪廓的な傳記の他に、更にこゝにふさはしい逸話などが用意されるならば、大いに生徒の理解を助けるであらう。

(三) 亂脈を極めてゐる現在の國語と、これに對する解決方針については、それぞれ原著の中から例を引いて説明を補つて置いたが、これに就いては更に生徒各自をして實例を求めしめ、反省考究せしめたい。かくしてこそ生徒の理解は根柢的なものになるからである。

2 参考

(一) 本課は極めて一部分の拔萃であるから、簡單に原文の構造及び内容を次に示すことにする。

〇一 國語を愛護すべき必要

- 二 國語の生活上に及ぼす重要性
- 三 現代に於ける國語の亂脈外國語の濫用
- 四 ギリシ・イギリス・フランス・ロシア等に於ける國語の愛護尊重の實例
- 五 地方俗語の及ぼす悪影響
- 六 國語愛護の四方針。合法合格は言語文章の第一義
- 七 美しく味あらしめる方法
- 八 豊かにし、統一あらしめる方法
- 九 從屬要素の主位を犯す角をたふす工夫

十 國語の文體變遷

十一 俗語の磨かれて古典語となつた國語發展の一徑路

十二 歲月が俗語訛語に加へる品位化

十三 國文に於ける様式の變遷

○十四 國語を立派にし國を輝かす四方針へに

(右の中、本課は(一)と(十四)との抄録である。)

(二)「愛語」に就いて原文の中に「挿解」として記されてゐるものを次に採録する。これは講演の際聽講者に印刷配布されたもので、我等先祖の國語愛護の觀念を窺知し得る興味深いものである。

一、愛護といふのは、衆生を見るに、先づ慈愛の心を發し、顧愛の言語を施すなり。……慈念衆生猶如赤子の懐ひを貯へて言語するは愛語なり。徳あるは讃むべし、徳なきは憐むべし。……怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること、愛語を根本とするなり。面ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ、心を樂しくす。面はずして愛語を聞くは、肝に銘じ魂に銘ず。……愛語よく廻天の力あることを學すべきなり。(正法眼藏・四攝法・拔萃)

二、萬葉集十三卷、柿本朝臣人麿歌集曰、葦原の 水穂の國は 神ながら 言あげせぬ國 しかれども ことあげぞ吾がする 言さきく まさきくませと つつみなく さきくいまさば 荒磯浪 ありてもみむと いほへ浪 千重浪しきに 言あげぞ吾がする

返 歌

敷島の和の國は言靈のたすく國ぞまさきくありこそ

三、抑々意と事と言とは、みな相稱へる物にして、上代は、意も事も言も上代、後代は意も事も言も後代、漢國は意も事も言も漢國なるを、書紀は後代の意をもて、上つ代の事を記し、漢國の言を以て、皇國の意を記されたる故に、あひかなはざること多かるを

此記(古事記)は、いささかもさかしらを加へずて、古より言ひ傳へたるまま記されたれば、この意も事も言も相稱ひて、皆上代の實なり。是れもはら古の語言を主としたる故ぞかし。すべて意も事も、言を以て傳ふるものなれば、書はその記せる言辭ぞ主にはありける。(古事記傳 一之卷)

四、わるきものは。詞の文字あやしく使ひたるこそあれ。ただ文字一つに、あやしくも、貴にも、卑しくもなるは、如何なるにかあらむ。さるは、かう思ふ人ことに勝れてもえあらじかし。いづれをよき悪しきとは知るにかあらむ。されど人をば知らじ。ただ心地にさ覺ゆるなり。何事を言ひても、「その事はせむとす」「言はむとす」「何とせむとす」といふ「と」文字を失ひて、ただ「言はんずる」「里に出でんずる」などいへば、やがていとわろし。まして文に書きてはいふべきにあらず。物語こそ悪しう書きなれば、いひかひなく、作り人さへいとほしけれ。「なほす」「定本のまま」など書きつけたる、いと口惜し。「ひてつくるまに」などいふ人もあり。「もとむ」といふ事を、「みとむ」などと、皆いふめり。いと怪しき事を男などはわざとつくるはで、故にいふは惡からず。我が詞にてもつけていふが心劣りすることなり。(枕草子)